

# ANNAPURNA II

1971

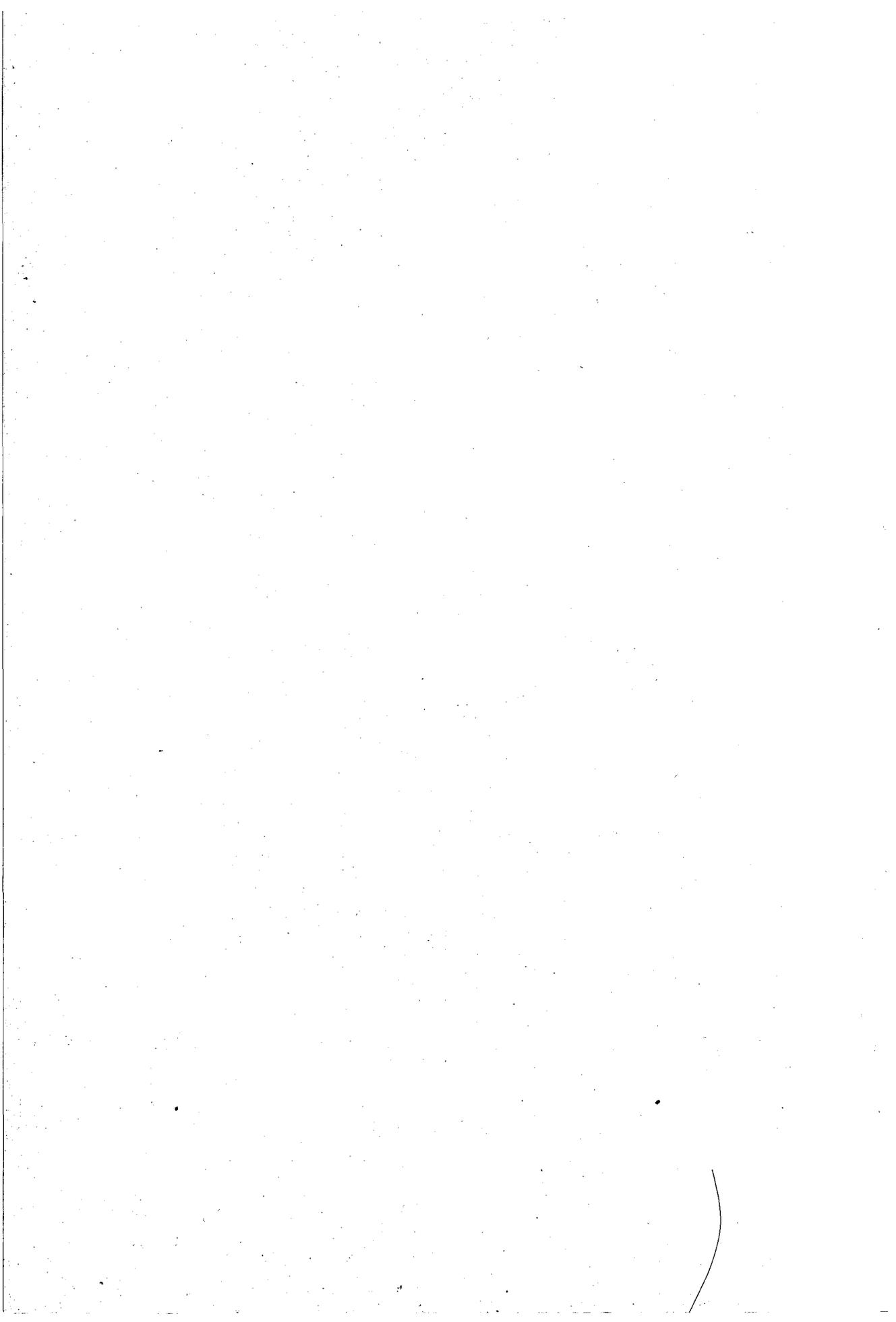
SHINSHU UNIVERSITY

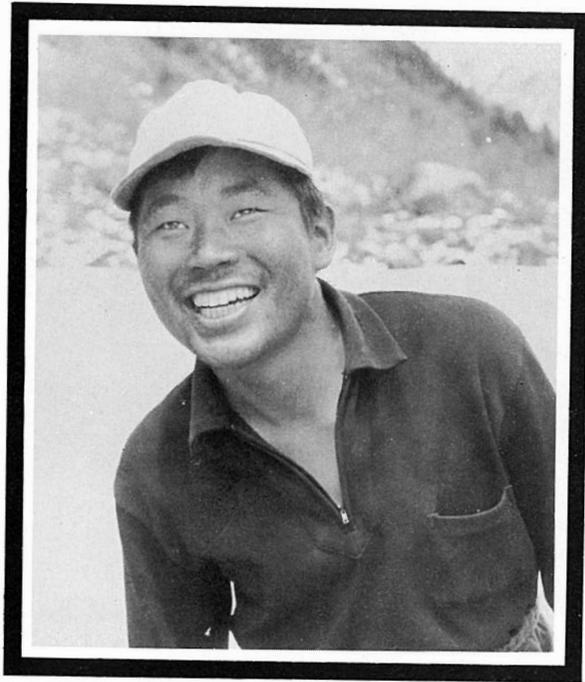
# アンナプルナ・Ⅱ

1971年・信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊の記録



信州大学山岳会  
信州大学学士山岳会





故 佐藤正敏君に捧げる



▲ C<sub>5</sub> よりみたアンナブルナⅡ峰 右手のピークはラムジュン・ヒマールの主峰  
稜線には頂上へ向った佐藤隊員の足あとが見える。



隊長 西郡 光昭



副隊長 片岡 格



隊員 堀 勝彦



隊員 森田 稲吉郎



隊員 松尾 武久



隊員 宮崎 敏

シエルパ



サーダー  
ギルミ・ドルジェ



アン・ヘマ



ベンバ・ヌルブ



アン・ヌルブ・  
ルクラ



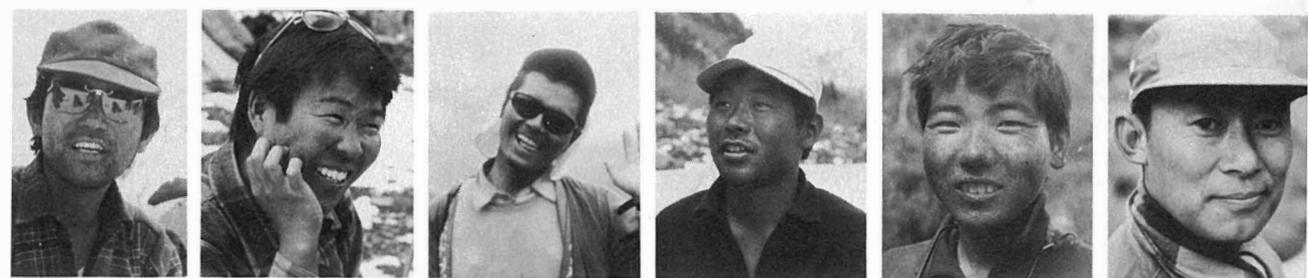
アン・ヌルブ・  
バンボツェ



アン・チョタレー



ベンバ・  
ツェリ



隊員 岡村 知彦    隊員 扇能 清    隊員 山下 泰弘    隊員 故 佐藤 正敏    隊員 市野 和雄    リエゾン・オフィサー  
 H・D・ライ



シクバ・ツェリン    アン・リタ    アン・ヌルブ・ボルツェ    ヌルブ    ドルジェ    ハサン・テンバ    ナワン・チョタ    ハサン・リ



▲  
カルカッタを出発してから10日目、  
やっとポカラに隊荷は到着した。積  
降ろす隊員、シェルパの表情も明る  
い。

◀  
ヒマラヤン・ホテルの庭一杯に積ま  
れた食糧のダンボール。約5トンの積荷  
はこれから再梱包されるのだ。

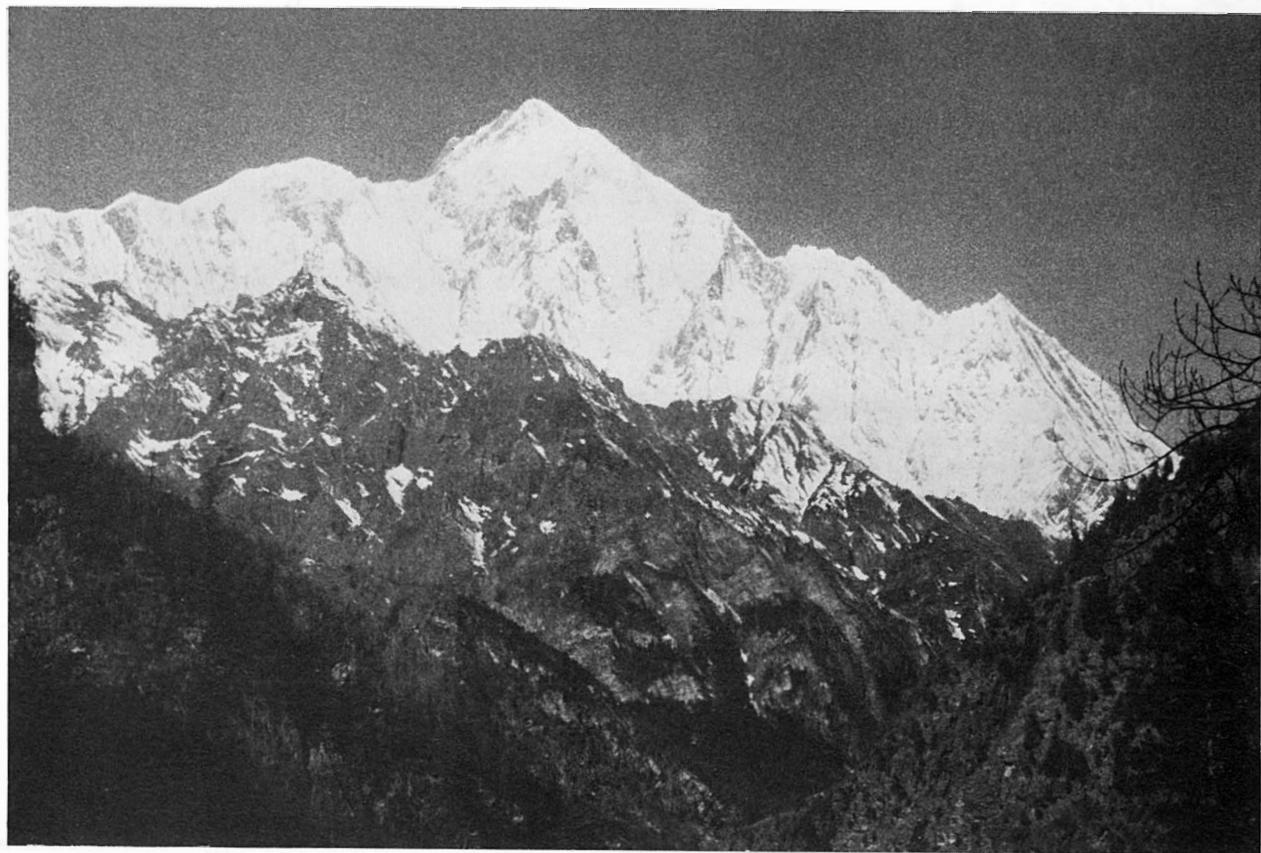


▲ マルシャンディ・コーラのゴルジュ帯を行くポーター。1人35kgの荷を担いているので慎重だ。

▶ サラタン・コーラに入った。やっとアンナブルナⅡ峰のふところに来た。ベース・キャンプ予定地まではもうすぐだ。

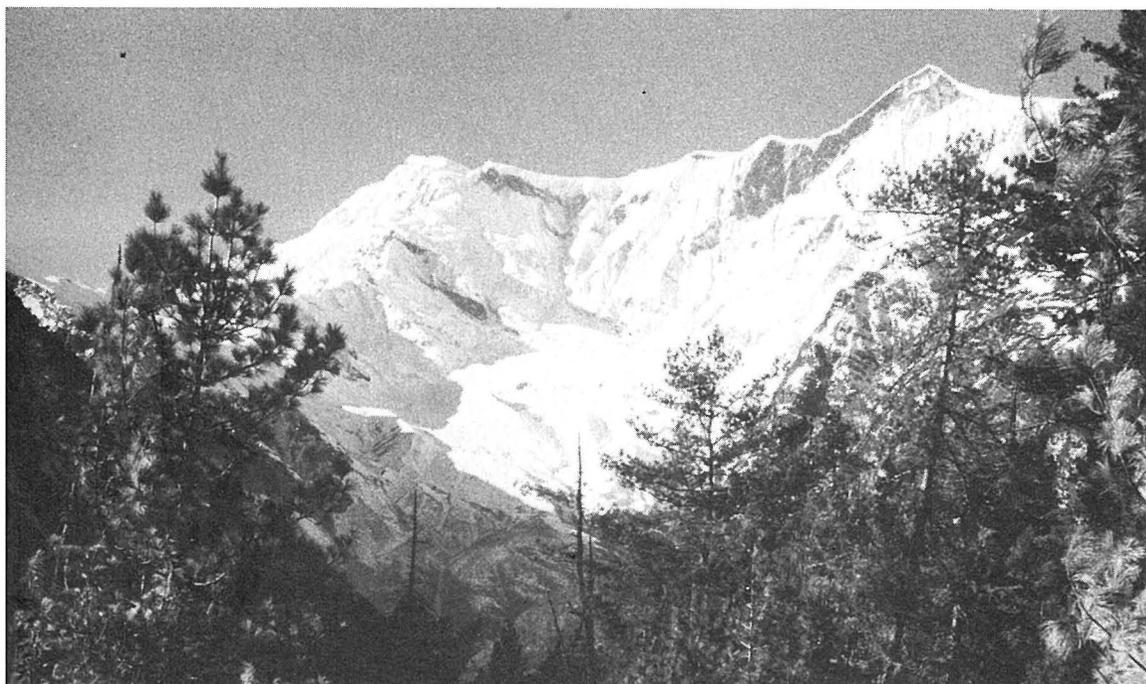
タンゾーを過ぎてしばらく行くと、突然するどい鋸のような尾根が眼前に現らわれた。あれが北東稜なのだ。

▼ だ。しばしルートを追いもとめた。





ピサン盆地に近いところからみたカンバ・コーラ内院。将来、ラムジュ  
▼ン・ヒマールの登路として脚光をあびるときがくるだろう。

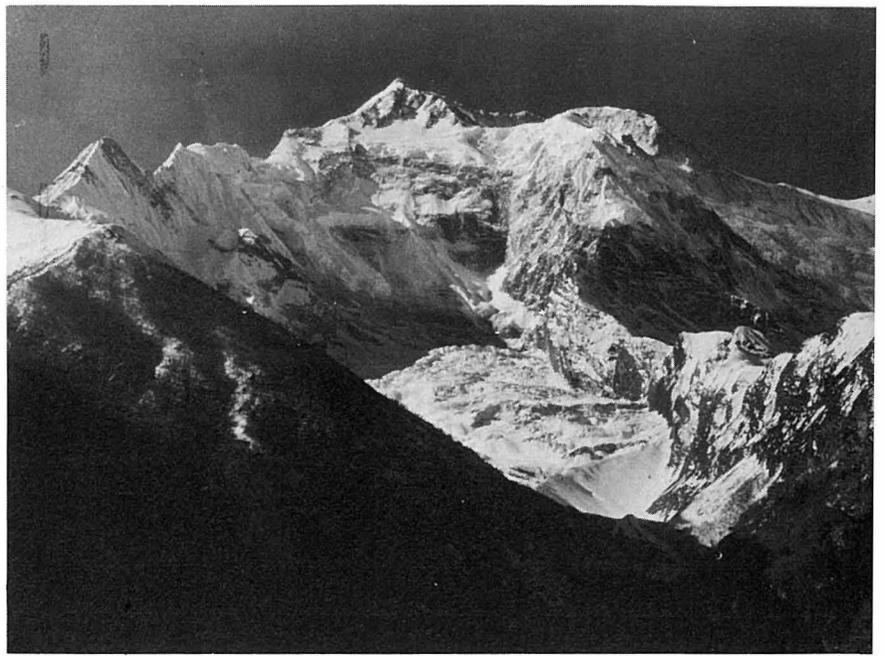




ピサン村よりみるアンナブルナⅡ峰。

左側が北東稜、右側が中央稜である。

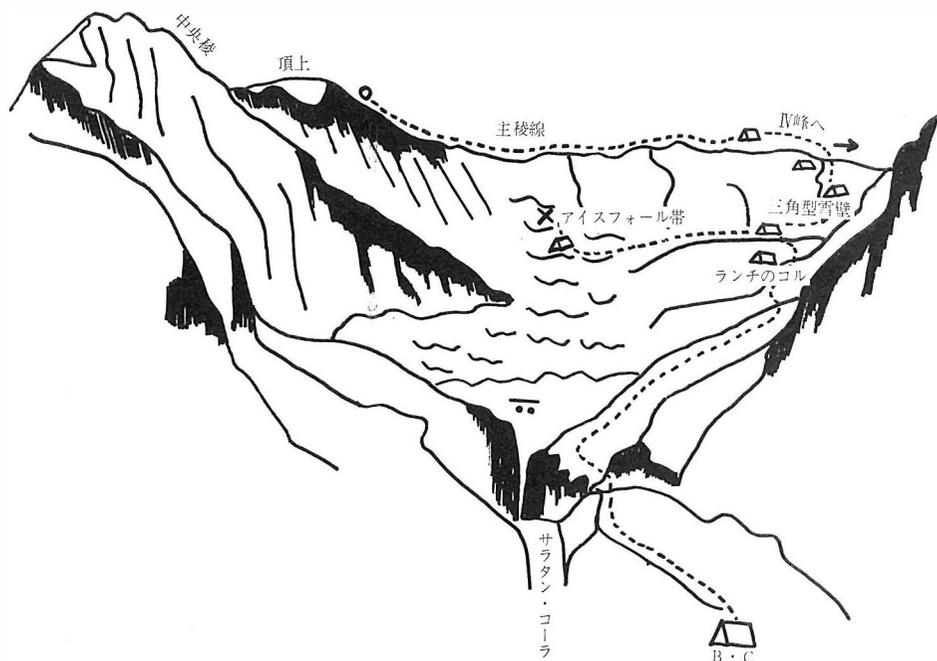
▼ 主峰は中央右側の丸い山である。



ノバ・コーラ（仮称）の内院よりみた  
東稜東面の状態。登攀不可能にただ驚  
ばかりであった。



▲ ベースキャンプより見たアンナプルナⅡ峰北面のアイスフォール帯



ベース・キャンプから C<sub>1</sub> への荷上げ。今日もポッカ部隊は黙々と歩く。写真右上の岩壁の下が C<sub>1</sub> 地点である。



▲  
ベース・キャンプから最初の難関はどんずまりの大滝をまく氷の滝の登攀であった。

ベース・キャンプと C<sub>1</sub> との間地点にいつも昼食をたべる「ランチの科尔」があった。ピサン・ピークやカングルーを見ての休憩は素晴らしい。

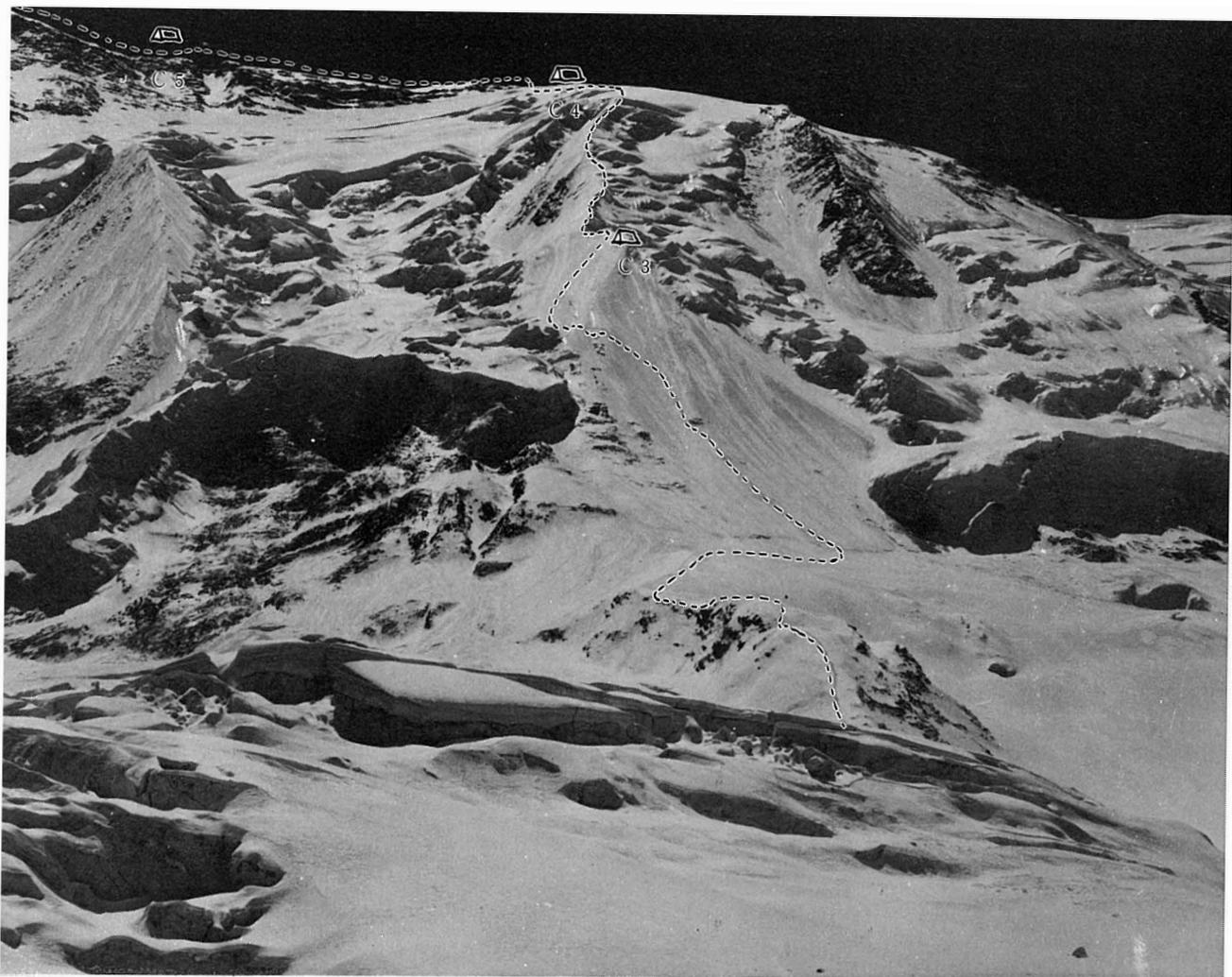
▼





高度差1,000 mのC<sub>3</sub>への登りは本当に苦しい。一步一步アイゼンを効かせて登る。この積みかさねがやがて頂上に至るのだ。

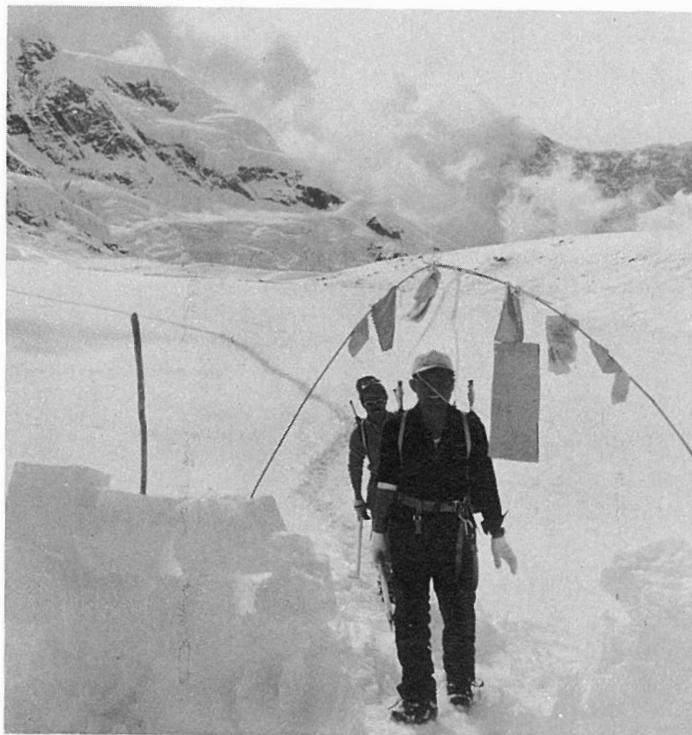


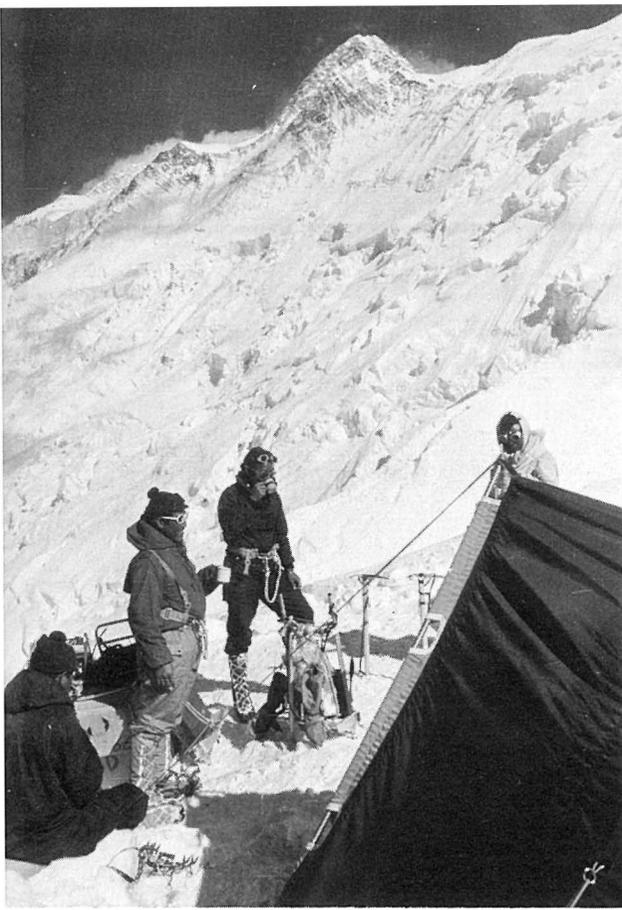


▲ C<sub>2</sub> より見た上部のルート。三角形雪壁にルート工作中的の隊員が見える。

▶ ルート工作を終えてC<sub>2</sub> に帰ってきた故佐藤隊員と松尾隊員。ゲートにはチベットのお守りがぶらさがっている。

◀ C<sub>2</sub> からC<sub>3</sub> への荷上げ。今朝も上天気だ。新雪を踏みしめて出発するとき心は躍る。





▲ C<sub>3</sub> で飲むネパール・ティーは本当に美味だ。  
激しい登山のあとでの一杯は明日の活力となる  
ようだ。



▲ C<sub>3</sub> からC<sub>4</sub> への荷上げ。高度が高くなるにつれて呼吸は苦しい。20歩登っては息をつき、ピッケルによりかかって呼吸を整えなければならないほどだ。眼下の尾根にC<sub>3</sub> のテントが見える。

「ご苦労さん」

C<sub>5</sub> までのルート偵察を終えてC<sub>4</sub> に帰

▼ 着する山下・市野両隊員。





▲ 7,000 m 附近からのアンナプルナⅡ峰。×印は最高到達点。

▼ 登山を終えてベース・キャンプに集合した隊員、シェルパ全員。





▲ 「ランチのコル」に造った故佐藤正敏隊員のお墓に別れを告げる。  
「さようなら、佐藤!! さようなら……………」



ご あ い さ つ

後援会長

長野県知事 西 沢 権一郎

1971年に行われた信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征は、信州大学開学以来といわれる大規模な遠征隊として開学25周年を記念して行われ、県内外から登山及び学術調査両面にわたる成果が期待されていたところであり、長野県としても社会体育の啓蒙、向上の見地から協力し、その成果を期待したところでもあります。

不幸にして登山計画は、隊員佐藤正敏君の遭難死という事故によって所期の目的を果さず、想い半ばにして下山のやむなきにいたったことはまことに痛恨の極みといわねばなりません。心から故佐藤君の冥福をお祈りするとともに、御遺族にも謹んで哀悼の意を表する次第です。

学術調査活動は登山終了後主に中部ネパールにおいて行われ、農学関係を中心にかんがりの成果をあげることができたと聞き及んでおります。この成果はいずれ学術調査報告として世に問われるであろうし、山に囲まれた長野県と類似の条件をもつといわれるネパールでの調査が地域社会にも大いに役立つ資料をもたらすことになればと期待しております。

今回は故佐藤君の追悼号ともいうべき登山を中心にした報告書になったが、若い諸君の資料や体験が少しでも参考になればと願ひ、大かたの忌憚ない御批判をいただくよう望んで止みません。

ご あ い さ つ

信州大学長 池 田 雄一郎

大学発足25周年記念に実行したネパール・ヒマラヤ遠征は不幸、隊員佐藤正敏君の墜死により、登頂の榮は万斛の憾を吞まざるを得なかった。

しかし、残余の隊員による既定の学術調査は相当長期に、且つ広範囲にわたって続行された。これら登頂行と調査記が関係者の努力により発行される運びとなった。

勿論、若干の錯誤も未完もあろうが、此は本学濫觴のプレルードでなくてはならぬ。後生を待って、かのインダス、ブラマプトラの大成を将来に冀うは筆者のみではないだろう。

1972.9.8

# ご あ い さ つ

実行委員長

信州大学医学部教授 赤羽 治郎

1971年2月から11月にわたって行われました信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征の登山報告書を出版するにあたり一言ごあいさつ申し上げます。

この度の遠征は本学山岳会・学士山岳会の諸君が長い間抱き続けた夢と研究の具体化でありましたが、実現に際しましては後援会をはじめ各方面から絶大なるご支援をいただきまして改めて幾重にもお礼を申し上げます。

この遠征隊は信州大学はじまって以来の本格的な遠征隊であり、隊員はいずれも国内での登山経験充分であり、海外登山の研究も怠りない諸君であっただけに、実行委員長としましても成功を確信し、心から祈っておったところでしたが、何という不幸、登頂を目前にして佐藤正敏隊員をアンナプルナⅡ峰の南面氷河に失うという事故があり、登山中止のやむなきにいたったことは悔いても悔いきれず、実行委員長として改めて責任を痛感しているしだいです。より高くより困難を目指す登山者の宿命とは申せ、前途洋々たる若者の生命は何物にも代えがたいものであります。佐藤君の冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

この報告書では、登山の一切の経過と反省が許される限り報告されております。その意味では若い隊員を中心として、編集にあたった諸君の精一杯の努力の結晶であります。今後のためにも今日の非を糧として、明日の海外遠征、登山活動のあるべき姿を目指して研さんを続けてまいる所存ですが、これを機会に本遠征についてのご批判を広く、できるだけ多数の方々から寄せられるよう望んで止みません。

# 発 刊 に あ た っ て

遠征隊長 西 郡 光 昭

遠征に際してご支援いただいた関係各位に、まず、改めてお礼を申し上げます。信州大学はじまって以来といわれた大遠征計画が実現のはこびとなったかげには、後援会各位・学内外の関係各位・実行委員会各位の、ところからなるご協力のあったことを思い感謝に絶えません。今回の遠征隊はこれらの方々のおかげによりはじめて実現したものであり、そこに私達の責任のあったことは当然であります。

しかしながら、この遠征の第一段階たるアンナプルナⅡ峰(7,937m)登山においては、佐藤正敏隊員を南面の氷河に失ない、登頂を果さず下山のやむなきにいたるという結果に終わってしまいました。全隊員が自信をもって送り出した登頂隊員であり、不帰の客となることなど夢にも想わなかったことでありましたが、遠征活動の責任者として、ただただ胸の痛みが増すばかりであり、ご子息を失われたご両親はじめ、ご家族の悲しみ、関係各位のご期待をおもう時、改めて深くお詫び申し上げるとともに、哀悼の意を表す次第です。

ここに今回の登山活動をご報告し、遠征のあり方・遭難の原因等につき大方の厳しいご批判をいただきたく願います次第です。

なお、第二段階の学術調査では残留隊員が可能な限りの努力をいたしました。今報告ではその要点を列記するにとどめましたが、結果がまとも次第ご報告する予定です。

最後に、改めて遭難のお詫びを申し上げるとともに、故佐藤正敏君の霊、やすかれと祈って、発刊のごあいさつといたします。



# 目 次

遠征隊の方針と編成 .....	1
信州大学山岳会の海外登山に対する考え方 .....	3
アンナプルナⅡ峰遠征隊の結成までの信州大学山岳会の海外登山に対する動き .....	4
アンナプルナⅡ峰登山抄史 .....	7
実行委員会・後援会の動き .....	9
遠征隊の概要 .....	19
遠征隊の概要 .....	21
遠征隊活動総括 .....	23
学術調査の概要 .....	31
行 動 記 録 .....	33
隊荷輸送隊の記録 .....	35
インド大陸のトラック輸送 .....	38
ネパール・バイラワにおける通関とポカラまでのトラック輸送 .....	40
キャラバンの記録 .....	42
本隊の記録 .....	51
登山活動の記録 .....	55
アタック・遭難 .....	79
帰路のキャラバンの記録 .....	87
遭 難 報 告 .....	91
遭難報告 .....	91
救助活動ならびに捜索について報告 .....	93
遭難の事務処理 .....	95
佐藤隊員の遭難に対する反省（総括） .....	96
遭難の原因について（補足として） .....	98
トランシーバー交信録 .....	99

各 係 の 報 告 .....	107
装 備 .....	109
食 糧 .....	125
医 療 関 係 .....	139
記 録 報 道 .....	142
気 象 .....	145
梱包・輸送 .....	151
通 関 手 続 .....	158
キャンプ間の輸送 .....	161
会 計 報 告 .....	163
マネージメント .....	165
留 守 本 部 .....	168
そ の 他 .....	169
キャラバンで感じたこと .....	171
ネパール王国の教育あれこれ .....	172
ネパール行を終えて考えること .....	176
遠 征 日 誌 .....	177
遠征隊の記録 .....	179
学術調査隊の記録 .....	194
資 料 .....	203
提出書類とその内容 .....	205
シェルパの横顔 .....	209
THE REPORT OF THE EXPEDITION ON THE ANNAPURNA Ⅱ .....	213
追 悼 .....	219
経 歴 .....	221
正敏を偲ぶ .....	223
追 悼 .....	225
遠征隊に後援・援助をいただいた方々 .....	237
編 集 後 記 .....	239



## 遠征隊の方針と編成

信州大学山岳会の海外登山に対する考え方  
アンナプルナⅡ峰遠征隊の結成までの信州  
大学山岳会の海外登山に対する動き  
アンナプルナⅡ峰登山抄史  
実行委員会・後援会の動き

山田和彦

小川 勝

小川 勝

宮崎敏孝

扇能 清



# 信州大学山岳会の海外登山に対する考え方

実行委員会企画部長 山田 和彦

信州大学山岳会・学士山岳会として、海外遠征（登山）に対する統一した規則などはない。未知へのあこがれ、より高いもの、より美しいもの、より困難なものへの欲求というようにごく素朴な態度は最も重要であり、基本的なものであろう。

しかしながら、大学山岳会の遠征として、海外登山は単なる各人の登山行為のみで終らすものであってよいわけではない。各隊員がそれ迄に得た専門的な知識と創造力と、そして旺盛な行動力を生かして、各分野でのフィールド・ワーク（リサーチ）を行い、何ものかをつかんでくることが重要と考えられる。

今回の遠征においても学術調査は登山ときはなすことなく遂行された。また、目標の山を選ぶにあたって、メンバーを決定するについても、これらは大きな要素となった。そして、得られたデータは総合的に処理され報告され、多くの人々の批判をうけなくてはならない。そういう意味では、全てのレポートが完成し初めて遠征は終了したということになろう。

しかしながら、1回のかぎられた遠征では、どれ程の成果が期待できようか。永続性のある遠征計画が強く望まれる次第であるが、山岳会独自ではそれは不可能であろう。そのためには、信州大学全体のスケールで計画し、行動する必要がある、その中で山岳会のしめる役割りを考えなくてはならないと考えられる。

苛酷な環境のもとでも、たくましく行動できるようにトレーニングされた山岳会々員こそ、そのような計画の中核になるものと自負してよいだろう。

登山に関していえば、その基本的な態度は国内での登山へのそれと変るところはない。単にピークに立てばよいというのではなく、同志がそれぞれの責務を分かちあいながら、共同で求めた目的を達成しようとする行為のその過程を重要視したい。

しかし、風俗習慣、気候や食物など生活環境の異なるところでの長期間にわたる生活と、高所の肉体および精神におよぼす影響はきわめて大きく、登山に伴う危険性は非常に高い。ヒマラヤの7,000mをこえる登山は、つねにアドベンチャー的な要素を含み、いままでのヒマラヤでの数々の輝かしい成果も、多かれ少なかれ、危険をおかして得たものである。これらを克服するために、十分な研究と緻密な計画、肉体と精神の鍛練、技術の習得につとめなくてはならない。

また、海外遠征で現地でのトラブルについてよくきかれるが、我々の物の考え方や山に対する姿勢では大きなトラブルはおこるはずはない。佐藤隊員の遭難があったにもかかわらず、ネパール当局、その他関係者は我々に対してきわめて好意的であった。それにつけても渉外をスムーズに行うのはもっとも重要なものであり、言葉、特に現地語に強くなる必要がある。

現状ではきわめて困難ではあるが、今回の遠征で終りとすることなく、なんとでも次回の遠征にそなえて力を貯えなくてはならない。

## アンナプルナⅡ峰遠征隊の結成までの信州大学山岳会の海外登山に対する動き

1 黎明期

小川 勝

信州大学には、1951年秋、ランタン・ヒマール遠征に参加された理学部の山田哲雄先生や戦前から朝鮮・ポリネシアで、フィールド・ワーカーとして活躍しておられた医学部の鈴木誠先生などの先駆者がいるが、山岳会としての組織的な海外遠征に対する動きは、全くなかったといえる。しかし、先輩の方々の胸の中には未知の魅力に対する憧れが、脈々と波を打っていたのであり、それが、合宿テントの中や、キャンプ・ファイヤーを囲んで語り合うことを通じて、後輩へ後輩へと引きつがれていったのであった。

1960年に信州大学山岳会(S・A・C)という、全学的な組織が結成され、松本山岳部(医学部、文理学部)、長野山岳部(教育学部・工学部)、上田山岳部(繊維学部)、伊那山岳部(農学部)の上部団体として、ようやく活動を開始したのであった。しかし、S・A・Cもただ、たんなる名目的な組織であり、年2回の会議において、各山岳部の横の連絡をとるといった現状が4年間も続いたのであった。

しかし、海外遠征に対する夢は、マナスル以来、各大学の海外遠征の報告により、刺激されて少しづつ、部員の間で実現の方向へ歩みだしていたのである。1964年春の長野県山岳連盟のギャチュンカン遠征とその成功は、我々を刺激せずにはおかないのであった。

1964年夏の剣岳遭難事故が発生し、S・A・Cはもっと実質的な方向へ動くべきであるとの考え方が各山岳部の主流となり、遭難対策、新人指導の必要上から急速に統合の方向へ進み、乗鞍における第一回山岳ゼミナール、サマーテントの共同運営、合同新人合宿、スキー映画会の開催、S・A・C委員会の強化など、今までとは異って飛躍的な活動を開始したのであった。

1965年2月には、長野県山岳連盟の幹部より個人的に、東アフリカ遠征のメンバーとして信州大学からも参加しないかとの話があり、隊員候補の選考なども行なわれたが、結局、実現には至らなかった。しかし、S・A・Cの中に、海外登山研究会を作ろうとの機運が強くなり、同年3月にS・A・C委員会の下部組織として、海外登山研究会が発足することになった。

研究会はヒマラヤ・アンデス・ニュージーランド・グリーンランド等、広く研究しようということで始まったが、ネパールの国内事情(1965年登山禁止令)から、アンデスへの遠征計画に具体的に着手した。しかし、この計画は、まだまだ実現にほど遠く、理想と現実とのギャップを痛切に感じたのであった。

1966年4月には、長野県山岳協会が発足し、S・A・Cも加盟し、協会の1967年ペルー・アンデス遠征隊に、信州大学より「西郡」を代表として推挙することにし、研究会のメンバーで初めて、海外の登山の経験を積むことになった。このことは、メンバーを刺激し、いつまでも長野県山岳協会に頼っているのではなく、信州大学独自の遠征隊を出そうという機運が強くなり、目標を改めて、ネパール、ヒマラヤに決めて準備会を発足させた。その目的を①1967年ポスト・モンスーンを期してネパールへ遠征隊を出す。②登山解禁に備えて、O・Bを交じえ、偵察隊を出すべく候補地を絞る。という以上2点を決めたのである。

地域としては、ランタン・ヒマール、アウトライヤー、チューレン・ヒマール、カンジロバ・ヒマールなどがあげられ、資料の収集に移った。

同じ時期に、長野山岳部のO・B会である「信稜会」にも、1967年秋に、チューレン・ヒマールへの計画が具体化しつつあって、同じ信州大学から同じ時期に、同じ所へ出る計画があるのなら、ジョイントしようということになり、実行委員長に学長・副委員長に各学部長になってもらい、全学的組織の遠征隊の結成に努力したが、これもまた失敗に終わってしまった。

しかし、挫折することを知らない、部員の間には、なんとかしてでもネパールに踏査隊を派遣しようとする強い信念があり、1967年5月の長野県山岳協会のペルー・アンデス遠征隊の出発に遅れること、3ヶ月にして、「ネパール王国ワンダリング」という信州大学学士山岳会・信州大学山岳会独自の海外遠征隊を出すに至った。

## 2 ネパール王国ワンダリング

1967年8月5日、信州大学としては初めての遠征隊が、希望に胸ふくらませて、横浜港を出発した。構成は隊長に教育学部清水悟郎教授を、隊員に工学部O・B佐藤邦彦、教育学部学生、望月映流、農学部学生、米倉幸夫、文理学部学生、小川 勝の計5名であった。

偵察の目的としては、

- ① グルジャ・ヒマール(サウワラ=7,193m)
- ② ニルギリ中央峰(7,223m)南峰(6,837m)
- ③ バウダ峰(6,692m)
- ④ ガネッシュ・ヒマール山群の南面(アンクー・コーラ上流)の偵察
- ⑤ ネパールの広域ワンダリングを通じての風俗・習慣等の情報収集

という5項目があげられた。行動の詳細は、後述するとして、結論的には、多大な成果を得て、成功裡に全員の無事帰国をみたのである。その中でも、日本人とし、最初と思われるミスティー・コーラ内院の踏査(1950年フランス隊と同じルート)、ガネッシュ・ヒマール(アンクー・コーラ)の偵察を果たし、また、遠征隊荷の通関・運送等、これ以後の遠征に関する必要事項の試行錯誤を繰り返し、体験して来ことは、何物にもかえがたく、貴重なことであったと考えられる。

この結果、1968年には、目標の山を、ガネッシュ・ヒマール・パピール峰(7,102m)に定め、本格的な遠征隊結成の計画が具体化した。未踏峰であり、我々の実力からしてみても、ちょうど良いのではないだろうかとの判断により、着々と準備を進めたのであった。

しかし、ネパールの登山禁止令は意外と厳しく、我々の予定した1970年までに登山禁止が解除される見込みがまったくないため、パピール峰はあきらめて、目標の山を変更せざるを得なくなってしまった。

## 3 ニルギリ中央峰

その次に目標にあがった山は、やはりネパール王国ワンダリングのとき偵察してきた。ニルギリ山群

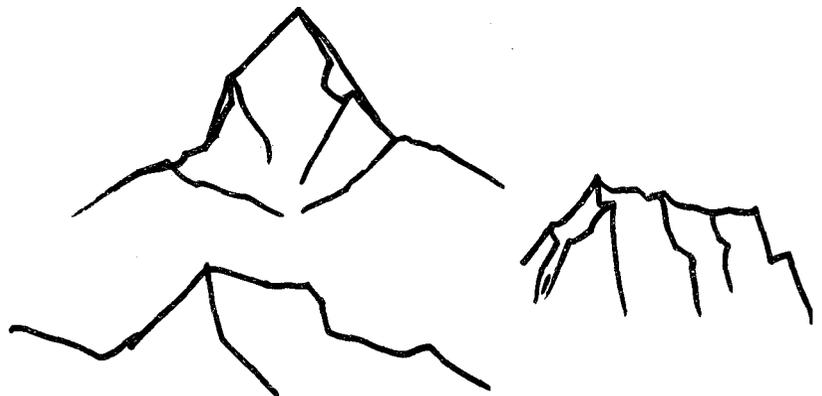
のうち中央峰(7,223m)であった。ルートとしては、ミリスティーコーラの左股をつめ、頂上に至るルートが検討され、実行委員会でも、その線でいくべく、決定された。

隊の構成は隊長以下5名であり、1969年5月には隊員候補者の強化合宿も実施され、実行委員会ニュースも発刊され、O・Bと現役一体になっての強力なバック・アップ体制がしかれて、本格的な遠征隊の結成に進んでいった。

しかし、ニルギリ中央峰には、1969年3月9日に発表された、ネパール政府発表の登山規制に関する新規則の中の登山許可されている38座の中に含まれておらず、実行委員会のメンバーの胸の中には一抹の不安がたえず残っていた。ちょうど、同年の4月、O・Bの百瀬斐敏・吉沢健のネパール予備調査隊が出発し、ニルギリの登山許可の可能性を打診することになった。期待と不安でまんじりともしない実行委員会へ両氏より連絡が入り、許可の見込みが非常に少く、時を同じくして、テリッオ・ピークに計画を持つ泊山岳会にも、不許可の報が入っており、再三にわたる目標の山の変更については、実行委員会の中でも賛否両論が、あい対立して、遠征計画に重大なピンチがおとづれようとしていた。そこで実行委員の誰れかを、ネパールに派遣し、登山局と交渉させようとしたやさき、O・Bの山田和彦が、エベレスト・スキー探検隊の偵察隊の医師として、参加することになり、すべてを、山田に託し、その連絡を待ったのであった。

#### 4 アンナブルナⅡ峰

山田は実行委員会の決定に従って、アンナブルナⅡ峰に仮申請をし、同年10月7日、ネパール政府により正式の登山許可が届いたのであった。これによると、1970年のポスト・モンスーン期、ならびに1971年のプレ・モンスーン期の2期のうち、いずれでも許可を与えるというものであり、一応、71年のプレ・モンスーン期を目標にすべての行動が開始されたのであった。(経過については後述の「実行委員会」の動きを参照のこと)



## アンナプルナⅡ峰登山抄史

小川 勝

アンナプルナ・ヒマールはネパールのちょうど中央に位置し、北から南へ流れる2つの大河、西のカリ・ガンダキ、東のマルシャンディにはさまれた東西にのびる大山脈である。

7,000mを超えるピークが10座以上もあるが、そのほとんどは1950年のフランス隊による主峰(8,078m)の初登頂以来、現在までに登られてしまっている。一番西にある主峰から東へ、Ⅲ峰(7,576m)、Ⅳ峰(7,525m)、Ⅰ峰(7,937m)の順にならんでいて、主峰とⅡ峰は直線距離にして約30kmも離れている。

アンナプルナは人種・文化・地勢とあらゆる意味で変化に豊んだネパールの中でも、もっともネパールらしいと感じられる中部ネパールの盆地と丘陵地帯の北に聳えている。ネパールの古都の1つ「グルカ」より、ポカラへかけての街道から眺めると、その雄大な偉容は、農耕で暮しを立てている地元の人々に「豊饒の女神」または「穀物の推積」(アンナプルナの意味)と仰がれるのも、なるほどと思われる。その中でも「魚の尻尾」マチャプチャレ(6,997m)とアンナプルナⅡ峰の屋根形の特徴あるピークは人の目をひきつける。

アンナプルナⅡ峰の登山の歴史を語る場合は、どうしてもⅣ峰の登山についても書かざるを得ない。それというのも、過去に挑んだ隊はすべて、H・W・ティルマン(英)の選んだⅣ峰経由のルートすべてを踏襲しているからである。

1950年5月、ティルマンは5名の隊員、4名のシェルパとともに、マルシャンディ川をさかのぼり、アンナプルナ・ヒマールの北面へ出て、Ⅳ峰経由でⅡ峰へ至るルートを発見した。Ⅳ峰の下、サブジェ・チュー谷にベース・キャンプを設営し、攻撃を開始したが、Ⅳ峰の肩(約7,300m)まで達した。

1952年秋には、マナスル偵察隊(今西錦司隊長以下隊員6名、シェルパ5名)がマナスル偵察に向う前に、Ⅳ峰を試登し、ティルマンと同じルートを5,800mまで登り断念した。

翌、1953年秋、京都大学々士山岳会隊(今西寿雄隊長以下、隊員7名、シェルパ7名)はⅡ峰を南面からねらい、マディ・コーラをさかのぼったが、大ゴルジュ帯に阻まれてしまった。やむなく、ナムン・バンジャンの峠を越えて、北面に転進し、時間と追っかけてこの登山が始ったが、ついに7,100mの第5キャンプで偏西風につかまり退却した。

1955年5月には、ドイツの小さな登山隊(H・シュタインメッツ隊長以下、隊員4名、シェルパ2名)がついにアンナプルナⅣ峰の登頂を果たした。この隊はその後、モンスーン中ながら・カングルー(7,009m)など、マルシャディ川上流の山々のうち、10座の初登頂を果たした。

1957年春には、ティルマン隊に加わったこともあるイギリスのC・エヴァンスとD・P・デーヴィスの2名はシェルパ4名と共にティルマンのルートによりⅣ峰の第2登を果たし、その後、Ⅱ峰へ続く尾根上の1つ目のコブまで到達した。

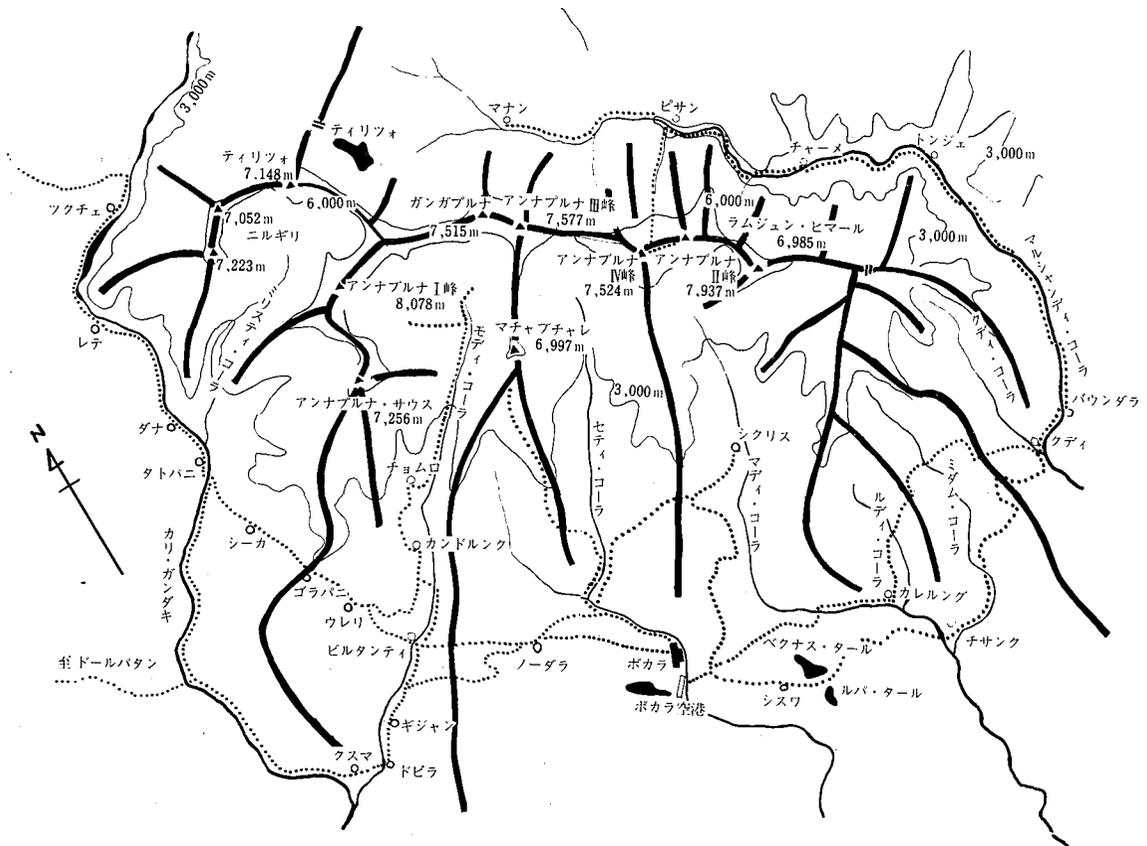
アンナプルナⅡ峰が初登頂されたのは、1960年5月17日のことである。10年前のティルマン

隊に加わったことのある、J・O・M・ロバーツを隊長とするイギリス・インド・ネパールの軍人ばかり10名の登山隊は9名のシェルパと共にⅡ峰を目ざした。Ⅳ峰の頂上の北側をまわりこんで主稜線をⅡ峰に向い、第6キャンプ(7,200m)から、ボニントン、グラント、アン・ニマの3名がアタックを敢行、初登頂を果たした。この隊はⅣ峰の第3登もしている。

1965年秋よりは、ネパール政府による登山禁止令が出て、ネパールにおける登山活動は不可能になった。1970年までに、アンナプルナⅡ峰への登山隊の接近はなかったが、登山が解禁になった1970年には日本の関西大学隊がティルマンのルートからⅣ峰をアタックし、第4登をなしとげた。そして、同じ、1970年のポスト・モンスーンにはユーゴスラビア隊が、1960年のロバーツ隊とはほぼ同じルートで、Ⅱ峰の第2登に成功したのである。

以上、アンナプルナⅡ峰・Ⅳ峰には、今まで8隊の登山隊が登頂をねらったのである。

アンナプルナ・ヒマール概念図



## 実行委員会・後援会の動き

宮崎敏孝・扇能 清

海外登山を“高嶺の花”“夢”に終らせることなく、自分達の身近なものに定着させることを願った4名の山岳会員は1967年8月から68年2月にかけて、ネパール王国の中・東部を踏査して、現地の具体的な資料・情報と共に貴重な体験を持ち帰ってきた。このことによって、我々の永年の夢であったヒマラヤ登山がたいへん身近な、実現可能な範囲にあると感じられるようになったのは重要な事実であった。

68年8月、踏査隊4名を中心に山岳会員、学士山岳会員の有志の間で、ヒマラヤへの遠征隊派遣の検討が始められたが、折しも、ネパールの登山解禁が間近そうだとニュースがもたらされて、具体的な計画案の作成に一段と熱気を帯びることになる。

以下、実行委員会の結成から出発までの2ケ年余り、紆余曲折した実行委員会の動向の概略を記して今後の参考に供したいと思う。

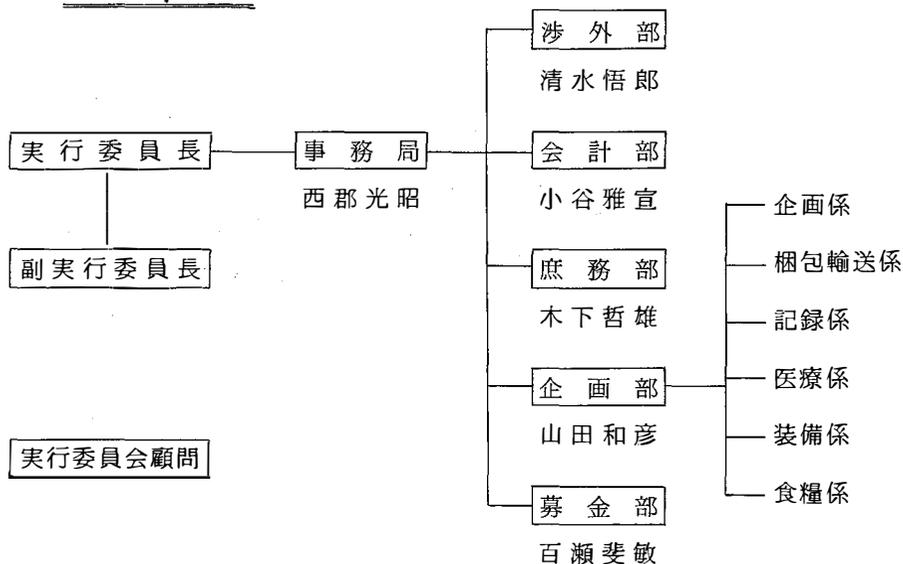
### ○ 実行委員会の結成

68年8月以来、踏査隊の経験・資料をもとに、山岳会員・学士山岳会員の有志の間で検討された計画案は、70年にネパール・ヒマラヤでも未知の山域として残されたガネッシュ・ヒュールのパビール峰(7,102m)の初登頂とその山域の踏査を主目的とするものであった。計画の規模(主として資金面の問題)から、計画を推進する母体として実行委員会を設ける必要があるとの判断により、各学部山岳部顧問・学生部厚生課などとの交渉を持ち、計画の主旨・概要などの説明会を兼ねた2回の実行委員会設立準備会を経て、顧問・大学当局の理解と協力のもとに、11月20日、第1回の実行委員会を開催することができたのである。

この第1回の実行委員会では、基本方針の確認・委員会の組織・構成メンバーの承認がなされたが、活動の中心となる実行委員長は決定し得ず、とりあえず、山田助教授(理学部顧問)を実行委員長代行として、実行委員会の活動が始まることになる。

実行委員会の組織は以下に示すとおりであるが、各山岳部顧問、および学生部厚生課長、同補佐は実行委員会顧問に位置づけ、全般的な立場からの指導・助言の役を担い、山岳会員・学士山岳会員は各係の仕事を担当することとし、全体の総括を行なう事務局を学生部厚生課に置くことが決められた。

## 実行委員会組織



実行委員長については、山岳会員・学士山岳会員の強い要望で、山岳部顧問教官に引受け願うことになり、顧問団の2度の話し合いの後、第2回実行委員会で、委員長に中村教授（農学部顧問）、副委員長に山田助教授を決定した。

### ○ 目標の山の変更

未知の地域にあり、登山の対象としても格好であるとして計画が練られていたパピール峰は、68年11月、ネパール政府が公表した新登山規則で入山が認められる38座に含まれず、入山許可が出されないことが明確になった。幸い67年の踏査隊が偵察し、登頂可能の見通しを持ち帰ったアンナプルナ山群の未登峰、ニルギリ中央峰（7,223m）が38座に含まれており、パピール峰の計画をほぼそのまま移行できるため、急遽・変更することを決定し得たが、スタート早々のことであり、我々にとっては少なかなぬショックではあった。

後日、このニルギリ中央峰も政情不安を理由に不許可となり、再度目標を変更することになるが、詳細は後述する。

### ○ 学術調査

準備会の段階から今回の遠征計画には学術調査も行ない、信州大学として学術的な面での成果も併せもたらすべきであるとの基本方針が確認されていた。当初、医学部の順応生理学・農学部の作物育種学・花卉園芸学・森林化学の各研究室と交渉がもたれ、各々関連テーマ・調査内容・日程・コース・経費など細部の検討もなされていたが、最終的には順応生理部門の日本エベレスト・スキー探検隊への合流・予定メンバーの健康悪化・目標の山の変更に伴う隊員への制約条件などによって、調査内容をよりプリミティブなものに変更することを余儀なくされることとなった。

## ○ 偵 察 行

68年12月の第2回実行委員会で百瀬・吉沢両委員より、1)登攀ルートの前モンsoon期の積雪状態の偵察、2)本隊のB・C位置の確認を目的として、69年4月中旬から60日間の予定で偵察を行ないたいとの提案が出され検討された。結果的には、休曜日数の制約から偵察の実現は不可能となり、独自のネパール踏査行に終ることになるが、計画を推進する新たなエネルギー源のひとつであった。

## ○ 隊員募集、第1次隊員選考

69年1月の第3回実行委員会で、隊員候補の募集については、広く隊員を募り、明朗に隊員を決定したいとの意向で以下の企画部の提案が了承された。

### 応募条件

- 1) 信州大学学生、卒業生または教職員であること。
- 2) 健康で、長期間の質素な生活に肉体的精神的に耐えること。
- 3) 実質的な積雪期登山の経験を有すること。
- 4) 自己負担(20~40万円)の可能なこと。
- 5) 家族・親族および勤務先の同意を得ていること。
- 6) 遠征隊に貢献し、成功への協調精神に富むこと。
- 7) 計画進行上なんらかの形で計画にたずさわれること。

### 決定までの日程

- |      |           |
|------|-----------|
| 2月末  | 募集締切      |
| 3月中旬 | 隊員選考委員会結成 |
| 5月上旬 | 練成合宿      |
| 5月下旬 | 隊員決定      |

1月末、関係者に連絡、公募された結果、締切りまでに25名の自薦・他薦・自他薦の応募があった。

69年3月、第4回実行委員会では隊員選考委員の決定に際して、企画部より山岳会員および学士山岳会員をよく識り、全体的は把握ができる人として提案されたメンバーの半数が山岳会・学士山岳会の、また実行委員会の中心的メンバーであり、同時に隊員候補にもなり、なおかつ選考委員に選ばねばならないという層の浅さを示すこととなり、紛糾するところとなった。

しかし、登山許可申請書類の提出日程から隊員選考の日程を遅らせることが難しい時点であったため、委員長・副委員長・事務局・委員有志で、隊員候補の身辺事情の調査を行う隊員選考暫定委員の人選を行ない、暫定委員により隊員および補欠の原案の検討が行なわれることとなった。69年4月第5回実行委員会における暫定委員の承認および隊員候補原案の承認・決定によって、申請書類の作成・提出にこぎつけたのであった。

原案は、

(隊長) 中村 健 (副隊長) 山田和彦  
(隊員) 片岡 格・森田稻吉郎・松尾武久・岡村知彦・吉安尚夫・山下泰弘  
(学術調査担当) 中村 健・氏原暉男・宮崎敏孝  
(補欠) 井口降夫・扇能 清・佐藤正敏・吉野英夫  
であった。

#### ○ 後援会の構想

計画実現の成否を決める“資金”については、最初から中心話題であって、計画の対外的・資金的バックアップを担う後援会を結成し得るか否かに大きな比重がかかっていた。一方、報道機関へいわゆる大口スポンサーとして遠征資金の大半を依頼すべく数度の交渉を持ったが、我々の期待する解答は得られず、日時が過ぎ去った。

後援会の構成については、第3回実行委員会で安岡厚生課長から学内のみでなく学外からの後援を考慮して、全県的な構成を考えるべきであるとの提案があり、実行委員会の了承を得たが、交渉途中に学内の人事異動・地方選挙が始まって、後援会の実質的な結成は70年7月にまで持ち越されてしまうことになった。

#### ○ 再び目標の変更

69年5月下旬、ネパール踏査行を終えて帰国した百瀬・吉沢両委員によって「ニルギリ峰の登山許可は難しい状態にある」との情報がもたらされ、第6回の実行委員会はこの対策を検討することになったが、その結果は、外務省、在ネパール日本大使館および泊山岳会(69年ポスト・モンスーンの北ニルギリ東峰、ティリツォ・ヒマールの登攀を計画申請中)に詳細を問い合わせた上で改めて態度の決定を行なうことであった。

6月中旬、泊山岳会の申請に対して「ニルギリ峰は登山が許される38座に含まれるもムスタン経由でチベット住民が移入しているため、ニルギリ峰山域への登山は当分の間禁止する」とのネパール政府の正式解答があったことを外務省で確認することになった。このことに対する実行委員会の態度は、6月末の第7回実行委員会で討議され、

- 1) 我々のルートは泊山岳会とは異なり、南面ミリスティ・コーラ(アンナプルナⅠ峰へのフランス隊のルートであった。)からであり、解答の“ニルギリ峰山域”の範囲を明確にするためにも登山許可申請はとりきげない。
- 2) 現在の申請が許可されない場合は、70年プレではかなり難しい状況になる。時期の変更を含めて(70年ポストもしくは71年プレ)登山許可のとれそうな山の研究を始める。
- 3) 研究対象としては、ラムジュン・ヒマール、バウダ・アンナプルナⅡ峰などとし、分担して資料を集める。

4) この計画は登山のみでなく学術調査も含めた信州大学の遠征隊として考える。

を確認することになる。

69年8月末の第8回実行委員会では、医学部順応生理学教室の上田教授を通して、69年ポスト・モンスーンの日本エベレスト・スキー探検隊の偵察隊への医師派遣の要請があり、委員長・副委員長・企画部で検討の結果

- 1) ニルギリ峰の計画のプッシュを行なう。
- 2) ニルギリ峰不許可の場合には、第7回実行委員会で確認された基本線に従って仮の申請書を出しておく。
- 3) 申請した山の偵察を可能な範囲で行なう。

等、我々の計画へのプラス面を考慮して、山田(和)企画部長に参加してもらいたいとの企画部の提案が承認された。

席上、山田(正)委員からダウラギリⅡ峰の研究説明があるがアプローチに1ヶ月を要する点に難色が示された。

以後

9月中旬 山田(和)より、ニルギリ不許可、アンナプルⅡ峰の仮申請をしたとの電報があり、前後して外務省より、ニルギリ不許可、他の山を選ぶようにとの連絡あり。

10月7日 信濃毎日新聞社より、アンナプルⅡ峰の登山許可の外電が入ったとの連絡あり。

10月上旬 ネパール政府外務省より、アンナプルⅡ峰の推薦状を送付するようにとの連絡あり。

10月中旬 ネパール政府外務省より、登山料払込みの請求あり。

と事態は急転し、我々が最も四苦八苦した登山許可が思いもよらぬタナボタ式に出されたことによって、登山許可取得の感激を味わうことなく逆にとまどいを感じることになった。

(この間、8月4日から10月21日：大学本部建物封鎖、9月15日から10月18日：農学部講義棟封鎖、9月27日から10月18日：西郡事務局長研修出張が重なり、実行委員会の動きは一頓挫を来すことになる。

第9回の実行委員会は、事態の急転後約一ヶ月過ぎた11月3日に開催され、活発な討論の後、目標：アンナプルⅡ峰(7,937m)、時期：71年プレモンスーン期と計画変更を決定することになった。そしてこの8,000m弱への目標の変更は、隊員構成をはじめ、これまでに立てられていた計画のすべてを根本的に検討し直すこととなり、“8度目の計画書”案の検討・作成が始まることになる。

実行委員会では隊員の構成について

- ・隊員の総勢10名
- ・山岳会員は最少2名を含める。
- ・隊員は原則として登攀と学術調査を兼ねる。
- ・登攀のみに専念する隊員は3名以内。

の基本線を確認して、隊員の選考・計画細部の検討を、隊員選考委員会および企画部に一任することになった。

## ○ 第 2 次 隊 員 選 考

第 9 回実行委員会での目標変更の決定にともない、正式の登山許可申請書類を早急に提出する必要があつて隊員の再選考が急がれた。11月9日に開かれた隊員選考委員会では、新たに推薦のあつた候補も含めて先の実行委員会で確認された基本線に沿つて検討が行なわれ、以下の選考委員会案が決定された。

- (隊長) 山田和彦 (医療、医学調査)
- (隊員) 西郡光昭 (医療、医学調査)
- 片岡格 (登攀専念)
- 森田稲吉郎 (登攀専念)
- 松尾武久 (気象データ収集)
- 宮崎敏孝 (林学、砂防関係調査)
- 岡村知彦 (登攀専念)
- 山下泰弘 (昆虫関係調査)
- 佐藤正敏 (山岳会員、人文学部3年)
- 市野和雄 (山岳会員、農学部2年)

ただし、西郡および山岳会員の2名は、実行委員会および山岳会の動向により変更もありうる。

この決定によって、日本山岳協会の推薦状交付申請書類を11月20日の長野県山岳協会の海外登山審議委員会に間に合わせるべく作成、提出することができたのであつた。

12月7日の第10回実行委員会では、ネパールより帰国の山田企画部長を交えて隊員選考委員会案の検討がなされ、学術調査についての基本的な考え方が討議された後、選考委員会案に隊長推薦として小川永行・出島五郎・扇能清の3名を加えて二次隊員候補とすること、および70年6月までに最終決定することが承認された。

## ○ 西郡事務局長の日本エベレスト・スキー探検隊への参加

70年1月、医学部順応生理学教室より、70年プレ・モンスーン期の日本エベレスト・スキー探検隊の医学調査員として、積雪期登山も十分にこなせる人の推薦依頼があつた。突然で期日のせまっていたこともあつて、山田・百瀬両副委員長・事務局・企画部で検討の結果、計画実現の実質的な推進時期に事務局長が不在になることが憂慮されたが、当初から学術調査面で連携してきたこともあつて、我々の計画の推進と同時に信州大学として対学外への考慮なども勘案して、西郡の参加を決定し、次の実行委員会で追認を求めることとなつた。

そして、西郡のネパール滞在中に、我隊で雇用するシェルパについて日本エベレスト・スキー探検隊での勤務評定をもとに、同隊に参加しているシェルパを中心にしてサーダー1名、コック1名、ハイポーター10名、キッチンボーイ3名、メイルランナー1名の雇用契約を済ませたのである。

### ○ 実行委員長の交代

69年9・10月の農学部の学園紛争時の過労のため、体調不良の続いていた中村委員長より、70年2月初旬に辞任の申し出があり、顧問間で検討の後、2月下旬の第11回実行委員会で辞任の承認と後任に赤羽教授（医学部顧問）を決定して、後援会の結成・資金集めに新たな意欲で取り組むことになる。

### ○ 後援会の結成

第8回実行委員会で了承された後援会構想は、いわゆる大口スポンサー（信濃毎日新聞社・信越放送）を別個に考えたものであったが、その後、池田学長をはじめ、中村委員長・山田副委員長・企画部などによる数度の交渉の後、両者を含めて後援会を構成することになった。

69年10月の登山許可発表後は、後援会の結成・資金集めに焦点が合されることになるが、交渉が最終的に煮つまるのが70年の5月であり、7月6日の結成式をもって実質的な後援会の発足になったのであった。後援会の難産はあとあとまで尾を引くことになり、留守本部に隊出発後の募金活動を負わせることになった。

最終的な後援会の構成は以下のとおりである。

#### 信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征後援会

（会 長）	長野県知事	西沢権一郎		
（副会長）	長野県議会議長	尾崎秀男		
	長野県教育委員会委員長	宮尾五郎		
	信濃毎日新聞社社長	小坂武雄		
	信越放送社長	石原敏輝		
	長野県経営者協会会長	田中重弥		
	長野県医師会会長	寺島清七		
	長野県農協中央会会長	滝沢敏		
	八十二銀行頭取	小出隆		
（参 与）	長野県議会副議長	臼田 潔	上田市市長	小山一平
	長野県議会 社会企画	申原義直	上田市議会議長	平野 茂
	および文教委員会委員長		伊那市市長	三沢功博
	同上 副委員長	戸塚 一	伊那市議会議長	松崎新助
	長野県教育長	伊沢集治	南箕輪村村長	木の島新一
	長野市市長	夏目忠雄	南箕輪村議会議長	征矢清人
	長野市議会議長	市川勘一		
	松本市市長	深沢松美		
	松本市議会議長	下条寛一		

	信州大学人文学部長	中川大倫	信州大学繊維学部長	白樫 侃
	信州大学教育学部長	土屋智明	信州大学教養部長	池尾健一
	信州大学理学部長	倉沢英夫	信州大学附属病院院長	小田正幸
	信州大学医学部長	尾持昌次	信州大学学生部長	羽島不二夫
	信州大学工学部長	土屋英俊		
	信州大学農学部長	兼松満造		
(幹事)	信濃毎日新聞報道部長	武藤清亨		
	信越放送制作部長	林 荘司		
	信州大学学士山岳会長	百瀬斐敏		
(督查)	信州大学事務局長	西間木久郎		
(事務局)	信州大学学生部厚生課長	高崎正弘		

#### ○ギルミ・ドルジェ、アン・ペマ来日、交歓会

我々の隊のサードおよびアシスタントサードの契約を交していた、ギルミ・ドルジェ、アン・ペマの2人は、日本エベレスト・スキー探検隊での活躍によって同隊より招待されて来日した。7月20日から3日間、2人を松本に招待し隊員候補が中心になって交歓を行なったが、この時の交情が現地での隊員・シェルパ間の意志疎通の根幹になるとは誰も予想しえないプラス面があった。

#### ○隊員の決定

第10回実行委員会の決定に従って、6月下旬第13回実行委員会では隊員決定について審議がなされるが、隊長予定の山田(和)の身辺事情の悪化によって参加が難しい状況にあること。また、副隊長予定の西郡も日本エベレスト・スキー探検隊に参加した直後で条件が整え難いことが報告され、この件の結論は情勢の変化を持って決定することとなる。

9月上旬の第14回実行委員会では、山田(和)、西郡とも身辺の事情は今後も好転しそうにないことが報告され、討議の結果、

- ・実行委員会としては早急に態度を決定する必要があるが、本人の意志に反して事務的に事を決定することはさけるべきである。
- ・実行委員会としては両氏の“生活”の保証まで行ない得ないが、両氏とも参加できない場合には計画推進の柱を失うだけでなく、対外的にも対内的にも今後大きな問題を残すことになる。

として

- ・両氏・委員長・副委員長・隊員候補で構成する小委員会で細部の事情まで話し合った上で結論を出す。

ことが確認され、結論は次回に持ち越されたのである。

また、席上、小川(永)の候補辞退の申し出および後援会との関係を考慮して、報道・記録を担当する隊員候補を追加するかどうかの検討を上記小委員会に任せることが承認された。

以後、小委員会で両氏の身辺関係者と接渉が持たれたのち、

- 1) 実行委員会としては、現在の情勢が山田（和）氏の辞退申し出を認めざるを得ない。
- 2) 現状では移入隊長は考えられない。
- 3) 現在西郡氏の処遇について明確な解答が出されていないが、この時点で隊長を引受けてもらわざるを得ない。
- 4) 実行委員会は西郡氏の処遇等を整えるために最善のバックアップを行なう必要がある。

との小委員会の結論が出され、10月4日の第15回実行委員会はこの小委員会の結論を承認して、遠征隊の隊長に西郡を決定したのであった。

つづいて他の隊員については、西郡隊長より「自分のことについてもはっきりしない時点で隊員を決定することはひっきりがあるが、日程・準備の都合で10月中には決定する必要があるので、隊長・委員長・副委員長・企画部長・庶務部長・山岳会委員長・学術調査アドバイザーで構成する小委員会で検討・内定し、次回実行委員会で追認・決定したい。」との提案があり、異議なく承認して隊員決定はまたまた持ち越すことになる。同時に報道・記録を担当する隊員候補として堀勝彦氏を追加する小委員会案も承認された。

隊員決定小委員会は、10月になって出された出島氏の体調不良による候補辞退の申し出を承認して、残り10名の候補について検討することになり、

- ・登攀を主とするメンバーが是非10名ほしい。堀氏に加わることで報道・写真等で良い結果が期待できるが、登攀面は実質9名になるので、今回は堀氏を次点にしたい。
- ・報道関係から計上予算以外に40～50万円の別途後援がある場合には堀氏を加えて11名の隊構成とし、報道・記録と昆虫関係の学術調査を充実させる。

を決定し、11月15日の第16回実行委員会で承認決定された。一方、報道関係から別途後援の確約がとれて、遠征隊員は以下のように決定された。

西郡光昭	隊長	総括・渉外	医療・医学調査
片岡格	副隊長	梱包・輸送	
堀勝彦		報道・記録	昆虫調査
森田稻吉郎		装備	
松尾武久		記録	気象調査
宮崎敏孝	マネージャー	企画・渉外	林学・砂防調査
岡村知彦		装備	
扇能清		会計・企画	植物調査
山下泰弘		食糧	昆虫調査
佐藤正敏		梱包・輸送	
市野和雄		食糧	

#### ○ 寄附・寄贈の依頼、受領開始

後援会の結成がほぼ本決まりになった70年6月末の第13回実行委員会で寄附行為への免税処置（指定寄附金免税）を得ることによって、寄附額を約8割増すことが可能であることが検討され、認可申請の手続をとることが了承された。申請書類の作成・提出と共に裏面からの工作も推められたが、連絡がつかない間に却下された旨連絡が入り募金の前途はかなり厳しいものになった。

一方、寄附・寄贈依頼は、装備・食糧・梱包・医療の各係で依頼先の検討が行なわれていたが、実行委員会として系統だてて依頼することになり、依頼文書などが整って、本格的な活動が始まったのは9月になってからであった。

物品寄贈は各係の下準備が整っていたこともあって、予定通り順調に進捗したが、資金の寄附は不景気風が吹き出したこともあって、遅々として進展せず一時はかなり切迫した雰囲気が出るようになった。そして、9月末の八十二銀行、10月初めの県補助が決まってやっと前途の収支見通しを考える余裕が出たのであった。

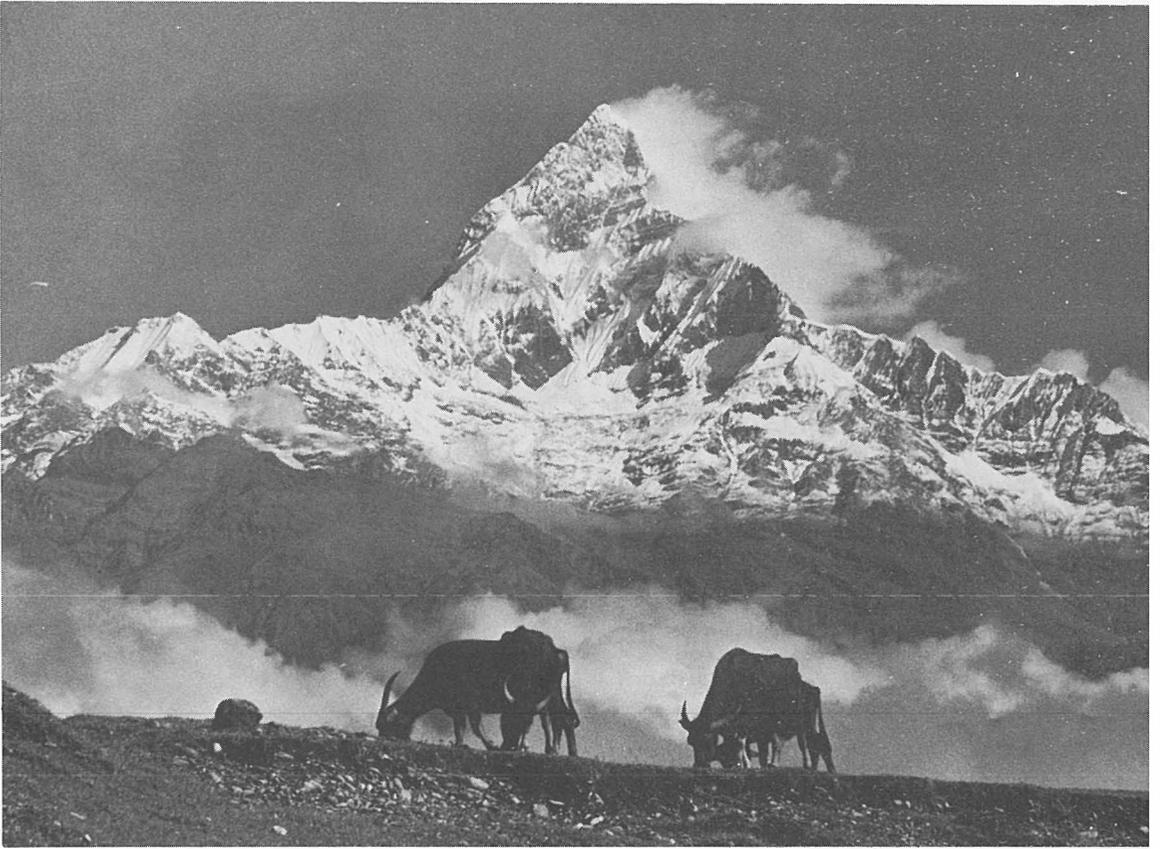
10月以後、学内・学士山岳会の募金は順調に進んだが、後援会・一般寄附については、動き廻れるメンバーが2～3名に限られたことや、寄附依頼の要領の拙さが重くなって、71年2月の隊出発時点で80万円近い未払いを残して残務処理を留守本部に託すことになったのであった。

#### ○ 出発準備・離日

11月に入ると寄贈物品の受取り・寄附依頼のほか、隊荷の輸送・渡航・通関手続の調査・渡航費の割引交渉などに加えて、隊員決定に伴う一部隊員の処遇交渉・依頼書類の作成・発送等々、期日のせまった問題が一度に持込まれることになり、事務局はテンテコ舞いをさせられることになった。

11月下旬から梱包が開始されるが、納品のおくれた物品にやきもきしながらも山岳会員・学士山岳会員のサポートによって、12月下旬、海路輸送の全物資をカートン・ボックスに詰め終り、正月返上でクレート詰め、パッキング・リストの印刷・通関書類の作成を終えて、期日ギリギリの71年1月5日6トン近い隊荷を横浜へ向けて送り出すことにこぎつけた。

一段落でほっとする間もなく身辺整理・必需品調達の際に、1月31日第18回実行委員会、2月3日の後援会壮行会を経て、2月7日先発、松尾・佐藤、2月11日中発、西郡・扇能・山下の出発後も前日まで寄附依頼・受領が続き、事務引継ぎを東京まで持ち越して2月18日日本隊、片岡以下6名が羽田を飛び立ったのであった。



# 遠 征 隊 の 概 要

遠征隊の概要  
遠征隊活動総括  
学術調査の概要

西郡光昭  
宮崎敏孝



# 遠 征 隊 の 概 要

## 1 隊 の 名 称

1971年信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊

## THE NEPAL HIMALAYA EXPEDITION OF SHINSHU UNIVERSITY 1971

## 2 遠 征 の 目 的

- (1) 中部ネパール・アンナプルナⅡ峰(7,937m)の登頂。
- (2) 高所における運動の、人体におよぼす影響の調査研究。
- (3) プレモンスーン・アンナプルナ周辺の気象データ収集。
- (4) ネパール・ヒマラヤ山域の花卉・花木類のわが国への導入についての調査研究。
- (5) 中部ネパールにおける稲の害虫被害の自然制禦状況の調査研究。
- (6) 氷河地帯における砂石の生産、流出状況の調査研究。
- (7) ネパール・ヒマラヤ山域における有用林木の生長率の調査研究。

## 3 遠 征 の 期 間

1971年2月7日～1971年11月29日

## 4 隊 員 の 構 成

隊 長	渉外総括	西郡光昭	31才	長野県木曾保健所勤務	医師
副隊長	梱包輸送	片岡 格	35才	不破建設株式会社勤務	
隊 員	記録報道	堀 勝彦	36才	自営カメラマン	
〃	装 備	森田稻吉郎	30才	植生高等学校 教諭	
〃	記録気象	松尾武久	29才	川鉄商事株式会社勤務	
〃	マネージャー	宮崎敏孝	28才	信州大学農学部助手	
〃	装 備	岡村知彦	28才	佐久市立内山小学校 教諭	
〃	マネージャー	扇能 清	23才	信州大学農学部 学生	
隊 員	食 糧	山下泰弘	23才	信州大学農学部専攻科 学生	
〃	梱包輸送	佐藤正敏	22才	信州大学人文学部 学生	
〃	食 糧	市野和雄	21才	信州大学農学部 学生	

5 シェルバの構成 ( )は出身村の名

サ — ダ —	ギルミ・ドルジエ(クンデ)
高所ポーター	アン・ペマ(クムジュン)
〃	ペンバ・ヌルブ(クムジュン)
〃	アン・ヌルブ(ルクラ)
〃	アン・ヌルブ(パンボツェ)
〃	アン・ヌルブ(ポルツェ)
〃	アン・チョタレ(スルケ)
〃	アン・リタ(クンデ)
〃	ペンバ・ツェリン(クンデ)
〃	ハクパ・ツェリン(クンデ)
コ ッ ク	ヌルブ(クンデ)
キッチン・ボーイ	ドルジエ(クンデ)
〃	パサン・テンバ(クムンジュン)
〃	ナワン・チョタ(クンデ)
メール・ランナー	パサン・リタ(クムジュン)

6 リェゾン・オフィサー ハリ・ダス・ライ(I・P)

7 行 動 概 要

1971年

1月 5日	隊荷、松本発	3月28日	登山開始
21日	〃 横浜発	5月 4日	登頂失敗、佐藤遭難死
2月 7日	先発隊、羽田発	9日	B・C集結、登山終了
11日	中発隊、羽田発	5月13日	B・C発
16日	隊荷、カルカッタ着	21日	ポカラ着
18日	本隊、羽田発	26日	西郡以下帰国
3月11日	隊荷、陸路ポカラ着	11月29日	学術調査隊帰国
14日	先発隊、キャラバン開始		
16日	本隊、キャラバン開始		
26日	B・C建設		

# 遠征隊活動総括

隊長 西郡光昭

## 1. 出国まで

遠征隊が本国を離れる前2～3ヶ月は最も多忙な時期となることは、これまでのどの遠征隊も同じであろう。我々の隊も、その例にもれず、資材集荷、梱包に追われて、チーム・ワーク作りを主眼にしたトレーニングは出来なかった。しかし、隊員のうち冬季休業にまとめて日数のとれる3名の現役隊員には直前の冬山合宿に参加してもらった。

資材の発注、集荷の点では、計画的に行われなかったうらみがあった。一度発注したウインチを、重量、価格などの理由で割愛せざるを得なかった点など、事前の検討を怠ったゆえであり、集荷では主に寄贈品についても若干の計画性を欠いたことは否定できない。我々の場合、比較的時間的余裕の持てる現役と他の一部隊員にそのマイナス面を補ってもらうことになったが、勤務を持つ隊員から成る遠征隊では一考を要する事項であろう。結果的に集荷状況はほぼ満足すべきものであった。

梱包は全て隊員が実行委員会と現役メンバーの助けをかりて自力で行った。詳細は梱包担当の報告にゆずるが、最外枠のいわゆるクレートの木枠の一部が横浜までの輸送途中にて一部破損し、修理を余儀なくされ、カルカッタからポカラのトラック輸送の積み下しの作業中にも破損した。幸い荷の抜き取りはなかったが、これはクレートの材が薄かったこと、段ボールの詰め込みの時点でカーターの姿勢を整える上での問題があったためにおこったものであり、この点に関し改良を加えれば、多少の労力が得られれば梱包費の点ではかなり節約できることが分かった。

我々の場合、隊荷の重量と輸送費を検討した結果、海路輸送の方法を取らざるを得なかったが、これほどの大規模な遠征隊でなければ、最近の傾向であるように、空輸を主体に考えるべきであるかも知れない。

## 2. 出国ーポカラ

我々は早期のインポート・ライセンスの取得とカルカッタでの無税通関、インド国内を輸送しポカラまでの陸送を行うことを目的に、2名の先発隊を先行させた。残りの隊員がその他の手続きは全て後発して行うという予定であった。

カトマンズでの仕事は概ね順調であったといえる。インポート・ライセンス取得は2月12日に、翌13日は隊荷の無税通関と陸送のため、2名がカトマンズ発カルカッタに向うことができた。カトマンズにおける作業は中発3名がカトマンズ到着後から本格的にはじまったがすべて順調に進んで大きなトラブルはなかった。しかし、この際にはヒマラヤン・ソサエティのパラジュリ氏、プラダン氏、ラマ氏のデレクター、そして、ホテル・ラリ・グラスのI・セルチャン氏の協力があってこそを特筆しなければならぬ。ここに感謝の意を表する次第である。

シェルパの雇用にも支障なく、その半数は隊長と旧知であり、非常に幸いした。リエゾン・オフィサーのH・D・ライ氏も隊長と、1970年日本エベレスト・スキー探検隊に同行しており人間関係の面では問題となることが少なかった。

しかし、シェルパ雇用の面でのヒマラヤン・ソサエティの役割については少なからず疑問を持たざるをえない。我々の場合、シェルパの雇用の面ではサーダーのギルム・ドルジェと約1年前から交渉を続けており、ほぼ確立していたと良いほどの段階に至っていたので、具体的にソサエティのアレンジは必要としなかったにもかかわらずアレンジ料をRS1,000も取られた。このアレンジ料が、その他の面、たとえば通関、ライセンス取得での料金とすれば別であるが、もう少し内容を明確にすべきだと思った。

我々の隊荷は船便の他に、約130kgの空輸便があり、この到着が遅れて若干気をもむことがあったが、後述するようにカルカッタ陸揚げ隊荷のことを考えれば、結果的にはさきさいなことのように思われる。この空輸隊荷は2月19日着の6名の本隊とともに到着するはずであったが実際は2月24日にカトマンズ着であった。

一方、インポート・ライセンスをたずさえてカルカッタに向った2名の隊員からの連絡では2月21日にはカルカッタの通関を終了させたうえ、陸送開始の見通しとのことだったので、この日程に合せると、2月27日には隊荷ポカラ着と踏んで、カトマンズでのアレンジを進めた。現地購入の食糧も割合保存の効く、ジャガイモ、米、カリフラワ等はカトマンズが品も豊富で、比較的安価であるという情報によってカトマンズから空輸を行った。(詳細は食糧担当の報告を参照されたい。)

しかし、カルカッタ陸送開始の確認をしたうえ、カトマンズに戻る予定の松尾からの連絡では隊荷はカルカッタの無税通関を終了したものの、インド国内陸送特別許可がないため、保税倉庫に入ったままであるとのことであった。インド・ネパール両国間の事情とはいえ、トラック輸送が出来ないと我々の遠征も経済的な破綻が目に見えており、松尾は急遽、デリーのインド政庁の特別許可を受けるべく機上の人となったのであった。

その間、カトマンズでの作業はほとんど完了し、予定通り隊員と隊荷は幾組かに分けてすでにポカラへ到着しており、陸送隊荷を待つばかりであったから、ポカラでは、焦燥の日々を送ることになってしまった。

カルカッタ勢も、許可取得のため、孤軍奮闘する松尾、荷の抜取りの監視のため保税倉庫に連日通う佐藤と、はじめての土地で、はじめての経験をつむ彼等の苦労がしのばれたのであった。カトマンズとカルカッタの連絡は、主として電話を使用した。日中は混雑が激しいので、早朝に限って連絡した。電報も使ったが、これは、よほどきちんと書いて、送らないと、送信側と受信側の意志のくい違いがあったりして、余り、すすめられない。

特別許可はそれほどの手間をかけずに取得できたが、陸送の開始は3月1日であり、これは日本での計画より約14日の遅れであった。大型トラック2台に分けられた隊荷には、佐藤が同乗し、陸路、ノータンワの町へと急いだのであった。佐藤の出発を確認した松尾はカトマンズに空路、引き返し、宮崎

とシェルパのアン・ペマと合流し、バイラフでの通関のために、必要書類を携えて、カトマンズを後にしたのであった。

隊長とリエゾン・オフィサーは、やはり通関アシストのため、ポカラよりジープでバイラフ入りし、ランビニ管区のスプデント・ポリスを訪れ、通関ならびにネパール国内の隊荷輸送にあたって、協力を依頼し、当署長であるC・B・ライ氏の快諾を得ることができた。しかし、インド側税関のあるノータンワまでは隊荷は無事に到着していたが、カルカッタ税関の発行する無税通関許可証の写し(Bフォームのドブリケイト)が未着のため、通関できずに、陸運業者の倉庫に放置されていたのであった。こんなこともあるだろうということで、松尾が、カルカッタで手に入れた、Bフォームの写しを持参していたので、それを税関吏に見せたが、カルカッタ税関から送られてくる、Bフォームの「正」がないと絶対に通関されないとのことで、ここでもまた、足留めをくらってしまったのであった。いくら交渉しても、らちがあかないので、結局、Bフォームの「正」の到着を待つことにし、隊長と宮崎は、隊員の待つポカラへと引き返したのであった。もちろん、これまでの時点でバイラフ税関での手続きは終了しており、これには、C・B・ライ氏のご尽力に負うことが大きく、改めて謝意を表するものである。

(氏は1965年明治大学のゴジュンバ・カン遠征隊のリエゾン・オフィサーをもつとめられている。)

ノータンワ税関にBフォーム到着の電報を受け取ったのは3月10日であり、残りの全員がポカラへ集結して以来10日後のことであった。この当時は、カトマンズで購入した食糧品がそろそろ腐りかけてきて、再調達が必要に迫られる項であった。これまでの無為の日々には、サーダーと非常に懇意なヒマラヤ・ホテルの主人であるアムド・ケサン氏の好意によって犠牲的ともいえるほどの安価で世話になることが出来たのであった。

3月11日、2台のトラックに分乗した2名の隊員とシェルパ1名がホテル下の道に元気な姿を見せてくれたときは、正直なところホッと、彼等の努力に頭の下がる思いで一杯であった。

当日より開梱し、キャラバン用に再梱包にとりかかったのであった。ポーター1人当りの担荷重量を35kgとし、それを越えない範囲で着々と準備は進められたのであった。しかし、シェルパの個人装備支給の段階で、小物入れ用のサブ・ザックが無いという文句が出たときは、予想しなかったとはいえ、彼等の強硬な態度に驚いたのであった。我々の計画では、彼等にサブ・ザックを支給するかわりに、大きいキャンバス・バッグと背負子を無料で支給することにしていたのであった。しかし、シェルパにとっては実用性というよりは、むしろ、シェルパの威厳を保つためであろうが、承知できないことのようにあった。我々隊員用のものは隊員各自の調達であったので、できるだけ予備を探し出したが、とても全シェルパに渡るだけの数はなく、最後に隊長が率先して個人持ちのサブ・ザックをシェルパ用に充当するという結果になってしまった。隊員達はザックの他に入山後のポッカ用の特別の背負子を持参しているものが多かったので、特別支障にはならなかったが、隊長として、計画の面で思いが至らなかったことと、隊員達に思わぬ犠牲を強いた点はまことに反省すべきであった。

その他の再梱包の作業は順調に進み、キャラバンの出発も目前に迫ったのであった。

### 3. ボカラーベース・キャンプ

今回のキャラバンを先発隊と本隊に分けることは従前の計画であった。先発隊には①、北面からのルートの詳細を本隊キャラバン到着前に見定めること②、その結果によって、ベース・キャンプ（以下、B・Cと略記する。）の位置を確定するという2つの目的があったからである。

先発隊は副隊長をリーダーに、隊員3名、シェルパ2名、ポーター11名と可能な限りの小規模で最大限に機動力を発揮できると考えたパーティー編成にしたつもりであった。途中1名の隊員の身体の故障で若干行動に支障を来したことはあったが、ほぼ先発隊としての役割は果されたと考えて良いと思う。

当初のルートであった北東稜に関する情報は、すべて先発隊の偵察によるものであった。すなわち、アンナプルナⅡ峰北東稜とラムジュン・ヒマールの北尾根に囲まれた扇形の氷河からのルートは、この氷河への入り口が、ゴルジュ状で悪く、ポーターの通過がかなり難しいであろうとの判断のもとに中止され、また、北東稜の西面が絶望的な懸垂氷河を形成しているため、北東稜を忠実にたどるルートも検討されたが、凹凸の激しい急峻な岩峰がいくつもあり、国内での写真などの資料をもとにした検討の結果とは大きくくい違い、非常に困難なことが予想されてこれも断念せざるを得なかったのであった。

結局、我々の取るべきルートは、仮称「中央稜」（概念図参照）を西側から取りつか、または、更に西よりのアンナプルナⅡ峰とⅥ峰の主稜線を目指して、北面のアイスフォールを突破するか2つに焦点が絞られ、協議の結果、これも凹凸のはげしい「中央稜」は距離は短かいとはいえ、我々の実力ではほとんど不可能であろうということになり、残された、主稜線につめるアイスフォール帯のルートが唯一のルートとなってしまったのであった。

3月26日、サラタン・コーラの源流、標高約3,500m地点にB・Cを建設することになった。キャラバン全般を通じては、そのルートが「街道筋」であり、積雪のある峠越えもなく概ね順調であったといえるが登山ルートの決定については、当時の判断は正しかったと思いながらも国内での準備段階から、より緻密な調査、検討が必要であったと反省させられる。

### 4. 登山活動

B・C建設の時点で、今後の登山活動を次の3段階に分けた。

- (1) B・Cから前進基地建設（アドバンス・ベース・キャンプ、以下A・B・Cと記す。）
- (2) A・B・Cから登頂まで
- (3) 登頂からB・Cの撤収まで

また、隊員の行動は原則として、次の2つの事項を守って行うこととした。

- (イ) 2回の上部への往復で、体調をみたくうえで上部キャンプ入りする。
- (ロ) 3日または4日の行動ごとに1日の休養を取る。

- (1) B・CからA・B・C建設

3月28日、B・Cからの行動を開始して以来、4月3日には、先行工作隊が5,200mの第2キャ

ンプ(以下、C<sub>2</sub>と記す)すなわちA・B・Cに入っている。この間の行動は7日間であるから順調であったといっている。

我々の取ったルートの場合、A・B・Cまでのルートはアンナプルナ北面、サラタン谷源頭の氷河の舌端を高巻きするようなルートであった。このルートはほとんど問題となる個所がなかったのであった。途中、第1キャンプ(以下、C<sub>1</sub>と記す)は約4,500mの地点に建設している。C<sub>2</sub>直下までは、降雪にあっても、数日続く好天と春が近くなることでたちまち融け去ってしまうほどであった。

荷上げ、それに伴う高度順化とも順調であり、全てがスムーズに進んだ段階といえよう。

各キャンプ間の連絡には、トランシーバーを使用し、その交信の時刻は、事前に特別の打合せがない限り、定時交信として、午前6時、11時、午後2時、5時としたのであった。

#### ② A・B・CからC<sub>5</sub>建設まで

我々のルートの問題は予想通り、C<sub>2</sub>より上部にあった。C<sub>2</sub>より上部では、はじめの予定であるアイスフォールのルートを取るべく工作を進めていた。ある程度の困難はあるにしても、アンナプルナⅡ峰にできる限り近い主稜線への突破が可能なルートであり、その可能性は比較的高いように思われた。ただし、このアイスフォール中の前進キャンプの建設地選定には難しい問題が残されるように思われこれに対処すべく、前進キャンプのキャンプサイトが確保できるまでは、テンポラリー・キャンプを建設して前進する方法をとることにしたのであった。

C<sub>2</sub>は、余りにもアイスフォール寄りに建設したため、雪崩の飛沫をあびて、テント・サイトの変更を余儀なくされたことはあったが、前進基地としては絶好の場所であり、これから上部への前進のための、人的、物的集積場として、申し分のないものであった。

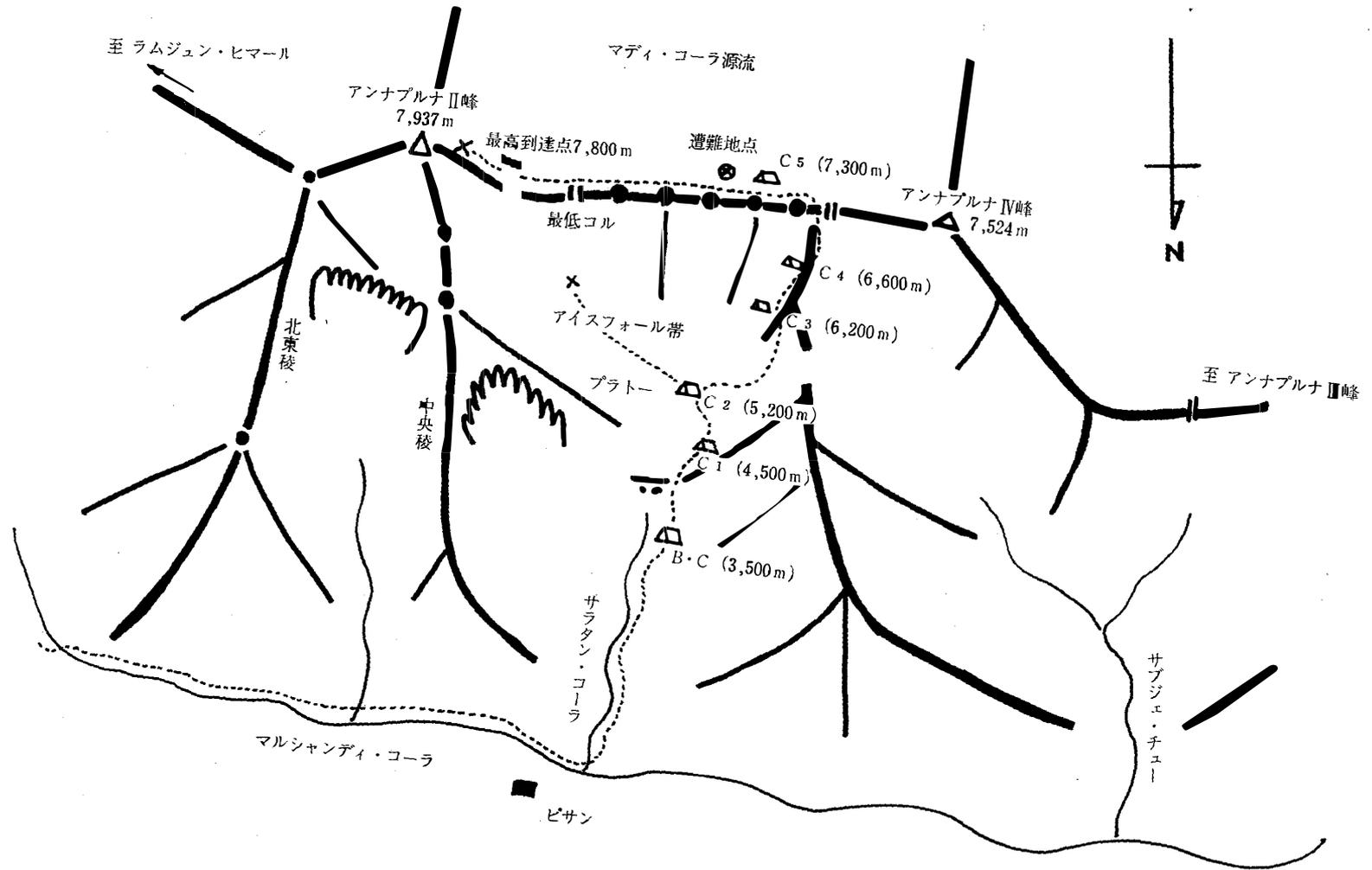
しかし、C<sub>2</sub>からの上部の工作の困難さは、アイスフォール工作に入った途端はじまり、登山開始後12日目にあたる4月8日、偵察、工作用に約5,700m地点に建設したテンポラリー・キャンプがその夜間に起ったらしいブロック崩壊の余波を受けて、支柱が折れてつぶれ、無人であったのが幸い、したが、冷汗をかくという場面があり、また、4月9日の夜半には巨大なブロック崩壊が起って、雪崩を誘い、アイスフォール全体に広がるデブリを見たときは、全く啞然としてしまった。それにしても、当日は隊員3名がテンポラリー・キャンプに入っていたにもかかわらず、今度はまったく知らぬ間の出来事であり、かえってC<sub>2</sub>が爆風と飛沫を浴びてあわてることになったことは、ヒマラヤでのスケールの大きさ、アイスフォールのセラック崩壊の恐ろしさを身をもって示されたような気がした。

他のいくつかのベルク・シュルンドが次第にその亀裂を拡げていることを思い併わせるにつけても、このような規模の崩壊と雪崩が数次にわたっておこるであろうことは、充分予測され、この格好に思えたアイスフォールのルートも放棄せざるをえなくなってしまった。

転戦するための陣容のたて直しのためにはC<sub>2</sub>は快適な基地であった。ここで、協議の結果、従来のルートよりもかなり遠廻りにはなるが、更に西寄りの雪稜だけが我々に残されたルートであった。(概念図参照)

このルートはアンナプルナⅣ峰近くに突きあげる雪稜をたどるというものであったが、従来のティル

アンナプルナ II 峰概念図



マン・ルートとは異なり、Ⅳ峰近くで合流するものであった。技術的にはこれまでよりは容易であるように思われた。

転戦後のC<sub>3</sub>建設のメドは4月14日、約6,200m地点についた。C<sub>2</sub>との高度差はかなりあるが、ルートの整備が出来あがれば問題もなくなるだろうということで、さらに上部へと足を伸ばそうというときに、このタクティクス中、最大の事態が生じたのであった。それは、4月15日から10日間、上部への前進を阻まれた降雪であり、それにも増して燃料消費の予想外の超過であり、これらの2点は佐藤隊員の遭難にも結びつく、予期せぬ出来事であった。

燃料についての報告・反省は担当者の報告にゆずるが、本隊としてはC<sub>2</sub>ヘキッチン・ボーイ2名を入れてからの消費が激しく、4月19日登山開始22日目でのチェックによれば、燃料数は、2～3週間程度という心細いものであった。前進キャンプへの燃料の輸送は頭にあって、全体としての消費、各キャンプ間の配分についての考慮に欠けていたことは否めない。この点に関しては隊長として大いに反省すべき点であった。

降り続く雪のために、上部キャンプ建設をあきらめざるを得なくなり、ついに4月21日これまでC<sub>2</sub>に待機していた主力以下を全員B・Cに下山させるのやむなきにいたったのであった。そして、天候回復を見はからって、再度アタックを行うことにしたのであった。この期に及んで、プロパンガス・隊員のコンディション・装備、食糧の消費状況などに充分注意を払ったうえで、今後の基本方針を次のように組み直したのであった。

- ① C<sub>2</sub>への再度集結を計り、登頂を試みて再びB・Cへ帰着するまでの実動日数を15日とすること。
- ② 最終キャンプへの資材輸送を考えれば、せいぜい登頂パーティーは1パーティーにならざるを得ず、しかも最終キャンプの位置と頂上までの距離によっては、一回の不時露営は覚悟のうえで、アタックを行う必要が出るかも知れない。
- ③ Ⅱ峰アタック体制が無理な場合は、登山キャリアを少しでも豊かにするため、多くの隊員にⅣ峰の頂上を踏んでもらうこと。

4月23日の時点で、今後、我々に残された登頂の方法としては、工作隊を先行させ、その後、アタック・パーティーを後続させて、調子の大きな崩れがなければ、最終的に、工作隊とアタック・パーティーを入れかえて、頂上に向かわせる方法しかないとの結論に達したのであった。

この間、C<sub>1</sub>の燃料の節約を計る目的で、B・Cからの薪の荷上げを行ったりして、4月25日、久々の晴天をみて、行動も最終的な段階に入った。松尾・佐藤の両隊員、それにサーダーとシェルパのペンバ・ヌルブをアタック・メンバーとして温存、工作隊をC<sub>2</sub>までダイレクトに上げて先行させた。

4月28日には隊員4名、シェルパ2名がC<sub>3</sub>入りし、アタック・メンバーは遅れてC<sub>2</sub>入りした。しかし、第4キャンプ(以下、C<sub>4</sub>と記す)の建設は意に反して高度が上からず、ようよう6,600mであった。なんとか7,000mに近い高さを望んでいたのであったが、ブリザードのため、以外と高度が伸びなかったのがあった。

しかし、最終の第5キャンプ（以後、C<sub>5</sub>と記す）は、これまでの工作隊と入れかわりに入ったアタック・パーティーの努力で予定通り高度が上って、C<sub>5</sub>は約7,300mの地点に建設できたことは幸いであった。

アタック・パーティーがC<sub>4</sub>入りした時点で、最終アタッカーとして、佐藤隊員とサーダーのギルミ・ドルジェの2名を選らんだ。このアタッカーの決定については別項にゆずるが我々としては、最高のメンバーを選んだと、今でもその考えは変りない。

C<sub>5</sub>の位置については、標高そのものより、C<sub>5</sub>からアンナプルナⅡ峰頂上までの距離の問題が重要であった。（この時点では、すでに、主稜線に到達できていたので、最悪の場合のⅣ峰登頂は計画から外されていた。）松尾隊員からの報告では往路3～3.5km（水平距離）はあるとのことであった。この距離はこれまでの数多くの登山隊の中でも、アタックの距離としては長い方に属するかと考える。しかし、アンナプルナⅡ峰の場合、この距離は過去2隊によって克服されて来たものであり、この2隊とも、我々のC<sub>5</sub>よりも遠い距離から頂上を目指している。我々の場合も、この距離は決定的な不可能を意味するものではなかった。

## 5. 頂上攻撃と遭難

はじめに、酸素について触れておくと、今回の登山では酸素の使用は原則として、標高7,000m以上の高所キャンプの睡眠時使用の方針であった。理由は、附属器械を含めた重量が行動にあたる支障の方が大きいと考えたからであり、それよりも、睡眠中に充分補給する方が得策と考えたためであった。我々の場合、実際には、燃料の制限という不利な条件下での登山となったため高度順化を獲得するうえで生じるかも知れない不利をカバーするために、C<sub>4</sub>入りの時点からアタック・メンバーに睡眠時のみ吸わせることにしたのであった。

アタックおよび遭難については、別項の報告、あるいは遭難についての実行委員会の座談会に詳しいのでその方にゆずるが、そこでも述べているように、今回の遭難の最大の要因は、燃料制限によってふりまわされた計画の破綻であり、これを事前にチェックして対策を講じなかったリーダー・シップのまづさであろうと反省している。

また、アタック・メンバーのサポートに直接当たった松尾隊員のように、当日のサポートの技術的な面に関する反省も、究極的には、リーダー・シップの破綻から来ていると考えられる。

私は今、遠征隊の隊長として責任を回避せんとしていうのではないが、この遭難を機会に特に遠征隊登山におけるリーダー・シップとメンバー・シップとは何であるかを根本的に考え直す必要があるように思う。チームを組んだ登山の根本にも迫る重要な問題だと考えるからである。

遠征全体を通じて反省する点は、氷河の中に眠る佐藤隊員の霊にも、亡き佐藤とともに実力をフルに発揮してくれた隊員諸君、シェルパ諸君の努力にも報い切れなかった隊長の実力不足であったことを改めて思い知らされ、悔いる気持で一杯である。

# 学 術 調 査 の 概 要

宮 崎 敏 孝

計画書の遠征目的にあげられた6項目の学術調査は計画実現のための資金・資材の後援を受けるために、一般にアピールし易いものであったことも事実であろうが、基本的には今後も継続して追求できるテーマとして抽出されたものであった。ただ今回のみに限って考えれば、たい総花的であり、調査予定内容も隊員の実力以上のものも含まれていて、“盲蛇におじず”の感じはまぬがれ難い面がある。すなわち、準備段階での勉強不足もあって対象とするフィールドの特性も適確に把握されてなく、調査方法・使用器具等についても現地で試行錯誤を味わうものもあった。また、現地の生活環境(モンスーン期の高湿・高湿、単調な食物、のみ、南京虫、アメーバ・赤痢など)への適応不良や、器具の破損なども重なって机上の計画通りには行ない得ない項目もあった。

なお、遠征目的にはあげなかったが実施されたものも含めて、今回の学術調査の成果については資料の整理・分析・データ解析後、別途報告書にまとめることになっているので、ここでは各項目の調査概要を記して総括報告とする。

- 1) 高所における運動の人体におよぼす影響の調査研究
  - 隊員各自が指定項目について毎日記入した体調日誌 11例
  - 登山期間の隊員・シェルパの血圧測定 3回分
  - ポカラ・カトマンズ住民の血圧測定 250例
- 2) 体位・体力計測
  - 学齡児(10~18才)の身長・体重・握力・背筋力・立位体前屈の測定
- 3) プレモンスーン・モンスーン期のアンナプルナ周辺の気象データ収集
  - 定時気象観測(天気、気温、最高・最低気温、湿度、風向、風力、雲量)
- 4) ネパール・ヒマラヤ山城の花卉・花木類の我国への導入についての調査研究。  
環境条件の調査および種子の採取
  - 高山植物種子採取 40種
  - 植物生体の導入 (シャクナゲ、プリムラ、ラン)
  - 植物サク葉標本
  - 土壌調査
  - 植物生態写真
  - 栽培植物種子収集
- 5) ネパールヒマラヤ山城における有用林木の生長率の調査
  - 樹幹生長率測定 (ヒマラヤ五葉松、三葉松)
  - 樹幹形計測 ( 同 上 )
  - 林分構成調査 ( 同 上 )

- 種子採取 (三葉松)
- 6) 中部ネパールにおける稲の害虫被害の自然制禦状況の調査
  - ニカメイガ・サンカメイガの卵塊採取
    - 3地区、2シーズン、計2000塊
  - 水田生息のくも、計200匹
- 7) 中部ネパールでの昆虫採取
  - 蝶 5,000頭
  - 甲虫 2,000頭
  - ガ 3,000頭
- 8) 氷河地帯における土砂石の生産流出状況の調査研究
  - 写真撮影





ベース・キャンプへ、ベース・キャンプへとポーターの列は続く。  
眼下は激流のマルシャンディ・コーラ

## 行 動 記 録

隊荷輸送隊の記録  
インド大陸のトラック輸送  
ネパール・バイラワにおける通関と  
ポカラまでのトラック輸送  
キャラバンの記録  
本隊の記録  
登山活動の記録  
アタック・遭難  
帰路のキャラバンの記録

佐藤正敏

松尾武久



## 隊 荷 輸 送 隊 の 記 録

### カルカッタの20日間

隊荷の通関とインド陸送という重要な任務を背負った佐藤と私は2月13日、ネパール政庁より発行された「インポート・ライセンス」を持って、カルカッタのダムダム空港に降りたのであった。カルカッタは2月というのに暑く、ムっとする熱帯特有の空気があたりを包んでいた。

カトマンズでは、カルカッタを中心とした西ベルガン州とビハール州の知事の選挙中であり、左翼と右翼の激突が報じられ、不穏な空気一杯であると聞いていたので、2人とも、オッカナビックリのカルカッタ入りであった。

空港よりカルカッタ市内へ行くリムジンバスの窓には、投石よけの金網が張ってあり窓より見える建物という建物には「鎌とハンマー」のマークが落書されて、日本では味わうことのできない不安感が一杯であった。

カルカッタの町は写真で見ていたとおり、ゴミゴミした町であり、その人間の数の多いのに驚き、また神聖な牛が裕々と町中を歩いているさまはまさにインド的であり、日本人の感覚とは縁遠いものを感じたのであった。

町の中心には、芝生の大きな公園があり、それはフォート・ウィリアムというイギリスの植民地時代の砦のあとであるとのことであった。昔は虎が出没した大密林であったとのことであった。朝になるとホッケー選手の一団や、クリケットをする人々で一杯になり、政情不安でありながら、生活を楽しむ人々がいるかと思えば、家もなく公園の樹々の下で寝泊りし、貯水池の水で身体を洗ったり、髪をとかす人々がおり、まことに奇妙な取りあわせであった。

ホテルは日本人がよく泊るリットン・ホテルに予約した。部屋は天井の高い大きな部屋で、扇風機がけだるそうに廻っていた。それでも、カトマンズのホテルとは格段の上等さであり、我々としては風呂が部屋についているだけで嬉しくなってしまうのであった。

到着と同時に、我々の隊荷の通関をしてくれる「エクスプレス・クリアリング・エージェンシー」に行くことにしたが、これがまた、小さな小路の奥まったところにあり、探すのに一苦労であった。

小さな事務所の一番奥に、口ヒゲをたくわえたインド人というよりは日本人の中小企業の親父といったほうがあっているような男がいた。これが社長のゴーシェ氏であった。これまで日本隊の通関をいくつも手がけた男であり、日本領事館関係の仕事もやっておると聞いたが、我々としてはどこまでやり手であるのか判断できず、まかせきりにしてもよいのかどうか、非常に不安であった。しかし、つきあっていく間に親切な男であり、仕事には熱心であり、かなりのやり手であることがわかり我々の不安もなくなった。「アチャー」(ヒンズー語で非常に良いとの意)を連発しながら、我々の通関にずいぶん協力してくれた。

ホテルの中にはマナスル西壁隊の高橋隊長がおられ、やはり隊荷の通関の陣頭指揮をしておられた。通関についてはバルワラというエージェントを使っておられ、やはり通関で苦労しておられるようであ

った。しかし、マナスル隊の隊荷の大半は我々の便よりも1ヶ月早い船ですでに陸送してあり、あとはLPガスとごく少数の装備だけであったので、飛行機輸送を考えておられるとのことであった。しかし、我々の隊荷はやっと2月16日、カルカッタ港に到着し、難関の保税輸送がこれから始まるといった段階であった。

2月17日に、県稜山岳会ダウラギリV峰隊の柳沢隊員が我々と同室になり、長野県勢として今回の成功を祈って、共同で通関にあたることにした。県稜隊のエージェントはバルワラを使っておられ、我々の隊のエージェントはエキズプレス・クリアリング・エージェンシーであったので、得られる情報がまちまちであり、特にインド国内のトラックによる保税輸送が禁止された2月18日以降は柳沢氏とどのように手を打てばよいのか判断できず、毎日毎日、イライラするばかりであった。

2月20日、共和党のリーダーが、白昼暗殺されるといった事件があり、カルカッタ周辺がゼネストに突入して、もう町中が混乱しきってしまっていた。デリーのインド政庁にトラック輸送の特別許可を得るべく出発しようとしていた我々の予定は、この事件でまったくどうしようもなくなり、隊荷を早く輸送しなければ、モンスーン前の絶好の登山期を逸するとあって、タイム・リミットまでの日数を指折り数えたときは本当に悲愴であった。

カルカッタのダムダム空港で、デリー行のフライトのキャンセル待ちをした2日間は、まったく口では云えないような焦躁の明暮れであった。やっとデリーへ向ったのは2月25日であった。松尾がデリーに行っている間に、佐藤の働きのおかげで、隊荷のシーリングも終り、トラック輸送ができることになった。その電報を、デリーのホテルで受取ったときのうれしさは何物にもかえがたく、一生忘れることのできないことであった。

そして、2月27日に1台目のトラックが、3月1日の夜、佐藤が乗ったトラックが1台、一路、仲間の待つポカラへと出発したのであった。

(カルカッタならびにバイラワにおける保税通関については別項を参照されたい。なお、松尾がニューデリーに行っている間の佐藤の働きを彼の遺稿より記載することにする。)

#### 2月24日

12時、カスタムへ行く。12時半、ゴーシェ氏と会って、ネパール関係オフィスへ行く。ゴーシェ氏が偉い人にヒンディーで説明し、3時頃ようやくトラック輸送の特別許可証を出してくれることになった。ゴーシェ氏はそのまま、ネパール領事館へ行ってしまったので、不安になり三井O・S・Kの東氏に調べてもらったら、やはり、特別許可証は出たとのことだった。これでトラック輸送はO・Kだ。

#### 2月25日

夕方、6時、ゴーシェ氏と会う。トラックの交渉をする。明日26日、ポート・チャージを支払い、27日、シーリングの予定とのこと。シーリングに立会えるかどうか許可申請をしてもらえるよう依頼する。夜、ホテルで3,000ルピーを支払う。その結果、遅くとも、3月1日にはカルカッタを出発できるとのこと。

#### 2月27日

松尾は今日の朝も帰ってこない。朝飯のあと9時にすぐエージェントへ行く。

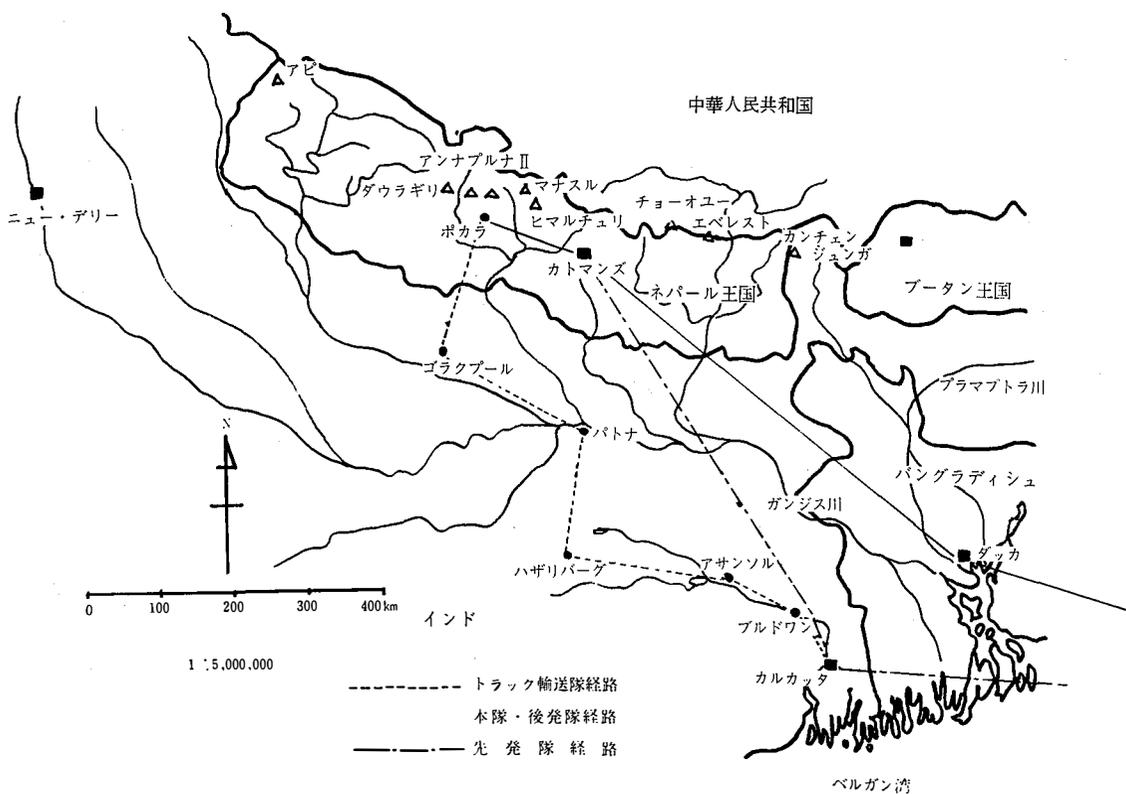
10時、エージェントの若いのとドックへ行く。いよいよ、隊荷の開梱検査とシーリングである。ネパール商務官と税関吏の立合いの上で、No.10のクレートのNo.136、No.135の Karton をオープンした。渡したはずのパッキング・リストが無く、自分の手持ちのもので、まにあわせた。別のクレートはもう、シーリングを始めている。簡単に中を見てO・K。すべてO・Kである。

4時、エージェントへ行く。3時に1台のトラックがもうドックへ隊荷を積みに行ったとのこと。もう1台は月曜になる。自分はどっちに乗っていくか、また、今日2台揃ってスタートできないかとだいぶもめたが、やっぱり別々に出ることになり、3月1日の方に乗ることにした。夕方9時に1台目が出発するとの電話を受ける。

本格的に松尾のことが心配になってきたが、調べようもなく寝てしまう。

2月28日

午前1時、やっと松尾がデリーより帰着、安心して、しばらく今後のことを話合った。



## インド大陸のトラック輸送

佐藤正敏

(この項は、遭難死した佐藤正敏君の遺稿によるものであります。)

### 3月1日

4時半、ネパール・キャリア(今回のトラック輸送業者名)へ行き、ルイア社長と会う。トラック1台が3,300ルピーということである。1ドル=12ルピーのレートでドル払いすることにした。

午後8時、トラックへ乗るため、松尾、柳沢(県稔山岳会のダウラギリV峰で遭難死)の見送りをうけて、ネパール・キャリアへいく。トラックには8個のクレートが積んであり、余った部分には他の荷物を積んでいたのので、ルイア社長にディスカウントの要求をする。4,200ネパールルピーで話をつけた。

10時、カルカッタ発、途中で子供が2人乗って総勢5名、なんやかやで町を出たのは、11時半頃であった。眠くなってきたが運転手は眠らせてくれない。

1時半、茶店みたいなところで食事、気味が悪い。チャパティーを食べる。

2時半、しばらく走った後、茶店で眠る。

### 3月2日

5時半出発、6時半、バードワンでトラックの修理、道中いたところに茶店がある。長距離トラックが停って休んでいる。朝はインディアン・ティーのみ、昼はカレー煮とライス、夜もいっしょではないかげんに飽きてくる。

家は海から離れるにしたがって、しっかりしたものとなってきた。道路の両側には立派な街路樹が並んでいる。

英語を話す者が1人もおらず、ホテルのボーイに教わったヒンディーとジェスチャーだけである。道はハザリバグでデリーへいくのと分れ、北に向いパトナの方向へ走る。街の出入口と橋には必ずチェックポストがあり、その都度、通行税を支払う。

午後11時半、州都、パトナへ着く。

### 3月3日

6時半、ガンジスを渡るフェリーにトラックを入れる。フェリーが一杯になるまで出ないのでお茶を飲みに行く。写真を撮ったりする。朝の風景はすごく印象的である。

8時半、フェリー出発

10時、対岸へ到着

11時、昼飯、めんどくさいので手づかみだ。チャプラから30分程のところ、一緒に乗ってきた子供が降りると、運転手も一緒に家へ帰ると言いはじめた。頭にきたが、明朝早く来るというので、これまで1日で来たことだし、距離から考えてあと1日あればノータンワへ行ける見込みであるので了解する。助手は晩飯のオカズを買いにバザールへ行ってしまう、どうなることかと非常に心細かった。

助手はマトンを買って来た。飯を炊くため鍋を2ヶ買って来た。彼らはトラックの脇で、炉をつくり、

炊事を始めたが、自分はふてくされて、ブランデーを飲んだ。集まって来た子供達の写真を撮ってやった。村人がヤシの実の酒をくれた。コップで6杯も飲む。彼らが欲しいというので美味くないインド製のブランデーをやったら、もっと飲めとか、髪の毛がのびているから切ってやるとか、うれしかった。真暗な中で、飯を喰って寝た。

### 3月4日

6時の約束の運転手は8時になってやって来た。さすがにさっぱりしている。

8時半、ようやく出発、シワンでお茶を飲み、トラックは快調に走る。10時頃から道の舗装が悪くなって来たので、スピードを落す。途中、人を乗せた象を2匹見た。動物園にいる象は悲しそうで、寂しそうな目をしているので、イヤなものだが、始めて生々とした目をした象に出会った。

デオリアで車の修理とガソリンの補給。ベンツのトラックはさすがにエンジンは快調である。今日は昼飯をとったきりでひたすら走る。

夕方、ゴラクプールに入る。久しぶりでパトナとならぶ大きな町である。しばらく足止めのチェックがあった。運転手に最後のハッパをかけるため、タバコ5箱、助手に2箱やった。彼らは正直である。今日中にノータンワへ着こうということになった。

ゴラクプールからひたすら北へ走り、雨まじりの中、真暗になった大地にはてしなく道が続いている。だんだん不安にかられて、はやく、はやくとあせっているうちに、ついに7時40分、国境の町ノータンワへ着いた。長かった。

8時、ネパール・キャリアのマネージャーとオフィスで会った。明日、Bフォーム(インド国内保税輸送許可証)が届くはずである。オフィスの外で寝る。蚊が猛烈である。

### 3月5日

今日はただただ、松尾の来るのを待つ。西郡隊長のところへ電報を打つ。届くかどうかはさだかではない。何度も税関へ行って見るが、松尾はついに来なかった。1日がムダ。オモシロクナイ。

### 3月6日

今日こそはと思うが、まだ来ない。事務所の暇な奴と話しをやりはじめた。ところが、これがパンジャブ大学の教授とわかり、恐れ入って、ていねいに色々話しをする。

とうとう、8時頃、バイラワへ連絡のために行こうとしているところへ、アン・ペマがやって来た。飛びあがらばかりに喜こんだ。持って来たBフォームをカスタムへと持っていたが、カルカッタ・カスタムからノータンワの国境カスタムへのディプリケイト(写)が届かないからクリアが出来ないとのことで、またまた、大きなトラブルがおきてしまった。仕方なく、バイラワへ行くと、国境で、松尾・宮崎が待っていてくれた。このときばかりは、後のトラブルのことも忘れ、役目を無事果たしたよるこびで一杯だった。

力車にゆられながら、ホテルへ向った。

〔注〕 我々の隊では、故佐藤隊員のみがインド大陸のトラック輸送を経験したのであります。ここに、ご遺族のご厚意で、原稿を借用できたことを感謝いたします。報告としては、不十分であるとは思いますが、文面を通じて、彼の努力のあとを偲んでいただきたいと思います。

## ネパール・バイラワにおける通関とポカラまでのトラック輸送

松尾 武久

3月6日、空路、カルカッタより再度ネパール入りした松尾とマネージャーの宮崎、それにシュルパのアン・ペマの3名はネパールとインドの国境の町であるバイラワへ向った。インド側の町であるノートンワにはすでに佐藤が到着しているだろうことは予想できたが、交通の便の悪いネパールのこと、やっと6日のフライトが予約できたのであった。

バイラワは、インド平原の町で、みわたすかぎりの地平線であり、さすがに暑くカトマンズの町と比べれば、はるかにインド的であった。遠くヒマラヤの方を見ると、ダウラギリ峰がひとときわ高く見え、それに続くアンナプルナ連山、そしてマナスル三山と一望のもとであった。

ノートンワの町には佐藤はすでに3月4日に到着し、我々の来るのを首を長くして待っていた。言葉も通じないインド大陸をトラックで縦断してきたとは思えないほど元気であった。

さっそく、持参したBフォームをアン・ペマに持たせて、インド側の税関へやったが、カルカッタの税関からのBフォームが届かないため通関を許可しないとの返事を受け、一同張切った気持ちが急にしぼんでしまった。

こんなこともあろうかと思い、無理やりエージェントから取って来たBフォームであったが、ノートンワの税関はそれでは絶対に許可しないと主張してやまないものであった。

隊荷がもう目の前にありながら、インド側の規則により無為の日々を送ることは耐えられないことであった。

西郡隊長やリエゾン・オフィサーのライ氏もバイラワに到着し、全力をあげて持参したBフォームでなんとか通関できるよう交渉したが、結局、カルカッタより送られてくるBフォームを待つということに落ちてしまった。日本にいるような感覚では、とうていインド人達についていけないということを感じたのであった。

3月9日だんだんタイム・リミットに迫ってくるので、なんとかしようとしていた矢先に、待望のBフォームのディプリケイトがカルカッタより到着したのであった。その日のうちになんとか通関して隊荷をネパール側に持ち込みたいと、ネパール・キャリアに交渉したが、トラックの都合がつかず、明日ということになってしまった。

マナスル西壁隊もノートンワで約10日ほど待たされていることからみれば、我々の場合は時間的なロスが少なかったといえる。

翌3月10日の朝10時、遂に我々の隊荷はネパール側の税関へと姿を見せたのだった。ネパール側の通関事務は、リエゾン・オフィサーのライ氏のお影で非常にスピーディーであった。

開梱されることもなく、1,460ネパール・ルピーを支払って総べてO・Kであった。(詳細については、ネパール側の通関の項を参照されたい。)

正午すぎより、ポカラで待つ隊員達のため新鮮な野菜を大量に買い込み、トラックは一路ポカラへ向けて出発したのであった。カルカッタに飛んでから実に26日ぶりであった。一緒にいる佐藤やアン・

ペマも非常に嬉しそうである。

道はキラキラ輝く熱帯の太陽の下、テライをただ真すぐにポカラめぎして走っている。この道はインドの援助でできたもので、非常に立派であった。窓の外を流れる風景も、なんとなくのんびり感じられ、自然と心がうきうきしてくるのだった。

昔は虎が居るほどのジャングルだったカッサウリも今は開拓されて畑に変っている。ここで、チェック・ポストを通ったが、バイラワ地区の警察署長のお墨付をもらってきたので、ここでも順調であった。インド側での数々のトラブルにくらべると、ネパール側でのこのスムーズな物事の処理は実に嬉しいものであった。

トラックは快調に走り、エンジンの音が実に頼もしく、ネパールの山岳道路をブンブン飛ばす。16時頃、ザイカリ川の渡しにかかった。フェリーボートで渡るのだが、これが人力で運かすボートであり、岸から岸へと渡したワイヤーロープで支えられており、6人の男達がもう一本別のロープを引張って、ゆっくりゆっくりと対岸へ渡すのであった。両岸には順番待ちのトラックが並んでいるが、これがまたのんびりしたもので、運転手達は草むらで眠っている。すぐ上流には、橋の建設が進んでおり、この橋が完成すれば、バイラワ - ポカラ間もグッと短縮されることだろう。

なんとか、今日中にポカラへと頑張ったが、山道でまるで蛇のようにくねくねしているし、夜の走行は運転手が嫌がったので、結局、タンシン村で泊ることにした。

夜は素晴らしい月夜で、犬がうかれて遠吠えを繰り返していた。我々も明日ポカラへ到着と考えると興奮してきて、何度も何度も寝返りをうったのだった。

3月11日、朝5時起床、満天の星のもと、ポカラへとスタートした。シャンザン村をすぎることから夜がしらじらと明け、今日も素晴らしい天気となった。しばらく行くと、マチャプチャレの山々と、アンナプルナⅢ峰が目に見えてきた。なんとという素晴しさだろうか。朝日の中にすっと立つヒマラヤ・ジャイアント。車がまがるごとに、右に左に現れられ、歓迎の挨拶を送ってくれた。佐藤もトラックの荷台で髪を風になびかせて、満足そうな顔をしていた。

曲りくねった道が、平地に入ると真すぐになるともうポカラ盆地であった。チェックポストで通行料を払っていると、色々な人間が話しかけてゆく。もう、何もかもが素晴らしく笑いがとまらないのであった。

さあ、いよいよ、本当にいよいよだ。長かった隊荷の旅は、今、目的地に到着しようとしていた。ポカラ湖のダムのすぐそばの橋を渡ると、道は2つに別れる。左をとればポカラの町へ、そして右をとれば、隊員達の待つポカラ空港だ。トラックは土煙りをあげてポカラ空港、ヒマラヤン・ホテルの前へすべり込んだ。ホテルの中からミーティング中だった隊員・シェルパがワァーと飛び出してきて、握手せめであった。嬉しい。実に嬉しい。予定より15日も遅れてしまったが、無事に隊荷を届けられたことが、ただ嬉しいのだった。

隊長のテキパキした命令で、ただちに隊荷のリパッキングに追われた。ヒマラヤン・ホテルの庭は我々のテントと荷物で一杯だ。抜けるように青い青い空がそして、頬をなでて通る風が笑っている。

## キャラバンの記録

### 偵察隊の記録

さア一出発だ。

3月14日

今日は偵察隊の出発の日である。朝6時に起床、食事を済ませた頃、ポーターが11名やってきた。メンバーは片岡副隊長、松尾、岡村、山下、それにシェルパのアン・ヌルブ(ルクラ)とペンバ・ツェリン(グンデ)、キッチン・ボーイ2名の総勢8名であった。西郡隊長の意図としては偵察隊に北東稜のルートの可能性の発見、もし、それが不可能であれば別のルートの偵察と、それぞれのルートをとった場合のB、Cの位置の確認を果していた。そのために本隊に先駆けて2日早く、しかも少人数で機動的に動けるよう可能な限り荷物を少くしたのであった。

7時、ヒマラヤン・ホテルの庭を元気に出発した。いよいよアンナプルナⅡ峰に向かって行動を開始するのかと思うと感激で一杯であった。ホテルの主人、アムド・ケサン氏から麻でできた白い布(カタ)を首に巻いてもらう。これはチベット人の風習で、また無事にポカラへ帰ってくるようにという意味であるらしい。その心使いが非常に嬉しい。

ポカラを出発してから最初のピニンケン村をすぎてから、ノルマル・ルートのベグナス・タールの方へ行かずカッチィ・コーラぞいにサンザルマレーへと向う。このルートはユーゴスラビア隊が復路に使用したらしく、あまり遠征隊の通らない道であるらしい。

ポーターは各々35kgの荷であったので、急坂になるとさすがにペースが落ちてビスタリ・ビスタリ(ゆっくりの意)になってしまう。今までの山行は自分達でポッカするのであったから、このようなポーターを使つての山行はどのようなペースで歩けばよいのか非常にとまどいを覚えた。

サンザルマレーをすぎたあたりから、道は尾根に登った。涼しい風が吹き抜け、右にベクナス・タールを見て、左は雲にかくれようとするアンナプルナⅡ峰を見て実にそう快である。

16時30分、今日のテント地であるコイレに到着した。マディ・コーラの右岸の畑の真中である。日本人の感覚では、そんなところにテントを張るなんてことは考えられないが、シェルパ達は平気な顔でさっさと張ってしまう。サブ用に買ってきた藤椅子に座って、ネパール・ティーを飲むと、これがキャラバンの味ではないかとすこぶるつきの楽しい気持であった。(松尾 記)

### 猿に笑われる

3月15日

午前6時起床し、1時間のちこの旅の第1日目の宿泊地であるコイレ村に別れをつける。坂道をかけ下り、マディ・コーラぞいに右岸を1時間、左岸を2時間歩く。谷ぞいに貧しい村が点在し、おどろくほどの高い山腹にもちよこんと2つ3つ家がかじりついている。見はるかす高地までのたな田。ネパー

ル人に日本の土地を与えたなら、その90%までを田畑にしてしまうのではないかとさえ思われるほどである。どこまでもたがやされた田畑、嘗々と人々がきずきあげた田畑、きわめて原始的な農法での自然との戦い。かくも厳しく、過酷な生活を強いられても、人々の笑顔は美しい。本当に人間らしい生活とは一体どんなだろう…。さまざまな想いが頭をよぎる。河より離れてチグリ部落着。ここで少し早めの昼食をとる。ほったて小屋の中で子どもたち数人が本を読んでいたので話しかけると、「小学校である」との答が返ってきた。クラス3であり、全員で8名(内女子1名)、教員はどこかへ行ってしまっていたがしばらくしてノコノコと帰ってくる。

白くざれた峠シエト・パイロ・コ・バンジャンをこえ、水量の多いルディ・コーラを徒渉してのちテント場を決定する。(14:00)ここはルディ・コーラとパウンドラ・コーラの合流点。マルシャンディに入る遠征隊のほとんどは、大まわりしていくためこの街道はあまり知られていないが、昨年ユーゴスラビア隊がアンナプルナⅢ峰登頂のさいの復路に使用したという。

静かな狭谷の、あるいは尾根すじの道を旅人のむれがいくつかが行き来する。質素な身なりでいくばくかの財産をたずさえ、何百年何千年となく変らぬその姿で旅人はこの道を通り過ぎていったことだろう。俺にとっては、たぶんふたたびまみえることのできない風景が眼前に現われては消えてゆく。

茶屋の男が、河には魚がウヨウヨいるというので、ぬい針を焼いて曲げて作ったつり針で松尾とルディ・コーラにつりに行く。彼らのいうようにたくさん魚なんかいないじゃないか。それに針がでかいせいか、ピクリともくいつかない。イライラしながらも川辺の岩かげで頑張っていたら、大きなサルが岩壁をたくみにトラバースしながら、あざけり笑うようにギャーギャーとはやしたてる。現地人に似てサルまでものみ高い。見物に来た見地人いはく「ダイナマイトは持っていないのか。毒薬は。……それじゃ魚なんか取れっこない」と。

夕方ルートについてのミーティングをする。正確な地図が欲しい。我々の持っている地図には、今われわれが通っている道も記してないし、現地人のいうことも10人が10人ともくい違っている。正確な地図が欲しい。(岡村 記)

## ヒマラヤの人工衛星

3月16日

テント地の前を流れるベタネ・コーラにそって、まっすぐ登る。川原の道であるので、踏跡をたどって登る。石ばかりであるのに、ポーターは平気でスタスタと歩く。彼等の足の裏は一体どうなっているのだろう。

峠へ出て見ると、マナスル三山が初めて顔を見せてくれた。ちょっと霧がかかっているのが口惜しいが、素晴らしい眺めに、しばらく佇む。ミダム・コーラとマルシャンデ・コーラの二つの川を間にはさんでいるので、明日はもう少し近くなって、さらに美しい三山が見れることだろう。

ツアップ村をすぎると、ミダム・コーラの川底に向かって八百メートルの下降である。対岸の尾根の同じ高さまで、登ることを考えると、ウンザリする。道は良く整備され、階段の石が大きな雲母で、太陽にキラキラ輝き、美しい。

ミダム・コーラのつり橋の所で昼飯を食っていると、グルン族の男女が6・7人やって来た。そのうちのたくましい男は、鉄砲をもっており、それで鳥を撃って生活しているとのこと。旧式な銃であった。女達の顔は日本人と良く似ており、日本の山中に居るような心地である。

今日の宿泊地へは、また六百メートル登らねばならないのであるが、暑い太陽を背中に受けて、日本人隊員は全員バテ気味であった。

谷間から尾根筋へ出ると、涼しい風が吹いており、ネパールの路が、尾根に発達したのが、理解できるような気がした。

やっとの思いで、今日の宿泊地のマリン村へ着き、ちょっと下った水場の近くにテントを張った。ラムジュン・ヒマールを真正面に見る絶好のテントサイトである。あたりがだんだん暮れてゆくと、アンナプルⅡ峰あたりに北斗七星が現れ、輝きを増している。夕食後、星の話をしている時に、西の方から東の方へゆっくりと走る人工衛星を見た。その光は、真暗な空をまるで科学の力を示すが如く、飛んで、ちょうどナムン・バンジャンの上の方で、ふっと消えてしまった。僕達4人はこの雄大な自然の中の、一大ページントをただ黙って見ているだけだった。ミダム・コーラの黒い谷間には枯草を焼いているのだろうか、所々に赤い野火がゆらめいて「ヒマラヤのふところに入って来たなあ」という気持がひしひしと胸を打つのがあった。（松尾 記）

## マナスル三山との対面

3月17日

アンナプルナ連峰の展望台ともいえるマリン部落より、尾根上に遠々とつづく細道をあえぎあえぎ登る。高度1,500メートルに至ってラムジュン・ヒマールと、それに続くナムン・バンジャンが遠望できる。想像していたよりも更に荒々しく勇大なコル。

ピラス部落を過ぎ、マージ・チョウタレ・バンジャンに立つと突然眼前に朝もやにかすむ神々の座、マナスル三山見ゆ。左方より巨峰マナスル、中央にP29、右方にヒマルチュリが神々しくプラチナのように輝き、天にぬきんでてそびえ立つ。このすばらしい風景をながめに来た。そういっても過言ではあるまい。バンジャンを下ると、しだいに三山は頭上におおいかぶさり、やがて雲間にかき消えた。

バウンダラ・コーラに下り立ち、吊橋のたもとでソバがきの昼食をとる。汗を川の水で流している、マナスル西壁隊のポーター達が三々五々帰路につくのがみえた。仕事を終え高額の紙幣をふところに、一路父のもと母のもと、そして妻のもとへと帰る彼ら。マナスル隊は、15日にB、C設営。50センチの積雪をついての強行軍だったという。

尾根をまわりこみ広大な溪谷マルシャンディ・コーラぞいに歩く。緑色の豊かな水をふところにした長大な川マルシャンディ。幾度この川の名を口にしたことだろう。マルシャンディ・コーラの支流クディ・コーラの吊橋を渡ると、クディの部落にチェックポストあり。質素な建物の中に2人の役人が座しており、パスポートを見せ簡単に通過することができた。この部落には、チェックポストの他に300人の生徒を擁するハイスクールがあり、この辺一帯の中心になっているようだ。

今日の宿泊地ブルブレ部落はクディより約1時間。部落手前にマルシャンディ・コーラを渡るこわれ

かかったバンブー橋があり、一瞬緊張をよぎなくされた。昔はりっぱな吊橋がかかっていたが、土台となる大岩が急流にさらされて横転し、こわれてしまったらしい。モンスーン期にこれを渡るには大変な苦勞を強いられることだろう。

テントを張り終えて後、松尾とほし草の上に寝そべり、谷間にそそり立つヒマルチュリの赤くそまり、やがて消えてゆく姿をながめつつ諸々の話に花を咲かせた。ヒマルとは山の意、チュリとは急峻の意であるという。この様な風景に接したなら、誰もが再び、いや幾たびでもヒマラヤの山ふところに来たくなるのが人情というもの。これよりピサン部落までは、マルシャンディ・コーラ沿いに歩むことになる。（岡村 記）

### マルシャンディ・コーラのゴルジュ帯を行く

3月19日

マルシャンディ沿いに今日もまた上り下りの多い道を行く。ジャガットの手前で、黒部川の栈道のような個所あり、途中旅人にさえ出会わなければ、黒部を歩いているのではないかとの錯覚におちいるほどである。1961年スイスの援助でできたという、大吊橋はおっかなびっくり。渡りきったところで昼食をとる。昨日のチベットのキャラバン隊と追いつ追われつの状態。相変らずポーターのピッチはあがらない。山腹の高まき、川底までゆうに1,000mはあろうか。ゴルジュ帯はえんえんと続く。ナムン・バンジャンの方向からマルシャンディ・コーラに直角に大きな沢が合流している。チベットの女に名を問えば、ニャット・コーラという。

急坂の登行にあきあきしたころ、突然目の前をさえぎるものがなくなり一同歓声をあげる。正にネパールの上高地。左岸の岩壁が大崩壊してマルシャンディの大河をせきとめ、大砂防ダムを作ったのだろう。広々とした川原の中を緑色の水が流れている。この谷を行き来する旅人にとって、この場所（タール）は一刻のいこの場となり、諸処でまどろむのであろう。今は褐色の平原だが帰路につくころは一面緑のじゅうたんをしきつめた草原に変っていることだろう。平原のほぼ中央にポツンと水車小屋がたっていた。コトコトと動くマシン、吊っているかごから振動によって自動的に豆が数つぶづつ落下する。単純だが見事な着想だ。どこにでも頭のいいやつはいるものだ。

次の部落ダラパニまでは、ポーターの足で約2時間とのこと。天気も悪くなる気配なので、この場所にテントを張ることにする。タールにはまきが少ないので、キチンボーイのユン・ドゥンが牛のふんを集めてきた。はじめどの程度もえるのか半信半疑で見えていたが、もえるもえる。その火力の強いこと。彼はチベットにいる時、よくこれを燃料にしたという。そういえば、学生時代に好んで読んだ西域探検記に、このような場面が出てきたではないか。チベットはここから手をのばせばとどく程の近きにあるのだ。現にそのチベットから亡命してきたユン・ドゥンもここにいるのではないか。

山下が下痢でねこみ、テントの中で苦しげにうなっている。俺の体調すこぶる良し。高度順応のみが心に残る。いそぐことはあるまい。郷に入れば郷に従え、「ピスタレ・ピスタレ」で行くことにしよう。

（岡村 記）

## あれが北東稜だ

3月21日

ティマン・カルカに放牧したヤクの首につけた鈴の音で目をさます。寒い。マナスルが朝もやの中に入り、うすばんやりと浮き出し、ナムン・バンジャンは手を伸ばせばとどく程のところにあった。さすが巨峰マナスル。陽の光でそのピークがあかね色にそまってより数分ののち、ようやくあたりの山々の頂きが色をそえるとは。

こごえる程の冷気も、太陽が顔を出したとたんになまあたたかくなり、ほゝを汗がしたたりおちる。マルシャンディのゴルジュ帯の高巻きの道を、タンゾーに向けて進むうち、針葉樹が急に目立ちはじめ、ふたかかえもあるような太いヒマラヤ五葉松や、ヒマラヤ杉が独特の姿をほこらしげに、風になびかせている。高まきのけわしい道もおえ、タンゾーへの下り道を急いでいたころ、梢の間に間に真白きアンナプルナⅡ峰見ゆ。高い。するどい。そしてまあなんと大きい山だこと。首すじが痛くなるまで、皆その偉容にただポカンと口をあげ啞然とするだけだった。我々の第一目標である北東稜からの登攀は、尾根を一見ただけで、まず不可能なことがわかる。ヒマラヤ造山運動の申し子のような、垂直にたてにならんだ地層が、のこぎりの歯のような尾根を形成し、かみそりの刃のごとく切れおちている。

チェックポストのあるチャーメを通り過ぎ、雑木林の中を落葉をふみしめて歩く。沢のせせらぎと風の音と、かさこそと落葉をふむ足音のみが耳に入り、静寂そのもののネパールの2級国道を、ポーターたちと離れてひとりで歩いていると、何だか南アルプスの、山ふところにいるような気になってしまう。

チベット様式の橋の手前で写真をとっていると、あまり感じのよくない男たちが近ずき、ジロジロと我々をながめている。何故かポーターたちも少しおびえているのが気にかかったが、屋根つきの立派な橋について見とれてしまった。屋根だけではなく中ほどにドアまでもうけてあり、かんぬきがかけられるようになっているではないか。数年前このあたりを歩いた薬師氏の記録文に出てくる、チベットからの逃亡兵カンバたちのキャンプの岩を守るための橋であろうか。山腹をみあげると物見やぐら風の建物に、十数人の男たちが群がり、我々を見おろしているのが不気味であったが、近よってきた男たちに意を決して話しかけ、部落の名を問えば「タータン」と云う。

タータン部落より約1時間、雪どけの道をゆき、河のほとりでキャンプを張ることにする。キャンプ地の南側には、北東稜末端の岩壁が頭上にかぶさり、北側にはピサンピークから伸びる尾根が、大スラブ帯を形成している。傾斜35～40度、高さ1,000m、その巾3～4kmにおよぶ、長大なこのスラブを登攀する方が、化物のようなアンナプルナⅡ峰にいとむよりも楽しそうに思ってしまう。

北東稜をよじるのはまず不可能。ピサン側からの偵察をしていない時点では、ラムジュン・ヒマール頂上附近より派生している尾根より、主稜線に出てアンナプルナⅡ峰をねらうほか方法はなさそうだ。ラムジュン・ヒマール登頂ならテント4、アンナプルナⅡ峰までは更に2～3ほしいところ。明日からのラムジュン・ヒマール内院および、ピサンピークからの偵察が、今後の行動を決定することだろう。

(岡村 記)

## 北東稜東面の谷の偵察

3月22日

はじめの計画では、アンナプルナⅡ峰の北東稜の東面から、登路を見つけることであつたので、ラムジュン・ヒマールと北東稜の間に入っている沢の上部を偵察することになった。

この沢の下部は滝となっており、右側は絶壁でとても登れそうもない。登路としては右岸の急な尾根しかない。ところが、この尾根に取付くには、カンパ兵のキャンプであるタータン村を通らねばならなかった。この村はネパール警察の手も届かない治外法権の村である。この村はダライラマが中国のチベット占領のときに、国外亡命をたすけた兵達が造った村である。村の入口には絶えず、見張りの者がいて不審な者がくると、すぐに多勢の兵隊が飛び出してくるというぶっそうな村であつた。

我々も首領と思われる男から質問をうけた。シェルパに通訳させて、村の写真を撮らないことでOKをとり、右岸の尾根に取付いた。途中までは踏跡らしきものがあつたが、登るにしたがつてブッシュがでてきて、とても荷をかついだポーターが登れるような尾根ではなかつた。雪がだんだん深くなり、ダケカンバの樹々が姿を見せなくなる森林限界(3,500m)の所に、深い沢が尾根を断ち切つていた。沢の雪も安定しているの、上部の見えるところまでと、10mばかり岩登りをして登る。はじめての4,000mラインなので高山病が心配であつたが、何事もなくほつとする。

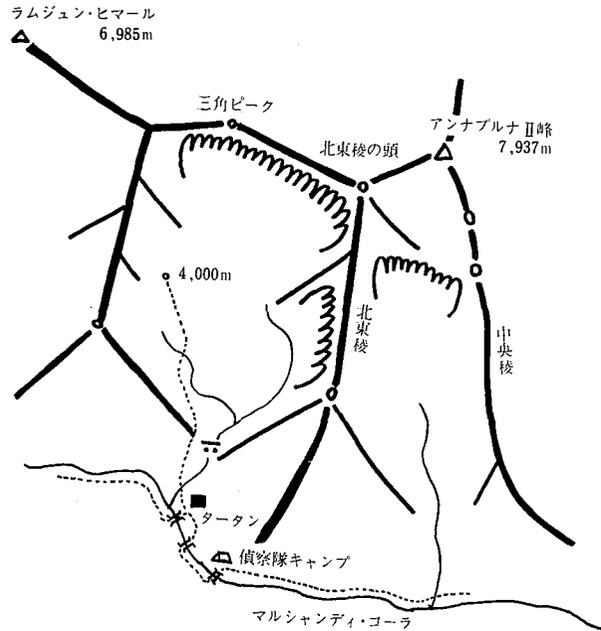
上部の雪原は幾筋もの浅い沢が走るモレーンの大雪原であつた。B、Cに最適なところはいたるところにあつた。すぐそばには北東稜のヒマラヤヒダをつけた何ものをもよせつけないきびしい斜面が広がり、唯一の手がかりとなるラムジュン・ヒマールとアンナプルナⅡ峰との最低コルへでる尾根が、何段もの雪のテラスを着けている。この尾根は我々の力でも、十分に登れると判断した。ただ出口の雪庇を乗り越すのが最大のポイントである。この尾根を登るルールは、アンナプルⅡ峰までの距離は長い、前人未踏のルートであり素晴らしいものになりそうである。しかもラムジュン・ヒマールへの登路としても、非常に有力であり日本人としてはじめて、この内院に入ったのではないだろうか。北アルプス立山の弥陀ヶ原と良く似ているので「ミダガ原」と呼ぶことにした。

ネパールに来てから最初の行動にクタクタになつたが、元氣に來た道を引き返す。一たん、マルシャンディの川岸まで下り、また登るのであるが、この登りの苦しいこと。薄明りの道をカンテラで照しながらやつの思ひでテントに帰着する。ルートの検討もそこそこに、我々はシュラフにもぐりこんだのであつた。

このルートは、B、Cを上部雪原にあげることができれば素晴らしいルートであると思う。しかし、その下部にカンパ部落があることと、雪原まで出る林の中のブッシュこぎが難点である。高価な資材や、多勢の人間が来れば武器を持つカンパ部落とのトラブルは絶対さけられないと考えられ、また雪の残る林の中のキャラバンはちょっと考えてもポーターの使用は不可能であると判断するしかないのである。

(松尾 記)

## カンパ・コーラ (仮称) 内院概念図



### ピサン・ピークよりの偵察

3月24日

昨夜は岡村隊員が激しい頭痛のため呼吸困難を訴え、あまりの激しさに手のほどこしようがなく、ただ見守るばかりであった。風邪がこじれてこのような状態になったのだと思うが肺炎にならなければよいかと心配した。

朝、いくぶん楽になったようであるので、今日は片岡隊員と松尾がシェルパ3人と一緒にピサンへ向った。ピサン盆地はせまいマルシャンディ・コーラが急に開けたところにあり、馬や牛が遊ぶ牧歌的なところである。しかし、まださむいために草原は緑が萌えていないので荒涼としている。ピサン村はまさしく写真でみたとうりのチベット風の村落であり、家々に高く揚げられている白い旗が寒い風にはためいていた。シェルパの知人の家で昼飯を食った。薄暗い部屋の奥にイロリがあり、そこでチベットの茶を味わう。ヤクのバターと塩で味付けしてあり、余りうまいものではないと感じた。高地であるだけにジャガイモがすごく美味でありいくつもおかわりをする。

食後、ピサン村のすぐうしろの道から、シェルパのアン・ヌルブ(ルクラ)と一緒にピサン・ピークの登路の途中まで登り、アンナプルナⅡ峰の偵察を行なった。その結果、北東稜は恐竜の背中のようなピークを幾つも持つナイフリッジの連続で、とても我々の手におえるような尾根ではなく、また、ピークよりまっすぐにピサン村へ向って落ちる中央稜は一ヶ所もう烈なオーバーハングがあり、これも登れそうにない。ジャヌーの最終キャンプまで行ったことのあるシェルパのアン・ヌルブ(ルクラ)も「イ

ンポシブル！」と言った。ルートとしては、ピークより西側に広がるアイフォール帯を登り、最低コルへ出るルートが一番確実であるようだ。ただ、遠くから見るので、アイフォール帯がどのようなになっているかよく判らないので、北東稜と中央稜、アイフォール帯の偵察と同時にできる中央稜にあす登り、もう少し詳しいデータを集めることにする。

夜は中央稜末端の尾根上にある牧場の小屋に泊り、明日中央稜へ向うことになった。トランシーバーの交信では、本隊はチャーメにきているらしく明日にでも会うことができそうだ。（松尾 記）

### 中央稜の偵察

3月25日

快適な小屋を出て峠へ向う。峠でB、C設置の場所を探す片岡副隊長と別れ、アン・ヌルブ（ルクラ）と一緒に尾根の上部へ出るべく登る。ラッセルが深く膝までもぐるグサグサの雪に悩まされながら2時間でやっと尾根の上に出た。左に北東稜、右にアンナプルナⅢ峰の見える素晴らしい尾根である。とにかく中央稜の核心部までと思い、更に2時間登り丸いピークまでやって来た。

北東稜を側面から見ているのであるが、中央部あたりのナイフリッジは相当に厳しく、ポイントはその部分である。我々の実力から判断してみると無理なことが判った。中央稜は、やはり、5,000m～6,000mの間に岩稜とアイスハングがあり、このオーバーハングは右へも左へもまげそうになく北東稜同様厳しい気がした。それにひきかえ、Ⅳ峰よりの雪の大斜面はルートのとり方によっては、前の2つの尾根よりも容易であることが確実であり同じ頂上を狙うなら、より安全性の高い後者のルートを取る方が良策である。アイフォール・ルートもプラトーあたりまでは易いが、その上部の主稜線まで出る部分が氷の具合によっては難しくなりそうである。

夕方、本隊がピサン盆地でキャンプすると交信があったので、今後の打ち合わせのため、全隊員が集結することになり、片岡副隊長はサラタン・コーラのB、C予定地より下り、松尾は中央稜の尾根を下って12日ぶりに全隊員が顔を揃えた。さすが本隊は人数が多いだけに賑やかである。ポーター達は木陰でそれぞれ自分達の夕餉の支度に忙しい。食事もうまく感激した。

夜のミーティングで隊長より我々のルートをアイフォール・ルートとすることの決定があった。

（松尾 記）

### サラタン氷河の偵察

3月26日

午前6時30分、少し膚寒い中をB、Cを後にする。石のゴロゴロした川原を少し行くとすぐ残雪が広がっている。雪は薄黒く汚れているが、軋むクツの感触は日本の山のそれと変わらない。登るにつれて雪は白くなり締ってくる。午前7時にB、C入りする本隊と交信コールするが、尾根にじゃまされて電波がとどかないのであろうか交信不能であった。アイゼンをつけアンザイレンして先に進む。ゴルジュをすぎると少し広がっているが周囲はグルリと氷と岩の壁にかこまれ、まるで井戸の底である。薄暗い静寂とした中で聞えるのはクラストした雪に噛み込むアイゼンの音だけである。滝は大きな岩壁になっており3ヶ所蒼氷がたれ下っている。右に回り込み、小さなインゼルの上に出る。そこでB、Cの副

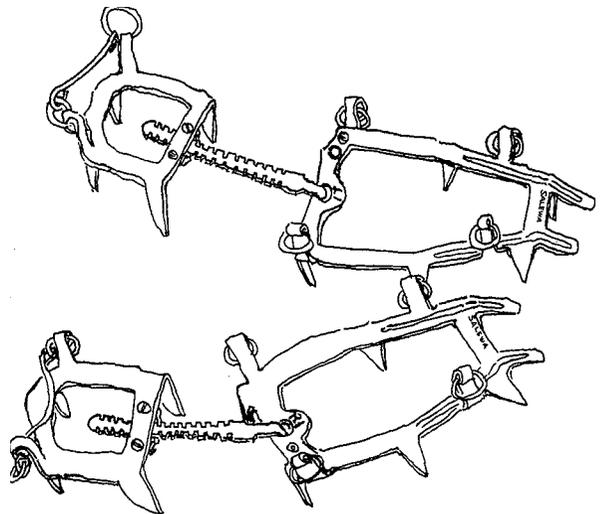
隊長と8時の交信を行ない、予定通りまず右側の様子を探る旨を連絡する。陽もだいぶ高くなってきた。雪の安定しているうちに動かなくてはと腰を上げる。インゼルの右はルンゼ状になり下のゴルジュまで続いている。インゼルを過ぎ滝より続いている岩壁の下をトラバース気味に登っている時、突然ルンゼの右にある氷壁の上部が崩れおち、小さなブロックになってルンゼを走る。後を見ると、ペンバ・ツェリンが無言のまましっかりと確保している。さらに40mザイルいっぱい奥にまわり込むと壁にはばまれ登れそうにはない。午前9時高度4,000mである。諦めていったんインゼルまで下る。

右側が不可能であったので、すぐ中央稜からの小さな稜にとりつく。下部は雪がなく逆層の岩になっている。登るにつれ雪稜に変わり傾斜もだんだん緩かになる。10時の交信で、今日は早めに行動を切り上げよとの連絡を受けた。先ほどとは打って違って周囲は開け、快調なペースで登る。風は全くなく直射日光を受け雪もキラキラ照り返す。あつい。

10時45分、高度4,220m、広い緩傾斜の雪面がつづく。滝の上部は氷河末端でアイスフォール帯になり、その中央部には小さな崩壊跡が残っている。更に上のⅣ峰よりも大きなブロックが陽に照り輝やいている。Ⅳ峰側の大きなプラトーから出ている尾根の斜面は緩かだが正面に尾根の最上部から下のゴルジュまでまっすぐに長いルンゼが2本走っており、雪は茶色くよごれている。落石の通り道ようだ。上部の岩には雪がついていない。ルンゼの巾は小さく見えるが、周囲のスケールが大きいので、実際どれくらいあるのかここからは見当がつかない。B・Cは尾根の陰になって見えないが、もう本隊は到着していることだろう。

午前11時下降を始める。雪がくさりアイゼンに着きダンゴになるので、1歩ごとにピッケルで落としながらゆっくりとくだる。ゴルジュまで出るとすでに到着した本隊の隊員、シェルパが、テントの周りを蟻のように動いているのが見える。アイゼンをはずし、心をワクワクさせながら足早にB・Cに向かった。

(山下 記)



# 本 隊 の 記 録

## 160名の大移動

3月16日

いよいよ、本隊キャラバンの第1日目である。朝7時にポーターを集め、アン・ペマとナイケ立合いのもとに、名前、部族、村の名を記録し、30kg前後に梱包した荷物と番号札を手渡していった。賃金は前渡し金として3日分の日当36ルピーは前日に、ヘッド・ナイケのアムド・ケサン氏に渡しておいた。ナイケはこの36ルピーから5ルピーをピンはねして、ポーター達は31ルピーを受取って、荷物を背負って次から次へと、ホテルの庭から姿を消していった。最後のポーターが出発したのは10時半であった。

3月中旬の垂熱帯のポカラは太陽の下にいただけで汗ばむぐらいの暑さであるので、歩くこともおっくうになる。また、隊荷待ちの25日間でたるんだ身体には荷の重さがこたえるようであった。

先頭からどのくらい離れただろうかと考えながら、10分も歩くと、我々の真新しい白い袋をかぶった荷物が軒先に10数個あり、それを眼で数えて、少し通りすぎてから休むふりをして、それらの荷物が確かにキャラバンのルートどおり運ばれているかどうか確認した。

ポーター達はその朝もらった金で、靴や食糧など、10日間の旅の準備のための買出しをするので、初日は村を出るまでに大変時間がかかった。

ポーターの最後尾を視界に入れて歩き、今晚のテント・サイトのベグナス・タール湖畔へ着いたのは4時であった。はじめてのキャラバンはなにかと気を使うことが多く、また要領がわからないので精神的に疲れてしまった。（扇能 記）

## ミダム・コーラの渡渉

3月18日

朝もやの中をミダム・コーラのキャンプ・サイトを後にする。キャラバン3日目である。すぐ丸木橋があり、ポーター達が多数たむろしている。橋を渡ればすぐカル・パタールの部落である。数軒の茶店や売店がありかなりにぎやかである。ここからはぬかるみに足をとられながら田園地帯を歩く。水牛が草をはんでおり、のどかな風景である。上流に行くにしたがい谷も狭まり、水量も増してくる。4回目の渡渉でいよいよ尾根に取付く。かなり急な山道である。一気に500m近くの高度を上げると、今日の泊り場であるナルマ高地である。きれいに耕やされた段々畑を過ると眼前にマナスル三山がとびこんできた。左から、マナスル、P29、ヒマルチュリと続いた巨大な白い塊が屏風の様に展開される。しばしその偉容に我を忘れてしまう。遠くヒムルン・ヒマールやチベット国境の山々がかすんで見える。想いはヘディンやアウフシュナイダーが苦闘したチベットへ走る。八王子山岳会のガンガプルナ隊の後発の2名が我々のテントに泊まる。明日への期待を胸にひめ、ヒマラヤの山旅3日目の夜も暮れていっ

た。(森田 記)

### マナスル三山との対面

3月19日

キャラバン4日目、くずれかけていた空模様も何とか持ち直しそうな気配である。6時40分にはナルマの泊り場を出発できた。ナルマ部落から尾根筋をどんどん登る。昨夕、ここで同宿した、八王子山岳会の広島、真庭の両氏はどんどん飛ばしてたちまち姿を消した。

この尾根がやがて細くなるまで登って、やがてやや下り気味のトラバースにかかる頃急に視界が開けて、マルシャンディを挟んだ対岸にマナスル三山が視野いっぱいにはびこった。何と大きい山だろう。谷のむこう側に下部まで見えるのだからその大きさも一段と迫力を増して見える。再び尾根の上に出、見はらしの良い地点を選んで軽い食事を取りながら展望をほしのままにする。午前の逆光の中だからうまい具合に写真にはなりそうもないが、しかし左から続くマナスル、P29、ヒマルチュリの巨大なる山が手に取るように見物できる楽しみはやはり、ヒマラヤならではの味わえないぜいたくなものであった。我々のキャラバンの中でも往復ともここが一番の景観の地であった。標高約1,800m、東側はこれまで述べたマナスル三山、北面には近くはラムジュン・ヒマールから遠くはアンナプルナI峰周辺まで何とぜいたくな景観であろう。あまりゆっくりした時間の持てないのを惜しみながらバグルン・パニ経由クディへと下っていった。今日の1日はまこと、ヒマラヤ山中のキャラバンらしい行動で、ただ谷を遡って行くだけでは景色のすばらしさは味わえない。グッと登って眼前が開けて景観をほしのままにし、惜しみながら谷底へと下って行くという行程がぜひあってほしいものだ。その意味では、これまでの苦労をひとときでも忘れさせてくれる一日ではあった。(西郡 記)

### バウンダラの村

3月20日

グルン族の村クディを出て、右岸をたどるとブルブレである。この村と対岸のナニスワラの村の間の、竹製の橋はこわれかかっている傾き、ポーター達には渡れないので、シェルパ達は総出でザイルで橋を補修して一人ずつ渡るということになったので時間のかかること、女ポーターは男のポーターに荷を渡し、空身でわたっていた。この村をすぎると左岸の道のゆくてに、ヒマルチュリがまたみえてくる。P29もみえて逆光に映えている。クラウンジャイ村は10軒ほどのソダと竹で作ったチャン屋の村である。老人の写真を撮ろうとしたら、チャンを飲まなければ撮ってはいけないという。子供たちが着ている服が日本の着物のスタイルである。ヒマラヤの奥にくいこんできたのだと思う。左岸をゆくとンガディ・コーラの吊り橋は川床よりずっと高い所をわたる。このあとの急坂を息切らせて登りきると、マルシャンディ川の川床が目の下に見える高捲の道となる。畑地の中をだらだらと歩くと、ゆく手にバウンダラの村が見える。あと一息。めずらしくも小雨がぱらつくがたいしたことはない。マナン村の人々に逢う。岩塩や羊毛などをもってポカラヤカトマンズで金にかえたり、米などに換えたりするのだという。一家総出の旅で子供までいっぱいの荷を背負っている。チベット服やチベット靴がみられて、

ますますチベットへの夢がふくれあがるのであった。今日はバウンダラの村のすぐ手前の田んぼの中でキャンプである。

この村はバウン族の村で、彼等は宗教上の理由からか、肉食と飲酒をしないというまるで聖人のような民族である。キャンプの上の村でヤマモモの実をとっている。ガムをやったら少々わけてくれた。甘ずっぱい味がこころよかった。（堀 記）

### 北 東 稜 を 見 る

3月24日

高度が増してきたせい、朝夕とも気温が下がり、西からの吹き抜けの風も冷たくなって来た。昨日通ったトンジュあたりからマルシャンディの流れが西からの流れに角度が変わっているせいなのだろうが、しかしその分、朝日のあたるのがこれまでより早くなった。ティマン・カルカへの道を辿って針葉樹林をどんどん進むと、1時間半ほどで非常に好ましく落ちついたたまたまのカルカがあった。放牧の連中のキャンプとチャン家が2、3軒落ちついた雰囲気だ。ナムン・パンジャンへの道がここから辿れるというのがここからのぞむ峠はまっ白で、今の時期は困難だろう。京大のアンナプルナ隊が難儀をしたように。

このようにのんびりしたカルカに一泊もできないなんて大遠征隊であるがゆえの悲しさである。小パーティーなら先の泊りを割愛してこういうところにとまりたいものだ。

マナスルが大きく美しく厳しく逆光に映えてそそり立つ。

タンゾーとカトーという日本人の名前のような部落の中間あたりからアンナプルナⅡ峰北東稜の東面が良く見えはじめたが、写真で一部見知っていたとはいえ、少くとも北東稜の東面からの取りつきと、この尾根の上部の凹凸のはげしい鋸状の稜線には改めて驚かされてすっかりどぎもを抜かれてしまった。とんでもないルートである。手のつける術がないではないか。早く偵察隊の情報を得たいものだ。今日の天候とはうらはらに、暗い雲が自分の心を覆うような北東稜の印象であった。（西郡 記）

### ピサン村にて作戦会議

3月25日

キャラバン10日目、いよいよベース・キャンプの位置を決定しなければならない。それ以上に重要なのはどのルートを選ぶかである。伝令による偵察隊からの連絡では北東稜は断念したことは確実。とすれば残るのは、もう一つ西の派生尾根を取るか、更に西の氷河をつめて主稜線に達するかの選択になるに違いない。最も東側に可能なルートとして偵察したラムジュン・ヒマールの北尾根とアンナプルナⅡ峰の北東稜とに囲まれたカール状の台地は大規模な遠征隊の、特にプレモンスーンの積雪のある時期ではそこへの入り口が悪くて通過が不可能となるであろうということであった。

偵察隊と今夕ピサンのテント・サイトで作戦会議を開く旨つたえて、ゆっくりピサン村の上にある丘に登った。マルシャンディの対岸からアンナプルナⅡ峰の北面を全体的にながめるためであった。

この丘から見上げるアンナプルナⅡ峰の北面も他を圧するほどのすざましい形相でしばらくはただ腕

を組んだまま見つめているだけであった。やはり北東稜は絶望的であった。いかに資料不足のゆえに甘くみていたとはいえ、いささか無謀すぎるルートであった。残るのはやはり前記の仮称中央稜か更に西面から氷河をつめる北西壁ルートとでも呼ぶルートしかない。とにかく今夕開かれる作戦会議で偵察隊の情報を検討して結論を出そう。

それにしてもここピサンの村は、何と荒涼とした村だろう。まるで人の臭いなんか感じられない殺ばつとした風景である。同じチベット系民族でもナムチェ・バザールなどはもっと人間の暖かみのようなものが感じられたのに、住民の数が土台少ないのだろうか。マルシャンディの川岸からこの村の中心を通り抜けて丘の上に登るまでに出会った人といえば、畑で遊ぶ子供が3人だけであった。(もちろん衝道筋に出れば往来の人達に会うことはできたが。)

今日のキャンプ・サイトはマルシャンディの右岸、松林に囲まれた手頃で静かな平地、この夜のミーティングで仮称「中央稜」、北西壁の氷河ルートのいずれを取るにしても通称「サラタン谷」をつめて雪線の際標高3,500mにベース・キャンプを建設することに決定した。急性の下痢で消耗のはげしい岡村隊員に弱能隊員を付き添わせて、そのまま偵察隊のテンポラリー・キャンプにて静養させることにし、明日はいよいよこのキャンプ・サイトから半日行程のB・C予定地までキャラバン往路の最後の日になるわけである。実際、昨日、今日のルートの選定とそれにとまなうB・Cの建設地点の選定にはすっかり頭が痛かった。(西郡 記)

### ベースキャンプへ

3月26日

いよいよ今日はベース・キャンプ入りの日である。寒いのでポーターは早くに出発する。右岸通しの平らな道である。10分ほどで左手から出てくる沢の奥に、アンナプルナⅡ峰が思いきり高く、まるで人をよせつけないようにそびえている。さらに20分ほど小ピサン村に出る10軒ほどの部落であるが、あまり人気はない。ここから道は左からおちてくるサラタン川をわたって、この川の左岸にそってのぼりとなる。ゆく手にはアンナプルナがどっしりすわっている。雪がいたるところにこっぴいて、ハダシのポーターもいてなんとなくかわいそうに思うが彼等は平気でぐんぐん登ってゆく、森林帯をぬけると草原である。この草原からしばらく登ると右手からのデブリがあってこれをこえたところに先発隊の偵察用の赤いテントがポツンと立っていた。ここは丁度雪線となっていたのでここをベース・キャンプとする。ポーターたちはここで荷物をおろして帰ってゆくのであるが、ポカラから来たポーターはもうすっかり顔なじみになっていて、名残りおしように金をだいて「ナマステ」といって、石ころだらけの道を下っていった。シェルパたちは多忙である。石積みをするもの、地をならしてテントを張るもの、荷物を仕分けしてデポするものまで戦争のようであった。

ここからは谷の奥に大きな氷の滝があって、その上にアイスフォールがみとめられ、左手には中央稜のピカピカに光った氷の稜線が頂上までつきあげている。その右手はプラトーがあるらしく、その上に頂稜まですべてをおおいつくした氷河がはい登っているのがみうけられる。圧倒するばかりの迫力である。

これから幾日かをたくすベース・キャンプは、念には念をいれて作られていった。夜は登山の成功を祈って、ロキシーやチャンがくみかわされ、シェルパダンスに夜は更けた。(堀 記)

## 登山活動の記録

### B・C の建設

3月26日

キャラバンが終って目指すアンナプルナⅡ峰の麓に着いた。B・Cの活動第一日目は整備から始まる。長い登山期間を通じてB・Cがいかに快適であるかは重要なことである。

快晴の空にはアンナプルナⅡ峰がどっしりと座っている。整地作業をしても気になって手を休めルートを追い求めた。

石がゴロゴロした所もあつう間に良いテントサイトになってしまった。われわれはピッケルを使って整地するのを渋っているが、シェルパたちは所かまわずピッケルを振ってガリガリやっている。整地の終わった所にテントが張られた。

20数名の胃袋を満たしてくれるキッチン・テントは、自然の大石を利用して周囲を石を積んで1mくらいの壁をめぐるしてフライ・シートをかけて隙間は松の枝でおおう。中は2つのかまどが作られて、棚にはない物は何もないという感じで食品が並べられてアンナプルナ・スーパーマーケットのできあがりである。中は広いし火を燃やせば、少々けむいが暖かいので隊員が集まるだろう。狭いテントよりもずっと快適である。

隊員が食事したり、ミーティングしたりする場所もキッチン・テントと同じ具合で作られた。中にダンボールを利用してテーブルを作る。シェルパの石の壁造りは見事である。大小さまざまな石を崩れないように積み上げる。彼等の家屋自体がこのような石造りの家であつて、このくらいの小屋造りは朝メシ前なのであつう。気象観測地も同じように石組みで造り最後に枝を切りおとしたダケカンバのポールに長野県旗、信州大学旗などに吹流しを付けてB・Cの中心に立てられた。それでB・Cの形は整いあとは荷物の整理である。

松本の事務局で梱包され海を渡り、ポーターに担がれて来た装備が開梱されて破損がないか点検される。久しぶりに個人装備を手にして新たな力がわく。上部ルート偵察に行った山下隊員とペンバ・ツェリンの姿を探す尾根の影になって見つけることができない。上部の様子が非常に気にかかる。あわただしく動いていると1日は短かく感じられ、もうすでに陽は沈み始めピサンピークがオレンジ色に染るころは仕事は終わった。明日からいよいよ荷上げが始まる。 (市野 記)

### C<sub>1</sub> のルート工作

3月28日

今日はアンナプルナⅡ峰の氷河への信大の最初の一步である。片岡副隊長、松尾隊員、サーダーのギルミ・ドルジェ、そしてペンバ・ヌルプの4名で荷上げ隊に先行して、ルートの確定とC<sub>1</sub>のキャンプ地の候補地を探すことになった。

昨日より、双眼鏡でルートを見ておいたので、ほぼそれにそって行動する。正面の大滝をさけ、ゴルジュ帯の上部左岸をトラバースし、アイスフォールの右側に出て、谷の左岸ずたいに登ることになっていた。

一番最初が氷のリッジでB・CとC<sub>1</sub>の間では一番の難所であった。松尾とサーダーがザイルを組んでトップで登る。わずか20 m程であるが、12本爪のアイゼンが快調に効いてすこぶる好調である。氷が太陽に光って美しい。

高度も低いので難なく越えて、フィックス工作は片岡副隊長とペンバ・ヌルブが行い、ルートの確定のため松尾とギルミ・ドルジュはどんどん登る。雪はそれ程深くなく、快調に登る。サーダーはさすがヒマラヤのベテランらしく体力もありどんどん先に行く。ヒマラヤ1年生の松尾にはとても苦しく、4,000 mを越えて休む回数が多くなってきた。

沢の雪崩と上部のアイスブロックの崩壊を避けるため、左岸の出来る限り上部の方をまいて登る。尾根からアイスフォールの方へ落ちているリッジの下部にキャンプ地として格好の場所があり、これから上の沢の上部にはテントらしきものも見あたらないし、B・Cから距離も高度もちょうど良いので、ここをC<sub>1</sub> 予定地と決定する。

先行隊は、さらに沢の上部の状況を見るため登行を続ける。真昼の太陽のため、ものすごく暑い。雪もグサグサになりはじめ、膝まで埋るラッセルに泣かされる。沢の上部は右の方へゆるやかに曲っており、その上部の様子が見えるところまで登った。高度は約4,900 mである。ピサン村の後にそびえるピサンピークが美しい。カングルーやヒムルン・ヒマールの山々も、チベットの花々も見える。今、念願のヒマラヤに来て雪を踏みしめている自分を発見し、よろこびで胸が一杯であった。

下を見ると、荷上げ隊の連中が、C<sub>1</sub> 予定地へ着いたようであるので、今日はここまでとし、引返すことにした。

沢も雪崩の心配がないようなので、真直ぐに下る。後にランチのコルと呼ばれた所で一休みし、アンナプルナⅡ峰の北面のルートの検討をする。頂上からはさかんに雪煙があがっている。

B・C帰着は午後3時であった。キッチン・ボーイの差し出す紅茶が実に美味しい。（松尾 記）

## C<sub>1</sub> への荷上げ

3月29日

朝からあまりスッキリしない天気だが全員でC<sub>1</sub> への荷上げに出発する。昨日に続いて2回目の4,500 mである。日本の山行ならバカにされるような荷の重さだが、歩いているときのしんどさは日本のそれとまったくかわらない。これが高度の影響というものかと思ひたすら歩く。

C<sub>1</sub> に着いて荷をおろす。青空を見つめてひっくりかえりたい位の脱力感だ。急いで下ると頭痛がするので、ゆっくりと下る。雪が腐って歩きにくい。

B・Cすぐ上のルートは雪がとけて、岩が出てきて、ショッパクなってきたので別のルートを探すことにしたが、どこも岩がもろくて良い所がない。結局、今までより10 m位右の滝に登ることになった。

夜のミーティングで明日、松尾・佐藤両隊員がC<sub>1</sub>入りすることになった。いよいよキャンプが上へ伸びていく。  
(市野 記)

## C<sub>1</sub> の建設

3月30日

C<sub>1</sub>への道も3回目ともなると、どこが急坂で、どこが緩やかかわかっているのでペースの配分がうまくできる。また、一昨日、昨日とで作ったルートの雪も固くなり、スムーズに歩けるようになった。空は青いし、頂上は雪煙をあげている。荷物は重いがそんなものは苦にならない。夢にまで見たヒマラヤの雪を踏みしめるのだから。

C<sub>1</sub>へ着いたのが10時30分頃で、それから6人用ミッド型テントを2張りはった。きょうからC<sub>1</sub>の住人である。目の前には氷河の末端のセラックが青白く光っている。ときおりドスンという大きな音を立てて、ブロックが崩壊して、くずれてゆく。背後の切り立った岩尾根が、抜けるようなヒマラヤン・ブルーの空に消えてゆく。

3日間の荷上げでC<sub>1</sub>には700kg強の荷物があがる予定である。すべては順調である。シェルパが作ってくれた、ネパール・ティーが非常においしい。早く高度順化するために、ドクターの隊長から水をどんどん摂取するように言われているため、何杯もおかわりをする。

テントの1張にはサーダー、ペンバ・ヌルブ、アン・ペマ、アン・ヌルブ(パンボチェ)の4名が入り、別の1張には松尾、佐藤が入る。6人用のテントに2人では広すぎて、テントの真中にちょこんと座っている感じである。

午後5時の交信で、明日はB・Cの隊員全員が行動すると連絡があったので、C<sub>1</sub>の6名も明日はC<sub>2</sub>へのルート偵察を行うこととなった。夜、不気味な音をたてて、さかんにアイスブロックが崩壊している。初めて聞く氷の雄叫びは大自然のエネルギーの悠久さをまざまざと教えてくれるようだ。

(松尾 記)

## C<sub>2</sub> のルート工作

3月31日

きょうは、はじめての5,000mラインを突破できるとあって、張り切ってC<sub>1</sub>をスタートする。きょうも快晴だ。固く氷っている雪面に、アイゼンのツァッケが効いて快調である。登るにしたがって、斜度がきつくなってくる。ふくらはぎが猛烈に痛い。ザイル・パートナーのアン・ペマはエベレストのサウス・コルへ何度も登ったという、若手シェルパのホープである。さすがに強く、着いて行くのに苦労する。

ルートはIV峰よりの尾根をまくようにプラトへ出るべく、浅いルンゼを登る。1ヶ所いやな所があったので40mフィックスする。スノー・バーとアイス・ハーケンで固定した。そこを登るとだんだん傾斜が緩くなってくる。最後の10mばかりの斜面を急登すると、あたりはパッと開け、大きなプラト

ーがそこにあった。右は中央稜より流れてくる氷河であり、目の前はわれわれが登ろうとしているアイスフォールが多数のクレバスやセラックを押立てて、われわれを拒否するかのように広がっている。右にはアンナプルナⅣ峰よりの尾根が白い雪を乗せてⅢ峰の方に続いている。京大隊や関大隊、それにアンナプルナⅢ峰に登頂した過去の外国隊が使用した尾根だ。

C<sub>2</sub>をどこのあたりにするか非常に難しい所である。といっても狭いからではない。広すぎて場所の選定に困るのである。サーダーはもう少し左の方へ行って見ようと言うので、全員で5,300mまで行ってみた。彼らは8,000mを幾度も経験しているのでスタスタ歩く、でもわれわれは生まれて初めての5,000mであるので呼吸が苦しい。軽い頭痛がしてきた。高山病にかかったらしい。テント・サイトの候補地はプラトーの一番左端のアイスフォール帯が一番近いところが良いと、サーダーや佐藤が主張したが、松尾はその場所は上部でアイスブロックの大きい崩壊があれば、一発でブロックが飛んでくるのではないかと懸念して隊長の指示を仰いでから決定することにした。松尾自身はもっと中央部へテントを張ったほうが良いのではないかと思った。というのはアイスフォール・ルートが万が一駄目であった場合展開がスムーズにできるということと、左端の場所よりも少しはアイスブロックに対して安全であると感じたからでもある。しかし、ヒマラヤの安全度というのは計りがたいものがあり、ある程度の危険をおかしても登ろうとするなら、左端の場所が1等地であることは誰がみても明白であった。

少しばかり荷上げた装備をデポし、下山に移る。雪が腐ってきて、膝までもぐるようになってきた。途中、右側の尾根の沢から猛烈な落石がある。幸い岩石はわれわれの方へは来なかったが、この場所は今後とも気を付ける必要がありそうだ。

C<sub>1</sub>を目の前にして、急に頭が痛くなってきた。どうやら本格的な高山病らしい。テントに入って、ゴロリと横になる。何をやる気もおこらない。アン・ペマが心配して、唐辛子のものですぐく入ったスープを作ってくれた。これを飲めば、すぐに治るからという訳だ。口の中から火が出るようなスープを目をつぶって一気に飲む。胃が踊っている。しばらくすると不思議なもので、頭痛もなくなってきて、冗談も飛び出るようになってきた。夜は、松尾と佐藤で手紙の書きくらべをする。 (松尾 記)

## C<sub>2</sub> 建設

4月3日

昨日、B・Cより登って来た片岡副隊長、扇能、市野それに松尾と佐藤の5名と、サーダー以下6名のシェルパと合計12名で、C<sub>2</sub>建設に向う。

C<sub>2</sub>に入るわれわれは個人装備だけであるので楽に登ることができる。しかも、2回も登り降りをしているので、身体もだんだん高度に慣れてきて、体調は最高である。佐藤も元気そのもので、さすがに強く、2人で張り合って登るが、たいてい先にキャンプに着くのは彼の方だった。

いつもいつも、登るときに思うのだが「なぜ、ヒマラヤまで来てこんな苦労をしているのだろう。自分はバカなんだろうか。」と。前の者があげた足の跡へ自分の足を乗せる単調な繰返し。歯をくいしばり、へこたれようとする自分に叱咤して、見上げる雪の斜面。振り返れば、ピサンピークもだんだん低

くなってきた。

C<sub>2</sub> はプラトーの左端の所に張ることを最終的に決定した。プラトーに出てから、平坦な所を歩くのだが、これが一番つらい。「もう少し、もう少し。」と自分に言い聞かせながら、やっとの思いでキャンプ予定地に着いた。

早速、赤いカマボコ型テント(10人用)1張と、ミード型テント(6人用)を1張りの計2張りをはる。中央稜の岩壁が後にあり、いかにもヒマラヤのテント地らしい。これから1ヶ月の間、ここがA・B・Cになると思うので、しっかりとテントを設営する。さあ、われわれの基地ができた。内なる身体から脈々とファイトの湧きあがるものを感じる。早く全隊員が揃いたいものだ。

空気が非常に乾燥しているので、やはり水をどんどん飲む必要があることを痛感する。高度順応のため、何杯も何杯もおかわりをする。さすが5,300mだけあって、ちょっとした動作にも息ぎれがする。空気が薄いということが実感としてわかる。

C<sub>2</sub> に到着後、軽い頭痛が6時間も続き、いささか気がめいる。佐藤は平気な顔をして、シェルパ達とワイワイやっている。私はあいかわらず、テントの中で、何もする気もなくゴロゴロして、はなはだ無気力である。高度順応がうまくできる人とできない人があると聞いていたが、自分はどうかやら後者らしいなんて考え、これからの高度をどうすれば良いのだろうと思うと、ますます心がめいってくるのだった。

C<sub>2</sub> からの星は素晴らしくきれいだ。太陽が沈むと、ウエストチュルーあたりだけがほんのりと赤く残っている黒い空にキラキラ輝く星は、世界で一番の見ものであると思う。(松尾 記)

#### 仮C<sub>3</sub>へのルート工作(当初予定したルートのC<sub>3</sub>、その後ルート変更した)

4月4日

きょうはアイスフォール帯のルート偵察に出かける。ギルミ・ドルジェとアン・ペマ、ペンバ・ヌルとアン・ヌルブ(パンボチェ)、松尾と佐藤の3組のザイル・パーティを組み、上部へ向う。

アイスフォール帯の取付は右の方から取付くことができ、大きく迂回して登らねばならない。ルートはだいたい最下部のアイスブロックのハングを目指して直上するのである。ギルミ・ドルジェとアン・ペマ組がラッセルをして、われわれが続いた。ルートの指示をわれわれが行い、決してシェルパの独断で判断するようなことはさせないようにした。傾斜は30~40度くらいであり、雪崩の心配をするが、雪のしまり具合からでは、その心配もないようである。持って来た旗を立てながら登っていくと、5,800mの地点で大きなクレバスに出会う。このクレバスを迂回するには、横へ相当出る必要があり、時間が掛かる。ギルミ・ドルジェは、クレバスの底が大丈夫らしいから、一旦その底へ降りて、もう一度登れば最短距離だと力説したが、なにもそんなにあわてることはなく、きょうの成果は十分であったと判断して、彼らに下山を命じた。明日、このクレバスの右端を渡って、上部に出るルートを探ることにした。われわれは十分な食糧と十分な器材を持っている。C<sub>2</sub>まで順調に来てしまったが、ここでペースを落し、慎重にやらないと事故が必ずあると思う。サーダーは不満そうであったが、荷物をデポし、下降することに同意した。

下降を始めたときより、猛烈な頭痛があり、足を一步降すごとに、頭にズンズンと響く。空気が不足して高山病になるのなら深呼吸をすれば、少しは良くなるだろうと思い、大きく深呼吸をしたが、不思議なことに、余計痛くなるのであった。延髄のあたりが非常に痛く、うずくまりたくなる衝動にかられる。アン・ヌルブ(パンボチェ)に確保を頼み、ビスタリ、ビスタリ(ゆっくり、ゆっくりの意)で下降する。

ようやくO<sub>2</sub>へ着いたときは、ノックダウン寸前であった。それから3時間ばかり、テントの中で何をする気もなくゴロツとしているだけであった。夜になってようやく頭痛はなくなったがさすが5,300mは空気が希薄であるので、物を取ろうとして身体を動かすだけで、息苦しい。佐藤隊員は、まったくケロッとしており、その怪物ぶりにはおそれいってしまった。同じ物を食って同じように行動しているのに全く不思議である。シェルパ達は彼のことを「ジャパニーズ・シェルパ」と呼んでいた。夜、久方振りに降雪があり、明日の行動に支障がなければ良いかと気をもんだ。(松尾 記)

### ヒマラヤの山菜料理

4月6日

きょうは休養日である。年寄りの私は毎日5時には目覚めてしまう。そして寝袋の中からウッドカッターとして雇ったチベット人が川へ水をくみに行く間、唱えているお経の声に、異国での山登りをしているという感じをおぼえるのであった。気象観測の計器をのぞいて、さっそくキッチン・テントに入りこみ、熱い紅茶をすすりながらキッチン・ボーイ達と、炉辺会議をおぼしめる。この朝のささやかな冗談話の中でも、シェルパの生活やソロクンプのことなどを聞きだしてはノートに書きとめた。休養日なのでみんなの起きだすのは遅い。きょうはフィルムの現像をやることにして、フライの下ではじめたが液温がすぐにさがってしまうので閉口した。水洗は川の水の中にこまかい砂粒が多量に入っているためあらかじめ、水浴でいどにして乾燥にかかるのであるが、風が出て来るとまたひとさわぎ。結局ダンボールの箱の中に吊って、ほこりの入らぬようにして乾かすことにした。

きょうはルート工作を続けていた松尾、佐藤組が休養におりてくるとのこと、なにかごちそうを作ることにしようとしたが、青い野菜がないのでベースの周りで、山菜探検をやることにした。まず左岸では芽吹きはじめたアザミをみつける。これは美味だろうとさっそくつみ始めたが、ものすごく針がかたいのである。扇能もきて手伝ってくれる。つぎにフキノトウをつむ。ここのものはピンクのフキノトウで、日本のものにくらべると香りも苦みも強そうであるが、料理しだいといいつつ集めてきた。

さてこれらをキッチン・テントに持ちこんだら、コックのヌルブはとたんに苦い顔をする。自分の持場をサーブに荒されるとでも言いたさうで、それにそんな草を食うのは豚といっしょだと言う。食いたくない奴は食わんでもけっこう、それだけたくさん食べられるとこちらも知らん顔で、さっそく料理にとりかかる。やがて上部キャンプからの休養組も着いて、もうシェルパたちはチャンやロキシーを飲みはじめているようだ。さて夕食だぞうと声をかけると、待ってましたとばかりにサーブは勢ぞろい。シェルパ達はシェルパダンスに興じた。料理のうでがいいせいか？ロキシーやチャンのうれゆきはよく、

ごきげんの夜はナダレの音とともに更けていった。その夜のメニューの一部を紹介すると、フキノトウとアザミのテンブラ、フキノトウの油みそあえ、わかめの三杯酢、カブの即席漬などがあった。リエゾン・オフィサーのライ氏もおせじにか、デレイ・ミート・ツァ（非常においしい）と言ってくれたものである。（堀 記）

### 飯 C<sub>3</sub> へのルート工作

4月7日

きょうは「グット・モーニング、サーブ、ティー」の声がない。シェルパは休養のためB・Cへ降りて、C<sub>2</sub>は片岡副隊長、扇能、市野の3名の隊員だけである。茶を作り、ラーメンを食べて出発準備をする。

昨夜の雪でトレースは消えているが荷は軽いので、ペースを速くするとすぐゼーゼーいい心臓がゴトゴトいう。不気味なナダレの跡を横切り、クレバスを越えて高度はどんどん上がる。ピサンピークが目の高さになる。昨日佐藤隊員がデポした所で止めるつもりだったが、上部へ抜けれそうな所を偵察する。頭痛もけだるさもないが、午後の太陽の反射とくさった雪のラッセルはこたえる。

アイスフォール帯に入ると自分がどこに居るのかわからなくなってしまい、安全と思われる所をさまよいて歩く感じた。足の下で「ズシン」なんて音がするたびに冷汗が出る。

5.890 mまで登るが先の見通しがつかずに下り始める。ロープをフィックしながらC<sub>2</sub>へもどる。C<sub>2</sub>にはハクパ・ツェリンとアン・ヌルブ（ルクラ）が入っていた。（市野 記）

### ハイ・ランドのボヤ

4月9日（B・C）

待望のC<sub>1</sub>入りの日、高ぐもりだが何とかもちそうな天気、個人装備だけを持ち、ピスタレ、ピスタレ（ゆっくり、ゆっくり）でランチ・コル（C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>間にあるコルにつけた名称）に向う。雪はしだいにとけ、あちこちで褐色の草や小かん木が頭を出し、カラガーナ（トゲのある小かん木）がスパッツの上から肌をさす。ランチ・コルでいつものように少し早めの昼食をとり逆光にきらめく中央稜をおおぎみながらタバコの煙を大きくすいこんだ。早く禁煙する方が高度順化のためによいと思いつつも意志が弱くいつになってもやめられない。そんなことを考えながら火をつけたマッチをふと何げなくすてた。するとどうだろう。異状に乾燥した枯草がみるみる間に炎をむき出して強風にあおられて広がっていくではないか。あわててジャンパーでたたき消そうとしてもその大勢はなかなかおとろえなく、むしろその炎の舌は大きくなる一方。棒やピッケルのシャフトで炎をたたき消し、雪を投げてもやけ石に水のようなもの。一緒にいたパーティのみなさん申しわけない。まったくの不注意からハイ・ランドでの想像を絶するアルバイト、息は切れ、炎でほほはやけつくようにあつい。あらためて火の勢と恐ろしさを思い知らされた。堀隊員はこの消化作業中に、パルナシウス（アポロチョウ）を採集されたとか。まったく見上げたもの。常に細心の注意をはらい何ごとにも対処しなければならないとの教訓をこの時あらた

めて知らされた思いがする。やっとのことで消火し、息を切らせてただ茫然と頂上をながめていると、何ごともなかったかのように氷の墓場では大自然のかもしれないすなだれの音が大カールにこだまし、腹の底までひびきわたる狂想曲をかなでていた。

サーダーの体調悪し。夕刻雪が舞い散り、春雷が神々の座になりひびく。モンスーンの前ぶれとして、毎年雷めいになりひびくというが、今年の雷神は何と気が早いこと。気がいい天気というべきかもしれない。  
(岡村 記)

### 初めての6,000mの夜

#### 4月9日 (テンポラリー・キャンプ)

きょうは、最先端のルート工作隊としてC<sub>3</sub>へ入るためC<sub>2</sub>を出発する。昨日と同様、ハクパ・ツェリン、アン・ヌルブ(ルクラ)と片岡副隊長、扇能、市野の2つのザイル・パーティーでゆく。C<sub>2</sub>から約1時間のだらだらした雪原、そして、フィックス・ロープにつかまっていたアイスフォール、長い急な雪面へと続く。2人のシェルパは、われわれのずっと先を登る。われわれは3度目のこの高度に来ているのにいっこうに楽にならない。陽が高くなると日本の山の5月のように、日射が強く顔や手などたいへんあつい。C<sub>2</sub>より約3時間、傾斜のおちた雪面へ出る。右手には稜線から続くアイスフォールが凹凸の多い壁のようにせまっている。この辺まで来ると、C<sub>2</sub>より見て、あのブロックとあのブロックの間を通過するというような目やすなどは全くわからない。このアイスフォールの間の傾斜のおちた雪面を登り右に折れて、昨日テントを張っておいた所へ向う。

シェルパがさわいでいる。ブロックの先端が落ちてテントをつぶしていた。昨日、いいテント・サイトがなくて迷って、経験の多いアン・ヌルブ(ルクラ)の意見を聞いて決めたテント・サイト、氷河の動きなど、初めてのわれわれには全くわからない。それでもテントの破損の程度は入口側のポールが曲っているくらいで、何とか使えそうな様子であった。埋雪しているデポ品を掘り出して、30mぐらいむこうの大きなブロックの下に、氷をたたき割ってテント・サイトを作ることにした。5人がかりで約2時間かかってようやく張れる程の場所を作れた。アイス・ハーケンを打って、テントを吊るように張り、シェルパをC<sub>2</sub>へ返しわれわれ3名が泊り込んだ。

アイスフォールの中は、気持の悪いものである。炊事をする間も時々、ピシッ、ピシッと氷が動く音がする。食欲のない夕食を終えて、初めての6,000mでの第1夜を不安に迎えた。扇能、市野は睡眠薬を飲み、片岡副隊長は、彼の睡眠薬ロキシーで明日の足跡のないルート工作を想って眠った。

(扇野 記)

### ル　ー　ト　変　更

#### 4月10日

休養明けの松尾、佐藤両隊員を加え、隊員4名、シェルパ6名にてC<sub>1</sub>からC<sub>2</sub>へのボッカのため登る。だいぶん通い慣れたし、問題もないルートだから気楽に荷上げを行っていた。C<sub>2</sub>に至るプラトールの端に出てホッと一息入れて、アイスフォールを見上げて驚いた。われわれがブロックNo1と呼んで

いてこれまで不安定に見えて心配していたブロックの一部が崩壊を起し、今後のルートになるであろうアイスフォール帯に表層雪崩をまきおこしてデブリを拡げているのではないか。これがブロックⅡの崩壊をも誘発し、雪崩を一層大きくしたように見えた。それにしてもこのアイスフォールの基部にテンポラリー・キャンプを作って、ルート偵察と前進を進めている片岡副隊長以下2名の隊員には恐らく睡眠中であつたらうこの雪崩には気がつかなかつたのであろうか。

C<sub>2</sub>にて休養の山下隊員に聞けば昨夜午後10時半頃、雪崩によるものらしい烈風と飛沫を浴びて、背負子、アイゼン、ピッケルが20mほど飛ばされたという。もうこれ以上このアイス・フォールにルートを延ばすことは危険性も高いし、C<sub>2</sub>も移動しなければならない。偵察隊の3名は表層雪崩のあつたらしいことは感じているようだ、がこのデブリの中を次第に高度を上げているのが見えた。11時の定時交信で片岡副隊長に取り急ぎC<sub>2</sub>へ帰着するよう指示、一方では隊員、シェルパ総がかりでC<sub>2</sub>の移動を完了したのだった。これで、これまでの、C<sub>2</sub>より上部の行動は無駄になってしまった。もう取るべきルートは誰一つ、ぐっとⅣ峰寄りの雪稜をたどって主稜線に出、そこからアンナプルナⅡ峰へ廻るルートだけになってしまったわけである。

疲れ切つてC<sub>1</sub>へ帰着したが、心なしか、この夜は北西壁からの雪崩の音も数多く聞えて来る感じであつた。C<sub>2</sub>から上部は明日からやり直しである。 (西郡 記)

### C<sub>3</sub>へのルート工作

4月13日

松尾、山下、佐藤、ギルミ・ドルジェ、アン・ベマ、アン・チョタレ、アン・ヌルブ(パンボチェ)、ペンバ・ヌルブの計8名で、新ルートとなった北西壁アンナプルナⅣ峰寄りの雪稜末端にある雪壁のルート工作である。雪壁の高度差は約500m、勾配は40~50度、かなりのアルバイトを喰ひられそうだ。雪壁を登りつめ、抜けた所にC<sub>3</sub>建設の予定である。

午前7時、出発。C<sub>2</sub>を後にプラトールを雪壁めざし西に進む。雪は足首までであつたが、進むにしたがつてだんだん深くなり膝までのラッセルとなった。トップを隊員が交替しながら、雪壁左基部より派出している長いインゼルのルートを取る。このインゼルを登りきり、右にトラバースし、雪壁基部の中央に出て一休み。午前9時30分。

昼食を取りながら雪壁を見上げると、近くで見る雪壁は一段と大きい。雪壁は三角型を呈し、その両辺にあたる位置には亀裂の入つたブロックが無気味に音もなく待ち受けている。左辺のブロックが崩壊すれば、インゼルから雪壁基部中央へのトラバース地点はもろにやられる。ブロックは蒼いというよりも薄緑色である。雪壁の中央に2ヶ所小さな岩が露出しており、それをめざして直登し、さらにそのななめ上に見える岩の上部を登りつめれば雪稜の左斜面に出るはずだ。

松尾、山下がアンザイレんしいよいよ登攀開始。佐藤と5名のシェルパでザイル・フィックスを行う。この地点よりフィックスの連続である。すぐ上に小さなクレバスが細長く横に走っている。渡れそうな所を捜し、その上縁の雪にピッケルを刺し込み、それを頼りにどうにか越える。まだ口は小さいが、これ

ないで、一心に歩きつづけると、とつぜん右手にブラカの村があらわれる。この村のつくりかたは異様である。背後に急傾斜の岩山をせおって、村全体がまるで城のように、斜面を上へ上へとかさなっていて、なんとなく、無気味であった。

あいかわらず冷い風がふいて土ぼこりと、横なぐりの雪がひどい。平坦な道を走るように急ぐ、向うからチベット服の男が来る。きょうはじめて道でゆきあう人で、マナンまでまだ遠いのかと尋ねると、もうすぐだと言う。これに気をつよくして目の前の、段丘崖をのぼりきるととつぜん行手にマナンが見える。まるで砂ぼこりと吹雪の中からぼんやりとうきあがった村は、まぼろしかなにかを見ているようで、大きい村という印象はうけなかった。人ひとり見えない不気味さであったが、村に近づくにつれて平たい石積みの屋上には、ひとりまたひとりと人が立ってわれわれの方を無言でみつめている。思わず緊張する。村の入口はなんのへんてつもない露路のようなところから入ると、びっくりである。道がまっすぐに長くつづいている。大きな村だという感じがすると同時に、人の気配はするのに姿が見えないのである。屋根の上や窓の中からこちらをうかがっているのが感じられる。一人の男がガンガプルナ隊のリェゾンの泊っている家に案内するといって、先にたってくれるが、うしろからは沢山の村人がわいわいといってくる。カメラを向けると「とるな」と大声でわめく。カメラに手をふれる者、上衣に手をふれる者まるで気味が悪い。村の中央部には広場があるが、かまわずに近よってあいさつをする。握手をしてみてもどろいた。幼いときからラマ僧の仕事しかしないためか、赤ん坊の手のように柔らかいのであった。このラマたちが村人の背後にあって、村人を扇動するのだとトンダップが教えてくれた。なるほど色の白いわりには目つきのするどい連中だった。

村のちょうどはずれのマルシャンディをみおろす一軒に入る。ガンガプルナ隊のシェルスタ氏の下宿である。再会をよろこびあう。熱いチベット茶が冷えきった腹にしみわたって、やっとひと心地がついてくる。家の屋上や窓からはいくつもの顔がのぞきこみ、警官がなにをしにきたのかとうかがっているらしい。

夕方雪がやんで風もおさまったとき、目の前にガンガプルナの左肩からおちかかる大アイスフォール、右にクランドバリエールとティリツォピーク、左にはアンナプルナⅢ峰、Ⅳ峰、Ⅱ峰とならんで、はるか川下にはマナスルが残照に光っていた。寒い屋上で羽毛服にくるまってうれしいひとときであった。

(堀 記)

## 燃 料 チ ェ ッ ク

4月16日

午前9時ごろまでグースカ。本日沈澱日。きのうまでの天気とはうって変ったすばらしい青空、4～5人用のテントをたたみ8人用のものを張る。中は広々としていていごこち万点。赤や黄の布地のテントは何かしら気が高ぶるけれど、ブルーのテントは何とまあ気のやすまることよ。終日ゴロンゴロン。

昼食の時、シェルパたちの炊事方法があまりにも燃料の消費量に無頓着なため心配になり、片岡副隊長とプロパン消費のチェックをしてみた。当初の計画では1日1人100gとし、計138kgのプロパ

ンを持ってきた。シェルパたちのプロパン消費量を頭に入れない炊事方法を気にして、今まで、うるさいほど注意しチェックしてきたが、定量をはるかにオーバーしているのではないかと不安になった。

今までのプロパンボンベから1人分消費量を計算しなおしてみると、何と1日1人最低の日で150ℓ多い日では200ℓと大巾に超過しているではないか。当初60日分の予定がこのままでいくと35日～40日あまりで底をつくことになる。急きょ全員にその旨を知らせ、B・Cの隊長に指示をあおぐ。以後極力プロパン消費量をおさえるしか手はないのではないか。食糧なら現地のものが手に入るからよいものの、プロパンという近代兵器を手に入れるにはインドまでおもむかねばならない。やはり、最悪のことを考慮して、現地で手に入る燃料装備も一応携帯しておくべきであった。装備係の最大のミスといえるだろう。

今夜から1人100～120ℓにおさえるよう、厳しくシェルパを指導しなければならない。彼らに厳しく当ることはつらいが、今となってはしかたがあるまい。装備係の大きなミスをどこかでおぎなわねば。

夜きじを打ちに外に出たら満天に星がちりばめられ、そのまたたきも高所にいる故かいつもみる星のそれとはちがって金属的な光り方をしている。月あかりで、はるかチベット国境の山々がぼんやりと浮かびでて、夢の国への想いがかきたてられる。眠下に広がる雲海を歩いて渡ることができたらどんなに幸せなことだろう。

(岡村 記)

### 全員のB・Cへの引揚げ

4月21日

4月15日頃からの天候の悪化・降雪は今日になってやっと回復したが新雪の中を行動することはすくにはできないうえ、これ以上限られた燃料を無為に消費する手もないだろうとの判断でC<sub>2</sub>で停滞を余儀なくされていた隊員、シェルパとも全員、一旦B・Cへ下山することにした。この項は弱目にとたたり眼である。雪崩によるルート変更、連日の降雪、燃料の不足。いかにリーダーの力量不足とはいえ、こう次から次へと不測の事態が生じたのでは気も滅入ってしまう。すでにB・Cにいた隊員とシェルパで引き揚げのメンバーの出迎えとその為の若干のルート補修を行った。午後前全員B・Cへ帰着した。

隊員、シェルパの沈滞したムードを盛り返す為と全員のこれまでの労をねぎらうつもりでごちそうとロキシーをふるまう。全員が揃うのはB・C建設以来のこととて、こういう時に抜群の器用さを発揮する掘隊員の手による心づくしの“のり巻き”と“ちらし寿し”に全員のまっくろな顔にも心なしか和やかさが感じられた。

(西郡 記)

### 今後の方針

4月22日

昨日は晴から雨(B・C)、今日も朝、雪一時止んで今度は雨と、どうしても天候が安定しない。今後の対策について副隊長と相談、全員のミーティングにかける。

現在の燃料（LPガス）の残料から計算して切りつめればあと20日、これまでのようにC<sub>2</sub>にキッチン・ボーイを張りつけて無駄な消費をチェックせず費やせば残り15日分という切迫した状況下で今後の稼働日数はLPガスの残量と消費見込みに大きく左右されることになってしまった。

登山の基本計画である第Ⅱ段階-C<sub>2</sub>（A・B・C）から頂上攻撃終了まで一の時点で手持ち15日を消費する見通しの明らかな場合はアンナプルナⅡ峰への登頂は断念しよう。

この基本計画を有効に推進するためには、隊員とシェルパを、偵察、工作、輸送を主な任務とするいわば支援隊と、体力の消耗を防ぎながら高度順化を計り、頂上に向ういわば登頂要員に分けて行動した方がよりスムーズな行動が期待できるのではないかという意見であった。もちろんこの二者を厳密に規制できるものでもないし規制すべきでもない。そこで一応登頂隊の要員として、松尾、佐藤の両隊員とサーダー、パンバ・ヌルブと決定した。これには全隊員、シェルパとも異存のないところであり、我々の陣容では最強のメンバーであるという判断であった。ここで重要なことは第6キャンプ（C<sub>6</sub>）建設の必要が生じた場合には我々の登頂も断念せざるを得ない時であるということ。であって第5キャンプからの攻撃で達せられるであろうとの判断に立ったことであった。更に燃料とのならみあわせでアンナプルナⅡ峰登頂を断念せざるを得ない場合には出来るだけ多くの隊員に最寄りのアンナプルナⅣ峰に登頂して貰うことにした。

午後はゾプキョ（牛とヤクの混血）を一頭殺したので久しぶりに動物性たん白に満腹した。

今朝の新雪によるものか、午後になってB・C近くの予想もしない滝場をものすごい勢いで雪崩が通過して眼を見張らされた。

（西郡 記）

### ゾプキョ 料理

連日の降雪で昨日C<sub>2</sub>、C<sub>1</sub>の隊員、シェルパがB・Cへ降りた。やはりB・Cはいい。暖かいし雪崩の心配もないし夜はゆっくり寝れた。

今日もB・Cは小雪がちらついている。今日の仕事はゾプキョ殺した。といっても我々が殺るのではない。C<sub>2</sub>にいた時からトランシーバーで縁起が悪いとかでもめていたが、B・Cより少し離れた所で殺させていただくことになった。

小雪の中を村人に引かれて数分後の自分の運命を知っているのかどうかしょんぼりして来た。なんとも寒々した場面だ。こんなことを言いながら興味半分で見に来た我々はなんと残酷なんだろう。チベットのゾプキョ殺し法は実に見事である。短刀1本で心臓を刺し血は一滴も外へもらさない。終わった跡は何も残らない。見物人の足跡だけだ。

キッチン・テントでは血に小麦粉をまぜて腸詰めを作る。真赤な血をかき廻して腸の中へ詰めて行く何ともグロテスクな感じだ。すごいものを食べるものだと感心していると3時のお茶にゆで上った腸詰めが出てきた。けっこううまい。作る所を見なかったらもうとうまかっただろう。

コックにまかせておくと肉はすべてカレーになってしまうが、今日はステーキが出た。天候の回復を祈って久し振りの栄養満点の夕食を楽しんだ。

リエゾン・オフィサーのライ氏は一片の肉も口にしなかった。宗教とはおもしろいものである。所かわればいろいろなことがあるものだ。 (市野 記)

## 薪の荷上げ

4月24日

プロパン・ガスが不足し、C<sub>1</sub> で使う余裕がなくなり、燃料に薪を使うことになった。降雪の直前には、C<sub>1</sub> は草原の中にあり、薪の使用は充分考えられることであった。

C<sub>2</sub> 上部の雪の安定するのに待つ間に全員で薪をC<sub>1</sub> へ上げることになった。B・C、に切って置いてあった薪を1人15kgぐらいずつ、背負い上げた。

いざ、B・Cを出発するという朝、サーダーのギルミ・ドルジェは、彼のかわりにキッチン・ボーイを出し、自分は、ピサンまでロキシーを買いに行くと言いだし、充分なプロパン・ガスを持って来なかったことに対する抵抗のような、我々には腹の立つ、気まずい場面もあったりして、彼のこれまでのビッグ・エクスペディションへの参加をものがたる、いわゆるぜいたくな遠征慣れしたシェルパということを感じたりした。

そんなことも、皆んなでワイワイ、ガヤガヤと、こんな記念すべき姿、写真にとっておかなくては… などと言いながら、C<sub>1</sub> まで散歩、体の調整に行くことになった。全員の2～3日の荷上げで充分すぎる程の薪がC<sub>1</sub> に用意された。 (扇能 記)

## C<sub>2</sub> の再建設

4月25日

再び頂上へ向っての行動が開始された。この日から頂上に立ち、撤収を終えるまで体の続く限り動くと思う。しかし、4日の行動1日の休養でも楽ではなかったというのにといい気持もふっと心によみがえる。ここまでくれば、全てを隊長に、隊員にあずけよう。自分で精一杯、山岳部に入部した新人当時のような気持で20日間がんばればよい。そう思うことによって気が楽になる。

進め！進め！である。

3日間の無人のA・B・Cはどうなっているだろうと考えたりしながら、B・Cをあとにして頂上の方へ向う。

このまえ、休養の為にB・Cへ下り来た時は、B・CからC<sub>1</sub>の間は、雪もほとんど消え、緑の草が伸び始め、小さな桜草の咲くところであったのに、今はまた雪の原、しかし空はまた、プレ・モンスーン期の好天であった。スリーピング・バッグと少しの荷物を持って、C<sub>1</sub> 往復、C<sub>1</sub> 入りする隊員、シェルパと別れて、C<sub>2</sub> へと向う。

1日でB・CからC<sub>2</sub>へ入るのは思った程、楽ではなかった。C<sub>2</sub>の直前の100m程の斜面では、足が重く感じられたが、割合元気でC<sub>2</sub>に着くことが出来た。

C<sub>2</sub>は、ポールをはずしてつぶしたテントの上に少し雪がのっていたが、テントをつぶして下山した

ことを、くやしく思った程の状態、何事もなくあった。テントをたて直してみると、強い日射でとけた雪がテントの中にプールを作っていたが、C<sub>2</sub>での生活に支障をきたすこともない様子であった。

再び、A・B・Cに人間が入り、明日からのC<sub>3</sub>、C<sub>4</sub>、頂上へのルート工作、荷あげに専念しようという意気込みが、隊員、シェルパの間に感じられた。

C<sub>2</sub>からのルートは、赤旗がところどころに見えるだけで、全く消えていた。

日没とともに、また、気持を新たに、この日、何回もがんばらなければならないと思った日であった。  
(扇能 記)

## デポ品の発見

4月26日

新雪の積ったプラトーをくるぶしからひざまでの重いラッセルが果てしなく続く。一步一步進むたび、のどがはりさけそうに痛む。三角雪壁の基部のクレバスはスノー・シャワーのため埋って見当らない。もちろんラダーやフィックス・ロープは跡形もなくなっている。やっとの思いでフィックス・ロープの末端を掘り出し全員で交たいて気の遠くなるような大雪壁のラッセル登行が始まった。左右の大氷塊は不気味な音をたててきしみ、間断のないブロック崩壊の音がこだました。一体いつになったらこの雪壁の果てまで行きつけないのだ。足は前へでようとするのだが、呼吸が苦しく身体は前に進まない。これがヒマラヤの登攀なのか。この苦しさが。

天までさえ続いていると思われる長大な壁もやっとの思いで通過しトラバースしてデポ地に来たが、4月20日の新雪雪崩で流されたのか、うずもれてしまったのか、デポ地を示す旗が目に入らない。見当をつけて、スコップで全員交替して雪を掘ったが、なかなか見あたらない。もしここにあったデポが流されていたらⅡ峰をあきらめねばなるまい。せいぜい努力してⅣ峰アタックが精一杯といったところだろう。これまでの数年にわたる苦労も、今デポ品を回収できるか否かにて全てかかっているといっても過言ではあるまい。

雪面を2m近くも掘っただろうか、回収をあきらめかけた時シェルパが赤旗の布の一部をやっとの思いで掘り出した。やはりここにあったのだ。安心したためか雪の重さもあまり気にならず掘りまくる。荷の一部を掘り出し、雪の下にデポ品があることを確かめて下りにかかった。これでⅡ峰を攻撃する最低の条件がそろったわけだ。

頭が痛い。一步一步下るたびにその振動が直接頭までつきぬけて伝わり、まるで頭の中に手を入れてかきまわされているような感じがする。のどのかわきもまた激しく一呼吸する毎にのどをブラシでこすられているようだ。

カングルーのピークから長大な雪煙がチベットの方へたなびいている。何という空のおおきであろう。藍の色そのものじゃないか。  
(岡村 記)

## C<sub>2</sub> より C<sub>3</sub> 往復

4月27日

ヒマラヤ日和というのか、ものすごくいい天気だ。空は黒に近い青色だ。急な雪壁は休む所もないので一気に登るが雪壁の下まで行くのが長く感じる。フィックス・ロープにつかまって登りデポ地に着く。太陽の反射熱と高度の影響だろうけだるさを感じる。昼食を食べて一休みするが上へ登ろうとする力がわいてこない。ここでいつまでもじっとしていたい気分だ。

山下と市野がスタカットで先行し、扇能がロープをフィックスしてくる。連日降り続いた雪の下にクレバスがあってヒャットする。雪は不安定でステップが壊れそうだ。なかなか良い所が見つからず6,250mまで行ってテラスを作る。下から見て平坦に思えたがテントを張るだけのテラスを作るにはかなりの雪を掘らねばならない。デポして下山にかかる。時間はかかったがあまり高度がのびておらないのには少々ガッカリする。

すでにピサン・ピークより高い所だ。雪壁の下りはけっこうショッパイ。シェルパは後向きになってロープにぶらさがりながら下って行く感じだ。C<sub>2</sub> に着いてお茶を飲むと体は暖まり1日の行動が終わった満足した気分ではいっばいだ。明日はいよいよC<sub>3</sub> 入り。 (市野 記)

## C<sub>3</sub> 建設

4月28日

午前7時出発。きょうはC<sub>3</sub> を建設し、片岡、扇能、山下、市野、アン・ペマ、アン・ヌルブ(パンボチェ)がキャンプ入りする。それをサポートして松尾、佐藤、ギルミ・ドルジェ、アン・チョタレ、ペンバ・ヌルブ、アン・ヌルブ(ボルツェ)、アン・リタ、ハクパ・ツェリン、ペンバ・ツェリンが荷上げだ。体の調子が良くない岡村は、雪壁基部のクレバスにかけたハシゴが降雪のため埋れてしまったのでその整備にあたる。

キャンプ入りする者は寝袋などの個人装備一式を背負い、他の者は装備、食糧をつける。たいした量でないのにだんだんと肩に食い込むように荷が重く感じだす。松尾、佐藤の両隊員は非常に元気で速いペースで先に登る。

午前11時前デポ地点着、松尾、佐藤の両隊員はすでに雪稜の上に抜け、佐藤隊員の姿だけがスカイラインに見えたが、登って来いと都合をして間もなく雪稜の陰に姿を消す。サポートのシェルパも雪稜の東斜面の中程をフィックス・ロープを伝いながら黙々と登っている。デポ地で一休みした後、「どうせ上げねばならぬ荷物だ。きょうのうちにできるだけ上げちまえ」と、めいめい背負子へさらにプロパンガスやザイルなどを着ける。ずっしりと応える荷を背に最後の力を振り絞りC<sub>3</sub> 予定地へ向う。サポートのシェルパが下って来、途中ですれ違う。もう一度デポを荷上げすることだ。みんなやる気充分で、遅れを取り戻そうと必至である。雪稜に出ると、ちょうどテント2張分の広さがある台地になっている。ここがC<sub>3</sub> である。高度6,200m。ルート変更、悪天候のため遅れたC<sub>3</sub> がきょうやっと

ここに実現する。

見渡せば、東に目指すアンナプルナⅡ峰が聳え、すぐ西にアンナプルナⅢ峰、北にはチベットの山脈が果てしなく続く。なんと素晴らしい眺めであろうか。今まで高く見えたカングルー、ピサンピークはもう低い。ヒマラヤの山懐深く入っていることを今更に感じる。

「あの辺がムクテナートで、そこには永遠に消えることなく燃え続ける炎がある」。ダブルボッカを終えたアン・ペマが説明してくれる。聖地ムクテナート。遙か彼方でその方角しかわからない。

雪を削り、テント2張を張る。隊員用テントとシェルパ用テント。そしてシェルパ用テントで食事を作ることにする。シェルパ3名がこの上6,250m地点にある昨日のデポ回収に向う。午後2時、「じゃあ、またね」。サポート隊の5名は足どりも軽くC<sub>2</sub>へ下って行った。

午後5時、C<sub>2</sub>とのトランシーバー交信で、明日荷上げする食糧の確認。いよいよC<sub>3</sub>用食糧をC<sub>3</sub>に上げるところまで来た。C<sub>4</sub>用はすでにここC<sub>3</sub>とデポ地にあるので、あとはC<sub>4</sub>、C<sub>5</sub>への荷上げを待つばかりになる。これで食糧の荷上げはほぼ完了する。

夕食後、明日の行動を打ち合わせ、片岡副隊長個人持のロキシーを少し分けて貰った。寒々と澄み切った夜空に星が一段と大きく輝いていた。明日の好天を祈りつつ寝袋に入った (山下 記)

## 高 度 障 害

4月29日

今日も快晴、みごとなプラトーの朝である。今日はC<sub>3</sub>への荷上げのもようを16ミリで撮影するために登る予定である。そのために荷物はもたずに16ミリ機材一式をスチールカメラとともって、荷上げ隊より一足先に出発する。もう朝日がまぶしいほどあたって快い。C<sub>2</sub>からプラトーを荷を背負って来る隊員やシェルパを撮影する。良い写真がとれるであろうとゆっくり後をおうつもりで歩きましたが、プラトーから小さい雪稜を登る荷上げ隊に追いつくには、走るくらいにしないと追いつかない。必死で登った。三角の水壁の下について小休止をしている仲間にやっと追いついたが、休むよりも少し上に登って撮影をと思い、フィックス・ロープをつかんで登る。よくまあこんなところにルートをつけたと、感心しながら直登の終わるところで足場を切ってカメラをもちだす。しかしすごい息ぎれである。今日はとばしすぎたのだと、いいきかせるが少しバテすぎている感じである。休むまもなく仲間が登ってくるので、膝の上にカメラを固定してシャッターを押す。松尾がゆく。佐藤がゆく。シェルパ達が妙にすました顔をして通りすぎてゆく。少しおくれで岡村がくるのを撮っていると、すっ—とあたりが暗くなる。あわてて止めていた息をせわしくすると、またあたりが明るくなる。「クマさん先にゆくよ！」と岡村が通りすぎる。息がつからそうであるが、私もどうやら高度障害にやられたらしい。トラバースしてゆく仲間を撮影すると、またあたりが暗くなる。あわてて肺に空気を送りこむ。私も登らなければと登りだす。1歩2歩3歩……10歩。また視野が暗くなる。フィックス・ロープにぶらさがって、あわてて呼吸をくりかえす。また明るさかもどってくる。それ登れとふみ出すが、今度は8歩でまた暗くなる。仲間達は先に行ってしまうて姿がみえないし、足元は急なスロープである。手をはなしてはいかんとし

かりつけながら、1歩をふみだすのだが。…もうどこにいるのかわからない。1歩目のステップもみえないし、体がずりおちていくようだなどと考えたり、いつの間にやら記憶がなくなってしまった。

————— 光りがもどってくる。だんだんあたりのものがみえてきた。「あっ、ここは雪の上なんだ。俺はC<sub>3</sub>へ登っているのだっけ」と、あたりを見渡すと右手上方5mぐらいのところに赤いロープがみえる。思わず腰に手をやると、安全環は下にだらりとたれていて、手袋はしていないし、ピッケルも手首にぶらさがったままである。足首がねじれるように痛いので足元をぼんやり見ると、急傾斜に膝をついた形で立っているのがあった。仲間はみえないが目の前に雪稜がある。あそこまでゆけば見えるかもしれないが、その前にまずフィックス・ロープまでもどらなくては、落着いていかなければと、四つ這いになってやっと赤いロープをつかむ。そしてカラビナを通す。あと10mほどがんばろうと歩きだす。1歩2歩。もうだめだ。そのまま休む。やっと雪稜をまわりこむ。少し上に仲間が休んでいるのが見える。ふっと気が抜けてまた記憶がなくなる。なにか話し声がするのできき耳を立てていると、どうやらトランシーバーで交信しているらしい。やっとまた仲間たちがみえてくる。これからあとはどうなったか分からないが、気がついたら仲間たちがデポ地点の箱の上に座らせていてくれたのであった。チベットの方面の山がみえる。見慣れた仲間もいる。安心したのか今まで全然痛くなかった頭が、ものすごく痛くなってくるし、呼吸も又苦しくなって来るので、目があけていられなかった。ノビた私を残して皆はC<sub>3</sub>まで荷上げに登ってゆく。

デポ地点で横になって皆がおいてくるのを待っている間、2度か3度激しい目の痛みの中にチベットの上に拡がる空が、一面に真赤にみえたときは、これで死ぬのではないかと考えたし、またいくらか頭痛の柔らいだときは、よく無事でいたものと胸の奥からうれしさがこみあげてくるのであった。

あの撮影地点からこのデポ地までの間に、憶えているのは最初の10mほどと、コースからはずれた処に立っていたことだけで、あとは何をしていたかも定かでないのである。何処へいってしまったと思っていた16ミリの撮影機が、ザックの中に入っているのを見た時はうれしかった。手袋は落してしまったのであろう。幸いにスベアをもっていたので帰りに助かった。

高度の障害というのは、下りの方がつらいものである。空身でおりたのだが、1歩毎すごいショックをうけて、途中で何度も坐り込んだまますべってゆきたいと考えだし、プラトーの平坦な道では、バランスを保つことがむづかしく、ルートを踏み外してはころんでしまい、全くうんざりしたが、C<sub>2</sub>が目の前に現われたときは、ああこれでもう歩かなくていいとただそれだけで嬉しかった。

夕食はものすごい頭痛で食べられずに、わずかに飲んだスープも、すぐあとで吐き出してしまう有様であった。これらの経験を書きとめておこうと、頭痛止めを飲んで、一生懸命に書いたはずの日記は、あとでどうしても判断できないところが多かった。睡眠薬のおかげでやっと眠れそうである。外は相変らずの雪が降っていた。

(堀 記)

## C<sub>4</sub> へのルート工作

4月29日

α米、乾燥野菜、粉末みそ、食べる物全部に独特の臭いがする。にぎりこぶし大ぐらいの量の飯とみそ汁一杯でもう食べたくなくなる。

今日は、また、自分にとって新しい高度へ向う。午前7時出発、デボ地まではステップがあり、一步一步踏みしめるように登る。約50m、そこからは、右側の雪庇と左側の急斜面をみきわめながら、足がスッポリと太モモまでもぐるようなラッセル、片岡、市野、山下、扇能、アン・ヌルブ(パンボチエ)、アン・ペマの6人で交代しながら進む。1時間位歩いて、ふり返っても、C<sub>3</sub>がすぐそこに見える。稜線を切るように走るクレバス、1人1人確保しながら渡る。こんどは急斜面の直登、胸までの雪、10数m毎に大きな穴を掘り、スノー・バーを打ち込みロープを固定してゆく、その遅々たる歩み、C<sub>3</sub>より300m位のところで第1回目の食事、大休止をとる。すぐ下にC<sub>3</sub>、そして、ずうっと下にC<sub>2</sub>、B・Cまでも見える。

200m位の雪壁を登り終えたのが昼、標高差にしてC<sub>3</sub>より200m弱、ここより傾斜40度位の細い雪稜が続く、風があたるためか硬くクラストしていて、カッティングが必要である。

市野、山下が先に進み、扇能、片岡がフィックス・ロープを持ってそれに続き、10数mおきにスノーバーを埋込み、アイス・ハーケンを打ち固定する。2人のシェルパがステップをバケツに変えながら登って来る。上の2人のステップを切る氷がカラカラと落ちてゆく、見あげると2人の姿が舞いあがる雪煙の中にぼんやりと見える。股の下からこちらを見ている。シェルパが追いつく、急いでザックを背負い逃げるように前に進む、また止まって穴を掘る。風が強くなり斜面をサラサラと雪が流れる。ステップが埋まる。太陽がアンナプルナの稜線に近づく、気温が下る。帰路が不案になる。ロープを固定する手がかじかむ。また息が切れるまで登る、約10数m、スノー・バーを打込む。ロープを固定する。単純なくり返しである。それでもアンナプルナⅡ峰は除々に姿を変える。17時ごろC<sub>3</sub>着、1日中足元の雪ばかり見て過ごしたような気がした。

(扇能 記)

## C<sub>3</sub> より C<sub>4</sub> 入り

5月1日

いよいよC<sub>4</sub>入りの日だ。C<sub>3</sub>からルート工作を始めて3日目である。ラッセルされ、ロープがフィックスされたルートを個人装備だけを持って登る。ルート工作の時は少しでも早く上へルートを伸ばそうと思っているが、キャンプ入りとなるとすでに開かれたルートを歩くことと、それより上へ行く希望で少々落着いた気分である。そのせいか個人装備が重く感じられる。2日間もかかって1歩1歩足場を作った雪稜も一気に登ってしまうことができる距離だ。

空はいつものように青黒く、すぐ下にはC<sub>3</sub>が木の枝に作られた巣のように見え、そのはるか下の広い雪原にはC<sub>2</sub>がはっきりと見える。C<sub>1</sub>あたりは雪も解けてテントまでは認めることはできない。B・

Cの隊員集合テントの銀色の屋根まで見える。その様子はまるで前穂高岳の重大郎新道から岳沢を見おろしているようだ。

アンナプルナⅡ峰の頂上あたりは時々雪煙を上げている。雪稜に出たところから風が強くなり、ものすごい地吹雪に逢った。今まではほぼ毎日、快晴であったので一瞬とまどう。日本のエベレスト隊に参加した時にもらったというヤッケを着ているシェルパは、風でダルマのようにふくれている。前日に荷物をデポした所で昼食をとり周囲の景色を楽しむ。ピサン・ピークはすでに目の下になり、その北にチベットの山々が波のように連っている、アンナプルナⅡ峰の頂上は上へ登るにつれて高くなっていく感じだ。デポ地点より100m位上部にテラスを作ってテントを張る。相変わらず風が強い。デポ地点との間をダブル・ボッカして片岡副隊長をはじめシェルパ達はC<sub>3</sub>へ下って行った。山下と2人きりになったC<sub>4</sub>は風でテントがバタバタする音と時々舞ってくる雪片が当る音以外は何も音がなく静寂そのものだが夕食は2人でアルファーマイ1袋で充分であった。ミルクと砂糖のたっぷり入った紅茶を飲んで寝たが夜中にもものすごい下痢で目を覚ました。外は相変わらず風が強かった。 (市野 記)

### 主稜線への肉迫

#### 5月2日 (C<sub>4</sub>にて)

午前5時起床。昨夜の就寝時飲んだ催眠剤がまだ残っているかのように頭がボーとしてすっきりしない。高度の影響だろう。現在、ここC<sub>4</sub>には山下、市野の2人だけ。きょう2人で主稜線へできるだけ足を延ばす予定である。

「きょうはポカラを見ることができかな。」雑談をしながら朝食の準備をする。食欲がないので、凍った果実缶をあたため、ビスケット、紅茶で軽くすませる。風が少しありブリザートがテントを叩く。シェルパは居ず、気心の知り合った隊員2人だけのテント内は、ふと日本の山に居るような錯覚を起こす。だがいったんテントから顔を出せば、アンナプルナⅡ峰の勇姿が雪煙を上げ眼前にどっしりと座している。見慣れたアンナプルナⅡ峰だが、ここまで登れば一段と大きくなる。しかももうすぐだ。頂上への最後の岩稜が正面によく見える。

午前7時、闘志を胸に秘め主稜線へ向って出発。コンテナスで少しずつ高度を上げる。同じ傾斜の雪面が長く続く。勾配はあまりなく、クラストした雪面の所々に雪が吹き溜っており膝まで潜る。小さな亀裂も数ヶ所走っている。トップを交替しながら歩きよい場所を選んで進む。高度計を気にするが、なかなか思うように高度が稼げない。腹の調子が良くなかった市野が軽い腹痛を訴える。しかし大したことはなく大丈夫とのことで登攀を続ける。

午前9時、凍らないようにとヤッケのポケットに入れて来た白桃缶、サラミソーセージ、クラッカーを食べる。荷が少ないのでひとつにまとめ、市野の背負子、カメラなどの不要なものをデポして出発。稜線はすぐ目の前に見えるのだが、なかなか到達できない。ルートはⅣ峰側に取れそうである。主稜線のアンナプルナⅡ峰寄りに小さなコルがあり、狭い急な雪面で続いている。下降時を考えると、この直下にザイルフィックスが必要のようだ。左手にアンナプルナⅡ峰を時々見やりながらⅣ峰側に向って進

む。呼吸が乱れ心臓の鼓動が体に響く。

午前10時30分。高度計は7,050mを指す。やっとヒマラヤでしか経験することができない7,000mの高度を越えたが、主稜線への岩や礫が露出している斜面へもまだ達していない。トランシーバ-交信で片岡副隊長より、11時までには登攀をやめC<sub>3</sub>まで下るよにとの指示があった。上部の様子を伝え、主稜線に出るにはかなりの時間を要しそうなので、この地点で登攀を止める旨を伝え了解を得る。残念だが主稜線へは出られなかった。

アンナプルナⅡ峰の岩稜直下の最底コルが同じ高度に見える。岩稜の上部にピナクルが3つあり、奥の一際高く突き出ているのが目指すアンナプルナⅡ峰の頂上であろう。いつも背にしていたチベット側に目を移すと、6~7,000m級の山々が乱立し、さながら背比べをしているようだ。「いつかは行ってみたいものだ。」と話しながらしばし眺めを楽しむ。

午前10時45分、雪面に残っているツアックの跡を頼りに下降開始。C<sub>4</sub>・C<sub>5</sub>入りをする松尾、佐藤、ギルミ・ドルジェ、ペンバ・ヌルブが居り、暖い紅茶を貰う。上部の様子を伝え、すぐにそのままC<sub>3</sub>へ。急な雪稜をフィックス・ロープを頼りに下る。C<sub>1</sub>附近はかなり雪がとけて黒っぽくなっている。C<sub>2</sub>はゴミのように小さい。C<sub>3</sub>のテントの外に人が出ている。

午後2時少し前、C<sub>3</sub>着。別人のように黒く日焼けした西郡隊長、宮崎が迎えてくれた。一週間ぶりの対面である。  
(山下 記)

#### アタック隊員の最終決定

##### 5月2日 (C<sub>2</sub>にて)

先に決定した登頂要員の中から、その後の高度順化の状況を主とする体調をチェックした上で2~3名のアタック隊員を決めたいというのが私の意見であった。この要員4名は再度の行動開始(4月27日)以来連日同一の行動を取っており、これまでの高度順化、疲労等の点から考えてもすこぶる快調であった。

燃料の残量の問題は、その後の管理が行き届いたため以前のような切迫した状態からはやや明るい見通しが持てるようになり、輸送の問題もシェルパの休養を返上しての協力でかなり余裕のあるものになってきた。

最終的な登頂隊員の決定は、体調の絶好調にある佐藤と経験のあるサーダー(ギルミ・ドルジェ)の2名とした。3名にしなかったのは悪場の通過に要する時間を節約するためと、主稜線上でのラッセルによる体力消耗は不要と判断したためである。残りの松尾、ペンバ・ヌルブの2名には登頂隊のサポートと、余裕が生じた場合の第2次登頂隊員になって貰うことにした。

明5月3日はこの4名にシェルパ4名を含めた計8名で最終キャンプ(第5キャンプ)を出来るだけ上部に上げる予定。

佐藤には今晚から睡眠時に酸素を吸ってもらうことにした。  
(西郡 記)

## 最終キャンプの建設

5月3日

第1次アタック隊の佐藤とギルミ・ドルジェの2人を支援すべく、松尾とシェルパ5名が、最終キャンプを建設に向う。アタック隊員は個人装備だけを持ち、我々は食糧、酸素ボンベ2本、それに6人用ミード1張(2人用のマナスル型では狭くて窮屈だとサダーが主張したからである。)プロパンガスボンベ2入を1本、炊事用具その他を6人で分担して担ぐ。

Ⅱ峰までの距離が長いと、C<sub>4</sub>が6,600mと低いと、できる限り足を伸ばしたいと考え、アルバイトを覚悟のうえで登りだした。幸い、昨日、山下、市野のつけたトレースが残っており比較的楽に登ることができた。トレースが無くなってからは、高度の影響がでてきて、10歩も進むと、息苦しく休むほうが長くなってきた。Ⅲ峰からの尾根がすぐ、直近に迫ってきて、もうすぐ主稜線というのがわかるが、足がなかなか前へ出ない。

12時40分頃、やっと主稜線に飛び出した。高度は7,300mで、右手には1時間程のところⅣ峰があり、シェルパ達と目標の山をチェンジしようではないかなんて冗談を交わす。ポカラの町が見えるだろうと期待していたが、深い雲の中に沈んでいて、ついに見ることができなかった。

このコルは広い雪原となっていて、絶好のキャンプ・サイトであるが、明日のアタックのことを考え、もう少しⅡ峰よりにキャンプを置こうと考え、1時間半程稜線を進む。ポカラ側の斜面は下から見程には緩くはなく、意外と急で20°位の斜面で雪庇に気をつけて歩かねばならないので相当時間を喰うようだ。2時になった場所にテラスを切りC<sub>5</sub>を建設した。

やっと、本当にやっとアタック体制ができあがったのだ。全隊員の努力があと一歩で実ることになり本当にうれしく感じた。カルカッタ以来、共に行動してきた佐藤がアタッカーであることは非常にうれしい。年は若い体力、実力とも隊員の中では一番良いものを持っている。彼ならきっとやってくれるだろう。佐藤と固い握手をして下りにかかる。彼には、サダー共々無事帰って来てくれることが一番目の目的であることをくどく言った。

C<sub>4</sub>にフラフラで着くと、ちょうど5時15分で、隊長が登頂よりも無事で帰ってくることを希望するとの送信をしているところだった。夜はきれいな月夜で、明日の天気はもう約束されたようなものだった。  
(松尾 記)

5月3日 (B・Cにて)

高山病にやられた岡村と私は、ベースキャンプに下山してから4日になるが、岡村は多少回復しているようである。私は歩くのはまるで酔ばらいのようで、ときどき息ができなくなり呼吸困難になり、顔のむくみがひどいのであるが今朝やっとベースにおいていらい始めての小便ができる。このあと少し気分がよくなった感じであるがまだまだ体がいうことをきかない。岡村とトランシットをすえて上部の中間の姿を追ってみたりした。ポーターやシェルパたちもかわるかわるやってきてのぞき込む。岡村と相談してひとつ交信の時の上部キャンプの動きを記録しておこうとテープレコーダーを持ち出した。

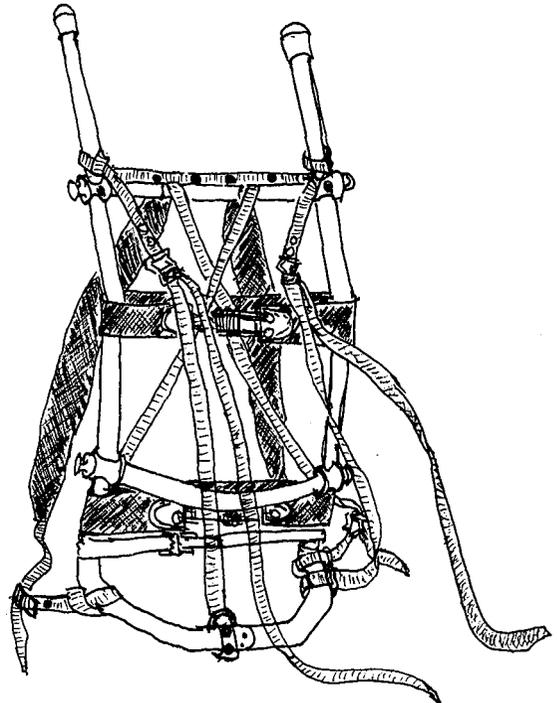
岡村はテープレコーダーと一生懸命に取りくんでいる。私はうれしい登頂のニュースを送るのに、少しテントの周辺のありさまも伝えようと、ベースから10分ほど下のカルカを見にゆく。もう春もだいぶと深まってヒマラヤの花が咲いている。黄色のカラガーナ、紫のクマオンアヤメ、タンポポなどがさかんに春をうたっていた。

バラサーブから各キャンプへのトランシーバー交信で、各キャンプのチェックと指令をひとつひとつ行っている。明日は登頂に向う日なので念には念をいれているのである。岡村は録音におおわらわである。私は新聞に送る原稿を書きだす。メイル・ランナーが手紙をどっさりもって帰ってくる。いつもながらうれしいひとときである。

C<sub>3</sub>は約7,300mに作られ、第1次攻撃隊の佐藤とサーダーのギルミ・ドルジェが明日にそなえて残る。C<sub>3</sub>には西郡隊長が入って各キャンプに隊員が配置された。

夕刻西郡隊長の最終チェックがおこなわれている。ポーターがシュクパをたく。シェルパ達も明日は登頂成功だと、ほがらかに話していた。私も原稿がきを少し早めにきりあげて、明日をたのしみに早寝をすることにした。

(堀 記)



## ア タ ッ ク ・ 遭 難

5月4日（C<sub>5</sub>にて）

絶好のアタック日和である。無風で快晴である。6時の交信で、佐藤の元気な声が入ってきた。頑張ってくれと祈るような気持でC<sub>4</sub>から登り始めた。若干の頭痛はあったが、昨日よりもスムーズに登ることができた。11時の交信のとき、頂上へ登りはじめる最低コルに佐藤とギルミのゆっくりと登る姿があった。ファイナルキャンプから3時間程でコルに出てくるだろうと予想したのに5時間もかかっている。きっと主稜線の斜面が相当に厳しく、ずい分シゴかれたにちがいない。頂上までの距離と時間を気にしながら、一路C<sub>5</sub>へとペンバ・ヌルブと急ぐ。1時にC<sub>5</sub>へ無事到着しテントの中を整理し疲れて帰ってくるだろうアタック隊員を迎えるべく用意をする。

それ以後、ただひたすらアタック隊員からの連絡を待つ。15時30分、佐藤隊員からの登頂を断念し、引き返すとの連絡あり、無事に帰ることをひたすら神に祈った。

5時、熱い紅茶と若干の食糧をもって、ペンバ・ヌルブと2人で稜線を歩く。2人のつけたトレースが頂上に向けて無心につながっている。風がだんだん強くなり太陽が沈むにしたがって急激に温度が下りはじめた。羽毛服を着て、その下にヤッケまで着ているのだが、歩くのをやめるとブルブルとふるえがくるほどであった。1時間ほど歩いて、最低コル手前のコブまでゆき、稜線をずっと頂上まで目をこらす。2人の姿らしきものを懸命に探す、それらしきものは見当らない。時々霧が無情にもⅡ峰の頂上をかくすようになってきた。トランシーバーで隊長の指示を仰ぐとテントで待機との命を受けたのでC<sub>5</sub>へとトボトボと帰る。日はとっぷりと暮れて今日もまた月夜で、稜線がうっすらと白く浮んでいる。テントで食事をとり、2人の帰りをただひたすら、まんじりとししないで待つ。テントをゆるする風に彼らが帰ってきたのではないかと何度も入口を見るがその度にガッカリした。

20時、隊長より交信あり「佐藤が稜線の何処かにいるが歩けなくなり待っているから救援に行ってくれ。」と悲痛な声の連絡を受けた。さっそくペンバ・ヌルブに行くべく指示を出したが「この夜に何処にいるかもわからない2人を探しに7,000mの稜線を歩くことは危険であり、死にに行くようなものだ。」と賛意をえられなかった。もちろん岳人の常識としては当然のことであるが、自分の気持としてはいてもたってもいられない気持である。しかし、この稜線を単独で行くことは、もっと危険であり、遠征中の単独行動はどんな時でも絶対に許されていなかった。

21時半、サーダーがクタクタになって1人でテントに帰着した。さっそく酸素を吸わせて、凍傷予防の薬をのませ、熱い紅茶をのみ終る間もなく、佐藤のいる場所をたずねた。ギルミの言うことには、テントの近くのコルで、テラスを切って置いてきたとのことであった。佐藤隊員は2人でビパークを主張したが、サーダーはこれでは2人も死んでしまうと考え、C<sub>5</sub>へ救援を求めたのであった。

22時、佐藤のいる場所がわかったので、ペンバ・ヌルブと2人で救援に向った。飲み物と食糧と寝袋をもって夜の稜線へと飛び出した。時間を急ぐので、コンテナスで行こうと思ったが、ここは慎重

に行かねば2人がスリップすれば何もかも終りになってしまうと考え、スタックアウトで行動した。テントから少し行くと稜線がゆるく左へカーブするのであるが、そこまで行くとコルのところにヘッドライトの灯が目に入った。「佐藤！佐藤！」とコールをかけた。「生きていてくれた。そのままじっとしていてくれ。あと少しでお前のところに行けるから……」と心の中で呼ぶ。それからただ無中であつた。やっとの思いでテラスの中にとび込んだ。彼の姿はもうなく、オーバー手袋と耳あてと凍った果物のカン詰が、ただむなしくころがっているだけだつた。風が強いので、コル近くの風の弱いところで雪洞をほっているのではないかとあたりを見まわしたが、それらしい足跡もなく、きっと彼は1人でC<sub>2</sub>まで帰ろうとして立ち上り、そのままスリップして、マディー・コーラ源流へと永遠に姿を消してしまつたのだ。

トランシーバーで隊長に現状報告をした。悔やしさと申しわけなさと、どんなにか自分の来ることを待たせよう佐藤の心持がいかばかりだつたか考えると、もう何が何だかわからなくなつてしまつた。隊長から「冷静になれ。冷静になれ。」再三再四忠告を受けた。とにかくC<sub>5</sub>へ帰って今後の体制を考えることにして、足どりも重くテントに帰つた。サーダーはすでに寝袋の中に入って死んだように眠っている。かすかな寝息が聞えるので生きていることが判りホツとした。テントが風にゆれるたびに目が開き、佐藤のことが頭でグルグル回転して一向に眠れなかつた。彼のことだからきっと帰ってくるにちがいない。ひょっこりと「アー疲れた。」といつて帰ってくるにちがいない。そのことだけが心を支配してつた。本当に長い夜だつた。 (松尾 記)

#### ( C<sub>2</sub> にて )

いよいよ登頂の日だというのに体調が悪い。5月1日B・C→C<sub>2</sub>・5月2日C<sub>2</sub>→C<sub>3</sub>という行動では、昨年エベレストのローツェ・フェイスまで登つたという経験があつても高度の影響を受けない方がおかしい。調子が良ければ、C<sub>4</sub>でもC<sub>5</sub>でも登つて行きたい。シェルパの虫歯の治療で出遅れたのがたつた。

それにしても、何という忌むべき日だ！

快晴でむかえた登頂日がこのような不幸な日になるとは、C<sub>3</sub>で宮崎と山下をC<sub>4</sub>に向け送り出したあとは、今日全開のトランシーバーを片時も放さずにいたが、ついに我慢できずにC<sub>4</sub>からC<sub>2</sub>に向け休養に入るシェルパ2名とともにC<sub>2</sub>に下つた。14時10分佐藤からの連絡ではまだ大分ありそうだがもう少し登つてみますという。「無理するな。C<sub>3</sub>に余裕が出来たし松尾達がすこぶる元気なので、明日そのトレースを使って第2回の登頂を試みる事ができるだろう」と伝えた。15時30分、同じく佐藤から「帰りの時間があるから引き返す。松尾さんにこのトレースを使って貰います」と連絡があつた。しかし隊長からの指示がその時点ではすでに遅かつたのだ。これまで、こと細かに出していた指示を登頂日に限つて最小限にとどめたのは、いままで通りの細かい指示でかえつて佐藤隊員自身に負担をかけるのではないか、すぐ傍らで一挙手一投足を見ているのなら別だが、余計に規制するのは止めよう。だからただ無理をせずに無事で帰すこと、頂上は踏まずとも再び全員が元気な顔をあわせようじゃないかということだけは念を押したのだつた。これは自分ながらの配慮のつもりだつたのだ。しかし結局は登頂を断

念して引き返す時間も指示しなかったのは、隊長としての責任だ。C<sub>5</sub>で佐藤の帰幕を待っていてくれる松尾からも何度も連絡があったが、佐藤とは連絡が取れないまま、夜がふけて行き、不吉な予感が次第に重くのしかかって来た。サーダーが突然帰幕した時は、佐藤よ、どうか元気でいてくれと祈るような気持で松尾に救援にむかうよう指示したのだった。この深夜に、この高度での救援活動は、松尾にとっても辛い作業どころか、間違えば二重遭難の恐れさえある。しかし、だからといって、佐藤隊員を放っておくわけにはいかない。松尾隊員の協力には全くお礼の言葉もなかった。

松尾から「佐藤の姿はもうありません」との報告を受けた時は、ひょっとしたら……とのこれまでの祈る気持ちがプツリと断ち切られた思いがこみ上がる。周囲を探して見当たらないと、スリップのあとだけが主稜線から南面の氷河へと続いているとの報告を受けた時はますます絶望的であった。気楽に行ってくるさと無理に細かい注意を出さなかったのが、無言の指示となって佐藤の肩に重くのしかかっていたのではなかったらうか。

とにかく明日また松尾達に捜索に出て貰おう。あとは、松尾とペンバ・ノルブに無事C<sub>5</sub>に帰ってもらうことであった。

(西郡 記)

#### ( B ・ C にて )

昨夜は興奮の故かねむれず、バラサーブに借りた「ネパールの人と文化」の本を読み、寝たのが午前3時、5時には目がさめ気が落ちつかずねむ気も感じない。

佐藤6時15分ファイナルキャンプ出発、B・Cのポンコツ一人、終日トランシーバー交信をテープにとる仕事にあけくれる。登頂のよろこびの一瞬を日本にいる仲間聞いてもらうためにも、ポンコツなりの努力をしてみることにする。

10時45分佐藤より交信あり。最低コルの手前のコブまでたどりついたという。意外と上下のある尾根であり春の穂高の吊尾根程度のショッパサだという。堀さんは、C<sub>1</sub>に未現像のフィルムを取りに出かけられ12時30分帰天。

3時30分アタック隊より交信あり。高度7,800m。強風でガスあり。今後の行動の指示を求めて来る。成功しなくても精一杯やればいいんだ。勇気ある退却をし、明日に期そうじゃないか。

以後交信がとだえ、二人の安否が気にかかり心がしめつけられる。7,000mの雪の稜線をあえぎ苦しみながらただテントに帰ることだけを考え歩いていることだろう。夕やみせまる中をトボトボとC<sub>5</sub>に向う二人を想像する。

学生の項、前穂をアタックして猛吹雪の中、奥穂から南岳への稜線を息を氷らせて歩いた時の記憶がふと心をよぎった。

8時15分佐藤より息切れし、苦痛にみちた交信あり、意味判断できず、意識もうろうとし虚脱状態にあるのだろうか。B・Cにいて何の方にもなれず「生きて帰れ佐藤ノ」コール&コール&コール。しかし以後佐藤は交信にでずじまい。

9時30分サーダーただ一人疲労困ぱいしてC<sub>5</sub>に帰天。稜線は風力5程度、立っているだけで身体のしんまでこごえる寒さであるが、月あかりが美しいとの事。この寒さの中でただ一人救援を待つ佐藤。

「生命の灯は絶対に消すな！」とにかく頑張るのだ。シェルパもウッドカッターも隊員もトランシーバー交信で佐藤の安全な報を聞かんがため、耳をすませて立ちつくす。不安にたえきれず、ウッドカッターは松葉を燃やし神に無事を祈る。俺も森羅万象の神に無事を祈ろう。

悲しみをこえて、10時30分松尾さん曰く「サーダーの言う雪穴に達す。佐藤の姿みあたらず。ただ彼をジッヘルしてありしザイルのみ残る。」と。全てが終った。我々の行為はバベルの塔であったのだろうか。 - 5月4日の日記より - (岡村 記)

5月5日 (C<sub>5</sub>にて)

昨夜はテントが風にゆれるごとに、佐藤がひとりで帰ってきたのではないかと、気になり、目が冴え一睡も出来なかった。遭難現場の確認と、この事実を詳しく伝えるために、無事にB・Cにたどりつかねばならないと考え、佐藤の残していった酸素ポンペを開き、マスクを口に当てて、寝よう寝ようと努めてみるが、頭の中に佐藤の姿が浮んで離れなかった。

朝、テントの外へ出てみると、快晴である。アンナプルナⅡ峰は、なにごとにもなかったように黒々とした姿を見せていた。風はあいかわらず強く、寒気は厳しい。

ペンバ・ヌルプの作った、朝飯を、無理やり胃袋に押し込んで、現場確認のために重い足どりでテントを出発した。テントからの稜線に、アンナプルナの方へ、佐藤が歩いたであろう足跡が、ずっと続いている。

40mザイルをスタックカットにして、距離を計ることにした。昨夜は、ずいぶん遠く感じたが、実際、計ってみると、5ピッチであるから、200m位であった。

あと少し、佐藤に体力があれば……。またあと、ほんの少し早く自分が救援に出てやっていたら、考えると、自分の責任ではつぐないきれないことをしてしまったと感ずるのだった。稜線は南面は、20°～30°位の傾斜で広い斜面となっており、北側のマルシャンディ川の方は、すばと切れて落ちており、大きな雪庇が出ており、踏み抜かないよう注意を払わねばならなかった。

現場には、昨夜と同じテラスが、そこに人がたであろう痕跡をとどめていた。そこから下方へ向って、滑落したあとがあり、途中でそれは、消えていった。マディ・コーラ源流のプラートの雪の上を、シェルパと2人で、佐藤の姿を探すが、一面、太陽に輝く、白い雪ばかりで、黒い点はひとつもなかった。おそらく、自分の引き起したナダレに埋ってしまったのだろう。

テラスの位置よりアンナプルナⅡ峰よりのゴブの斜面にスリップのあとが2本あった。サーダーの言のとうり、佐藤は力つき、2回スリップして、もう歩けなくなり、テラスを切って、そこで待つよう指示したものと思われた。

現場の写真を撮ったが、シャッターが凍っていたのか、それともギヤーがうまくかみあわず、フィルムが送られなかったかして、写真は撮ることができなかった。念のために、2台の写真機を持ってっておくべきだった。

10時、隊長の指示で、C<sub>5</sub>へ帰った。トランシーバーによれば、宮崎、山下の両隊員と、アン・ペ

マ、アン・ヌブル（パンボチェ）の2人のシェルパがサーダーの救出とC<sub>5</sub>の徹収に向っていることのであったので、お茶を作りながら、彼等のくるのを、テントの中で待つことにした。

サーダーは、少し元気になり、色々話しをするようになったが、まだ興奮からさめていないので、質問は極力さけることにした。

3人共、ただ黙って、テントの中に座っているだけだった。重苦しい空気が、テントを包んでいる。時おり来る突風だけが、テントをひとゆすりし、あざ笑うかのごとく、消えてゆく。

宮崎、山下両隊員がなかなかこない。心配になって、テントを出ようとした時、アン・ペマとパンボチェが、やって来た。2人は自分の目をジッと見たきり、一言も言わない。でも、彼等の目には僕を励ましてくれる、暖いものがあった。

とりあえず、この場所に残していくものを指示し、テントの中をかたづけさせた。テントも置いていくことになった。二日しか使わなかったプロパンガスも、そして、一生懸命、上げた、食糧も、装備の一部も置いていくことにした。

12時頃、宮崎、山下の両隊員がテントへ着いた。山下隊員の顔を見ると、今まで張りつめていた気持が、急になくなったようになってしまい、何をしゃべったかも覚えていない程になってしまった。彼等は、急いでやって来たものとみえ、疲労が激しいようであった。本当に申し訳なく、彼等と顔を合わせるのがつらかった。

2時、いよいよ、別れのときがきてしまった。もう僕の人生のうち、来ることのないであろう、アンナブルナⅡ峰の7,300mの遭難現場の近くへ、宮崎、山下、と3名で、佐藤に最後の別れをしにいった。涙がとめどもなく出てくる。「佐藤よ!!許してくれ。」

カルカッタから、そしてバイラワ、ポカラへと、いつもいつも一諸だった佐藤。雪と氷の冷い所へ一人ぼっちにして、僕等は帰らねばならなくなったなんて。

C<sub>5</sub>からC<sub>4</sub>の道は、とほうもなく長かった。宮崎、山下、松尾と3人でコンテナアスで下る。途中から2人が高度の影響を受けて、フラフラとなって来たので、スタックカットで確実に下ることにした。急いで降ることよりも、ここでは、確実に下ることが、僕達の最大の責任であったからだ。

ようやく、C<sub>4</sub>に着いてみると、サーダー達は、C<sub>3</sub>まで、一きに、下ったらしく、C<sub>3</sub>より昇ってきた市野と、サーダーと一諸だったアンペマと、パンボチェが待っていてくれた。

シェルパの中でも、特に優秀な、この2人が残っていてくれたことは、非常に心強く、彼等には、本当に感謝の気持で一杯だった。 (松尾 記)

## 徹収の決定

5月5日（C<sub>2</sub>にて）

今日も続く好天だがこれ以上登頂を目指すことは不可能だ。昨夜半までの行動で要員の松尾、パンバ・ヌブルの消耗は眼に見えていたし、第一、佐藤の姿を確認しなければならない。もうとても再度のアタックなど期待できない事態になっていた。とても登頂活動を継続できる状態にもない。C<sub>5</sub>の松尾に

は再度事故現場の確認と佐藤の姿を探すことを指示、C<sub>4</sub>の宮崎達にはC<sub>5</sub>へ支援に向かうよう指示した。朝9時、松尾からの再確認を行ったが、状況は昨夜のとおり、南面の氷河には佐藤の姿らしきもの見当らずという連絡があり、この時点で撤収と決定した。一方連絡の不徹底でトランシーバーが配置されないC<sub>3</sub>の片岡副隊長へ遭難事故の連絡をするための伝令をC<sub>2</sub>から出す。疲労の激しいサーダーはペンパ・ヌルブにつきそわれてC<sub>3</sub>へ、C<sub>5</sub>はテントなどをそのままにしてC<sub>4</sub>からのサポートを受けて午後おそくC<sub>4</sub>まで下った。

いつもは楽しみな日本からの手紙がC<sub>2</sub>へ到着したが読む気もなし、早くB・Cへ帰り、佐藤の遭難についての報告を送らねばならないが、上部キャンプの撤収が軌道に乗るまでは下るわけには行かない。

(西郡記)

## 今後の方針

5月6日

C<sub>2</sub>にて松尾、サーダー達の下山を待つも予想外に時間を喰っているの、あとのことをC<sub>2</sub>要員の森田・扇能の両隊員に任せてB・Cへ向う。

今後の方針を次のようにした。

上部キャンプの撤収は5月9日までに済ませて全員ベース・キャンプに集結すること。その間、佐藤隊員の家族、信州大学の実行委員会、日本大使館、ネパール外務省へ電報および手紙を送る(これは西郡が担当する)。B・C集結の時点で佐藤の慰霊碑をB・CとC<sub>1</sub>の中間地点に建立、再梱包を11日までに完了し12日に帰途の先行パーティB・C発、13日本隊キャラバンB・C発、少なくとも西郡は出来るだけ早くカトマンズへ帰り事故の報告を済ませて早期に帰国する。他の隊員もおのおのの用務が済み次第順次帰国する。

B・Cでは堀・岡村両隊員、リエゾンの出迎えを受けたが、このメンバー以外には事故のことは知らされていなかった。これはピサン村の住民が、事故を聞きつけて法外な要求をするかも知れないというための配慮からであったが、少なくともベース・キャンプにいる現地人はいつもと違う様子に気づかない筈はなかったであろう。(西郡記)

## リエゾン・オフィサーのサーダーに対する尋問

5月8日

ベース・キャンプへの到着以来、リエゾン・オフィサーが事故当日5月4日にサーダーと、シェルパのペンパ・ヌルブの取った態度にかなりの疑問を持っているらしく、当日の様子をしきりと聞きたがる。5月7日八王子岳会ガンガプルナ隊のリエゾン・シュレスター氏がお悔みに訪れ、サーダーが疲れ切ってベース・キャンプに下山してそれがますますはっきりした。

リエゾン・オフィサー達は「何ゆえに佐藤隊員を残して単身C<sub>5</sub>へ下ったのか」という点について最も関心や疑問があるらしく、もし佐藤を故意に置き去りにして帰還したのであればこれは遠征隊員の役に立つべきシェルパとしてはあるまじき行為であり、これまでのいかなる外国の遠征隊にもなかった不

名誉であるということであった。

それに対して西郡は、彼等（サーダーおよび、ペンパ・ヌルブ）が取った行動はもっともな行動であり、彼等は自分なりの最善の行動を取ったとおもうので疑問の差はさむ余地がない、彼等を信んじたいと述べた。

しかし、リエゾン・オフィサーはサーダーのテントに押しかけて事故当時の様子をことこまかに聞きただしたという。翌日サーダーは眼をまっ赤にして西郡を訪れ、尋問の苦しさを訴えた。

西郡は再びリエゾン諸氏と協議、前記の所信を改めて述べ、リエゾン・オフィサーが最悪考えている故意に佐藤隊員にある行為を加えたのではないかという疑問は、松尾・ペンパ・ヌルブが救援に赴く途中現場付近と想われる地点に遠く、佐藤のものと考えられるヘッド・ライトを確認できたという事実から否定されるのでこれ以上の尋問は差し控えるよう要求した。リエゾン・オフィサーはこれを快よく了解してくれ、その後、これ以上触れられることはなかった。（西郡 記）

### ベース・キャンプ反省会

5月11日

もうすでにモンスーンが到来したのか、それとも不幸な佐藤隊員の遭難を悲しんでか、午前中はいまでも泣き出しそうな雨雲だったのが午後になってすっかり雨になってしまった。石積みの隊員集会用小屋の中で帰りの荷の整理をする隊員達。

夕食後、今回の登山を遭難を中心にして振り返るための反省会をおこなう。昨夜は隊員達5名が雑談的に今回の遠征の長短（長所などありようははずはないが……）について明け方まで話し合ったが、今日はそのくり返しのような感じになった。

まず、5月4日の、頂上攻撃と遭難の状況について、当日とその翌日登頂隊の支援隊として行動した松尾から詳細な報告（遭難報告参照）と反省が述べられた。1)なぜツェルトを携行しなかったのだろうか。2)夕刻2名を出迎えに主稜線をたどり、発見できずに帰幕する際、携行した飲み物や食べ物を引き返す地点にデポすべきであった。3)C<sub>5</sub>から主稜線を経て頂上に達するルート凹凸が意外に多く、下部キャンプで想うより以上に体力の消耗のはげしい長いルートであったこと。4)自分も含めて、全時間を通じて佐藤も経験の深いシェルパが先々へと進むのに引きつられたきらいがあったのではないか。5)少しの時間的余裕をみつけてC<sub>5</sub>からロープを固定してアタック隊の帰りを楽にするような配慮が必要ではないか。6)そのような行動を容易にし、寒気による体力の消耗をできるだけ少なくするためにも、テントの中でアイゼンを着脱するような、臨機応変な行動が必要ではなかったか、等であった。

これらの松尾の問題提起を中心に各隊員から意見を述べてもらった。

登頂日当日のメンバーの体調を厳しくチェックする態度が足りなかったのではないか。事故当日、佐藤の体力消耗が激しくなり、トランシーバーの使用が困難になったのであればシェルパが代って交信できるよう訓練させる必要があったのではないか。

登頂隊員を支援するサポート隊は前夜同宿し、翌朝体調や準備を見届けた上で送り出す計画を立てるべきであった。

プロパン・ガスの手持不足と登頂計画の制限の中で最終キャンプから、頂上までの距離の判断を甘くしたまま、最終キャンプをC<sub>3</sub>と固定したこと。またこの時間に登頂隊員の調子を整える目的で温存する形になったことは必ずしもよいとされないのではないかと。

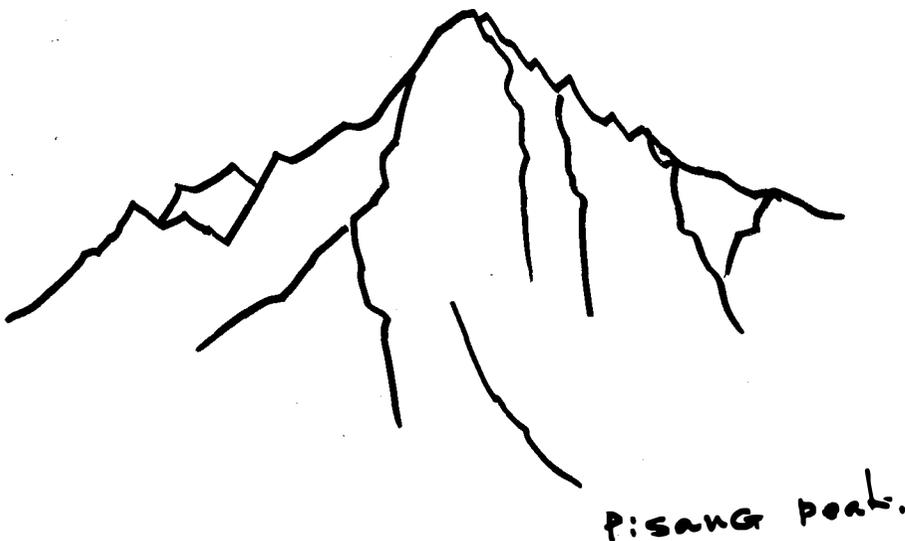
はじめてのヒマラヤ登山という使命感、7,000mという高度で佐藤隊員は登ばらずんば止まずという緊張した精神状態におかれてしまったのではないかと。特に6,600mまでは登山中一度登った高度であるが、それから上部ははじめての高度であったことが大きく影響したのではないかと(2日間で1,400mの高度を往復する必要があった)。

C<sub>4</sub>の高度について、6,600mということであまり安心したきらいがあったのではないかと。建設時は風も強かったが、C<sub>4</sub>はもっと延びたであろうこと。等々……………。

これについて、西郡が出した意見はおのおのもっともであり、燃料の手持不足のために生じた背水の陣2週間のタクティクスに根本的な無理があったこと。これがひいては遭難につながっているのではないかとと思われること。佐藤・松尾の温存は体力の温存にはなったかも知れないが、高度順化の上では少なからぬ無理があったと思うこと。隊長としての西郡をとってみれば7,000mの唯一の経験者であることを考えれば、常に最前線に立って先の見通しがたてられる位置にいるべきであったと反省していることなどを述べた。夜遅くまで話しはつきない。

小雨のしとしと降る中を午前0時就寝。

(西郡 記)



## 帰路のキャラバンの記録

さよなら アンナプルナ

5月12日

いよいよアンナプルナⅡ峰とも別れの時が来た。40日もの間我々隊員とシェルパが全力を出して頑張った山、そして佐藤隊員を飲み込んでしまった山、そのアンナプルナⅡ峰を今、後にしようとしているのであるが、何かスッキリして背を向けて出発していけない気分である。すでにモンスーンが始まったのであろう、ここ数日どんよりした日が続いてアンナプルナⅡ峰はガスの中で見えることも出来ない。

先発隊の荷物は梱包されてポーターが来るのを待っている。ポーターの面倒はシェルパにまかせて隊員は一足先に出発することにする。ポカラでの再会を楽しみにして握手を交してテントの数も減り、明日の本隊出発準備であわただしB・Cを後にした。その翌日にはまた全員がいっしょになってしまうとは夢にも思っていなかったことだ。

ピサン村の手前で堀、松尾両隊員と共にガスに隠れて見えないが容易にその姿が目につかぶアンナプルナⅡ峰に向かって歌を歌って別れをつげた。

当然我々とすれちがっていいはずのポーター達は姿を現わさない。村の入口で西郡隊長が若い男と何やら話しておられる。若い男は村のパンチャニヤットのメンバーであって彼が言うには今日は日が悪いので誰も村から外へ出てはいけないというのである。何とも妙な掟があるものだ。村の中でポーターを待つがなかなか来ない。冷たい風が吹く中で待つ我々を見物に村人が寄って来ては、今日は村の外へ出られないと言う。昼食の時間になり民家のわきで風をよけてB・C最後のごちそうである巻鮓をいらいらしてかぶりつく。

やっと来たポーターは我々が昼食をとっていた家へ入り込んでしまった。14人のポーターの内男はたった1人であとはすべてチベットの女たちである。この周辺の村では男は外国へ出稼ぎに出ていて普段は女ばかりということだ。頭髪につけたギーと体の汚れでものすごい臭いがする。この臭いも慣れればけっこう良いものなのだろう。

先発隊のシェルパはおとなしい性格であったがよほどこの女ポーター達には腹が立ったのだろう、大声でどなっている。しかし彼女等は強い、まったく受け入れない。中には可愛い娘もいるのであるが1人意地悪バアさんのようなボスがいてそいつが思う様にやっているようだ。男は弱いものだ。村の境まで行く事も受け入れられない。

シェルパの1人がこの様子をB・Cへ知らせると、サーダーをはじめ数名のシェルパがピッケルをかかえてものすごい見幕でかけつけたが、サーダーの交渉もうまくいかなかったので、我々は民家に上り込んでチャンを飲み出した。酒のつまみは女ポーターの悪口である。

サーダーもいい機嫌でB・Cへもどいった。結局先発隊の本日の行動はB・Cからピサン村までのほんの1時間位であった。

もしここに前日B・Cを出発したりエゾンオフィサーのライ氏がいたら何とか出来たのではないかと思われる。ネパールの役人は非常に強いのである。彼女等の言うことを聞いていたらポカラまで何日かかかることだろう。

(市野 記)

### 女ポーターにてこずる

5月13日

早起をする。快晴である。川向うの Cholten のかたわらで、くっきりと白く浮きあがった北東稜の撮影をする。先発隊のわれわれは、昨日ポーターに村の風習をたてにサボタージュされて、このピサン村までしか来ることができなかったので、女ポーター達に今日はティマンカルカまで、必ず行くと約束をさせて、シェルパたちにポーターをまかせて、私はアン・ヌルブ(パンボチェ)と、右岸の道先発したのであった。

ピサン盆地をゆっくりと歩きながら、もうずいぶん緑が匂うようになったこの平原に別れをつける。この平原のおわりでマルシャンディをよこぎるとき、北東稜が雲間にあらわれ、おりから雲の中から大きな雪崩の音がする。カンバ兵のキャンプタータン村あたりでは、ベンケイソウに似た花やワラビらしきものがたくさんみられ、春たけなわであった。カンバ村を通りすぎた草原でひるめしにしようとするわりこむと、サーブたちが集まってきた。のんびりと食べたのだが、ポーターたちはいっこうにやってこない。それもそのはず、女ポーターたちは30分歩いて30分休むというような、サボタージュ作戦で歩いていたのである。シェルパ達がどなろうがわめこうが、おだてようが、全然ききめがなかったという。しかたなしにわれわれが先に行っていたら来ざるを得ないだろうと、とうとうチャーメ村まできてしまった。

チャーメのチェックポストでは、一日早く出発したライ氏が待っていて、笑顔で迎えてくれた。ポストの前庭で警官と談笑しながらポーターを待つこと3時間、やっと一人また一人とポーターがあらわれはじめた。シェルパが苦い顔をして全然歩かず、悪い奴らだとおこっている。われわれのポーターたちは、この村泊りといってさわいでいるともいう。先発隊のポーターにまじって、みなれない顔のポーターがやってくる。おかしいなと思っていると、どうやら本隊のポーターのようである。先発隊に本隊が追いついてしまったわけで、われわれもすっかり頭にきてしまった。結局住路にテントを張った所で泊まることになってしまい、不愉快きわまりない。隊長もすっかり湯気をたてている。そこで先発隊のポーターは、全員クビにすることにした。それを知った彼女等は口ぎたなくなじるが、こちらも負けてはいない。どなりつけるとすすぐと帰っていった。これからのキャラバンは、全パーティで帰路につくことになってしまい、先発隊は、わずか出発後2日目にして消え去ってしまったのであった。おまけに夜は雨が降って寒い一夜であった。

(堀 記)

ビールが飲みたい

5月21日

ベグナスターの朝はさわやかに明けた。今日はポカラに入る日最後のキャラバンである。B・Cを出発してから9日目である。このあたりは水田地帯なので、稲の緑が日本を思い出させる。キャラバン最後とあってか、ポーターたちの足もうってかわって軽く速い。標高の低いところなので陽ざしも強烈で、やたらとむし暑い。チャンハウスがあると、ポーターもサーブも自然に足をふみ入れてしまう。シスワの村から中国の援助で作られたという。ポカラとカトマンズを結ぶチャイニーズ・ロードに行く。空はすっかりすみきってマチプチャレの尖塔が、青空につきささっている。わたしたちの山アンナプルナⅡ峰は、あいかわらず黒々とした岩壁を誇っている。大パーティだった往路のキャラバン。はげしかった氷壁の登攀。そしてアクシデント。想いは次々とうかんできてつきない。登山は終りをつげつつあるのだが、私の中ではネパールでの何ヶ月かの経験が、これからなんらかのかたちとなってあらわれてくるであろう。ペンシンキャンプは素通りである。のどがかわいてヒマラヤホテルに早くついて、冷たいそして高いビールをのみたいの一念で、走るように歩く。4時間30分の行程で、なつかしいポカラ空港をよこぎると、もうヒマラヤホテル。ケサン氏やみなれた顔が、「ナマステ・サーブ」とにこにこしてくれる。まず食堂で横文字のやたらとかいてあるビールの缶をあける。このうまさかのどを通してゆくとき、登山は終わったのだという想いが、わきあがってきた。明日からはキャラバンの疲れをいやす間もなく、事故処理などのたくさんの仕事をかかえて、一刻も早く日本へ帰らねばならないのだ。さっそくその夜はミーティングをはじめる。

(森田 記)







滑落したマディ・コーラ側斜面（シクリス上部より）

# 遭 難 報 告

遭 難 報 告  
救助活動ならびに捜索について報告  
遭難の事務処理  
佐藤隊員の遭難に対する反省（総括）  
遭難の原因について（補足として）  
トランシーバー交信録

西 郡 光 昭  
松 尾 武 久  
西 郡 光 昭  
山 田 和 彦  
西 郡 光 昭  
岡 村 知 彦



# 遭難報告

西郡光昭

5月4日、隊員佐藤正敏、サーダー、ギルミ・ドルジェは登頂メンバーとして午前6時15分第5キャンプ発、アンナプルナⅡ峰頂上に至る西稜を辿り午後3時標高7,800m地点に到達。しかし、強風、寒気加わり当日中の登頂は可能少ないため、登行継続を断念するよう隊長より指示があり午後3時30分第5キャンプへ向け下降を開始する。この帰途、佐藤の疲労、体力の消耗はげしく歩行継続きわめて困難となり、2回に亘り雪面を滑落した。幸いにも安全確保のためロープを結んでいたサーダーは、標高7,800m地点稜線上の雪面に小テラスを作り、ピッケルを雪面に十分深く打ちこんで佐藤の身体をロープで結び固定し、若干の食料を残し救援隊の到着まで待つよう伝えて救援を求めべく単身第5キャンプ向け下降、疲労困ぱいしながら辿りついた。

以上の経過については救援及び現場捜索にあたった松尾隊員の報告に譲るが、松尾隊員の捜索結果及びサーダーの報告から判断して、佐藤は自力で行動せんものとしてロープを解き、誤って滑落したものと考えられ、滑落地点より下部平坦地までの落差1,300mも考え併せ、行方不明とは言え死亡したものと判断せざるをえない。

## 救助活動ならびに捜索についての報告

松尾武久

遭難当日、1971年5月4日、松尾は第2次登頂隊員ならびに第1次登頂隊支援の任を帯び、シェルパ、ペンバ・ヌルブと共に第4キャンプより第5キャンプに登り待機した。

5月4日、快晴一時曇り、風強し。

- 15:30 佐藤隊員より引き返すとのトランシーバーによる連絡あり。
- 17:00 登頂隊出迎えのため第5キャンプを両名にて出発。
- 18:00 見通しの比較的良好な稜線にて2名の影を求めも確認できず。ガス時々去来、風強し。
- 19:15 登頂隊員2名と会えぬまま第5キャンプ帰着。
- 21:22 サダー、ギルミ・ドルジェ単身第5キャンプ帰着。疲労激しく口もきけず。辛うじて第5キャンプ近くの鞍部に小テラスを作り、ロープとピッケルで佐藤を固定して来たとの報告あり。
- 22:00 松尾、シェルパ、ペンバ・ヌルブが救援のため第5キャンプ発、尾根を曲った地点から現場付近に佐藤のものと思われるヘッドランプのライトを確認す。
- 22:57 現場着、サーダーの報告の通り小テラスは確認できたが、佐藤の姿なし。テラスの下端より滑落の形跡が認められた。オーバー手袋1対、軍手1対、耳あて1、缶詰

(果物) 1が残されているであった。隊長より第5キャンプへの帰着を命じられて下降。

23:52 第5キャンプ帰着。

5月5日、快晴、風強し。

8:00 捜索及び現場確認のため第5キャンプより滑落地点へ。小テラスまでの距離200mであった。

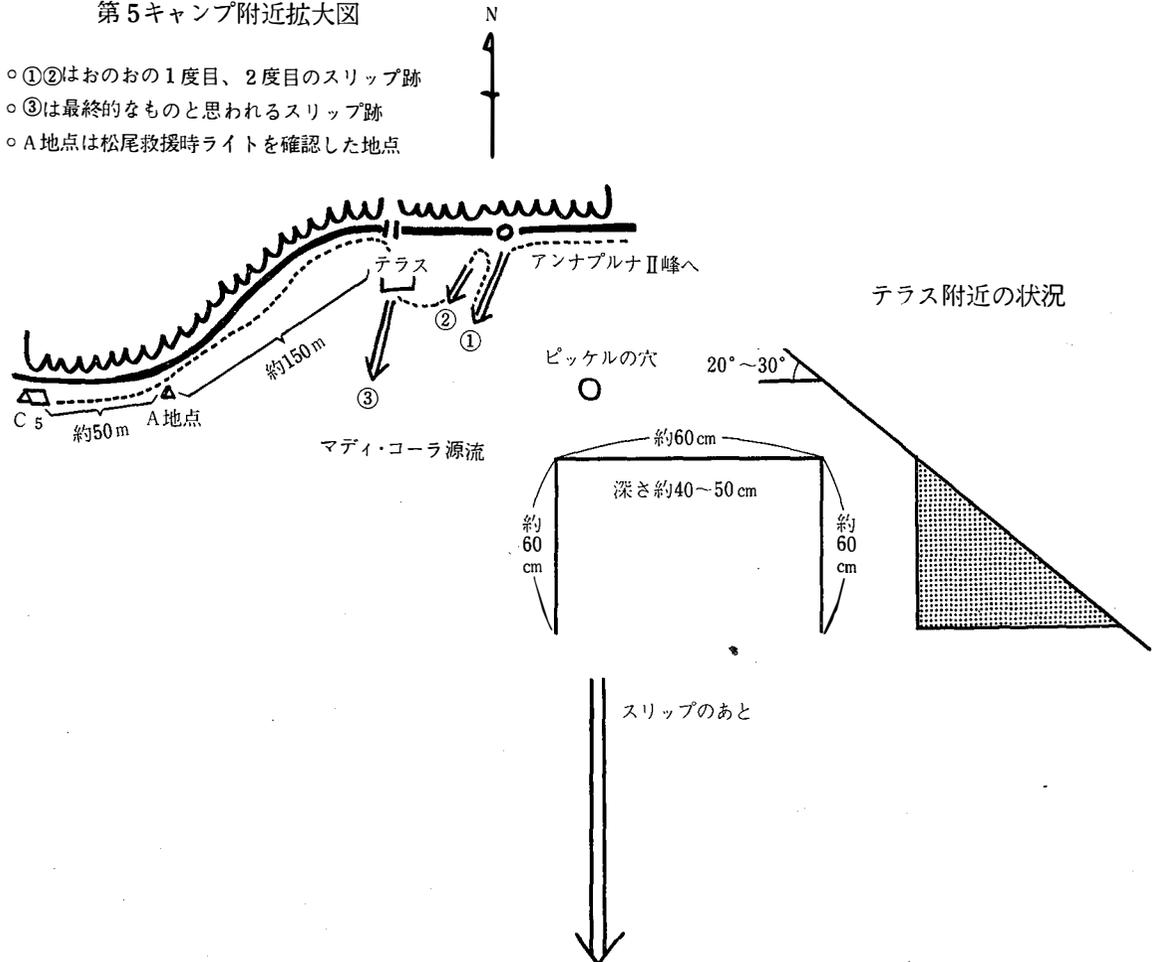
8:30 小テラス到着。このテラスから谷側に向う滑落の跡を確認。マディ・コーラ源流の氷河部分を上部より偵察したが、遺体は確認できなかった。現場は、傾斜20~30度の雪面で氷の部分は認められないが、同斜度にて標高7,800mより同6,000mまで続いている。現場の状況はサーダーの報告通りであり、松尾は現場付近の写真撮影を行ったが、シャッター凍結のため撮影は不可能であった。

10:00 隊長の指示により第5キャンプへ帰着。

14:00 第5キャンプ撤収、緊急に下部キャンプへ下る。 以上

(外務省への報告文書より)

第5キャンプ附近拡大図



## 遭難の事務処理

西 郡 光 昭

5月6日、前進キャンプの撤収を副隊長以下にまかせてC<sub>2</sub>から直接B・Cへ下山し、まずリエゾンオフィサーに事故の報告をし、緊急に連絡すべき筋を確認した。

まず日本向けでは、佐藤隊員の家族、遠征実行委員会事務局、後援いただいた信濃毎日新聞社、ネパール国内では、ネパール外務省、在ネパール日本大使館。

佐藤隊員の御両親、実行委員会へは隊長の西郡が、信濃毎日新聞社へは報道記録担当の堀が夫々執筆し、ネパール国内向けのもの、日本大使館へは西郡、ネパール外務省へはリエゾンオフィサーのH・D・ライ氏が筆をとって相互に認めあわせを行って、事実関係についての確認を行った。

佐藤隊員については、その姿を発見できぬまま撤収にかかったのであるから正確には「行方不明」とすべきであったが、遭難時の状況、翌日の松尾パーティーの捜索の状況から事実上生存の見込みなしとの判断を取ったので「死亡と判断した」との記載を入れた。ベースキャンプからのメール・ランナーは、5月7日にB・Cを出発させた。

5月23日、ポカラ経由カトマンズ到着、日本大使館で確認したところでは、メール・ランナーに託した大使館あての手紙はこの時までには到着していなかった。ただし、ネパール外務省向けの手紙は確実に到着しているらしく、日本大使館では、この情報をもとにして本国への連絡をとっていただいたというのであった。

日本での情報は第1報5月14日UPI通信が伝えるところとして入り、ネパール外務省発外務省あての連絡としての公電は5月17日に信州大学が外務省領事課からいただいている。

5月23日、大使館を訪問し、今回の事故についておかけした御迷惑とお手数を深謝するとともに口頭で事故の経過について説明した後、書記官の指示で死亡届（大使館に書式あり）2通、および事故報告書1通を提出した。いずれもあて先は在ネパール日本大使館、特命全権大使根本博殿、事故報告書には書式はないができるかぎり具体的に、詳細に記述した。

西郡は5月24日カトマンズ発、急処帰国することになり、ネパール外務省への報告と挨拶は、宮崎とリエゾン・オフィサーH・D・ライ氏に依頼した。

5月26日帰国後は、外務省、日本山岳協会に連絡をとったが、いずれもご厚意により事務的手続きはほとんど修了していた。関係各位には5月20日付、実行委員会長名で、登山に際してのお礼と遭難についてのご迷惑のお詫びと行動概要および事故報告の小冊子を発行した。

## 佐藤隊員の遭難に対する反省（総括）

山田和彦

佐藤隊員の遭難の状況はすでにくわしく報告した。いま、遭難にいたった経過をひとつづつさかのぼってまとめてみると。

- 1) フィックスされたロープをほどいて行動をおこし、滑落したこと。
- 2) フィックスされる前に2回のスリップ事故があり、著るしく体力を消耗したと考えられること。  
（午後8時13分のトランシーバー交信では、すでにろれつがまわらぬ程であった。）
- 3) この2回のスリップを防止できなかった程の疲労。
- 4) 自分の体力の限界をみぬけなかったこと。（ひき返す時間が遅れたこと。）

これらが直接の原因と考えられる。ここにいたった過程での問題点を計画の段階から考えてみると

- 1) アンナプルナⅡ峰の登頂計画は信大隊の力では無理であったか。
- 2) 遠征の準備の段階での無理はなかったか。
- 3) 日本出発より登山開始迄の間に問題はなかったか。
- 4) バリエーション・ルートを選んだこと。
- 5) 高度順応はうまくいったか。（健康管理）
- 6) 食料、装備などに不備はなかったか。
- 7) 悪天候、燃料不足、ルート変更などによって日程の余裕がなくなり行動に無理があったのではないか。
- 8) アタック隊員の選定
- 9) アタック当日のトランシーバー交信の不備。
- 10) 当日の隊長からの指示に問題はなかったか。
- 11) 救援の行動に問題はなかったか。
- 12) その他

目標とする山をニルギリ峰からアンナプルナⅡ峰へ変えたとき、その困難性を重視してメンバーを10名以上とし、全隊員が十分登山活動のできる能力のある人を選んだ。ヒマラヤの経験者が1名のみの信大隊が8,000m近い山は無理ではないかとの意見もあったが、計画の段階でも、また現在でもアンナプルナⅡ峰は信大の力で充分可能であると考えている。

遠征の準備での反省点もいくつかあるが、アクシデントにつながるものはない。

インドやネパールでの渉外やトランスポートに予定より日数をくっているものの、全体のスケジュールからみて、これが最終的に行程へしわよせされているようなことはない。佐藤隊員はインド・ネパールの隊荷の陸送を担当したが、健康状態は良く、疲労はポカラ滞在の間にとれている。キャラバン中にも特に問題はない。初め計画ではアンナプルナⅡ峰へ直上する北東稜ルートをとる予定であったが、偵察の結果Ⅳ峰～Ⅱ峰間のアイス・フォール状の氷壁にルートを求めた。しかしなだれがC<sub>2</sub>に及び、更

にⅣ峰よりルートを変更したが、これにあやまりはない。結果的には初めのルートにはその後崩壊やなだれはおこらず、そのまま登っていれば最終キャンプは更に頂上近くに設営できたであろう。しかしルートが長くなったといっても計画ではアタック・キャンプはC<sub>3</sub>であり、実際はC<sub>3</sub>をアタック・キャンプにしているのでこれも問題はない。またC<sub>3</sub>から頂上迄が遠すぎたということも言えない。(ユーゴスラビア隊は信大隊のC<sub>3</sub>より遠くからⅡ峰登頂に成功している。)

だがキャンプが計画のようにもう一つ伸びていれば、きわめて登頂は容易になったであろう。隊全体からみて高所順応はおおむねうまくいっていた。佐藤隊員は頭痛などの高所の影響はきわめて少なく、食欲もあり、シェルパと対等に働いていた。ただあとでギルミ・ドルジェ氏の話によれば、C<sub>3</sub>で初めて軽度の頭痛と腹痛を訴え、アタックの朝は食欲もいつもよりおちていたという。しかし7,000mを越えれば軽度の頭痛はだれにでもあり、食欲もおちるものであり、これだけで彼の行動は無理であったとはいえない。問題はC<sub>2</sub>からC<sub>3</sub>まで連日の行動で上っており、疲労の蓄積が考えられることである。

これはプロパンガスが予定以上に消費されたために、燃料不足となって日程に余裕がなくなったためであった。悪天候やルートの変更などの日程に対する影響はほとんどなかった。(計画では登山に60日をあてていた。)このプロパンガスの使用量はマカルー隊などの報告をもとに1人1日100gとしたが、じっさいには150gが使用され、統制してからも125gが使用された。その結果C<sub>3</sub>以上で使用できるガス量よりアタックの機会は2回のみにかぎられてしまった。この計算のあまさと、チェックの遅れたことが日程の余裕をなくした原因と考えられる。充分、日程に余裕があれば更にテントをのばすことができたであろうし、高所順応もよりうまくいったであろう。

アタック隊員に佐藤君が選ばれたのは体調がきわめて良く、気力も充実しており、当然であったと考えられる。又、パートナーにギルミ・ドルジェ氏が選ばれたのも経験、体力、技術などからして順当であった。

アタック当日、C<sub>4</sub>以下ではトランシーバーは常に交信可能にしてあり、アタック隊は電池の消耗を考えて、6時、11時、14時、17時の定時交信の他は、アタック隊から呼び出しするようになっていた。しかし10時45分交信の後、14時10分2度目の交信があった。このとき、佐藤隊員はまだ元気であったが、行動はかなり遅れていた。登頂の機会はその当日のみではなく、翌日には松尾隊員らのアタックが予定されていたので、引返すかどうか話題になり、下からは無理をしないようにとの指示であったが、本人の希望で前進を許可している。次の交信は15時30分であったが、このときの会話でも佐藤隊員は元気であったが、登頂は無理と判断しており、隊長も引き返すことを命じた。その後17時の交信はなく松尾らがC<sub>3</sub>より出迎えに向ったが、佐藤隊員らの姿を発見できず、風と寒気のため引返した。20時13分の交信ではすでに佐藤隊員はろれつがまわらぬ状態であり、トランシーバーの操作もうまくできなかったものと思われる。おそらく2回にわたるスリップによって急激に疲労が重なったためと考えられる。ここで問題となるのは何故定時交信がおこなわれなかったか、14時10分の交信のときに強く引き返すことを指示すべきではなかったかということである。当日ビバークする予定はなく、ツェルト、燃料などは持っていかなかった。ビバークを予定していなくてもツェルトなどを常に

携帯すべきであったとも思われる。

20時13分の交信後の隊の行動に、あやまりはなかったと考える。

以上、2日13日に開かれた遭難反省会での意見をまとめたものであった。

## 遭 難 の 原 因 に つ い て(補足として)

西 郡 光 昭

1972年2月13日に行われた遭難の原因に関する委員会で述べられた意見に加えて、遠征隊長としての反省をまとめて記したい。

まず、佐藤隊員遭難の背景としての主因は限られた燃料から必然的に決められた登頂までの期間(2週間)が隊員に登高計画、高度順化の点で無理を強いたこと。とくに佐藤隊員をはじめ登頂隊員にはこれが致命的となり、事前にチェックできぬまま、第6キャンプ建設をも安易に中止したこと、以上に集約できるのではないかと考える。

我々の登攀計画は燃料の手持ちが明確になった時点で急転直下、せっぱつまった状態にたちいたってしまった。がこれはひとり燃料担当隊員の責任に帰すべきでないことは当然であり、タクティックスの流れの中で把握すべきであった隊長の責任こそ問われるべきである。この点から考えれば、例えばアイスフォール・ルートの断念や、松尾隊員自身が佐藤隊員の救助活動にあたって述べている反省点、あるいは反省会で問われた種々の疑問、アタック当日の佐藤隊員の体調等は、あえて本タクティックスの本質的な反省点ではないと言って良いと考える。

隊長として反省するのは、燃料の不足、今後の見通しを確認したうえで、たて直され計画の中にすでに登頂隊員のアクシデントは内在していたというべきであり、もし佐藤隊員・サーダーの登頂パーティーが登頂に成功して帰還したとしても、ただただ僥倖といわれるものであったのではないかと思う。

その意味で、この失敗は素直に失敗として認め、再び同じ失敗を繰り返さないための研究の積み重ねこそが大事であろうと思う。

## トランシーバー交信録

快晴にあけた5月4日、頂上攻撃の日、キャンプ間で行なわれた交信の全てが、B・Cで録音されていた。当日の状況の参考にその重要と思われる交信を記載することにした。各キャンプ間の隊員配置はつぎのとおりである。

B・C           堀，岡村  
C<sub>2</sub>           西郡，森田，扇能  
C<sub>3</sub>           片岡，市野  
C<sub>4</sub>           宮崎，山下  
C<sub>5</sub>           松尾，ペンバ・ヌルブ  
アタッカー   佐藤，ギルミ・ドルジェ

(ただし、当日の最終的な配置であり、C<sub>4</sub>以下のシェルパの配置は行動表を参照のこと。)

6:00 (定時交信)

西郡   お早よう。良く眠れたかどうか。アタック隊の体調はいかが。

佐藤   体調良好。ギルミも良好。少し手間どって出発が遅れた。

西郡   天候が良いので予定どおり慎重に頂上へ向ってくれ。C<sub>2</sub>はトランシーバーを常時開局しているので、用件のあるときはいつでも呼びだしてくれ。

佐藤   諒解。では行ってきます。

10:45

西郡   アタック隊の現在の高度と稜線の状態を知らせ。

佐藤   高度計が昨夕から故障のため高度は不詳。位置は最低コル手前のピークに下にいる。ちょうどC<sub>2</sub>の真上あたりだ。

西郡   最低コルまでの距離はどのくらいか。

佐藤   最低コルまでの距離は順調に行けば15分くらいだと思う。C<sub>5</sub>からピーク間の稜線は思ったより厳しく、ラッセルのため時間がかかった。

西郡   諒解。持ち時間まで努力してくれ。

佐藤   もうすぐ11時の定時交信だが、行動したいと思うので定時交信は省略したい。

11:00 (定時交信)

宮崎   現在位置はC<sub>4</sub>のデポ地点。アタック隊の姿が良く見えるので適時C<sub>2</sub>へ連絡する。現在、アタック隊は最低コルを過ぎ、頂上よりの丸いピークの下に到着したもよう。

西郡   C<sub>5</sub>の天候いかが。

松尾   上部では風が強くなってきた。

12:30

松尾 12時30分、C<sub>5</sub>へ着いた。稜線上は風が強く、寒さが厳しい。

宮崎 C<sub>4</sub>も11時頃から風が冷たくなりだした。アタック隊は雪庇の丸い尾根を越して、頂上へ続く岩稜のとっつきから100m程登った雪面に確認できた。

14:00

宮崎 アタック隊は最低コルと頂上とのほぼ中ほどを登っているが、頂上にガスがかかりだしたので、アタックメンバーの確認が困難になりそうだ。

西郡 諒解。C<sub>2</sub>はガスで視界が全くきかない。風と雪はない。

宮崎 C<sub>4</sub>も時おりガスがかかって見にくい。粉雪がチラホラ舞っているが風はない。B・Cの高度計の目もりを知らせろ。

堀 現在、3560。5月2日6時30分、3550。同17時30分、3577。3日5時30分、3560。同17時30分、3552。4日5時30分3550。B・Cは雲は高いが大粒の雨が降り始めた。

西郡 C<sub>5</sub>の風の状態はいかが。

松尾 現在は少し穏やかになっているが、時々突風が吹く……………。

佐藤 こちらアタックパーティー。現在頂上に至る三つのピークの一番下のピークの所にいる。

宮崎 C<sub>4</sub>から見ると、三つのピークの一番下の方からのびている雪のクロアールの下にいると思うがいかが。

佐藤 だいたいそんなところだ。

宮崎 位置は最低コルから頂上への2分の1程のところだ。

佐藤 先はだいぶ長いような気がする。

宮崎 2人の体調はいかが。

佐藤 私はさきほどから少々胃の痛みを覚えている。ギルミもあまり元気がない。

宮崎 諒解。C<sub>4</sub>からみるとルートとしてはアタック隊のいる雪のクロアールに登るが一番いいようだ。

西郡 アタック隊、今後も登行を続けることができるか。

佐藤 予定どおり行きたいと思う。

西郡 諒解。あまり元気が出ないようなら、無理に頂上を踏む必要はない。帰ってくること。

佐藤 できるだけ頑張っていきたいと思う。質問だが、胃の痛みにセデスは効くか。

西郡 きかないことはないから飲んでおくように。

佐藤 ありがとう。それではそのようにする。

西郡 それと水を持っているか。

佐藤 持っている。

西郡 胃が痛いなら、テルモスに入っているお湯を飲んでおくように。

佐藤 諒解。登行を続ける。

西郡 C<sub>5</sub> 松尾へ。アタック隊がC<sub>4</sub> まで下ることはほとんど不可能なので、C<sub>5</sub> で受け入れ態勢を整えておくよう。以後の行動についてはアタック隊の持ち時間もそれ程多くないので、今後の状態、アタック隊からの連絡を持って詳細を決定したいと思う。C<sub>5</sub> は今後ずっと開局しておいてほしい。

15:30

佐藤 ただ今、アタック隊は推定高度8,800m……。

西郡 聞き取りにくい。もういちどどうぞ。

佐藤 アタック隊の高度……8,800m。

西郡 7,800mの高度にいるのか。

佐藤 失礼した。7,800mぐらい。

西郡 諒解。からだの具合はいかが。

佐藤 元気だ。上部の天候は非常に悪くなってきた。サーダーは帰りの時間が遅くなるから帰るほうがいいとの意見だが、どうしたら良いか。

西郡 ……天候が悪い方向に向っているし時間もないので、そこから引返すように。

佐藤 もうちょっとのところで非常に……だが……。

西郡 もういちどどうぞ。

佐藤 もうちょっと……。

西郡 もういちどどうぞ。トランシーバーのボタンをよく押して話してください。

佐藤 あと1時間ほどで、ピークに立てると思うので、非常にやりきれない気持がする。

西郡 諒解。ご苦労さん。慎重に下山してくれ。

佐藤 ……トレースがありますので、第2次アタック隊は確実にピークに立てると思います。

西郡 あす、松尾とペンバ・ヌンプを行かす予定でいるから無事に下山してほしい。

佐藤 諒解。僕等の消耗の度合から見ると、C<sub>5</sub> へ帰るのが精一杯と思う。そのようにアレンジをお願いしたい。

西郡 既に松尾とペンバ・ヌンプがC<sub>5</sub> に入っており、全てサポートしてくれるので安心して振り返り込んでくれ。

佐藤 ありがとう。それでは交信を切って……。

17:00

アタック隊のC<sub>5</sub> 帰着が遅いので、C<sub>5</sub> の松尾隊員とペンバ・ヌンプが迎えに出発した。

18:00

西郡 こちらC<sub>2</sub>、アタック隊は帰ったかどうか。

松尾 現在C<sub>5</sub> より1時間程来たが、人影は見あたらない。まだ稜線には陽があたっているが、非常に寒気が厳しく、立っているだけで身振いがとまらない。尾根の状態は厳しく、陽が落ちると

ほとんど行動不可能と思われる。

西郡 諒解、トレースはわかるか。

松尾 ピークに向ったトレースはあるが全く人影が見えない。霧が晴れたのでちょっと待って引返す。  
……ちょっと待って、霧が晴れる。……稜線上ずっと見渡せるが人影は見当らない。目の前のピークから最低コルにかけての山かげで見えない所にいるものと思われる。

西郡 それではまもなく着くと思うので、ただちに引き返してくれ。

19:15、松尾、C<sub>5</sub>着。

20:15

佐藤 ……どうぞ。

西郡 こちらC<sub>2</sub>、西郡、感度良好。

佐藤 エー、こちらアタック隊……。

西郡 ……からだの調子どうだ。佐藤。

佐藤 エー……してすみません。

西郡 サーダーも元気か。

佐藤 エッ、はいお願いします。

西郡 サーダーも元気ですか。

佐藤 ……ます。はい……はございません。

西郡 ……C<sub>5</sub>まで歩けるか。C<sub>5</sub>まで歩けるか。

佐藤 少々、お待ち下さい。

西郡 佐藤。佐藤。こちらC<sub>2</sub>感度いかが。

佐藤 感度良好です。

西郡 C<sub>5</sub>へたどり着けるか。

佐藤 はい。……どうですか。

西郡 アタック・キャンプまで歩けるか。

佐藤 エー、歩けることは歩けますが、エー……がわかりませんので……方向がわかりません。

西郡 C<sub>5</sub>から迎えを出すので、くれぐれも動かないようにしてください。

佐藤 エー

西郡 こちらC<sub>2</sub>、こちらC<sub>2</sub>、佐藤

宮崎 佐藤。感度あるか。応答せよ。

佐藤 はい、こちら佐藤です。感度良好です。

宮崎 迎えに行きますから、絶対に動かないこと。  
佐藤 エー、迎えに来るといっても……。

.....

宮崎 佐藤。感度あるか応答せよ。

宮崎 佐藤。感度あるか応答せよ。

.....

宮崎 佐藤。感度あったら応答せよ。

佐藤 はい、感度良好です。

宮崎 その地点で動かずにいてください。

佐藤 現在地点をいうのですか。

宮崎 C<sub>3</sub>から迎えに行くから、動かないでいなさい。

佐藤 現在位置の迎えに……しました。

宮崎 もう一度お願い。

佐藤 現在の位置を動かないでいなさいとの……ですね。

宮崎 そのとおりです。元気だけつけておいてください。

佐藤 はい。諒解。待ってます。どうぞお願いします。

宮崎 サーダーもいっしょですか。

佐藤 サーダーも……。

宮崎 動かずにそのままいてください。

.....

西郡 今の交信傍受しました。現在地は不明ですが、とにかく松尾があと数分くらいで開局しますので、すぐ迎えに出したいと思います。C<sub>4</sub>から現在の上部の状況はいかがか。

宮崎 ぬけるような星空、月夜です。なお風が少々強いようです。

西郡 C<sub>4</sub>からは2人のアタック・メンバーのヘッドランプの明りは見えませんか。

宮崎 ここからはいっさい見えておりません。

西郡 諒解。

松尾 こちらC<sub>5</sub>松尾、開局しました。

西郡 20時15分、佐藤から連絡あり、現在疲労はげしく、ルート不明で行動できないとのことです。申し訳ないが、2人で迎えに出てもらいたい。

松尾 諒解。どのあたりかわかりますか。

西郡 彼等の現在地その他、交信不良でつかめませんが現在地に待機させてあります。防寒具完装のうえ迎えに行ってください。

松尾 諒解。

西郡 できるだけ早くお願いします。

.....

松尾 佐藤からトランシーバーの連絡があったことをペンバ・ヌルブに伝えましたが、夜、どこにいるかもわからない2人を迎えに、この風の強い中、出て行くのは非常に危険であるとの返事がきました。

西郡 そこを連れ出して、なんとか説得してください。連中は非常に元気ですし、私の考えでは、コルの手前のC<sub>5</sub>側にいると思われます。

松尾 先き程、私とペンバ・ヌルブが行ったときの尾根の状態はコンテナアスでゆっくり行かねばならないほどです。

西郡 現在の風は強いか。

松尾 だいたい風力5くらいです。さいわいなことは月明りであることです。

西郡 佐藤と連絡を取りますので、少しでも良いから迎えに出るようにしてください。

松尾 諒解。もう一度説得してみます。

21:22

松尾 アタック隊のシェルパ・ギルミ・ドルジェ、単身C<sub>5</sub>にたどり着きました。疲労困ぱいしていて、口もきけないような状態です。ギルミの話によるとテントから約30分の所にテラスを掘って、佐藤を待機させてきたそうです。

西郡 現状では迎えに行くことも非常に困難だと思います。佐藤には明朝まで待ってもらいよりしかたないと考えます。

松尾 同感です。たとえ私とペンバ・ヌルブが行ってもどうにもなりません。

西郡 それでは明朝特別早くC<sub>5</sub>を出発、現地にかけてくれるようお願いします。サーダーに別れたときの佐藤の体調を聞いてください。

松尾 非常に疲れているもようだ、帰途に2度滑落して、サーダーが上へ引きあげたそうです。

西郡 諒解。それでは明朝行動してください。

松尾 今行きたい気持ですが、明朝早く行きます。

西郡 気持はわかるが、今は大事にしてください。続いてサーダーの身体の具合は、凍傷はないか。

松尾 手足に凍傷はありません。薬を飲ませて少し酸素を吸わせました。

西郡 諒解。今晚はぐっすりねかせてやってください。サーダーの迎えは明朝C<sub>4</sub>から上がります。あとは佐藤の無事を皆で祈りながら明朝全力をあげよう。C<sub>5</sub>のトランシーバーも開局にしておいてください。

松尾 諒解。

.....

松尾 ペンバ・ヌルブと相談の結果、今行く方が良いと考えますので、出発します。テントまで連れて帰れるかどうかわかりませんので、シュラフを持って行きます。

西郡 諒解。C<sub>5</sub>にいっさいまかせる。充分気をつけるように。

22:00、松尾、ペンバ・ヌルブ兩名にて佐藤隊員を迎えに出発。

22:57

松尾 現在、ギルミが佐藤を残して来たという場所に着いた。結論から先に申しあげる。佐藤はもういない。現在の様子から、佐藤はザイルをほどいて、テントへ行こうとしスリップ。そのまま滑落したもよう……。

西郡 諒解。大変長い間ご苦労さん。その地点で引き返しC<sub>5</sub>へ向ってください。

松尾 あと20分ばかり早ければこんなことにはならなかったのに。

西郡 ご苦労さん。もういい。ペンバ・ヌルブとC<sub>5</sub>へ引き返してくれ。

松尾 僕がもう少し早く来たら、こんなことにはならなかったんや……。

西郡 松尾、しっかりせよ。あとに残された者が大事だ。気をつけてC<sub>5</sub>へ引き返すように。

松尾 諒解。ゆっくりとC<sub>5</sub>へ帰ります。

西郡 気を持ち直して、2人でゆっくり帰ってくれ。

23:52

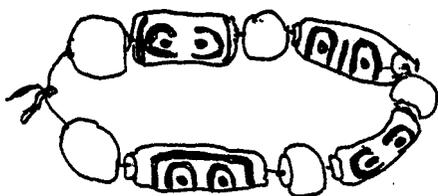
松尾 ようやくC<sub>5</sub>へ着いた。

西郡 ずいぶん長い間、苦しいアルバイトご苦労だった。とにかく今晚はねむってくれ。明日のことは明朝指示する。

松尾 諒解。明朝目がさめた時点で連絡をとる。おやすみなさい。

西郡 それでは大事に。おやすみなさい。

(記録)岡村知彦







ポカラ空港

# 各 係 の 報 告

装 備  
 食 糧  
 医 療 関 係  
 記 録 報 道  
 気 象  
 梱 包 ・ 輸 送  
 通 関 手 続  
 キャンプ間の輸送  
 会 計 報 告  
 マネージメント  
 留 守 本 部

森田稲吉郎  
 山下泰弘  
 西郡光昭  
 堀 勝彦  
 松尾武久  
 片岡 格  
 松尾武久  
 岡村知彦  
 宮崎敏孝  
 宮崎敏孝  
 井 関 芳 郎



# 装 備

森田 稻吉 郎

登山の目標であるアンナプルナⅡ峰は、標高7,937mを有する。そこで装備計画はまず8,000m峰の登山を前提として準備した。又、予定ルートである北東稜は、鋭い鋸の刃のような氷稜が5,000~7,000mにかけて続いており、技術的にきわめて困難が予想されるという点も加味して装備計画を立案した。登山は佐藤隊員の遭難死という結果に終わったが、その原因の一つとして装備の欠陥が指摘される。初歩的なミスから始まって、ヒマラヤの高所という特殊な条件を考慮した装備計画としてはいくつかの問題点を含んでいた。こうした反省に立って、装備計画の全搬にわたって述べることにする。

## I 装 備 報 告

### (1) 個人装備

#### (a) 羽 毛 服

羽毛服は東洋羽毛Ⅲに特注した。布地はユニチカのナイロンダイヤポールを使用し、表は黄色、裏は青色を用いた。羽毛量は、上衣はダブルで0.86kg、ズボンは七分にして0.14kgを入れた。羽毛は行動時の着用を考え、一般的な量しか入れなかったが、別に寒さは感じなかった。羽毛がガチョウの毛であるため、ダウンより大きいのと、布地のタテ糸が多いのと風合いについては、外国製のトレイアドメゾンに比べると少し劣るのは致し方なかった。

#### (b) 寝 袋

寝袋は羽毛服と同じ布地で、やはり東洋羽毛に特注した。羽毛量は保温を高めるために限界に近い1.8kgを入れた。従来、高所用としてはダブル形式が使われており、今回は思い切ってシングル形式を取り入れたが、保温性と取扱い易さの点で好評であった。チャックは金属性を取付けたが、滑りが悪かった。

#### (c) マットレス

材質として厚さ1cmの緩衝材用のウレタンを2枚重ねて接着した。ウレタンは吸湿性があるので樹脂加工した完全防水のナイロン・ハイフスポーツ地を被せて、ミシンをかけて自家製作した。サイズは長さ160cm、巾45cm、厚さ2cmとした。市販されているこの種のものに、発泡スチロールを使ったのがあるが、これに比較してウレタンマットは、①非常に柔軟である。(円形に巻きとることが出来る。)②かさ張らず携帯性が良い、など優れた点を持っている。尚、高所ではテントの底からの寒気が厳しく厚みをもう少し大きくすれば(2.5cm位)、より快適なものになるのではないかと。

### (2) 露営用具

#### (a) 夏用テント

夏用テントとして、ビニロン(うぐいす色)布地を使用し、細野テントに依頼して10人用家

型2張、4～5人用屋根型2張を作製してもらった。居住性を良くするために、合掌ポール式にし前後に入口を設け、チャックによる開閉が出来るように工夫した。このチャック式は内側から開ける場合、開けにくかったが、この点は改良する余地を感じた。防水性は縫い目に防水処理をしておいたので良かった。

なお、モンスーン期には、低地では蚊がうるさく寝苦しかったが、網を入口につけておくなり、カヤをつるなりすれば、より快適に過ごせると思う。

(b) フライシート

フライシートとしては、荷物用フライ(5×4.5m)2張、8人用ミード用フライ、1張、10人用、4～5人用夏天フライそれぞれ2張、合計で7張を用意した。B・Cでは、このフライシートを使って、隊員集会の石小屋(20人収容できる。)、キッチン兼食料倉庫用石小屋、荷物倉庫用石小屋、ローカルポーター用石小屋を、石を積み上げて、そこにシートを被せてそれぞれ造った。フライはビニロン帆布にアルミ蒸着をしたものを使用した。断熱性、耐水性、耐久性の点で良い結果が出た。

(c) 冬用テント

冬用テントとしては、次のものを細野テントに注文して製作した。布地は東レⅢより寄贈していただいた。ナイロンツイル230番を使った。

10人用カマボコ型テント	赤色	1張	
8人用ミード型テント	黄色	1張	
6人用ミード型テント	青色	3張	
4人用ミード型テント	赤色	4張	
2～3人用ヒマルチュリ型テント	赤色	2張	計11張

高所では、テントの居住性、保温性、耐久性に加えて、思考力と動作が鈍ってくるという特殊な条件下から簡単に設営できること、軽量であることなどあらゆる性能が要求される。今回は、信大山岳会が従来から使っている細野テントを若干の改良を加えて持参した。まず4人用ミード型とヒマルチュリ型はすべて外ポール、内張縫付けとした。また、プロパンガスを用いるので燃焼効果を高めるためとホースを通すために、直径15～20cmのベンチレーターを各テントの前後に、外から向かって左下側10cmのところ2つずつ開けた。又、設営条件の悪い場合を想定して、4人用ミード型、ヒマルチュリ型などの小型テントを6張用意し、2張ずつルーフで連結できるように設計した。なお、結果は良かったがもし改良するとすれば次の点があげられる。

(イ) 居住性の点から、日本の山で使うものより、サイズをやや大きくすること。

(ロ) 高所に於ける精神の安定を図るという点から、青系統の布地を用いること。

(ハ) 軽量化という点では、布地はほぼ重さと強度が比例する関係から、ポールの材質をジュラルミン等に改良すること。

(d) 照 明 用 具

照明用具としてローソク、ガソリン・ランプ、ボタンランプ、強力ライト、ヘッドランプの5種類を準備した。ローソクは日本でいう50匁位のを200本持参し、キャラバン及びB・C以上で使った。色は赤、青、黄、茶、緑の5色があり、すべてカトマンズにて購入した。染料の関係から茶色と緑色は不完全燃焼した。ガソリンランプは、昆虫採集用のもので、とても明るかったが、ノズルの故障が多く2台とも使用できなくなった。多少、暗くとも石油ランプの方が、故障がないこと、燃料の価格のことで良いと思う。

(3) 登 攀 用 具

(a) フィックスロープ

フィックスロープとしては9mmφ、白三つ撚りのものを赤染にして、3,600mを持参した。帝国産業の好意により廉価で譲っていただいた。ユマールを使うためと、8mmφは行程に流しにくいことなどから9mmφを持っていったが、強度や使い易さの点でも充分であった。なお、染料で後染をしたが、手で触れると多少、色が付着するのと、摩擦に弱くなるという欠点があった。今回使用したフィックスロープの使用量は下表の通りである。

<フィックスロープ使用量>

BC ( 3,5 0 0 m ) ~ C <sub>1</sub> ( 4,5 0 0 m )	2 6 0 m
C <sub>1</sub> ( 4,5 0 0 m ) ~ C <sub>2</sub> ( 5,2 0 0 m )	8 0 m
C <sub>2</sub> ( 5 2 0 0 m ) ~ C <sub>3</sub> ( 6,2 0 0 m )	8 0 0 m
C <sub>3</sub> ( 6,2 0 0 m ) ~ C <sub>4</sub> ( 6,6 0 0 m )	5 0 0 m
合 計 1,6 4 0 m	

(b) 縄 梯 子

縄梯子として、次の大小2種類を作った。大型の梯子パイプは長さ4m、材質17ST4アルミ合金、外径20mm、肉厚1.0mmの規格のを33cmに切断した。小型の梯子パイプは78S(スキー・ストック用)ジユラルミン、外径19mm肉厚0.83mmのを20cmに切断した。

組立ては1mに3本の本数で、31本のパイプで10mの長さの縄梯子を作製した。ロープは6mmナイロンクロス(併)ロープを用いて、14mの長さのを大型梯子では3本、小型梯子では2本使用した。登山行動では、残念ながら殆んど使用しなかった。B・Cにて組立て、大小30台用意した。

(c) アイス・ハーケン

当初は北東稜ということもあって、次の様に100本のアイス・ハーケンを用意した。

品 名	サイズ(長さ)	持 参 数	残 数
スクリュウ・ハーケン	1 6 0 mm	4 0 本	2 2 本
平型 ハーケン	2 0 0 mm	1 0 本	7 本
	2 5 0 mm	1 0 本	6 本

品名	サイズ(長さ)	持参数	残数
V型 ハーケン	200 mm	10本	6本
	250 mm	10本	7本
U型 //	200 mm	10本	4本
	250 mm	10本	5本

総数100本の内、約40本を使用、57本が残った。北東稜からルートが北西面に変更になり、氷壁が少なかったため、フィックスに多くはスノー・バーを使った。

(d) スノー・バー

長さ60 cmと80 cmの2種類を持参した。

長さ	材質	規格
800 mm	17ST4	20 mm 外径
		1 mm 肉厚
600 mm	78S	19 mm 外径
		0.9 mm 肉厚

リングには6番銑線を電気溶接した。結果は、80 cmのものが1本、60 cmのものが2本、計3本が破損してしまった。前者は雪面ズレによってナイフで切り取ったようにスッパリと切断されており、後者は強い圧力によってクシャクシャに壊されていた。破損の原因は材質の選定の誤りにあった。特に強度試験については、怠ってしまったが、事前に行なっておくべきであった。

(4) 酸素用具

酸素シリンダー28本を持参し、C<sub>3</sub>で3本、C<sub>4</sub>で1本睡眠用として使用した。レギュレーターは、他隊より譲り受けた4台の内、2台が不調であった。レギュレーターそのものが、性能が不安定で、新品でもかなり故障するらしく、中古品には慎重な準備が当然必要であった。

(5) 炊事用具

(a) プロパン・ガス

燃料はB・Cでは薪、高所ではすべてプロパン・ガスを使った。プロパンはすでにかんりの登山隊にて使用され、高所燃料としては、きわめて優れているが、消費量が予定よりオーバーしてしまい、登山期間を縮小せざるを得なくなり、遭難の背景となった。

持参したプロパンのデータは次の通りである。

シリンダーのタイプ	本数	ガス容量	ガス重量	充填ガス
アルミナム5 kg型	12本	11.7 l	5 kg	い号ガス
アルミナム2 kg型	39本	4.7 l	2 kg	い号ガス

プロパン・ガスの総重量は12本×5 kg=60 kg, 39本×2 kg=78 kg合計138 kgで、これは日本の冬山で一度テストして、それを基に1日1人の消費量を100 gとして、それに60

日間・23人を乗じて算出した。しかし、結果は1日1人の消費量が150gまでになり、その後節約して125gまでに落した。消費量については、他のデータを参照したが、レギュレーターとガスレンジの関係、高度による酸素分圧の低下による影響からか、消費量が25%~50%と大巾に増大してしまった。

次に今回充填したプロパン(い号ガス)は下表の通り、-40℃の低温下で着火し発熱量も高い上に、瞬間的に着火できるので、高所における燃料としては、最も優れていると思う。従来プロパンは鉄製の重いシリンダーが用いられていたが、最近中国工業で重さが鉄製の50%前後であるアルミ製が開発され、重量の点での難点がかなり改善され、高所用燃料として大きくクローズアップされてきた。

#### 登山用燃料の特性

燃料名	比重(kg/cm <sup>3</sup> )	蒸留温度 (10~90%℃)	沸点	高発熱量 (kcal/kg)	理論所要空気量		
					m <sup>3</sup> /kg	kg/kg	m <sup>3</sup> /m <sup>3</sup>
ガソリン	0.74	30~205℃	—	11,500	11.44	14.79	—
燈油	0.82	150~320℃	—	11,000	11.37	14.70	—
ブタン	2.06	—	-11.7	11,830	—	15.5	31.0
プロパン	1.56	—	-42.1	12,030	—	15.7	23.9
アルコール	0.79	64.4℃	-42.1	5,300	—	—	—

#### (b) ガス・レンジ及びその他の附属品

レンジについては、空気との接触する断面積の大きい3種類のスチール製のものを1テント1台として15台用意した。

レギュレーター(流量調節器)は噴出ガス量と圧力を大きく調整できる可変式の3kg型を使用した。酸素とプロパンの理論的混合比は1:24であり、地上に比べて酸素の量が1/3に近い高所では噴出ガス量を多くガス圧を低くしなければ不完全燃焼してしまう危険性があることを考慮して、レンジとレギュレーターを選んだ。

結果はきわめて快調で7,300mの高度でも十分に燃焼した。又、連結管(チェック・ホース)は4台用意して、シリンダーを2台連結して使用したがその効果については不明である。この連結管は充填器としても使用できるが、今回は充填には、使われなかった。又、ホースについて断熱効果のあるアルミ蒸着したアルミホースを用いた。

プロパンの船の輸送では、赤道及び気温の高いインド内を通過するので、振動によってバルブがゆるみ、ガスが漏れることを防止するために、バルブのハンドルを取りネジを強く締めつけておいた。

## Ⅱ シェルパ装備について

シェルパに供与すべき装備については、ヒマラヤン・ソサィティのレギュレーションによって定められている。今回は、それに準じて下表のように支給した。

品 名	規則による数	私達が支給した数
1. ウールシャツ	1	1
2. ウールパンツ	1	1
3. ウールアンダーシャツ	1	1
4. ストッキング	2	1
5. ウール靴下	6	4
6. ウール帽子	複 数	2
7. ミトン	1	2
8. 大型ザック	1	1
9. 羽毛服(上)	1	1
10. " (下)	1	1
11. ズボン	1	1
12. マットレス	1	1
13. 寝 袋	1	1
14. 羽毛手袋	1	—
15. セーター(厚手)	1	1
16. クランポン	1	1
17. パンツ	1	2
18. アイス アックス	1	1

### 規則以外に支給した装備

サングラス	1	サインペン	1
スカーフ	1	メモノート	1
半袖シャツ	1	石けん	1
ベルト	1	ポリエチレン・タンク	1
オーバーシューズ	1	ゴーグル	1
ロング・スパッツ	1	オーバー・ミトン	1
安全ベルト	1	運 動 靴	1
ヘッドランプ	1	整 理 袋(内)	1
ポンチョ	1	整 理 袋(外)	1
ナイフ	1	ホーロー・カップ	1

今回、私達が支給した装備については原則的には、ほぼ隊員のものと同品質を差別しなかった。寝袋も3万5千円程する高価なものであったが、同じものを思い切って支給した。しかし、支給した装備について、サダーからクレームがつけられた。サダーの個人プレーか、それとも他のシェルパへのデモンストレーションとも受け取れるが、隊員とシェルパの間に、まずい空気が流れた。まず、ザックについては、その替りとして今回は、背負子と袋を与えたが、ザックを要求され、止むを得ず隊員個人のもので供出した。又、キッチン・ボーイには半袖シャツ(麻)を支給したが、シェルパからも要求され、これもザックと同じく隊員のもので予備を合わせて供出した。それに細いことだが、羽毛服の色のオレンジ色が、ラマ僧の僧衣と同じということで嫌われたが、この点については私達も気がつかなかった。シェルパは生活がきびしく貧しいせいも、隊員のもっている物をほしがれる傾向にあったが、こうしたシェルパの要求には、出来るかぎり答えてきた。

### Ⅲ 装 備 の 反 省

(1) 今回の装備計画は担当者が海外登山には未経験であり、いくつかの点では創意工夫したが、過去の登山隊の教訓を十分に生かせなかったし、いくつかの使いにくい装備もありチグハグな面があった。

特に、日本の山で使用した経験の全くない、またはあまりない装備については、事前に十分な検討とテストを行ってから持参すべきであった。たとえば、酸素器具については、少なくとも今までの信大の山登りでは全く未知のものであり、短期間に勉強したが、その特性のすべてにわたっての理解が不足していた。こうした一つのきさいなことが、ヒマラヤの高所では大きな弱点となって来ることを思い知らされた。ヒマラヤ登山は人間の生命活動の限界との斗いであり、そこには必要にして十分な条件がすべて満たされなければならないところにその難しさがあることを体験をもって痛感させられた。少なくとも今回の装備計画では、一つ一つの装備についての知識がかけていた。それに、装備を単なる道具として考えていたところに最大の弱点があったと思う。思想性ともいうべきか、衣服は体の表面を保護し、ゼルブストは内臓を保護していくのだというきびしいとらえ方がなければならないと思った。

(2) シェルパ装備の項でシェルパとのトラブルがあったことを触れたが、シェルパの要求については、ほぼ全面的に認めてきた。こうしたトラブルは多くの隊であったことが報告されてきているが、私達としてはその処置の仕方は正しかったと考える。登山を成功させるためにはチームワークが大切な要素であることは云うまでもない。今回の登山の目的には、頂上もその一つであったが、私達には隊としても個人としても多くの目的があった。シェルパはズルイとか、贅沢になり何んでも欲しがると、ナメられてはいけないという考え方はしたくなかった。遠征はもうすでに終わったが、11人の仲間と苦労して登った日々の語らいや、シェルパを含む多くのネパール人との思い出が強い印象として残っている。

№	品名	規格	数量	単重量	隊員	リエバン	サダー	シエル	パコック	キッチンボーイ	メールランナー	予備
56	整理袋(A)	ビニロン大	28	350 <sup>g</sup>	11	1	1	9	1	3	2	
57	整理袋(B)	ナイロン中	37	210	22	1	1	9	1	3		
58	整理袋(C)	ナイロン小	22	50	22							
⑤9	ゴムゾーリ	ビーチサンダル	12	220	11	1						
60	高所帽	化せん綿 キルティング	12	70	11		1					

(2) 露 営 用 具

№	品名	規格	数量	単重量 <sup>g</sup>	備 考
1	夏用テント	10人用家型	2	23,000	ビニロンホプリン#8100、ウグイス色、アルミ蒸着フライ付合掌式ポール(3ヶ所)、チャック前後開閉
2	夏用テント	4~5人用家型	2	12,200	“ “ “ “
③	冬用テント	10人用 カマボコ型	1	19,000	ナイロンツイル、赤色 ナイロン内張
④	冬用テント	8人用ミード型	1	12,500	ナイロンツイル 黄色 外ポール、アルミ蒸着フライ付、ナイロン内張
⑤	冬用テント	6人用ミード型	3	11,500	ナイロンツイル 青色 外ポール、ナイロン内張
⑥	冬用テント	4人用ミード型	4	8,000	ナイロンツイル 赤色 外ポール、ナイロン内張は縫付、ルーフ付
⑦	冬用テント	2人用 ヒマリチュリ型	4	5,500	ナイロンツイル 赤色 ナイロン内張は縫付、ルーフ付
8	フライシート	5×4.5m	2	4,000	荷物用
⑨	スコップ	農業用小型	3	1,100	
⑩	のこぎり	氷用	4	300	
⑪	スノーブラシ		11	50	
12	ツェルト	2~3人用	3	650	ナイロン 黄色
13	ローソク		200	25	カトマンズで購入
14	ガスランプ		1	1,500	
15	ボタンカートリッジ		22	500	
16	ククリ		3	1,900	カトマンズで購入
17	テントペグ	冬用 20~30cm	200	60	
18	ガロンランプ		2		
19	ガロンタンク	10ℓ ポリタンク	2	600	
20	ガソリン		20ℓ	750	
21	ボタンコンロ		2	800	

№	品名	規格	数量	単重量(ℓ)	備考
22	スベア テントポール	10人用夏天	1セット	1.900	
23	スベア テントポール	4人用ミード	1セット	1.300	
24	スベア テントポール	6人用ミード 8人用ミード	1セット	1.300	
25	フレームスベア	ミード型用	2	1.200	
26	フレームスベア	カマボコ型用	1	600	
27	フレームスベア	ヒマリチュリ型用	2	1.200	
28	スベア テントポール	5人用家型	1セット	1.600	

### (3) 登攀用具

№	品名	規格	数量	単重量(ℓ)	備考
1	アイスバイル	門田製	4	750	
2	ロックハーケン	タテ15 ヨコ15 兼用20	50	100	
3	アイスハーケン	スクリュー 16cm	40	110	
4	アイスハーケン	V型 2.0cm 2.5cm	20	150	
5	アイスハーケン	U型 2.0cm 2.5cm	20	150	
6	アイスハーケン	平型 2.0cm 2.5cm	20	150	
7	スノーバー	80cm 60cm パイプ型	100	200(80cm) 110(60cm)	
8	カラビナ	カシン 内安全カン付 35コ	100	80	
9	ザイル	10 <sup>m</sup> / <sub>m</sub> 40m ナイロン 登攀用	4	2.000	
10	ザイル	11 <sup>m</sup> / <sub>m</sub> 40m ナイロン 登攀用	6	2.500	
⑪	フィックス ロープ	9 <sup>m</sup> / <sub>m</sub> ナイロン	3.600m	9.300/200m	
12	すて縄	6 <sup>m</sup> / <sub>m</sub> クレモナ	200m	430/10m	
13	テープロープ	ナイロン	40m	1.300/40m	
14	アイスハンマー	カシン	5	610	
15	ロックハンマー		2	1.000	

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
①6	赤旗	ナイロン	100	5	
17	竹ポール		113	130	現地調達
18	わかんじき		3	1050	
19	なわ梯子	8 <sup>m</sup> / <sub>m</sub> × 10 <sup>m</sup>	30	1700	
20	あぶみ	3段	6	170	
21	ストック	スキー用竹製	5対	1000	
22	滑車	内滑止め式2	4	滑り止式450 普通型250	
23	ユマール		4セット	300	
24	アイスピック		5	250	
25	ヘルメット	カシン	6	480	
26	ヘルシールド		20	30	
27	エクспанションボルト		10	90	
28	ボルト錐		5	60	
29	ホルダー		3	300	
30	ボルト用エゼクター		5	10	
31	ハーケンホルダー		4	110	
32	ラダー	(2m) 1 (5m) 1 ジュラルミン	2	(小)6.000 (大)9.000	

#### (4) 酸素用具

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
1	O <sub>2</sub> シリンダー	川崎重工製	28	6000	
2	O <sub>2</sub> レギュレータ	フランス製	4	600	
3	O <sub>2</sub> マスク	フランス製	4	800	
4	O <sub>2</sub> マスク	JAL	5	100	スリーブ用
5	不凍液	マスク用	200cc	50	
6	シリンダースパナ		2	90	
7	エコノマイザー	予備	4	250	
8	マスクゴム管		5	10	

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
9	ゴムパッキン		1	2	
10	シリンダーわく		4 set	1.100	

⑤ 炊事用具

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
1	プロパンボンベ	2 kg型	39	4,000	シリンダー・ガス共
2	プロパンボンベ	5 kg型	12	9,500	"
3	ゴムホース	アルミ加工	100 m	130/m	
4	ガスレンジ		15	1,000	
5	ガスレギュレータ	可変式3 kg型	15	1,000	
6	チェックホース		4	600	
7	ホースバンド		30	20	
8	ミツ又		5	70	
⑨	マツチ	大箱	25	300	
⑩	ドンブリ	プラスチック	60	160	
⑪	はし	プラスチック	60	80	
⑫	スプーン		30	20	
⑬	フォーク		30	20	
14	コップア	大 5~6人用	4	1,300	
15	コップア	中 4人用	2	950	
16	バケツト	ポリ製	3	400	
17	バケツト	布製	5	300	
18	なべ	特大ネパール製	3	2,000	
19	なべ	大	2	1,500	
20	なべ	中	2	770	
21	高圧釜		2	3,800	
⑳	蒸器		2	2,500	
23	やかん	大	3	350	
㉑	おぼん		3	180	

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
25	包丁		4	900	
26	おたま		6	100	
(27)	ふきん		1	35	
(28)	フライパン		2	750	
29	フライ返し		3	90	
30	しゃもじ		8	100	
31	おろし金		3	50	
32	こね棒		2	60	
33	ボール	大 プラスチック製	5	250	
(34)	ザル	大 プラスチック製	2	120	
35	ポリタンク	20ℓ用	2	1.500	
36	プレート	大小	5	150	
(37)	テルモス		5	620	
(38)	ライポンF		20	450	
(39)	クレンザー	大袋	2	2.500	
(40)	カン切		20	25	
(41)	金なみ		2	40	

(6) 通信器機

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
(1)	トランシーバー	500mw	4	1.000	
(2)	トランシーバー	100mw	4	600	
(3)	トランシーバー用電池	AM-3	320	15	
(4)	トランシーバーケース	化せん綿 キルティング	8	40	

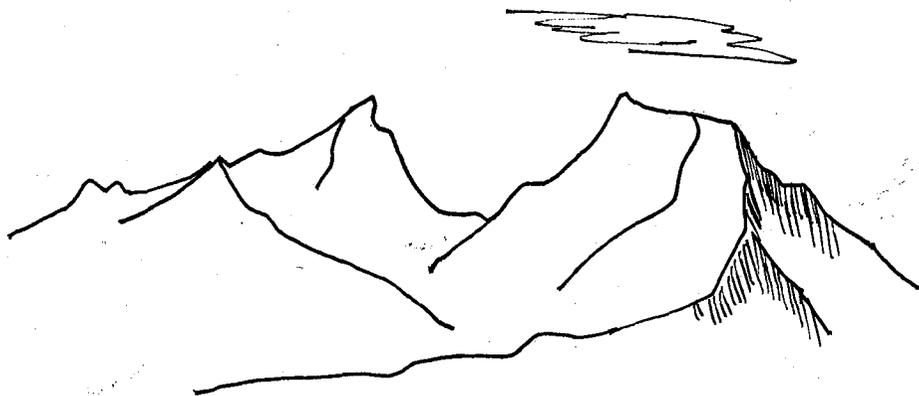
(7) その他

№	品名	規格	数量	単重量(g)	備考
(1)	テープコーダー	カセット式	1	4.700	
(2)	カセットテープ	120分	10	50	

№	品名	規格	数量	単重量(φ)	備考
③	トランジスタラジオ	8石 2バンド	2	1.200	
④	トランジスタ用電池	UM-2	25	35	
⑤	強力ライト	電池6本入り	2	650	
⑥	ライト用電池	UM-1	160	100	
⑦	テープ用電池	UM-1	40	100	
8	双眼鏡		1	650	
9	高度計	エベレスト 9000m用	2	80	
10	爪切り		1		
⑪	目覚時計		5	160	
⑫	モンキーレンチ		3	290	
⑬	チリ紙		100	300	
14	はさみ		1	150	
⑮	針金		30m	25/m	
⑯	かなずち		2	370	
⑰	ドライバーセット		1	250	
⑱	ニッパー		1	90	
19	バール		1		
⑳	ペンチ		2	250	
㉑	バネ秤	(30kg) 1 (50kg) 1	2	420 1.400	
㉒	番号ふだ		150	7	
23	ガムテープ		10	1.000	
24	理髪用具		1set	550	
25	鏡		1	110	
26	裁縫用具		1	500	
㉓	ホイッスル		12	10	
28	整理袋	大 ビニロン	5	350	
29	〃	中 ナイロン	9	210	
30	〃	小 ナイロン	4	50	
31	サラシ		1	500	

№	品名	規格	数量	単重量(θ)	備考
③2	金切ばさみ		1	260	
③3	ポリエチレン袋		8	400	
34	ワンダラー電池		240	110	
35	ポーター用雨具	ビニール	160枚		2×1.5 m
36	ネパール国旗		2	100	
③7	グレンザー	大箱	10	1000	
38	PPバンド		300m		
39	PPストッパー		300		

- ③番号……印は寄贈された又は寄贈されたものを加工した品目をさす。



マナスルと P.29

T.M

# 食糧

## 1 基本方針

山下 泰弘

ヒマラヤのような異常な環境下では特に、日ごろ食べ慣れているもの、食べやすいものを欲するようになる。したがって、日本人の食生活の要である米を中心に、市販されわれわれの口に慣れているものを携行し、ヒマラヤ特別食は用意しなかった。

日本からカルカッタまでは船舶、カルカッタからポカラまではトラック輸送にするので、このような運搬にも耐え破損しない包装のもの、また熱帯での高温多湿な条件に長期間接しても保存が良く変質しないことが必要であった。

軽量かつ調理が容易である点を考え、特に最近著しく発達したインスタント食品を積極的に取り入れた。

当初の計画では登山日数を60日、キャンプ数もC<sub>6</sub>まで予定した。そこで、キャラバン食、B・C食、中間食(C<sub>1</sub>~C<sub>4</sub>)、高所食(C<sub>5</sub>、C<sub>6</sub>)、学術調査隊用食糧とに分けて計画に当たった。C<sub>5</sub>の延食数は60日人食、C<sub>6</sub>は18日人食とした。しかし現地での偵察後のルート変更に伴い登山日数を40日に短縮し、さらに実際にはC<sub>6</sub>がファイナルキャンプとなった。したがって食糧計画にも変化をきたし、高所食の一部を中間キャンプで、中間食の一部をB・Cで消費した。C<sub>4</sub>には56日人食、C<sub>5</sub>には20日人食荷上げした。

総重量は約1.9トンであった。

## 2 キャラバン食

現地調達食糧を中心にし、調味料、嗜好品を日本から携行した。朝食は現地米やチャパティなどの現地食と、日本からの麺類を用意した。チャパティは日本製の小麦粉と現地購入の小麦粉アタ(フスマ入り)、マイタ(上質)で作ったが、日本製の小麦粉は粘着力が強過ぎて練るとき大変であるし、冷えると堅くなる欠点がある。味も現地の方が良いようである。

本隊の昼食は弁当にする機会が多かったが、先発隊は小人数であったので、キッチン・ボーイを先に歩かし適当な場所で昼食を作らせた。こうすると、あたたかくて変化のある食事が取れる。途中にある茶屋でチャ(ミルクティ)を飲み、バタ(ダイズ)、マッカイ(トウモロコシ)の炒ったものを食べながら、現地の人と話をするのもキャラバンを楽しくする。

夕食は必ず米にし、うち2日に1度は $\alpha$ 米とした。これは、現地米はいわゆる外米臭くパサパサし石も多くてまずいとのことを配慮しての計画であったが、実際には逆に現地米の方が好評であった。カトマンズで購入した上質米であったせいもあるが、良いものさえ選べば現地米もそうひどくはないということである。カトマンズでは細長いインディカ型の米も、日本米のようにまるいジャポニカ型の米も手

に入る。米のバサバサする原因には品種、貯蔵方法などいろいろ考えられるが、シェルパによる米の炊き方にもよるようである。彼らは習慣として、米を仕掛け沸騰しだすときどき蓋を取り掻き交ぜ、でき上がる前に余分な湯を捨ててしまってから蒸すのである。したがって、事前に水の量や炊き方を十分指導しておく、われわれの口にあった御飯を食べることができる。

奥地に入るにしたがって米、ニワトリなどは高価になり、他の食糧と同様量少くなる。登山前の体調を整えるために栄養価の高いものと思いつつも、なかなか思いどおりにはならず日本から携行した食糧に頼らざるを得なかった。キャラバン中に体力を消耗するのは馬鹿気ているので、高度も低く体調も十分なときに積極的に栄養を取っておいた方がよい。

帰りのキャラバンも行きと同様現地食糧の入手は悪かったが、余った登山用食糧を使用することができた。

### 3 B・C 食

B・C食としては、高所で疲れた隊員の休養キャンプとして性格上、高所では作れないような献立ができるよう考慮、準備した。しかしシェルパまかせだと、いきおい彼らの良く知っている得意な料理に片寄りがちになる。よく知らない料理より自信のあるものを作っておいしく食べてもらおうとする彼らの気持は嬉しいが、同じ献立が続くと飽がきてしまう。さいわい隊員の協力により異国の地に居ることを忘れるような日本料理をときどき口にすることができた。

朝食は米を中心にときどき麺類、夕食はほとんど米にし、行動時の昼食はチャパティに蜂蜜、バター、ジャム類をつけて食べた。

近くにあるピサン村からアル(ジャガイモ)、パパール(そば粉)チャン(どぶろく)、ロキシー(焼酎)だけはいつでも補充することができたが、野菜は全く手に入らずポカラから運んできたタマネギ、ニンニクなど貯蔵のきくものに頼るしか手がなかった。青野菜は特に少しあるだけでも気分的にかなり違うので、成長の速い二十日大根のような種子を用意してでも色を添えたかった。空缶の鉢に植えておいたタマネギが芽を出し、帰途につく頃は30cmくらいまで成長していたが、数が少なく、もったいなくてとうとう誰の口にも入らずに終わった。テントの周囲にたくさんでたフキノトウは絶好の野菜でミソアエにして隊員を喜ばすことができた。ニワトリは手に入らなかったが、ヤギ、ゴブキョ(ヤクとウシの交雑種)を購入することができた。

シェルパは緑茶は好まず、習慣としてミルクティを好みその需要も驚くほどで、結局紅茶とミルクが不足し、マイル・ランナーにポカラで買ってきてもらった。紅茶、ミルク、砂糖はかなり多量に用意した方がよい。

### 4 中 間 食

朝食はα米とみそ汁、夕食はα米とスープ類を中心にしたが、シェルパにまかせると雑炊にする機会が多かった。A・B・CとなったC<sub>2</sub>は、交替で上ったキッチン・ボーイが腕を奮ってくれた。α米の

御飯は上部キャンプで臭いが少し気になったが、ふりかけ、味海苔、お茶漬の素などを使うとそれ程気にならず食欲も増した。

昼食は甘味の強いビスケットは敬遠され、単白な味のカンパン、ウェフアーが好まれた。特にシェルパには甘いものは不評で、彼らの好むものを選ばせて荷上げすることになった。シェルパを伴うヒマラヤ登山では、彼らも隊の一員であり重要な戦力なので、彼らの食生活や好みも考慮した食糧計画が必要である。果実缶、特に白桃缶は圧倒的に好まれた。おやつとしてはラーメン、そばがき、ツァンパ（麦こがし）などを作って食べた。

シェルパのトウガラシの使用量はかなり多く、食べると高度順化が良いと信じているようである。B・Cでトウガラシとニンニクやショウガを潰して交ぜ合せたものを作って上げ、中には家から特別製の香辛料を個人で持ってくる者も居た。トウガラシなどの香辛料を使うと食欲が増すのは事実であり、隊員もかなりの量を使用した。

飲料としては紅茶、緑茶、昆布茶、コーヒー、ココア、ミルク、ミルクセーキ、ジュースを用意した。高度順化を良くする目的で、隊員は1人1日1ℓ以上の水を摂取するよう指示したが、紅茶、ミルク以外は十分であった。

サラミソーセージは好評でC<sub>4</sub>まで上げ昼食として食べたが、ベーコンは臭いが気になった。上部キャンプへはヤギやゾプキョの生肉も上げた。酸素の少ない高所に於ては、エネルギー供給時の燃焼に糖質より酸素を多く要する脂質はあまり取らない方が有利とされていた。しかしその後、脂質の摂取の有利点も指摘された。京大サルトロ・カンリ報告書によると、ぶどう糖もグリコーゲンも、直接食べた糖質から変化してできるだけでなく、蛋白質の一部からも、脂質の構成成分であるグリセリンからもつくられる。したがって間欠的に力を出すときには、体内のグリコーゲン貯蓄が回復できるので、脂質食でもよく運動を続けることができる。さらに脂質だけでは完全燃焼しないし、脂質だけがたくさん燃焼する時は疲労しやすい原因といわれるアセトン体が肝臓にできたりするが、脂質と一緒に糖質が燃えていれば、こうゆう不快な現象は起らないというのである。従来の日本人の食生活では脂質の摂取量が少なく慣れていないため、食べても十分消化吸収されるかが懸念された。しかし脂質の摂取量も多くなった最近の食生活を考えると問題はない。その上、高エネルギー源なので食物の容積が減り、さらに胃の負担をも軽くする点を考えると、これからのヒマラヤ登山での脂質の摂取も考える必要がある。また長期間の仕事が必要とする登山の場合、腹持ちが良い点も見のがしてはならない。

中間食の半分を完全レーション・システムにし、嗜好品、香辛料、調味料を入れたスペシャル・ボックスを各キャンプ配置にした。レーションしたダンボールは3人×5日分の食糧で約17kgであった。レーションしたのものには同じ献立が重ならないよう、また朝、昼、夕食の組合せにも配慮した。各キャンプには完全レーションしたものとししないものとを予定していたが、実際にはレーションしてない中間食のほとんどを消費量が多いC<sub>2</sub>（A・B・C）に上げ、他のキャンプはレーションしたものになってしまった。完全レーションすると、現地での繁雑さは省くことができるが融通性に欠ける。このような点を考え、登山計画に合った最適の方法を工夫すべきである。今回のわれわれの反省では、少しレショ

んに凝り過ぎたのではないかと指摘があった。

## 5 高 所 食

とにかく咽を通しやすいという点を考慮して計画し、最終的にC。用食糧は予定した高所食の中からキャンプ入りする隊員に好みのものを選んでもらい荷上げた。

主として選んだものは、果実缶が多かった。行動中の昼食では、これしか咽を通らなかったからである。あとごく少量のビスケット、チーズ、チョコレート、そしてウエファーを食べただけだった。高所で、これだけの昼食では激しいアルバイトのエネルギー補給はできないので、夕食は、肉、魚などの缶詰を食べた。α米と一諸に、雑炊にして食べるが多かった。ホワイトミートや焼肉類は美味であった。サケ缶なども食べやすく有効である。ラーメンが欲しかったが、だいたいにおいて、今回の計画でよかったとの反省である。α米はどうしても臭いが抜けず、中間キャンプよりも食べるときに鼻につきやりにくいときが多かった。アタックメンバーが好きなものを選別して荷上げする方法は、手数はかかるが実に良い方法である。

## 6 学 術 調 査 隊 用 食 糧

タバコ、若干の調味料、嗜好品以外は現地調達食糧でまかなった。カトマンズでは中国やインド製の加工食品をはじめかなりの食糧が手に入る。野菜は春、秋には豊富だが、モンスーン期間は少ない。調査はポカラを中心に行動したため、奥地で入手不可能な食糧はポカラで購入した。ここではニワトリをはじめ、バンシー（水牛）、カシ（ヤギ）の肉は簡単に手に入り、また近くの湖で取れる魚（コイ、フナ類）も、朝早く飛行場前のバザール（市場）に行けば売りに来ている。

登山終了に引き続いての、また生活条件の悪いモンスーン期での生活で隊員に食欲の減退や体力の衰えが見え始めたため、日本式の料理を作るようになった。ネパール人の食生活と日本人のそれとは根本的にそれ程差はなく、現地の材料でも工夫すれば結構日本的な食事が取れた。

テントは使用せず茶屋に泊ったが、薪を使って1人1日1～2Rsである。茶屋ではタルカリ（カレー煮）とバト（御飯）を2Rsくらいで食べることができ、そうすると宿泊は無料とのことで、現地の旅行者が利用している。茶屋にはカシの干肉などもあり、肉類には全く不自由しなかった。野菜はモンスーン期はないが、秋になると奥地でも手に入るようになる。9月に行ったカリ・ガンダキ上流にあるトウクチェ村では、アルー（桃）を食べることができ、また日本で栽培されているものと同程度の大きさのキャベツやダイコンがあり驚かされた。遠征隊の残したものであろうか。秋はマンゴーをはじめ日本ではお目にかかれない果実やナシパティ（ナシ）など日本にもある果実が出まわり、果実の豊富になる季節でもある。

チャンはツァモル（米）、コト（シコクピエ）、ウワ（小麦）から作られ、高地の冷涼な場所のものが美味である。暖い季節には保存の悪いツァモル・コ・チャン（米のチャン）は少なくなり、コト・コ・チャンだけになる。チャンを蒸留したものがロキシーで、これにはマツカイ（トウモロコシ）のもの

もある。ネパール製のウイスキーや、日本製やスウェーデン製の缶ビールもあり、アルコール類は不自由なく手に入れることができる。現地の生活にも慣れ、余裕のある旅であった。

## 7 おわりに

食糧計画と実際を全般的に顧みて、問題となるのは昼食である。予定した以上に、高所では甘さが気になり、ビスケット、ジャム類の甘いものは不評で敬遠された。昼食となるとどうしても甘いものになりがちであるが、単白の味の方が好まれる。われわれの山岳会が研究し、現在日本の山で使用しているカンパンを、包装をしっかりとものに改良して携行してもよかった。さらに、ポテトチップ、チュラ（米を蒸して平にしたもの）など現地食糧の利用も考えられる。またベビー食を好む者から、果実缶をみただけでもジンマシンが出る者まで、年齢や個人差で好みも異ってくる。したがって、事前に各隊員の好みや希望も調査しておく必要があると感じた。昼食については、特にこれからの研究が必要な課題の1つである。今回、研究がもう1つ足りなかった点を深く反省している。

各キャンプ（高度）での食欲・体調はどうであったか、などを含めた体調日誌が毎日各隊員によって記録された。その結果は医療係の方でとりまとめられることになっており、後日報告されることになっているのでここではふれないでおく。

携行食糧は市販されているものがほとんどであったが、全く変質していず使用可能であった。ベーコンは信州ハム(株)に依頼し保存のきくよう特別加工、真空包装にさせていただいたが、若干変質していたものがあつた程度でそのほとんどが変質していず登山中の肉類供給源となった。

最後に、食糧準備にあたり各方面各位から多大な御援助、御協力を賜わり、ここに厚く御礼申し上げます。



ビマルチュリ

T.M

# 主 食

食 品 名	キャラバン	B C	中 間	高 所	調 査	総 数	単 重 (g)
α 米	26×2	132	1.495	156	181	2016	160
鶏 飯 //			50			50	115
チャーハン //			50			50	110
しいたけ飯 //			100			100	115
まぐろライス (缶)	5	10				15	375
赤 飯 //	5	10				15	375
“	10	14				24	400
五 目 飯 //	5	10				15	375
“	10	14				24	410
チャーハン //		3				3	375
ラ ー メ ン	52×2	162	142			408	90
信 州 そ ば		20				20	250
インスタント //	52×2	108	30			242	100
マ カ ロ ニ		15				15	300
ス パ ゲ テ ィ		15				15	300
う ど ん		20			20	40	250
そ う め ん		20				20	250
も ち		5				5	700
小 麦 粉	8	30			10	48	2000
ホットケーキの素	10	10				20	430
ク ラ ッ カ ー			51	9		60	120
“			41			41	100
ク リ ー ム //			59	1		60	130
チ ー ズ //			35	15		50	90
ビ ス ケ ッ ト			19	11		30	230
“			30			30	280
“			26	4		30	240
“			39	9		48	150
チョコエファー			27	3		30	200
ク リ ー ム //			20	10		30	200
カ ン パ ン			78			78	250
“			19			19	200

缶詰肉類 佃煮 漬物類

食品名	キャラバン	B C	中間	高所	調査	総数	単重(㊦)
白桃(4号)	4		77	15		96	425
“(5号)			48			48	312
黄桃		4	20			24	425
洋梨		4	20			24	425
みかん(4号)		4	53	15		72	425
“(5号)			48			48	312
びわ			24			24	425
フルーツポンチ		4	2	18		24	425
さば水煮			58	10		68	220
まぐろ大和煮			29	1		30	220
まぐろフレーク			24			24	190
須の子フレーク			50			50	170
焼肉			49	1		50	170
ホワイトミート			19	5		24	200
いわし		24				24	400
あさり燻製漬		12				12	100
赤貝串焼		12				12	100
さけ			19	1		20	220
蜂の子		12				12	100
ベーコン	10	100	55			165	250
サラミソーセージ		40	20			60	200
“(1号)	20		160			180	100
“(2号)		25				25	80
しめじ茶漬		2	16	2		20	200
木耳茶漬	1	2	15	2		20	200
木耳三杯漬		2	16	2		20	200
味茸のり		2	16	2		20	200
なめ茸茶漬	2	2	14	2		20	380
なめ茸		1				1	3000
しその実		4	17	14		35	100
小梅	5	24	14	14		57	30
山菜みそ漬			10			10	400
海苔佃煮		10				10	135
“(1号)		7				7	120
しいたけ海苔		8				8	150

## 菓子 ドレッシング 乾燥食品

品名	キャラバン	B C	中間	高所	調査	総数	単重(㊦)
チョコレート	8	28	50	42		120	90
〃		15	129			144	40
〃		30	23			59	80
キャラメル		28	194	18		240	70
ガム	100×2	320	275	30	40	865	20
キャンデー			80	12		92	20
あられ(5色)	4	20	4	2		30	160
〃 (欧風)	1	20	8	2		30	160
ピーナツ		10	10			20	150
レーズン		10	20			30	350
〃		20	20			40	300
浅田アメ			12	6		18	75
〃		4	2			6	189
〃		3		2		5	275
リンゴジャム		17	17	2		36	140
イチゴ〃	25	29	72	13		139	140
ママレード	13	10	36	2		61	140
〃		7				7	280
ピーナツチョコ		10	33	7		50	120
ピーナツクリーム	3	24	20	18		65	120
ソフトチョコ	12					12	240
蜂蜜つ			18	2		20	250
〃		10				10	500
〃			10	2		12	450
チーズ	5		77	18		100	225
〃		96	285			381	25
バター	10	10	20		10	50	200
ねぎ			34	6		40	12
ほうれん草			34	6		40	12
人参			34	6		40	20
ごぼう			34	6		40	18
全卵			24	6		30	40

調 味 香 辛 料

品 名	キャラバン	B C	中 間	高 所	調 査	総 数	単 重 (g)
み そ	1	23				24	1000
粉 末 み そ		40	80		3	123	50
〃			36	6	1	43	70
〃	5	5	10			20	140
し ょ う 油	5	26	8		2	36	500
粉 末 〃			29	1		30	60
ケ チ ャ ッ プ	2	19	8	1		30	500
マ ヨ ネ ー ズ	10	18	20	2		50	100
〃		30	10			40	150
ソ ー ス	2	5	10		10	27	500
と ん か つ 〃		5	10		15	30	330
ミ ー ト 〃	5	19	10		14	48	850
〃		1				1	3000
砂 糖	10×2	72	80	8	40	220	1000
食 塩	3	11	10	1	5	30	620
ア ジ シ オ	1	1	4	2	2	10	60
〃	1	10	8	2	2	23	100
味 の 素		1	4			5	130
〃		5	4		4	11	500
ハ イ ミ ー		1	4	2		7	80
〃	2	5	8	1	2	18	100
天 ぶ ら 油		2			2	4	825
サ ラ ダ 油	2	4	4			10	450
粉 わ さ び	2	20	8			30	5
七 味 唐 が ら し	1	4	4	1		10	100
ガーリックパウダー	1	10	12	1		24	20
こ し ょ う		1	1			2	375
お 吸 い も の				8		8	70
赤 だ し		2		10		12	70
と ろ ろ 汁		6		7		13	70
コンソメスープ		5	12	1	6	24	70
〃		2	5	1	6	14	170
コーンクリーム	4	20	30	3	10	67	73
トマトクリーム			5	3		8	86
ポ タ ー ジ ュ	4	15	30	3	3	51	66
ビーフクリーム	4	10	35	3		48	73
野 菜 ス ー プ	4	8	35	3		46	37

調味香辛料 乾物

品名	キャラバン	B C	中間	高所	調査	総数	単重(㍊)
シチュエー	4	5	35	1		41	126
カレー	8	34	60	2	8	104	130
〃		1				1	1.000
ドライカレー		16	30	1		47	42
ハヤシ	4	19	35	1		55	130
ホワイトルウ		1				1	1.000
五目釜めし		15	30	1		46	37
チキンクリーム			5		6	11	68
すしの子		20				20	75
食酢		1				1	1.600
凍豆腐	10	20	20		10	60	200
昆布	3					3	45
とろろ昆布		2	17	1		20	55
納豆昆布		3	1			4	50
おぼろ昆布		20	10			30	12
たら昆布		4	26	5		35	150
干たら	4	11	16	4		35	200
海苔		1				1	1.400
味付海苔		2	1			3	2.000
わがめ	1	6	30	3		40	45
食ふ		12	28			40	60
花かつお		8	61	6		75	30
さきいか	19	20	20			59	40
かんびょう		2				2	200
ずいき		2				2	20
干しいたけ		17	31	12		50	50
干いも		20				20	200
切干大根		1				1	1.000
ひじき		1				1	30
はるさめ		12	8			20	120
ビーフン		8				8	150
ふりかけ(たらこ)		7	20	3		30	80
(のりたま)		15	35	8	2	60	30
(のりごま)		15	43	2		60	32
(すきやき)		5	30	5		40	43
のり茶漬	18	20	20	42		100	28

飲料 アルコール タバコ

食品名	キャラバン	B C	中間	高所	調査	総数	単重(%)
緑茶	1	5	20	6		32	140
〃	10	35				45	130
ぎょくろ		1				1	80
まっ茶		2				2	30
昆布茶		3				3	100
紅茶			24			24	100
〃	10	15		11		36	50
コーヒー	2	4	4		2	12	250
ココア	1	4	4		2	11	450
クリームパウダー	10	20	20	6	4	60	180
〃		30	40			70	80
粉乳		5	4			9	500
〃		5	12			17	200
コンデンスミルク		10	60	18		88	379
粉末ジュース	5	5	10			20	450
ミルクセーキ		10	20			30	272
清酒		30				30	300
〃		60				60	180
缶ビール		50				50	350
ハイライト	260	200	280		500	1800	25
ピース	50		100			150	25
ホープ			100			100	25



[ 現地購入食糧リスト ]

カトマンズ購入食糧

品名	現地名	数量	金額 Rs	備考
米(ジャポニカ型)	zamal	100 kg	350.00	上質価格に巾がある
(インデイカ型)	"	100 "	350.00	"
ア タ	ata	100 "	350.00	小麦粉フスマ入り
マ イ タ	maita	100 "	500.00	上質 小麦粉 インド製
ダ ル	dal	40 "	160.00	豆でスープにする
ツ ァ ン パ	zhampa	25 P	150.00	麦がし
チ リ ソ ー ス		10 本	50.00	ピン入り
チ リ パ ウ ダ ー	khorsani	4 kg	68.00	
ネ パ ー ル コ シ ョ ウ	marich	3 本	9.00	ピン入り
ニ ン ジ ン	gazar	31 束	27.90	
ジ ャ ガ イ モ	alu	10 D	27.50	奥地は多い
ニ ン ニ ク	lasun	2 D	14.00	
グ リ ン ピ ー ス	matoru	2 kg	5.00	
カ リ フ ラ ワ ー	kauli	6 ケ	4.00	春は多い
ホ ウ レ ン 草	palung	20 束	2.00	
大 根	mula	5 束	2.50	
カ フ	roro-mula	5 束	1.25	漬物によい
し ょ う が	aduwa	1 D	1.50	
レ モ ン	khagate	25 ケ	5.00	ピンボン玉くらい
マ カ ン	suntala	40 ケ	10.00	ポシカンのようなもの
キ ャ ベ ツ	banda	5 ケ	4.00	
紅 茶	chiya	7 kg	28.00	安く多い
タバコ(ポウター用)	chulu	1200 箱	280.00	1箱10本入り 24パイサ
バ ス ケ ッ ト		20	500.00	
細 引 き		20 本	10.00	
た こ 糸		1 本	0.50	
布 袋		1		ツァンパを入れた

D=Dharni = 2.225 kg

P=Pathi = 25合

M=Mana

1 Pathi = 8Mana

ポカラ購入食糧

品名	現地名	数量	金額Rs	備考
タマネギ	pi az	16 D	52.00	
トマト	golbhera	10 D	18.50	ピンポン玉くらい
キャベツ	banda		14.00	
グリーンピース	matoru		22.00	
ジャガイモ	alu	1 D	4.00	
水牛肉	banshi-ko-mas	1.5 D	12.00	
ニワトリ	kukhura	7羽	100.00	価格に巾がある
玉子	kuhhura-ko-phul	114ケ	68.50	
チリソース		2本	6.00	
塩	nun		2.00	岩塩、上質の食塩もある
チャン	chan		70.00	
ロキシ	roksy		40.00	
薪	daura	14束	61.00	

キャラバン中購入食糧

品名	現地名	数量	金額Rs	備考
米	zamal	14.5 P	155.00	
そば粉	papal	4 M	4.00	
ジャガイモ	alu	1 P	6.00	
バナナ	kela		9.00	1Rsで6~8本
ニワトリ	kukhula	26羽	390.00	奥地ほど高価
玉子	kukhula-ko-phul	150ケ	85.50	
塩	nun		1.00	
食用油	tel		32.50	1Mが4~5Rs奥地は少ない
紅茶	chiya		5.00	
ミルク	dudu		10.00	
チャン	chan		66.00	
ロキシ	roksy		14.00	
薪	daura	54束	259.00	
石油			19.00	

ベースキャンブ

品名	現地名	数量	金額Rs	備考
米	zamal	25 P	325.00	1 pathi = 13 Rs
ジャガイモ	alu		329.00	1 pathi = 3 Rs
ソバ粉	papal		468.50	1 pathi = 10 Rs
紅茶	chiya	23 箱	138.00	
ミルク	dudu	5 缶	60.00	
カレー粉		3	30.00	
ヤギ	kasi	2 頭	323.00	38 Rs は殺し代と腸づめ代
ゾプキョ	zopkyo	1 頭	410.00	ヤクと牛のかけあわせ10 Rs 手数料
チャン	chan		542.00	約 1 ㍓ = 2 ~ 3 Rs
ロキシ	roksy		88.00	約 1 ㍓ = 5 Rs

## 医 療 関 係

西 郡 光 昭

登山期間中の医薬品需要の主なものは、鎮痛剤、消化剤としての胃腸薬、鎮咳剤であり、これにくらべ外用薬の使用は、はるかに少なかった。

高度の影響によると思われる頭痛を訴える隊員には、割合積極的に鎮痛剤の服用を指示し、水分の摂取もあわせて指示した。しかし頭痛と同時に全身倦怠感、顔面浮腫、眩、食欲不振等の症状を訴える隊員については、出来るだけ早目に下部キャンプに降りさせるようにつとめた。

胃腸薬が予想外に用いられたのは、調子の良かった比較的若い隊員の健胃ぶりがしばしば食べ過ぎになったため、特にベース・キャンプにおいていちぢるしい。

隊員の健康管理については、朝夕のトランシーバーによる定時交信の際、各キャンプのリーダー格の隊員から、シェルパを含めて報告させ、各隊員にはネパールに入国と同時に身体の調子などを日誌に記入させた。(日誌のまとめ、考察については、別に発行予定の学術調査報告書一仮称一を参照されたい。)

各キャンプには、消化剤、鎮咳剤、鎮痛剤、催眠剤、ビタミン剤、外用薬などを常備して適宜補給したが注射薬は一部前進基地(第二キャンプ)のみに配置した。

高度の影響は程度の差こそあれ、全隊員に現われたが、きわめて重いものはなく、しいてあげれば、登山開始後約1カ月の4月29日、C<sub>2</sub>からC<sub>3</sub>へ荷上げ中の堀勝彦隊員が標高約5900mの地点で瞬間的に意識障害をきたしすぐ回復したが、その後食欲不振、水様便の激しい下痢で回復に4日を要したことがあった。

隊員の健康管理同様、シェルパの健康についても注意が必要である。登山期間中、ウ齒の痛みがひどくベース・キャンプまで下った者2名あり、戦力の低下にもなる上、このムシ齒の抜齒にはまったく苦勞させられた。うち1名はやがて前線に復帰したが残る1名は同時に激しい咽頭炎にかかっており、食事も取れぬ状態で7日間つきっきりにさせられてついに復帰できなかった。期待していたシェルパであったし、隊長としての任務を最前線で果そうと思っていただけに残念この上なしであった。痔疾1名、咽頭炎・熱発1名、頭痛を訴えて投薬したもの3名、下痢3名、外傷は隊員・シェルパともになかった。

往復のキャラバンでは隊員、シェルパともしばしば下痢に悩まされたが大事に至らなかった。最も重症だったのはリエゾン・オフィサーで治癒までに3日を要した。キャラバン中メイル・ランナーが足に火傷を負い、全治までに10日以上かかっている。ポーターを含む現地人の診療では、咳の訴えでテントを訪れるものももっとも多く、次いで発熱・下痢・眠疾・腹痛・湿疹等であり、外傷はポーターの頭部裂傷(3針縫合)1件のみであった。

### 高度障害

高度によって影響を受ける生体の変化は、高度を下げることによってすみやかに回復するものから、

簡単に回復しないものまで、程度はさまざまであり、個人差によるものも多いと考えられる。勿論、高所に適性を持つ隊員を選ぶのが最善であろうが、実際にはそれがほとんど不可能な現状である。隊長としても、医師としても登山中の隊員の高度順化の様子を的確に把握し、指示することは、隊員の生死にも、登山の成否にもかかわるだけに非常に難しい問題であるといわなければならない。

アンナプルナⅡ峰の登山にあたって高度順化に関して次のような基本方針を立てた。

1. 3～4日の行動を1サイクルとして終了の時点で1日の休養を取る。
2. 泊る高度が初めての経験である者は、それまで少なくとも2回は到達しておくこと。
3. 不調を訴えるものはできるだけ早くより低所に降りる。

しかし、実際には重要な時点で燃料欠乏という思わぬ事態が生じ、この基本線が上部キャンプでかなり崩れてしまった。特に5月4日、登頂隊員として頂上に向いその帰途遭難死した佐藤正敏隊員らの行動をふりかえてみると、いかに彼の体調がきわめて良好であると判断し、かつC<sub>4</sub>から睡眠用の酸素を使うという手段を講じたにせよ、明らかに行動計画に誤りがあったということができ、佐藤隊員の滑落には高度順化が充分果されなかったことがその背景となっていることを思い知らされ、指令した隊長として、責任を改めて痛感させられた。悔い切れぬ思いで一杯である。

## 携 行 医 薬 品 ・ 医 療 器 具

(合計 64.5kg)

### 1. 内 服 薬

品 名	数 量	使用量	品 名	数 量	使用量
総 合 感 冒 薬	400T	120T	ビ タ ミ ン 剤		
鎮 咳 剤	800	600	総 合 ビ タ ミ ン	900T	300T
鎮 痛 解 熱 剤	1000	400	ビ タ ミ ン C	320	220
鎮 静 催 眠 剤	25g	7g	ビ タ ミ ン E	400	300
鎮 痙 剤	500T	150T	抗 マ ラ リ ヤ 剤	25g	5g
緩 下 剤	100	—	抗 ヒ ス タ ミ ン 剤	25g	—
止 痢 剤	400	400	胃 腸 薬		
抗 生 物 質	120g	65g		1000包	700包
( 各 種 )				1000T	150T
喉 咽 頭 炎 用	9	9	副 腎 皮 質 ホ ル モ ン 剤	1g	0.4g
ト ロ ー チ			強 心 利 尿 剤	100T	15T
尿 路 消 毒 剤	100T	—			

## 2. 注 射 薬

品 名	数 量	使用量	品 名	数 量	使用量
強 心 利 尿 剤	65 A	30 A	鎮 痛 解 熱 剤	30A	5A
昇 圧 剤	10	—	呼 吸 促 進 剤	10	—
抗 生 物 質	30 ♀	9 ♀	副 腎 皮 質 ホ ル モ ン 剤	200mg	100mg
止 血 剤	35 A	—	局 所 麻 酔 剤	100cc	10cc
鎮 瘻 剤	15	3	点 滴 用 ( 各 種 )	5A	—

## 3. 外 用 薬

品 名	数 量	使用量	品 名	数 量	使用量
軟 膏 ハイドロコチゾン 抗 生 物 質	60本	60本	マ ー キ ュ ロ	250cc	若干
水 虫 薬 ( 小 )	5	若干	マ ー ゴ ニ ン	500	〃
普 通 点 眼 薬	60	20	オ キ シ フ ル	500	〃
筋 肉 痛 用 ス プ レ ー	5	1	痔 坐 薬	20ヶ	15ヶ
陽 や け 止 ク リ ー ム	15	15	パ ッ プ 剤	800♀	—
リ ッ プ ク リ ー ム	15	15	オ ス バ ン	500cc	若干
			エ チ ル ア ル コ ー ル	1,000	〃

## 4. 医 療 器 材

品 名	数 量	使用量	品 名	数 量	使用量
小 外 科 セ ッ ト	1		指 頭 消 毒 器	1	
血 圧 計	2		煮 沸 消 毒 器 ( 小 )	1	
聴 心 器	2		注 射 器 ケ ー ス	2	
体 温 計	5		ア ン プ ル ケ ー ス	1	
注 射 管			綿 花	2袋	若干
デスポーザブル各種	30本	15本	綿 球	5	〃
ガラス各種	15		眼 帯	5	—
注 射 針 ( 各 種 )	100		舌 圧 子	2	
包 帯 ( 各 種 )	20	6	シ ー ネ ( 各 種 )	各 3	—
ガ ー ゼ ( 30×30cm )	100枚	40枚	ピ ン セ ッ ト	2	
油 紙 ( 大 )	10枚	若干	ハ サ ミ	2	
絆 創 膏 ( 各 種 )	10本	〃			

# 記 録 報 道

堀 勝 彦

来る夜も来る夜も、ローソクの暗い灯のもとで寒さにふるえ夜ふけまで書きつづけた原稿。ネガフィルムを託したメイル・ランナーが、ベースキャンプからポカラに向けて出発するとき、無事に日本まで届いてほしいと祈ったものであった。

今回の遠征に協力していただいた信濃毎日新聞社、信越放送局にたいして、新聞には登山隊の行動を伝える記事を、放送局には記録映画を撮影し、これらマスコミを通じて後援会各位や県民に報告をすることが、より効果的であると考えられた上で、写真や取材を私が担当することになった。

私が隊員として参加することになったのは10月であったので、それから出発までの短い期間に、信濃毎日新聞の報道部と写真部、信越放送局では報道制作部にたびたびかよって、取材のうちあわせ、撮影機材および写真用具の準備にあわただしい日々を送った。とくに16mmの映画撮影は私にとっては初めての経験なので、制作部の小林忠治氏の指導によって撮影機の操作方法から手ほどきをうけた。ヒマラヤでの高山の条件に近いということで戸隠スキー場などで実際に撮影してすぐに現象し映写しては反省点の指導をうけて次の日に再度戸外において撮影をするというインスタント特訓であった。その後もう出発までの寸暇をさいては、機材になれるように努力した。

今回の登山隊の撮影に用意した資材は次のとおりである。

○マミヤプレス					1台
交換レンズ	65mm	150mm			各1本
フィルムホルダー					3個
○マミヤレフC33					1台
交換レンズ	65mm				1本
○ニコマート					2台
交換レンズ	28mm	50mm			各1本
〃	マイクロニッコール	135mm			1本
近接撮影用アダプター					1個
○ベルハウエル	16mm	撮影機			1台
○フィルム					
エクタクロームX	2B	150本	ネオパンSS	2B	200本
コダクロームII	35mm	20本	〃	35mm	200本
フジネガカラー	2B	20本	フジ	シネ用	3,000ft
プラスX	35mm	200ft			

以上のはかに現象のための機材、薬品等を持っていった。これらの機材の輸送は、カメラとフィルムを除いたものは、隊荷とともに船便で発送された。カメラは1人2台の制限なので各隊員に分担して運んでもらい、フィルムは船便では変質のおそれもあると考えられるので最後発の隊員とともに手荷物と

してネパール入りをした。フィルムは税関のチェックがきびしいとの風評で、化粧箱をとりはずして、ビニール袋にシリカゲルとともに封入してベニヤ製のトランクにつめた。

### 取材のあらまし

取材にはネパール入りの次の日、2月20日より始めた。隊員の動きを追ってカトマンズ・ポカラでの隊荷のつくまでの間にシェルパとの出会い、街のたたずまい、民族的なものに主体をおいての撮影であった。スチールとシネの重装備では自由がきかないので、シェルパ1名を常に助手として使用した。モンスーン前の撮影で困ったことは乾燥しているために、空気中に微細な砂ぼこりが多く、カメラに付着してとくにヘリコイド部は、ジャリジャリと音をたてるほどであった。最初の現像はポカラでおこなったが、水道の水が朝夕わずかの時間しか供給されないため、水洗は全然できず、くみおきのバケツの水を2・3度かえただけでホコリをさけるために室内をカーテンでかこって乾燥した。原稿はカトマンズから書きはじめたがかたことの英語でネパール語がだめなために知りたいことの答を半分も得られなかった。

キャラバン中の取材も助手にシェルパを使ったが重労働であった。ポーターの列の前後にとびあるき、ロケハンのない一発勝負でシネとスチールをとりわけ、部落ごとに聞きこみをして、ほとんどキャンプ地まで休みも少なく活動した。キャラバン中は現像は無理なのでひかえた。キャンプ地では撮影ずみのフィルムの整理に1本づつメモをつけた。リエゾンオフィサーと2人でひとつのテントを使用したので、毎日ネパール語の教授をうけ取材に役立てた。原稿かきは毎夜12時ちかくまでかかった。ローソクとキャップライトの光では不便を感じた。

登山期間中は助手を使用しなかったが、長期の期間中荷上げをしながら取材をした。C<sub>2</sub> から上部ではカメラの凍結を防止するため、テント内にもちこむのはテント内と外気温がほぼ一定になる夕方にしてそれまでの間はキルティングの袋につつんで戸外においた。シネカメラは、油ぬきをしていったが寒気防止のため綿入れの袋におさめてもちあるき、そのまま撮影をした。スプリングの切損を防ぐため一杯にまきあげることはしなかった。スチールカメラは油ぬきをしていかなかったが、メタフォーカルプレーンが凍ったりムラを起したことは一度もなかった。現像は暗室をもっていなかったので、大型のフィルム交換袋の中でまきこみをおこない、外気の寒さで温度の低下をさけるために、バケツをお湯につけて、保温して日光下で行った。サラタン川の水は細かい砂くずを多量に含んでいるので、水洗はできずくみおきの水のうわずみを使ってゆすぐ程度であったが、それでも膜面に雲母などが付着して困った。乾燥には一番気を使った。ベースキャンプでは、つねに風がふいていて河原地の砂ぼこりをはこんでくるので、テント内でもホコリだらけとなってしまうため、荷物のダンボールの中にガビョウでとめて、その上をビニールその他でおおって乾燥した。

### 送稿について

多くの遠征隊の報道担当者が、原稿郵送途中の紛失を防ぐために原稿を復写したとの報告があるが皆無事に到着しているように思えたので、私は復写をすることはしなかった。原稿は、タイプライター

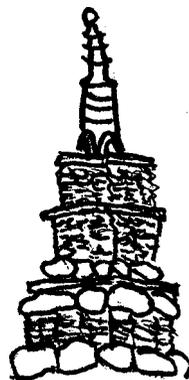
用紙に細かい字でできるだけ多く書いた。ほとんど毎日書いていたといっても過言ではない。一通の封書に8枚までとし、現像ずみのフィルム35mm判を20～30枚、セロテープではりつけて消印のあたらない位置に入れて、内容に応じて速達便とした。ベースキャンプから2～3名のメイルランナーを使用して5～10日の間かくで送った。メイルランナーはポカラまで往復10日～11日かかり、郵便局で投函してA. P. セルチャン氏気付になっている郵便物を受けとって帰った。電報や特に大切な郵便物についてはA. P. セルチャン氏の手をわずらわせた。郵便物は全部無事新聞社や放送局についていた。しかし遭難の報の電報は至急便で日本語で打ったが、新聞社には到着していなかった。ネパールからの通信は郵便物は問題はないが電報は非常に不安定である。

### ま と め

フィルムは、モノクロについてはその70%は現地で現像した。一部は帰国して現像した。カラーフィルム、シネフィルムはすべて帰国後の現像によった。ただし私は、学術調査でネパールに残ったため先に帰国する隊員に適時もちかえてもらった。現像については乾期はホコリがひどいため、防じん用のプラスチック・バッグのようなものを工夫することが望ましく、モンスーン中に高温であるため、現像がすすみすぎる傾向があったので、現像液を冷蔵庫で冷やしておき、夜間にのみ現像をした。水洗も特別な場合をのぞいては不可能である。

モンスーン中の低地では、高温多湿のために、フィルムが変質もしたり、かびがはえたりしたものもみうけられたが、ポリエチレン袋にシリカゲルを入れて密封したものを断熱材のアルミ箔で包装しておいたものには変調がなかった。

送った原稿は、信濃毎日新聞社の菊地俊朗記者の手をわずらわして4月8日から6月8日までの間に「アンナプルナへの旅」と題して連載された。記録映画の方は7月10日に「ズームイン信州」の中で先に帰国した隊員の解説つきで放映された。



# 気 象

松 尾 武 久

登山をするものにとって、気象の移りかわりの把握は重要なポイントのひとつである。ことにヒマラヤのような高い山での、気象現象の与える影響は成功、不成功にかかわるものであることは誰れの目にも明白である。しかし、ヒマラヤの天気を分析するには、余りにデータ不足であることも明らかである。今回の遠征隊には、ヒマラヤの気象データをできるかぎり収集しようということで、予算の許す範囲で、次のような器材を用意した。

気 圧	ポケット高度計（スイス・トーマン製）	2 台
”	高度調整付7日巻自記気圧計（中浅測器製）	1 台
”	” 1ヶ月巻自記気圧計（中浅測器製）	1 台
温 度	アルコール棒状温度計	5 本
”	ルサフォード型最高最低温度計	1 組
”	V字型最高最低温度計	3 台
湿 度	アスマン型通風湿度計	1 台
”	自記温湿度計 7日巻（中浅測器製）	1 台
”	” 1ヶ月巻（ ” ）	1 台
雨 量	小型雨量計	1 台

また、天気予報をより正確にキャッチするために、ニューデリーの気象台とオール、インディア放送に「特別天気予報」をしてくれるよう依頼した。我々の隊と同時期に、エベレス南壁に国際隊、マナスルには東京都岳連の西壁隊と韓国隊、ガンガプルナには八王子山岳会隊、タウラギV峰に長野県の県稜隊と各国の隊がひしめいていたので、デリーの気象台も心よく引受けてくれたのであった。

しかし、オール・インディア放送は短波放送であるため、電波をとらえることが難しく、各高度による風力ぐらいが参考になった程であった。しかも、隊員の少い小遠征隊では、気象係として、ラジオのあるテントに必ずしもいるわけではなく、ある時は荷上隊であり、またルート工作隊であったりして、余り利用できなかった。

天気予報はむしろ、毎日の雲の観測をすることによって、その周期性を把握したほうが、良く適中するようであった。

観測の実施は、ベース・キャンプ建設後から本格的に開始した。もちろん、キャラバン中も観測してきたが定点として観測するのは3月28日以降からであった。C<sub>2</sub>が建設された後からC<sub>2</sub>での観測も開始した。C<sub>2</sub>での観測器械の使用は4月11日以降、7日巻自記温湿度計と7日巻自己気圧計の2台を使用した。

観測時間はグリニッチ標準時0時、12時、ローカル・タイムでは朝5時半と夕方5時半の2回とした。  
 データーの記録には次のような野帳を作った。

気 象 観 測 記 録 紙

観測日	時間	高度	天気	気圧	気温	風向	風力	アスマン乾湿計		最高	最低	降雪	融雪
								乾球	湿球				
月日													

観測器機の設置はベース・キャンプに南側に石壁を作り、直射日光をさけ計器類をダンボールの上へ水平になるように設置した。また、ペンキで白く塗装したダンボール箱を百葉箱として、地上1.5mの所に設置し、最高最低温度計を置いた。風向は樺の木で作ったポールを立て、吹き流しをつけて、風向を判断した。風力は若干のばらつきはあるがビューフォードの風力表を基礎として観測した。

行動中の気象変化の記録は、各パーティーのリーダーに一任し、行動終了の行動記録紙の中に次の項目を設け、天気の変化を記録するようにした。時刻は8時半、11時半、14時半、17時半の4回とし、その時刻における高度と天気の状態、風の状態、雲の状態、雪面の状態を観測する簡単なものとして、行動に負担をかけないようにした。

○ 天気について

ポカラ全隊員が集結した3月11日より、登山活動終了後再度ポカラに集結した5月23日までの天気の状態は次のとおりであった。(ただし、ベース・キャンプの高度である)

3/11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
○	○	○	○	①	○	○	①	①	①	○	①	①	○	○	⊙	①	①	⊙	①	○
								●	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	⊙	●	⊙	●	⊙	⊙	
4/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
①	①	①	①	①	①	①	①	⊙	①	⊙	⊙	⊙	⊙	①	①	⊙	⊙	⊙	⊙	①
⊙	⊙	⊙	●	●	●	⊙	⊙	●	⊙		⊙			⊙	⊙	●	⊙		●	●

22	23	24	25	26	27	28	29	30	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉	☉
●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23										
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○										
◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎										
							夕立	夕立	夕立	夕立										

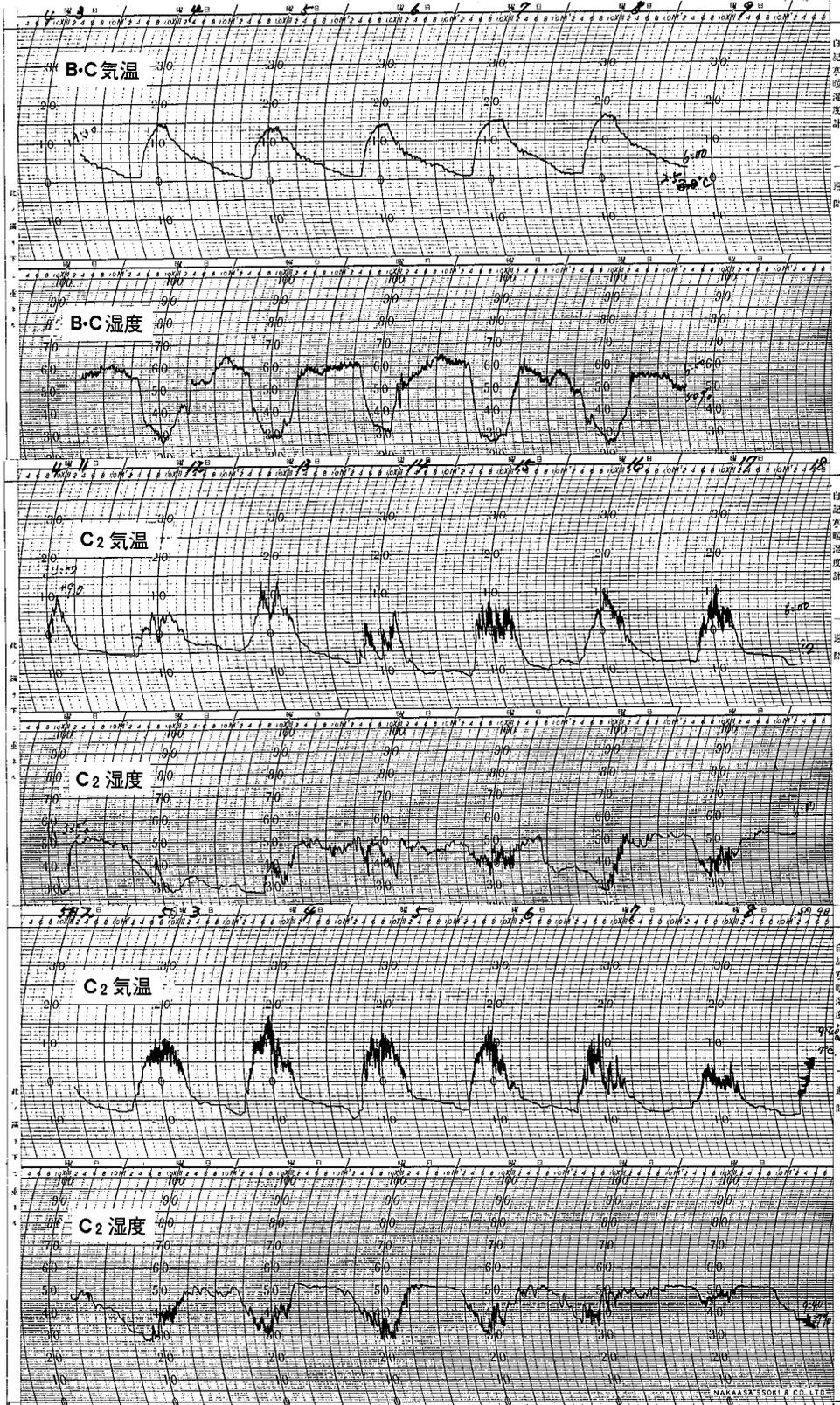
これをみると、マルシャンディー川流域のピサン地区あたりは余り天気の安定している地区ではなさそうである。もっとも、今年は80年ぶりとかの天気の悪い年であつたらしいが、トンジエを越えるあたりで、天気がガラリと変っているようである。往路の3月20日と復路の5月15日のところがトンジエである。高度は約1,700mでマルシャンデー川はここから高度を急にあげて行く屈曲点でもある。天気のパターンとしては、雲海が朝にマルシャンディー川をおおい、太陽が登るにしたがって、雲が上昇し天気が悪くなるといった型が一番多いようであった。にわか雨は行動にそれほどの支障となるものは少く、むしろ天気の変化をつけてくれるようなものであった。5月10日以降は午後になると必らずしとすと降る梅雨のような雨に変ってきた点が注意すべき点であった。ポカラに下った5月20日以降は、夕方になると必らず雷を伴ったスコールがやってきた。

#### 気温ならびに湿度について

気温については、B・Cの位置が3,500mと低かったせいか、B・Cでは最低気温が平均-2.5度(摂氏)、最高気温は14度位であった。次に示す表は7日巻自記湿度計の記録紙であるが、4月3日から4月9日までは、B・Cで記録したものであり、4月11日以降はC<sub>2</sub>で記録したものであるが、気温・湿度の上下のパターンを見るには格好の資料であると考えている。

気温は太陽が登りだすとそれに連れて気温も上昇し、14時頃が最高となり除々に下って来る。湿度はその逆の動きを示し、たいたいB・Cでは最高60%、最低10%ぐらいに下り、その振巾は大きい。C<sub>2</sub>に登ると雪の上であったせいもあって、最高は50%、最低は30%と安定した振巾を示している。

今回、記録したC<sub>2</sub>における最低気温は-9度であった。むしろ、このシーズンの温度は日本の冬山の方が寒いようである。紫外線が強いので、日中の体感温度は30度以上で、毛のシャツだけで充分であるが、これがいったん、曇ってくると、急に0°近くまで下るのであるから、ヒマラヤという所は人間の体力を奮うあらゆる要素が揃っているといえる。



風向については、B・Cを設置したサラタン・コーラの方向が上流から下流へ南西から東北へ抜けている関係上、南北の風が一番多かった。いわゆるアンナプルナの主稜線を越えて、5,300 mのプラトールを走った風が谷を吹き抜けるのであった。朝には南西の風が吹き、夕方は北東の風が吹くというパターンが一番多いようであった。

風力については、高度が低いこともあって、強い風が吹いたことは一度もなかったようである。しかし、これはビューフォードの風力表を使用したので、データとしては余り有効でないようである。

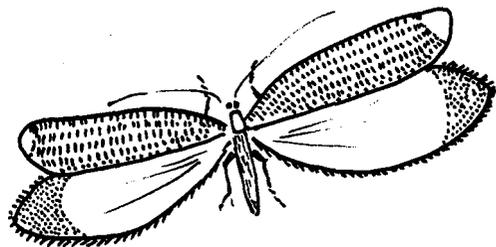
C<sub>2</sub>において、風向は南風が多かった。いわゆる、アンナプルナⅡ峰の頂の方向から吹いてくる風が多かった。プラトールはただ広かったので、あらゆる方向から吹いてくるだろうと予想していたが、割合南風が多いデータに驚いている次第である。

C<sub>2</sub>の風力は、ビューフォード風力表のグレード表で7ぐらいの風が吹いたことがあった。いわゆる風に向かって歩きにくい程度であり、秒速15 m程度であったと考えられる。

気圧については、日本のように高気圧、低気圧の通過というものがないようで、だいたい5ミリバールの振幅で上下しているようであった。われわれは、高度計で測定する予定であったので、ポカラの空港の高度722 mに合わせて、B・Cまで持参した。

しかし、気圧の測定は非常に難しく、地図の正確なものがないため、ポカラを出発したあとでは、高度の補正が出来ないため、数値に正確さがでてこないと考えられるのでその点はもう少し考えるべきであったと思う。

今回の観測の結果はこれからのデータ整理にかかっていると思われる。しかし、一時期のそれも、一地点だけの観測結果ではヒマラヤ気象の解明にはほど遠いと思われるが、われわれとしては、今後、信州大学の遠征が続けられる限りは、気象データを集めるよう努力していきたいと考えている。それと、もうひとつは、気象についてのしっかりした知識を持った隊員を養成することが、有効なデータ集収につながり、有効な分析につながるものと思われるので、信州大学の理学部あたりに気象学の講座ができれば、さらに信大独自のヒマラヤ気象の分析も夢でなくなるような気がするのである。





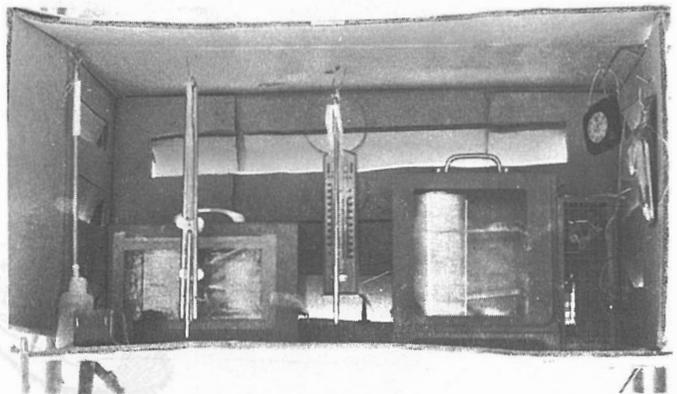
ベース・キャンプでの気象観測器材の設置の状況。左より  
百葉箱・日照計・自記温湿度計・自記気圧計



ベース・キャンプ百葉箱の内部



C<sub>2</sub> での百葉箱の状況



C<sub>2</sub> 百葉箱の内部

# 梱包・輸送

片岡格

## 梱包について

### ◎ 基本計画

ヒマラヤ遠征の梱包には一種独特の困難さがある。まず内容物の形、大きさ、重量が多種多様で、これらを組み合わせてパッキングすることを要求される。一方、キャラバン中、ポーターの担ぐ荷物は30kgであるから最終荷姿は30kgにおさえなければならない。しかも安価に仕上げることを要求されている。

今回はポーター賃の高いポカラ地区であり、キャラバン日数が短いことを考えて、梱包具の軽量化と破損との関係に留意して計画した。計画のポイントは以下に示すとおりであった。

#### 1. 荷作りに関して

##### イ 破損および変質防止

内容物である登山用具の破損よりはむしろ、問題とすべきは各地の積み換えや、荷役における外装の破損による盗難などに注意しなければならないことである。

変質については食糧は真空パックにする。最近の食品包装の技術進歩から考えて、大部分のものはそのままか、ポリエチレン袋で包むことで十分目的を達すると考える。

##### ロ 単位梱包の識別について

100を越す単位梱包の中から、いつでもどの地点でも必要なものをすぐに能率よく取出せるようにする必要がある。したがって使用地域と品目を主として、記号と文字の色で識別できるようにする。

##### ハ 内容品の組み合わせについて

登山隊においてもっとも注意しなければならないことは、事故による登山用品の紛失である。現地調達不可能な重要品は、最大限に分散梱包する。

#### 2. 梱包用具に関して

内容品の保護と重量を考慮して以下のような梱包用具を用意する。

##### イ カートンボックス

3種類を用いる。

A型 27×45×80cm

B型 27×45×53.3cm

C型 27×45×26.6cm

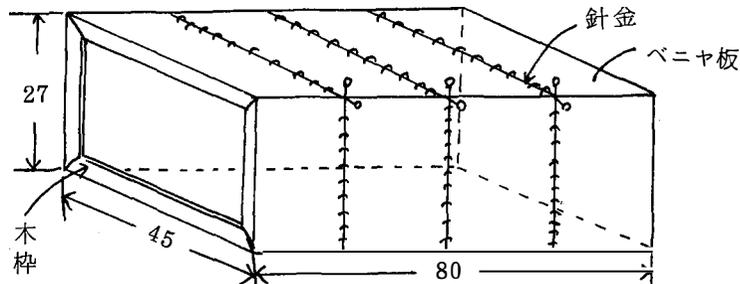
カートンはSKSボックスを使用し厚さは3mm、外側は防水塗装をし識別記号を入れる。B型とC型でA型と同じになり、また、C型3個でA型と同じになるようになっている。

##### ロ ワイヤーバンドボックス

図のようなものを2種類用意する。

A型 27×45×80cm (内径)

B型 27×45×100cm (内径)



板はベニヤ板を用いるべく軽くする。カートンボックスの組み合わせ、および一般装備のドカ詰め使用する。

B型には、はしご、シャベル、ピッケルなどの長物を入れる。

#### ハ キャンバスバッグ

次の2種類を用いる。

A (帆布製) ワイヤバンドボックスがすっぽり入るもの。

錠をかけるようにする。2つ一緒にして外側からスチールバンドをかける。これが外観になる。

B 80×80cm位の大きさにして、現地食料、キャラバン中の炊事用具等の運搬を主に、その他雑用品入れとして使う。

#### ニ その他

麻なわ、針金、ガムテープ、ポリエチレンバッグ、くぎ、かなづち、荷札などが梱包に関する用具である。

#### 3. 梱包、マーキング、リスト作成について

物質の集積と同時に、品物の除収、計量、識別分類、梱包をして、パッキングリストを作成する。また、外装のキャンバスバックには

N. H. E. S. U. 1971

POKHARA VIA CALCUTTA とマークを入れる。

#### 4. 帰路の梱包

帰路は食料の全部と装備の一部が減っているので、往路に使用したカートンボックスとキャンバスバックのうち比較的損傷の少ないものを使用する。

#### ◎実施

基本計画を基に軽量化、価格、輸送方法等を検討したのち、我々が実際に行なった梱包方法は以下のようなものであった。

##### ○カートンボックス

専門家の助言もあって、材質は防水ダブル強化ダンボールを用いて、大型：28×44×82cm、小型：28×44×41cmで、小型2個で大型と同じ大きさになる2種類のカートンボックスを製作、使

用した。

この小型ボックスは中間キャンプの荷上げに際し、15kg～20kg単位としてそのまま運搬に使えたし、大型ボックスはB・Cでの荷物整理や、2段に重ねて食卓、机に活用することができた。

また、このカートンボックスは(キャンバスバックと併用したことにもよるが)往復20日余りのキャラバン後も、大型ボックスの運搬中、常に低面になる部分に少し型くずれが出た程度で、その後、学術調査時のキャラバンにも使用し、一部は帰りの隊荷輸送にも十分耐える程、予想以上に丈夫なものであった。

このカートンボックスは、山田ダンボール(株)より寄贈されたものであった。

#### ○キャンバスバック

カートンボックスは防水加工されたものであったが、ダンボール切口からの浸水による破損や運搬中の背擦れによる傷みを防止する目的でキャンバスバッグで覆って運搬することにした。

我々が使用したのは、一部、9号帆布製の他、大部分はフラットヤーン・ポリエチレンラミネード・クロスゲンタン製の袋で、カートンボックスの角など擦りを強く受ける部分は、防水被膜が弱くなるが、袋自体は丈夫で学術調査のキャラバン後も、日本まで隊荷を送り返す際に十分利用できた。

この袋は、三和紙工(株)より、製縫調整のうえ寄贈されたものであった。

これらの袋類は、食糧購入、荷物整理、荷上げなど、様々に活用できたいへん重宝したものであった。

#### ○ジュラルミントランク

現金、事務用品、医療器具、薬品の運搬用に、一般に市販されているジュラルミン製トランクを使用した。

#### ○竹籠

炊事用品、食糧(主食、野菜)の運搬には、ネパールで日常使用されている竹カゴを利用した。ポーターの額で担ぐ独特のスタイルとマッチして、非常に有効であった。

#### ○梱包方法

ポーター1人の担荷量(30kg)に合わせて、大型ボックスは30kgを目標にカートン詰めを行なった。すなわち、小型ボックスは主として食糧用とし、大型ボックスは装備、調査器材用とした。

食糧はB・C以上のものについては、数種の4～5人・日/袋のレーションパックを基本単位として、何種かを組合せて、また、調味料、飲料、嗜好品等はキャンプごとの特別ボックスとして、それぞれ一箱分ごとに大きいポリエチレン袋で包み、内容明細リスト、缶切をつけてカートンボックスの封をした。キャラバン、B・C、学術調査用品は、品目ごとに一括してカートン詰めしたので、35kgを越す小型ボックスもできた。

装備、調査器材は開梱地別(ポカラ、B・C)に詰めた。

#### ○マーキング

大小210個にのぼるカートンボックスを一目で識別できるように、使用地別、内容別に、色と略号とで次表のように区分し、スプレーペイントでマーク付けし、同時に通し番号を記入して、パッキング

リストとの対比によって内容が容易に理解できるようにした。

カートン表示

キャンプ, 種類	色別	内 容
高所キャンプ	赤	Equip ( 装備 ), Food ( 食糧 )
中間キャンプ	緑	”
B・C	黒	”
個人装備	青	Equip ( シェルパ用個人装備 ), Personal ( 隊員用個人装備 )
キャラバン	黄	Equip , Food
学術調査	茶	S・R
医薬品	赤	+
写真器材	黒	Ka.

。クレート ( 木枠 ) 詰め

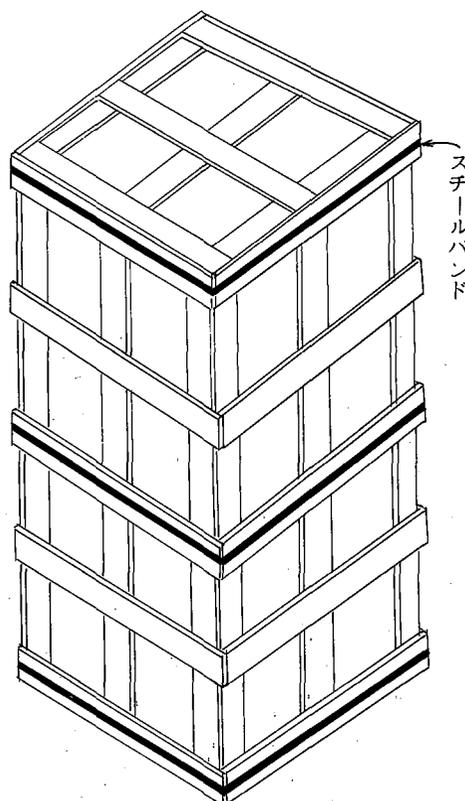
写真材料、医薬品の一部および納期が遅れた調査器材は空輸することにし、他のものは海路輸送することになり、途中での紛失を防ぐ意味からもクレートに詰めて輸送することにした。

カートン詰め終わったカートンボックスは各々ガムテープで封をして、マーキングを行なった後、P. P. バンドをかけてクレートに詰めた。

経費節約のため、クレートは我々で自作することにして図のような骨組みで大型ボックスでは10箱、小型ボックスでは20箱の大きさで、木枠の内側にはベニヤ板を入れてカートンボックスの保護と同時に荷抜き防止を考えたものを設計製作した。材は巾9cm、厚さ1.5cmのモミ材を使用し、詰め終わったあとスチールバンドで補強した。

この素人細工のクレートは設計ミスでスキ間ができたため、予備のカートンボックス、スキーストックなど長物をつめることになり、予想外に好都合であった。

クレートは各々350kg前後にそろえる予定であったが、発送期日がせまっていたため、カートンボックスの詰めあがった順にクレート詰めしたことによって、次表のように大きな差が生じた。横浜港で船積前に1個小破し、補強されたが、悪名高きカルカッタ港等でのクレート破損に伴う隊荷の紛失が大いに心配されたが、無事ポカラに到着した時には、幸運に恵まれたと思う以外になかった。



クレートの寸法・重量

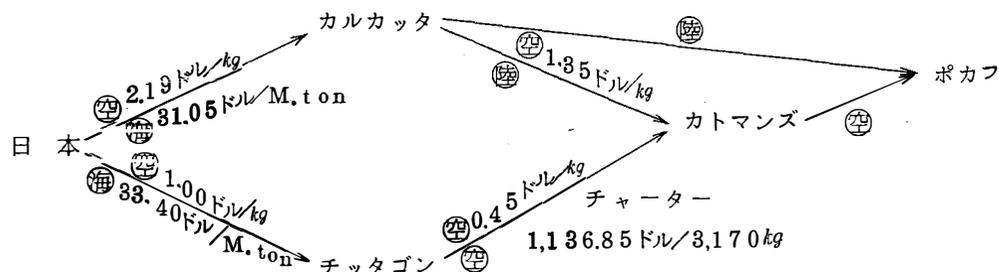
CRATE No.	CONTAINING	MEASUREMENT	CUBICTION	GROSS WEIGHT
1	食糧	3.2×3.2×5.5(ft)	54.04 (ft)	455 (kg)
2	〃	3.2×3.2×5.3	52.08	425
3	〃	3.2×3.2×5.4	53.06	435
4	〃	3.2×3.2×5.5	54.04	608
5	〃	3.2×3.2×5.3	52.08	538
6	〃, LPガス	3.2×3.2×5.4	53.06	427
7	〃, 装備	3.2×3.2×5.4	53.06	405
8	装備	3.1×3.2×5.5	52.11	368
9	〃, LPガス	3.1×3.2×5.5	52.11	360
10	〃	3.2×3.2×5.4	53.06	375
11	個人装備	3.1×3.2×5.5	52.11	285
12	〃	3.1×3.2×5.5	52.11	268
13	〃	3.1×3.1×5.5	51.06	255
14	〃, ストック	3.2×3.2×5.5	54.04	285
15	学術調査器材	3.2×3.3×5.5	55.09	370
Total			801.3	5,859kg

(22.689m<sup>3</sup>)

輸 送 に つ い て

◎輸送ルート

隊荷をいかに確実、安価に、素早く持ち込むかが、隊の行動を左右する最大の因子になることは明らかであった。69年、70年に出かけた隊の情報をまとめると、輸送の問題は、1)酸素、LPガスなど危険物の輸送方法と、2)カルカッタ港の荷抜き、通関にしばられた。これに対処するために空輸ルートの開発が始まっていることも伝えられたので、エイジェントと交渉を行なった。その結果71年ブレ・モンスーンに出かける6隊がまとまる場合の割引運賃を考慮して下図のようなルートと運賃単価が明らかとなった。



そして、計画上計算されていた隊荷の重量は約4,500kgであり、我々が選択できるルートは、予算面から、悪名高きカルカッタ港を経由する(海→陸)のひとつであることも明らかになったのである。

#### ◦ 輸出手続

輸出手続に必要な輸出承認申請書および無為替申請理由書を作成してエイジェントに託し、手続、通関、船積の一切を任せた。ただ無税購入したばかりの輸出証明証交付に関して、分散梱包になっていたため少しトラブルがあったが、開梱せずに証明書の交付をうけることができた。

輸出手続と平行して、海上運賃の割引申請も行なったが書類の不備、提出先のミスがあって期日に間に合わなかったが、厚意的な処理によって、運賃の半額割引を許可された。

#### ◎ キャラバン

アンナプルナ山群の登山基地ポカラに隊荷が到着したのは予定より約10日遅れであった。待ちかねた隊員、シェルパによってさっそく隊荷の整理、キャラバンの準備が開始された。

ポカラ地区のポーター賃金は15ルピー/日で東部地区より高いが、35kg前後を担ぐとのことで、1人分の荷を35kgにすることにする。国内でのカートン詰めが開梱地別に行なわれたため、パッキングリストの作成時にはたいへん労力を費したが、ポカラでの再梱包は全くスムーズに進み、隊荷到着後、2日目には先発隊が、4日目には本隊が、各々11名、141名のポーターと共にキャラバンを開始することができた。

キャラバンにおけるポーターの監督、督励はサーダーをはじめシェルパと、ナイケの仕事であった。ナイケはポーターの手配、監督に当たるため、ポーター約50名にナイケ1名の割合で配付される慣例になっていて我々も3名雇用することになったが、キャラバン途中でのポーターの交代等の手配一切が任されていた。

ポーターの賃金は慣例に従って3日分をポカラの出発時に前渡金として先払いしたが、以後はサーダーの判断で必要と思われる時に、行動中に陰路で、荷物とポーターの首にかけてナンバータグとを照合して、支払った。

帰路も往路と同じ要領で70名余りのポーターを雇用することになる。遭難後の連絡などで急がれたキャラバンであったが、ピサン村の女ポーターのペースにはまってしまい、賃上げ要求を認めることになってしまった。

#### ◎ 再輸出

当初の予定では、登山終了時点で学術調査に必要な物質を除き、他の隊荷を日本へ送り返すことになっていた。遠征資金の赤字補填の必要から、大半の装備を当地で売却することに決まったことおよびその任にあたる予定であった佐藤の遭難死とによって、学術調査終了時点で一括して送り返すことになった。

学術調査終了後の持帰り隊荷には、昆虫・植物の標本が5箱分含まれていたため、ネパールでの通関時のトラブルが懸念されたので、正式の輸出手続を踏むことにした。登山局の添状を付けて輸出承認申請書を提出したがごく簡単に許可され、税関でも供託金払もどしの計算に時間がかかっただけでごく簡単にシーリングが終った。ただこの正式手続をとったことによって、空輸荷物の旅行者身廻品に対する割引を受けることができず、約400ドル多く支払うことになった。

輸入時の供託金は、カトマンズ空港の分は通関後即日払いもどされたが、バイラワ税関のものは約一週間後に受けとることになった。

## 感想

### ◦ 梱包

- カートンボックス、キャンバスバッグ共今回使用したもので今後も十分であると思う。カートンボックスは少し扁平にして、 $26 \times 45 \times 82 \text{ cm}$ 、 $26 \times 45 \times 41 \text{ cm}$ ぐらいが扱い易いと思われる。
- 梱包方法、マーキングも今回のもので支障はなかったが、つけもの、佃煮類のパックで破れたものがあった。今後一考する必要があるだろう。
- 各クレートが均等になるように配慮すべきであった。クレートの構造としては斜材を入れる方がより丈夫であり、材も少なくとも $2.0 \text{ cm}$ 以上の厚みがほしかった。スチールバンドのかけ方も一考したい点であった。

### ◦ 輸送

- 輸送方法、ルートは常に日程、経費との関連で選択される必要がある。隊荷が少ない場合にはカートンボックスのままで行なえる空輸は有効である。  
費用についても交渉手腕によって大幅な違いが出る。今回は行なえなかったが、航空会社、エイジェントの協定などを研究して、いろいろな手段、抜穴なども心得ておくことの必要を強く感じた。帰路の場合でも標本類と登山用具の二種に分けてもよかったし、一括して別送荷物としても通関時にトラブルは起きなかったように思われる。
- 我々の作成したパッキングリストはインドおよびネパールの通関をより容易にすることを目的として、カートンボックスごとの内容を品名をあげて書かれたものであって、77ページにもなるものであったため、輸出、輸入時には品目ごとに整理したリストを別に作成して、パッキングリストに添付して提出した。  
今回の経験からすれば、カートンボックスごとのリストは品名をあげずに、食糧、酒、たばこ、身廻品、キャンプ用品、登攀用具、衣料、薬品、写真材料のように大まかな項目にまとめた表示で十分なように思われる。
- 東パキスタン紛争、インド・ネパール通商条約破棄、ネパール向け荷物の陸送禁止、印パ紛争など、今回多かれ少なかれ関係を持つことになった国際政治情勢についても、事前に情報を入手して臨機応変に対処できるように心掛けるべきであった。
- 今回は梱包材料のすべてを寄贈でまかなうことができたし、運賃についても海路の50%のほか国内のトラック輸送についても割引を受けることができ、経費節約の面で一役はたせたが、これは関係各企業の厚意によるものであり、ここに感謝の意を表したい。

## 通 関 手 続

松 尾 武 久

カルカッタの通関に関しては、出発前より各隊からの情報を得ていた。プロパンガス等の通関が難しいとのことや、治安状況が悪いため、荷抜きが相当あることなどであった。

我々の隊は、通関業者として、EXPRS S・CLEARING・AGENCYという会社を使用することにした。この業者はカルカッタの日本領事館関係の仕事や、三井O・S・K船の仕事もよくやっており、正式に登録している信用のおける業者であった。事実、社長のゴーシェ氏は非常に親切であり、インド人ではありながら、感覚的には日本人と相通じるものをもっている男であった。

素人には、通関という業務は良く理解できないので、隊員の役目としては業者にハッパをかけることぐらいであった。毎日、朝から仕事場へ出ていき「早くしろ」と言い続けるのが主な仕事であった。

保税倉庫に荷物入っている、荷抜きがあるとのことであったので、佐藤隊員が監視のため何度も税関の係員と交渉したが、駄目であった。港の陸揚げのときは、誰れも構内に入れてくれないので、よほどのコネがない限り、立会いは無理なようである。

トラック輸送のための、シーリングは非常に簡単であり、立会いにネパール商務官ならびに税関史とエージェントと隊員が1名ついた。我々の場合は、パッキングリストと中身がきちんと一致していたので、ハガネ帯にカルカッタ・カスタムの刻印で封印するだけだった。オープンされたのはクレート1ヶだけでそのうちのダンボール2箱だけだった。

特に我々が問題としていたプロパンガスの持込みについても、特別の問題はなかった。我々は、パッキング・リストに「O<sub>2</sub>シリンダー」として記載したが、業者はむしろ正直に記載したほうが良かったと言っていた。事実日本から船に乗せるときは、船会社にプロパンガスであることを申告しているために「般荷証券」(B/L)には、L・P・Gとして記載されているので嘘ということがすぐにわかってしまうのであった。

特にプロパンガスには危険物と明記したほうが、通関もそれだけ早いようで、マナスル西壁隊の高橋隊長もそのことを主張されていた。マナスル隊もプロパンガスを多量に持って来ていたが、なにごともなく通関を済ませていたようであった。

以上のように、通関に関しては業者に一任するほうが、結果的には良いようである。むしろ、今回問題になったのは「Bフォーム」のことであった。Bフォームとは「BILL OF ENTORY HOME CONSUMPTION」(インド国内保税輸送特別許可証)のことであるが、これがないと、インド国内を通してネパールへの無税輸入が出来ないのである。過去の日本隊がいくつもこれで悩まされていたことを知っている、なんとか、トラックの荷と一緒に持参して、国境での時間のロスを無くそうと考えていた。カトマンズで得た情報によれば、パウダー峰に登った愛知教育大隊がビルガンジで2週間程、またマナスル西壁隊がノータンワでこれまた10日間程、足どめをくっていた。彼等の親切なアドバイスにより、業者にもくどく言っやっ手に入れることができたのであった。しかし、我々の持っていた一枚は輸送業者用のものであり、国境を越えるには、カルカッタ カスタム国境のカスタ

ムへと送られるもう一枚のBフォームが重要な役割を持っていることを知った。結局、このBフォームがない限り決して国境を越えることができないのであった。

日本人の感覚では輸送業者用のBフォームでも「正」の「写」であるので、有効であると判断するが、インドの税関の役人はカルカッタ当局より送附されるBフォームと輸送業者用のBフォームとが合致するまでは通関してくれないのであった。

Bフォームは全部で5枚あり、カルカッタ・カスタム用のもの、国境税関用のもの、輸送業者用のもの、ネパール政府用のもの、そして控となっている。タウラギリV峰の県稜山岳会の柳沢氏も我々の後からノートンワに到着したが2枚のBフォームを持っているにもかかわらず、カスタム間で送附されているBフォームが到着するまで足どめをくってしまったのである。

インドの通関には、時間的な余裕を見て、ゆっくりとあせらずやるのがかんじんであるような気がした。

今回は、特にインド・パキスタン間のハイジャック事件に端を発した国際緊張、また、ネパールが中国との交流を深めたことや、ネパールに輸入された安価な品物がトラックを利用して、インド国内に多量に密輸入されていることなどで、インド側は極度に神経を使い、トラック輸送によるネパールへの輸入を禁止するとの措置に踏切ったのであった。これがカルカッタ・カスタムヘドリーからの指示として連絡がきたのが2月18日であった。17日までは、カルカッタ・カスタムの許可でトラック輸送は可能であったが、18日以降は中央政府の特別許可が要るとのことであった。我々としてはまさしく晴天のへきれきであった。汽車と飛行機を利用したの輸入は、従来どおり許可されていたが、汽車ではクレートをこわし、荷物をバラバラにせねばならないため非常に手間がかかり、またインドの鉄道は広軌と狭軌が交互にあるため貨車から貨車への荷物の積みかえが大仕事でありその間、貴重な隊荷を盗られる恐れが強いため、我々としては鉄道利用はとて無理な話であった。

飛行機のチャーターということも考えたが、こちらの方はロイヤル・ネパール航空の保持機数が少ないことと、また料金が非常に高いため貧乏世帯の我々にはとてできない話であった。

とすれば、後に残る方法はトラック輸送だけであり、なんとかインド政府に働きかけて特別許可をとるべく松尾隊員がニューデリーに向かったのであった。デリーの日本大使館の書記官と一諸に本省へ行こうと打合せをしているとき、佐藤隊員からの電報で特別許可証が発行されたことを知ったときは本当にうれしかった。業者からカルカッタ・カスタム経由本省へ提出していた申請書の効果があったのだった。

Bフォーム発行以後の通関は実に簡単でトントン拍子に進んだのであった。

Bフォームの到着により、無事インド側を通関した我々の隊荷は、いよいよネパール側の輸入通関のためバイラワで一時ストップした。ネパール側のカスタムの所長は非常に親切であり友好的であった。ネパール政庁で交附を受けた「輸入許可書」の写も既にカトマンズから送られており、万事がうまくいって、インドの通関とは大違いであった。連絡将校のライ氏の援助もあって実に簡単であった。

ネパール輸入で問題となるのは、酒・タバコ・そして牛肉製品であった。酒・タバコは100%の課税であり、牛肉製品は宗教上の見地から持込みを禁止しているようであった。

我々は、今後のこともあるので酒・タバコについては正直に申告をした。税関の役人はそのことによ

り開梱もしなくて良いとの判断をしてくれ、実にスムーズであった。持込んだ品物を売却することを予想してセーリング・タックスという税金がかかることだったので、持込んだ品物のうち、また持出すものとネパール国内で消費するものとリストを提出した。この規則は1970年6月に制定され、ほとんどが5%の課税であるが、物によっては9%の課税をされるとのことであった。帰国のときにカトマンス空港で申告した結果、持ち帰りの品物が多くて約400ネパール・ルピーの返却があった。

食糧品等にも当初課税されると聞き、シェルパに国際隊(エベレスト)の場合はどのようなであったかを確認させたところ、国際隊は食糧については払っておらず、我々もまた課税対象からはずしてもらおうこととして、結局、1,460ルピーを支払いすべての通関を終了したのであった。



## キ ャ ャ ン プ 間 の 輸 送

岡 村 知 彦

キャラバンの終着地サラタン川上流左岸のベースキャンプは、平坦な河原で幕営地としては絶好であって、装備のデポ基地としては最良の地点であった。B・Cでは石壁を積みフライシートをかけ、その内に食料装備等のダンボールを積みあげるとい程度で十分であった。

各キャンプ間の高度差はおよそ800~1000mであり輸送高度としてはほぼ理想的なものであった。テントサイトを早朝6時に出発し、午後2時には行動終了し帰天できたのも前述のようにテント地にめぐまれたのが最大の理由となっている。C<sub>3</sub>を除いては広いテント地が確保でき、輸送のための荷分け作業も余裕をもってのぞむことができたしのんびりと雄大なパノラマを楽しむこともできた。

B・CよりC<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>へは、隊員15~18kg、シェルパ20kgの荷を隊長及び輸送係の指示に従って荷分けし、その大部分はダンボール箱や布袋に入れ背負子につけて荷上げた。全行程中ボッカに用いたダンボール箱及び布袋は適当な大きさであり丈夫なため輸送面では信頼できたが、隊員使用の特製ジュラルミン背負子は今少したて長にし、紐をかける小把手をつけるなど一考の余地が残る。

B・Cを除いた各キャンプ地でのデポは、ビニルシートを敷いた上に荷物を置き、フライシートやツェルトをかけたが、雪どけや積雪更には高所における不慮の露営を考えれば、荷物の下敷とフライシートをかねそなえる大巾な布地を少なくとも各キャンプ2枚づつ用意する方がより安全だったように思える。C<sub>2</sub>より上部では隊員5~8kg、シェルパ15~18kgあたりのボッカ量におさえ、原則として隊員は登攀ルート開拓に専念し、シェルパは全てボッカ要員としたが、結果的には大成功であり、隊員はもとよりシェルパにも好評であった。各キャンプ間の輸送にもさしたる支障もなかったし、又隊員の高度順化にも良い結果を与えたのではないか。

物資の荷上げの連絡は、もっぱら午後5時の定時トランシーバー交信の際におこない、また荷上げ終了時にはメモを紙片に書き綴りその報告としたが、要領をえぬトランシーバー交信のため、しばしば意志の疎通を欠くことが見うけられた。登山全期間中つねに問題になったのは、このキャンプに在庫する食料及び装備の種類とその数量の確認であった。係あるいは輸送に精通したものがキャンプに不在の時も一見して食料装備の在庫及び数量の過不足がわかるという工夫が明確になされず、各キャンプに常に少なからぬ不安と混乱とを生じさせ、隊員の頭を痛めさせたのではないか。記録用の食料装備の荷上げリスト用紙は用意されていたものの、記入者によって書き方がまちまちであり煩雑なため、隊員の誰が見ても全て理解できるといった状態ではなかった。輸送あるいは食料装備の係があらかじめ最悪の状態をも考慮した上での詳細な荷上げ予定表を作製し、各キャンプに食料装備別の一見して記入理解できるよう工夫された専用のノートが用意されていたなら隊員の頭を悩ますことも少なかったであろうし、隊長の指示もスムーズに伝達できたのではないか。また各係の責任者が全キャンプの在庫品の把握を完全にできる何らかの方法が今少し配慮されていたなら、ロープラダー、プロパン及び過不足食料等の輸送計画を全員が理解できこれに当ることが可能であったはずである。

登山最後の上部キャンプ撤収の際には、必要最少限のものをおろしボッカしたが、他の隊でしばしば

問題になった装備の紛失も、回収したフィックスザイルをシェルパに進呈したことが功を奏してか見う  
けられなかったのは幸いであった。

何はともあれ、B・Cより各キャンプへの輸送計画をすすめるには、予想以上の繊細な神経と頭脳とが  
必要であるということを感じた。



# 会 計 報 告

宮 崎 敏 孝

今回の遠征計画は、その予算算出の基礎を '67年ネパール王国踏査隊の現地データおよび経験におき、これまでの他の遠征隊の報告等を参照して計上されたものであった。目標とする山をニルギリ中央峰(7,223m)からアンナプルナⅡ峰(7,937m)に変更する段階では、隊員増、日程の延長に伴う滞在費、人件費の増加および酸素器材を中心とした登攀用具の追加などで、予算規模はニルギリ峰の5割増しの15,000,000円が計上されたのである。

以下に計上予算収支と実行収支を対比して示し概略の説明を加えて会計報告とする

## 収 入

	予 算	実 行
1) 後援会関係	7,700,000	5,790,000
2) 一般寄附	2,800,000	969,437
3) 学内寄附	500,000	650,602
4) 山岳会・学士山岳会	1,000,000	1,335,550
5) 隊員負担	2,400,000	3,550,500
6) 借用装備分	600,000	.....
7) 雑収入	0	1,244,120
計	15,000,000	13,540,209

## 支 出

1) 外貨費	5,470,000	5,018,553
2) 渡航費	2,505,240	1,982,418
3) 国内費	7,024,760	6,539,238
┌ 装備費 購入分	2,900,000	4,412,837
└ " 借用分	600,000	.....
食糧費	800,000	211,660
医薬品費	150,000	0
梱包・輸送費	650,000	295,503
傷害保険料	500,000	489,450
学術調査器材	850,000	18,212
記録費(報告書)	370,000	207,359
事務・通信・雑費	204,760	904,217
計	15,000,000	13,540,209

- 前表の予算収支は、予定寄贈物品をも金額に換算して計上したものであり、実行収支は寄贈物品の換算額は含めずに計上したものである。
  - 雑収入には装備売却代金1,143,171円が含まれている。
  - 外貨費の詳細については項目別の集計を行っていないので明示しなかったが、収入減に合わせて支出をセーブした結果である。
  - 渡航費は71年プレに出かけた6隊が協同して行なった特別割引運賃の交渉が成功したことによる。
  - 食糧費、医薬品費はその大半を厚意ある寄贈に負ったものである。
  - 梱包・輸送費は梱包材料のそのほとんどを寄贈に負い、海上輸送運賃は半額の割引を許可されたことによったものである。
  - 学術調査器材は学内各研究室より借用することでまかなった。
  - 事務・通信・雑費にはガソリン代215,400円、ギルミ・ドルジェ、アン・ペマ接待費66,658円、葬儀慰霊祭関係費248,522円その他実行委員会発足後3ヶ月5ヶ月の通信連絡費が含まれる。
  - 記録費の実行支出は72年3月31日現在の収支残額である。
- 以上の収支は68年11月から72年3月31日までのものである。



## マネージメント

宮崎 敏孝

68年8月、ネパール王国踏査隊のメンバーを囲んで山岳会員・学士山岳会員有志の懇談会が開かれた。席上、ヒマラヤへの遠征隊派遣の可能性が検討され、大方の「ぜひやるべし!!」の意向の中に今回の遠征計画の実質的な第一歩が踏み出されたのであった。

明確な活動目標を定めえず、低迷状態にあった山岳部に対して「新たな活動目標を持ち得ないならば、山岳部は解散すべし、海外遠征はその目標のひとつになり得る。」との自論は持ちつつも、懇談会の席上「現在の情勢では、山岳会・学士山岳会だけの実力では遠征実現不可能!」との悲観的な発言を行なったひとりであった私が、2回の実行委員会設立準備会ののち実行委員会では計画推進の中核になる企画係、途中から事務局を担当することになったのは、ただ時間的制約の比較的小さい職場に居たからであろう。懇談会の際には予想もしないことであったが、遠征隊での企画・渉外の分担も含めて、3ヶ年余り担当したいいわゆる“マネージメント”に限った雑感・反省を記して批判を願う次第である。

### ◎ 実行委員会

計画の推進母体として結成された実行委員会はその結成準備会も含めて、当初は委員全体にそれ相応の活気がみなぎっていて、計画推進の対外的な活動を通して山岳会・学士山岳会を組織的な行動体に進展させる中心になり得る可能性を感じさせた。

しかし、第一次隊員候補選考後、実行委員会として当面する諸々の問題のうち緊急を要するものが多くなり、事務局・企画係で処理されることが増加した。一方、実行委員会と各会員・事務局・企画係と各委員の情報伝達の役を任せた「実行委員会ニュース」の印刷・配布が停滞することになり、意志疎通がスムーズにできなくなった状態で、隊員候補の選考をはずれた委員の参加が鈍り始めたのであった。

実行委員会内の情報疎通が悪くなったことによって、役割分担に基づいた行動が難しくなり、当初、庶務部・渉外部・会計部などの分担分野であった問題も、事務局・企画係で処理を進める結果になった。

その原因は、全体を統轄する任にあった事務局・企画係が直接に問題を処理する能力は持ってはいても、情報伝達ルートを確立して、随時先を見越した適切な情報を流すことによって各係・委員の役割分担に基づく行動を喚起することによって全体の盛上りを形づくる能力に欠けていたことにその大半を帰することができるであろう。

計画の第一歩を踏み出した時点で、それまでの“口コミ”情報による行動の限界は十分自覚されていて、計画実現のために要求されであろう組織的な行動の基礎となる新しい情報伝達手段の確立が思考されていた。その意味で「実行委員会ニュース」はその一翼を担えるものであったはずである。しかし隊出発までの2ヶ年余り、16号までどうにか続けられた「実行委員会ニュース」は、

“ 口コミ ” 是正の努力ではあったとしても、内容・配布時期においてけっして “ ニュース ” でなかった点で新しい情報伝達手段にはなり得なかったのであろう。

“ マネージメント ” のポイントが全般の問題の先取的提示処理条件の準備・情報交換のキーステーションであるとするならば、私の能力を越えたものであったし、その明確な自覚なしに担当してきた点を強く反省せざるを得ない。

#### ◎ 遠征資金・資材

正直に書くならば、計画を実現するために必要な資金・資材を集め得る明確な目安、目算があって第一歩が踏み出されたのではない。しかし「歩きだしてから考えよう」ではなく、「歩きだしたからには終りまで歩きとうそう」との覚悟だけは全員が持っていたはずである。

資金面の後援を最も期待した報道機関（信濃毎日新聞・信越放送）との交渉が進展せず、後援会の結成の目度も立たない時点でアンナブルナⅡ峰の登山許可が報道された時には、感激よりも少なからぬ戸惑いが先行したのは事実である。登山料の半額も借入金によって払い込まざるを得ず、前途の多難は“マネージャー”でなくとも感じられたことであろう。

池田山岳会長・赤羽委員長・山田副委員長の奔走でやっとのことで結成にこぎつけた後援会についても実行委員は、その構成をフルに活用するだけの能力・資質を持ち合せず、交渉のまずさ・募金行動の低調さによって隊出発後の募金活動を留守本部に残すことになる。この最後の段階でも実行委員会をフル回転させ得なかったことは“マネージメント”の拙劣さの現われであった。

ただ、資材の寄贈は、各係・山岳会員の奮闘で様々の人々の厚意を得て予想外に順調に進み、食糧・医薬品・梱包は100%の目標を達したと言って過言ではなかった。これらが経費節約の面ではたした役割はかなり大きなものであった。

#### ◎ 渡航費割引

渡航費は予算の1/6を占めこれをどのように節約するかも大きな焦点であった。当初、一部隊員のカルカッタもしくはバンコックまでの船便の検討を行なったが、タイミングの良いものがなく、全員飛行機を利用せざるを得ないことになった。

1月中旬、71年のプレモンスーンに出かける6隊が協同して渡航費・荷物運賃の割引交渉を行なうとのニュースが入り、とりあえず事情を聴取に出かけたが、初めて外国へ出る我々には思いつくこともできないプロジェクトであった。その後別のエイジェントからも交渉を受けたが、条件を検討して先の6隊のプロジェクトに加わることにした。航空機指定、払いもどしなしの条件であったが、ドタン場での500,000円には多少の不便も許容せざるを得なかった。これは他人の整えたお膳立てに乗っただけで、我々はこれだけの条件を開拓する実力をとてもち合わせてはいなかった。

### ◎ チーム・ワーク

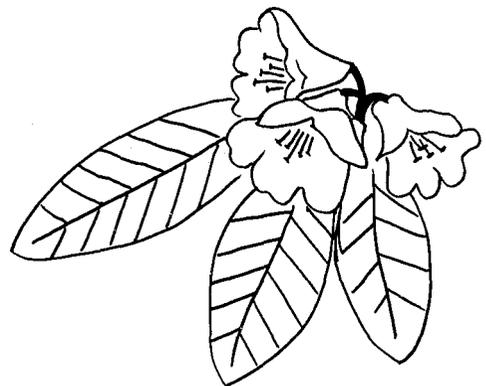
隊員間のチーム・ワークで心配するようなことは何も存在しなかった。71年の日本隊に多く起った隊員とシェルパとの間のトラブルについても、以下のような幸運もあって我々には無縁であった。チームの中心になる隊長、サーダー、リエゾン、オフィサーが前年のエベレスト・スキー探検隊で互に懇意であり、サーダーの我々の隊にかけた情熱と全シェルパの掌握力、前年の夏にサーダー、アシスタントサーダーと隊員とが交歓していたこと、また隊荷の到着を待つ10日間に、英語・ネパール語・日本語のチャンポンで互に用件が通じるようになっていたことなど、思わぬ好条件が重なってシェルパの不満が一度に爆発するようなトラブルを心配する必要はなかったのである。ただひとつ、装備係がヒマラヤンソサエティの規約を解釈ミスし、シェルパにサブザックを用意していなかったが、即座に隊員の私物の供出が決まり、問題にもならないことがあった。

### ◎ ポーターの賃上げ

遠征隊の“マネージメント”は国内のそれに較べてたいへん楽なものであった。ただ隊が持ち出した外貨は予算より2,500ドル少ないものであって、全体的に経費を切りつめる必要があった。全隊員の積極的な協力があって滞在費をはじめ人件費も節約できたが、帰路のキャラバンで大きなミスを出すことになった。

本来、キャラバンのすべての権限はサーダに任されたものであったが、キャラバンの行程が延びないため、前年の関西大学パーティーが採った請負制についてリエゾンオフィサーを仲介者としてポーターと直接交渉を行なった。その結果、話しの内容を彼らの都合のいいように結び合されて、それをたてにしてストの動きが起り、替りのポーターを集めるのが難しい地域であったため、賃上げを認めざるを得なくなり、約200ドルを無駄使いすることになった。

サーダーは彼なりに対策を考えていたのであったが、それを無視したように、彼の役割を忘れて直接交渉を行なったために起きたトラブルであった。



## 留 守 本 部

井 関 芳 郎

実行委員会の中心となり、計画をすすめてきたメンバーが隊員として出発するにあたり、留守本部の体制を整えた。遠征隊の緊急連絡先として、学士山岳会員の山田和彦氏宅に電報口座（SHINDAI HIMALAYA、MATSUMOTO）を設け、同時に、事務局長代理の任にあたり、マネージャー会計担当代理として農学部の井関が当たった。さらに信州大学学生部厚生課内に連絡センターを設けた。実行委員会もそれ迄通り続けて定期的に開催することに決定した。

留守本部の仕事の具体的内容は、1) 資金調達及び支払い 2) 隊の行動に必要な国内においての諸手続 3) 隊との連絡及び隊の状況を関係者へ報告することが主な仕事であった。

1) 資金調達については農学部教官諸氏の御協力により、関係各方面に働きかけて多額の資金を集めることができた。又、遭難発生以後においては学内関係者、及び学士山岳会員より多額の援助を得る事が出来た。

2) 諸手続については、最も重要なことはリエゾン・オフィサー、シェルパの保険加入手続である。これは現地の隊がシェルパのブッキングが終了してからでないと手続がとれない。

3) 隊との連絡はほとんど手紙の往復である。カトマンズでは片道1週間位で連絡がとれるが、ベースに入ってしまうと早くも片道2週間はかかった。それに往復で1ヶ月もかかる故、手紙の行き違いも多く意志もうまく伝わらなかった事もあった。又、行方不明になった手紙も何通もあった。

緊急の場合には、電報、電話を利用したが、電話が通じるところならば電話の方が良い。料金もそれ程大きな開きがなく、又ローマ字での電報はよくスペルが間違い、非常に読みづらいし、おのずと字数にも制限がある。複雑な場合には電話の方がよい。

隊の状況の報告については実行委員会席上、実行委員会ニュース、ヒマラヤ通信等で、学内関係者、及び学士山岳会員に通知した。

遭難発生時には、詳細報告等、後援会、大学関係者、一般、学士山岳会員、現役等全て関係者に配布した。

この様な仕事をして行くに当たり必要なのは留守本部間の密接な連絡であり、電話をフルに活用した。それにいつでも動けるといふ体制、機動力である。今回のように、松本、伊那、そして後半木曾福島と3ヶ所に分散した機能をつないだのは電話と、自動車であった。今回の留守本部において自動車がなかったら、機能は完全にマヒしていただろう。

留守本部のあり方として最も大切な事は、担当する者が計画の内容に深くタッチし、さらに会計（入金、支払い状況）について詳しく知っておく必要がある。又、実質的に動ける者が担当すべきであり、さらに出来得る事ならば計画段階から終了まで同一人物が任に当たるべきであり、その様な体制を組むべきである。

10ヶ月間と長かった留守本部であったが、大学関係者、現役部員、学士山岳会員のご協力によって大任を果たすことができたことをここに感謝いたします。



## そ の 他

キャラバンで感じたこと  
ネパール王国の教育あれこれ  
ネパール行を終えて考えること

市野和雄  
岡村知彦  
岡村知彦



## キャラバンで感じたこと

市野 和雄

160人近いポーターが列をなして歩く風景は、まさに壮観である。本や映画で見て、あこがれていたヒマラヤ遠征の大キャラバンの中に今自分がいることが、夢のように感じてポカラを出発した。今までは、ひたすらボッカでしごかれていた自分が「サーブ」と呼ばれ異国の人々であり、自分の祖父母、両親、弟妹のような年令の人々が荷を運んでくれる中を歩いていると何かとまどいを感じる。

民家にもぐりこんだり、数人が集まって夜をあかしたポーターが早朝どこからともなく集まって来る。サーダーを中心にシェルパ達が彼らを整理するために声を張り上げている。朝のキャンプ地は静かな自然の中でここだけがザワザワとして何とも言えない雰囲気である。

出発した時は、長蛇の列だったのが時間がたつにしたがって小グループに別かれ間隔が開いてくる。茶屋で茶を飲んだり、火をたいて食事の用意をしたり、昼寝をしたり、われわれが見るとのんびりやっている。覚えてのネパール語で早く行くように言ってみるが、いっこうに反応がなく、反対にからかわれているようだ。こういうことはシェルパにまかせておくことにする。

われわれも茶屋へ入って休み、豆やトウモロコシをいってもらいたべた。時にはチャンを飲んだりして楽しいキャラバンを続ける。

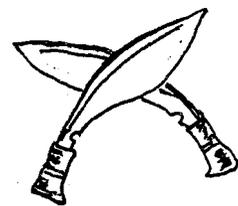
その昔、われわれの祖先が旅をした時もこんな調子であったのであろう。

1日の行動が終わり、何人かで鍋をかこんで簡単な食事をすませて笛を吹いたり、歌をうたっているのを聞くとまさにこれが彼らの生活なのだを感じる。

彼等は、われわれに雇われたポーターであるから賃金を支払ってあれば確実に荷を運んでくれるものと思いこんでいると、調子がくることがある。

何日間もいっしょに歩いていると親しみを感じて乏しい単語をならべたり、ふざけたりしていると、彼等はこれ幸いと思うのか、荷が重すぎるとか、賃金の値上げを要求してくる。言葉、習慣の違った異国の人々を使うむずかしさを感じる。やはり自分は気のいい日本人のようである。

もしこれらの人々がいなくなったら登山はどうなるのだろうかと思うと、これら遠く異国の人々に感謝したい気持ちである。



## ネパール王国の教育あれこれ

岡村知彦

教育制度が確立されてよりほぼ100年。今や中教審答申により第3の変革期を向えようとしている日本の教育界にも、その初期には暗中模索しながらも確約たる理念をもち情熱的にその対策に取り組んだ時期があったはずである。その情熱を私は今回のネパール遠征においてバザールの片すみで、あるいは神々の座の見おろす山腹の村々で、この肌でつかむことのできたことを感謝せねばなるまい。

ネパールの旅路に出る前、私は山田哲雄先生より、1959年飯田山岳会サルバチョメ遠征のころ、ネパールでは首都カトマンズに小学校が2校のみであり、教育の黎明期にあるむねお聞きし、貧しいアジアの後進国であるネパールにおいて、その変革やいかにと心を躍らせて渡航した。ネパールの教育に関しての文献は案外少なく、リード夫妻がその著書“Nepal in Transition”でネパール教育制度を記し、ヒラリーが、ヒラリスクール建設に関する本を出しているにすぎない。日本の教育者も相当数訪ねているものの、発表された文献の中には教育関係の論文は見あたらない。そこで、ごく短期間ではあったが、私が見聞きしたネパールの教育について、簡単にまとめてみようと思う。前述の文献をいまだ読んでいない私にとって、見当ちがいのところも多々あることと思うが、それは私の語学力の不足から来るものとして御容赦願いたい。

ネパールにおいて教育が一般国民に開放されたのは、1950年のトゥリブバン国王による革命ののちであり、教育制度がきどうに乗ったのは、1959年のマヘンダラ国王による王様革命ののちである。約1000年以前より、仏教僧侶を中心として相当高度な教育がなされていたようであるが、詳しくは不明である。1920年代になってラナ家の宰相 チャンドラ・シャムシェルによる初の国立高等教育機関であるトゥリチャンドラ・カレッジが設立され、インドで教育を受けたり、英国陸軍士官学校に留学する青年も増大したが、いずれも一部特権階級専用のものであり、一般国民は文字はもちろんネパール語さえも話せず、各部族の言葉が異なるため、国民の意志の疎通も満足にできかねる状態であったという。しかし、一部エリートのための教育であったとしても、次代をになう青年たちの育成をおしななかったということが、国家としての存続を失ったチベットとの一番大きな相違点であり、近代国家を設立したネパールの基盤となっていることは確かなようである。

ネパール王国には、現在ネパールスタイル、英国スタイル、それにダライラマ学校、ヒラリー学校などが存在する。また、後進国に大きく功献しているミッション系の学校は、キリスト教が現在ネパール王国で禁止されているためおもてだった活動はしていないようであった。英国スタイルのものは、インド上流階級の子弟が通学する学校を模倣した私立のものであり、カトマンズの上流階級の子弟が通学しているという。また、ダライラマ学校は、中共チベット地区よりの亡命者子弟がおもに通学する学校であり、米国の陰の援助で経営がなされ、ヒラリー学校は、エベレスト初登頂者エドモンド・ヒラリーが、独自に設立した学校であり、クムジェン、ポルツェ等エベレスト街道ぞいの村々に12校点在する。しかし、ネパールの大部分の児童は、全国に普及しつつあるネパールスタイルの学校に通学しているの

で、ここではネパールスタイルの学校教育を中心として記してみたいと思う。

ネパールスタイルの初中等教育システムは、

class 1, 2 エレメンタリー・スクール class 3, 4, 5 プライマリー・スクール  
class 6, 7 ミドル・スクール class 8, 9, 10 ハイ・スクールとなっており、

高等教育システムは、

class 11, 12 カレッジ(約12,000人在学) class 13, 14 バチュラー・  
コース(約8,000人在学) class 15, 16 マスター・コース(約500人在学)であり、  
それぞれ、文学、商学、法学、理学などの学部に分れている。

1965年度の統計によれば初等教育への就学率32%との結果がでていますが、現在、初等教育への就学率はめざましく、全国的には60~65%以上といわれている。ことに首都カトマンズにおいては80%以上といわれている。カトマンズでは、class 1~14まで数少ない校舎をフル回転し、モーニング・スクール(午前6時~9時)、デイ・スクール(午前10時~午後4時)、ナイト・スクール(午後6時~9時)の3部制という離れわざを実行している。就学率60~65%と低い原因には、ネパール王国においての女子教育の軽視と、チベット系国民の不参加があげられる。しかし、チベット系国民圏にもネパールスタイルの教育が滲透しつつあり、その範囲は、ネパール警察権のひろがりとはほぼ一致する。

この国においては、一応初等教育は義務づけられているものの、法的なすくばく力はあまりなく教育を受ける意志と経済力があれば誰でもが、教育を受けることができるというのがたてまえのようである。就学年齢も確とは定められてはおらず、5~7才になればclass 1の教育を受けられる。そして、原則として1年たてば進級するとし、その成績いかんによっては留年あるいはとび級進学が認められているようである。現に私のおとずれたポカラのハイスクールにおいても、class 8の学級において、12才の少年と18才の青年とが机を並べているという風景に接した。ハイスクールは、よほど奥地へおもむいても存在したし、カレッジも各地方の主要都市に数多く存在したが、バチュラーは全国で20校しかなく、ましてやマスターコースの学校は首都カトマンズにトゥリブバン大学1校しかなかった。日本ほどではないにしても、多くの浪人がいることは確かなようである。これら高等教育は、まさにネパール王国のエリートのための学校の感はまぬがれない。われわれ登山隊のリエゾンオフィサーであるハリ・ダス・ライ氏の言によると、ネパールの教育は一部特権階級に有利であり一般国民が有名校に入学するには、社会的(カースト制度)にも経済的にも、非常に困難であるとのことであった。マスターコース以後の高等教育機関であるドクターコースの学校はこの国にはなく、インドや英国、ソビエト、米国等に留学する向学心に燃えた青年も少なくないという。

学校で使用する教科書は、ほとんどが質素なものであったが、紙質が上等で印刷の美しいものは、米国の援助でできた本であるという。教科書が必要であれば、市街の本屋で簡単に入手することができるし、不要になれば本屋で引きとってくれる。子どもたちの多くは、この古本を使用しているようであった。カトマンズの目立った本屋で新しい教科書11冊(class 1~3のもの)を買い求めたが、1

5ルピー（1ルピー約30円）で入手することができた。学校で使用する教科書は各州でまちまちであるが、ガンダキ州のエレメンタリースクールでは、ネパール語。プライマリースクールでは、ネパール語、英語、数学、地理、歴史、科学、社会。ミドルスクールでは、ネパール語、ネパール文法、英語、英文法、サンスクリット、地理、歴史、代数、幾何。ハイスクールでは、ネパール語、ネパール文法、英語、英文法、サンスクリット、代算、幾何、法律、地理、歴史などの教科書を使用しているとのことであった。

ネパールの公官庁での半公用語である英語はclass 3から始まり、ハイスクールを終えるころには英会話、英作文はほぼ完全に修得しているという。帰路たち寄ったチサンクハイスクールにおいて、英作文のテストを見せてもらったが、シェークスピアについての高度なレポートができあがっていた。また、カレッジ以上の詳細は不明であるが、ポカラのカレッジで使用している歴史の教科書のひとつに、グルカ戦争当時のことを書いた「東インド会社とネパール」という英文のものがあり、内容は私のつたない語学力ではとうてい判明しかねる高度なしろものであった。このことを見ても文科系の教科、特に語学がいかにネパール教育の中で重視されているかがうかがえる。多くの部族の集合体であるネパール王国において、部族間の言語の不一致をネパール語によって統一し、国民の意志の疎通をはかり、近代国家としての体制をととのえることこそが、現教育の第1目標であることを考えれば、当然のことかもしれない。また、この第1目標が達成された時はじめて知育偏重の教育から脱皮し、美術、音楽、体育等現在ほとんど実行されていない教科にも目が向けられることと思われる。

学校に支払う月謝もまた各州によってまちまちであった。ガンダキ州においてはclass 1は1ルピー、class 2は2ルピーというように各classと同額の月謝を支払い、カレッジ以上になると30～50ルピーであったが、バグマティ州では、class 1～5は5ルピー、class 6～10は10ルピー、カレッジ以上は30～50ルピー程度ということであった。しかし、月謝の額に比べ、初中等教育の学校施設はおどろく程悪い。カトマンズ市街の学校をのぞけば、そのほとんどが石板をつみかさねた建物や、そまつなかやぶきの小屋であり、室内は窓が小さく照明道具もなくうす暗い。そのためか授業はもっぱら学校の近くの草原やチョウタレの木かげで教師を中心に連座にならんとすわり行っていた。たまに立派な校舎を見つけて聞いてみるとインドの援助でできたものであったが、室内には長いすと机がなくそれらが雑然と並んでいるだけで教具らしきものはほとんど見うけることができなかった。山間地へ行くと質素というよりは、物置小屋に近い学校が多くそれらのほとんどは尾根上の高台にあり、眼下の谷間より少年たちが校舎めがけて四方八方から集まって来る。15～20Kmも離れた遠方より通学している多勢の少年たちのいたのにはおどろかされた。

貧しいながらも全国に教育が普及しつつあるこの国において、教員資格はカレッジを出ると、class 1～10までの資格を得ることができるし、ハイスクールを出て2年間の訓練を受けて、class 1～5の資格を得ることもできる。しかし、教員の給与は日本同様低く、プライマリースクールの教員で150～400ルピー、ハイスクールの教頭で500～600ルピー、バチュラーの教授でさえ800～1,000ルピーにしかすぎず、役人の給与よりも大巾に低いため教員のなり手が少ないのが現状の

ようである。ネパールにおいて中産階級以上の生活をするには、他の後進国同様公官庁の役人になることであるという。しかし、役人の採用試験は、カレッジ以上の卒業生でなければ受験することができず、その門戸はせまい。

文明の灯は学校より広がるとの考えで、明治時代日本の青年たちが辺地の教師として活躍したと同様、今ネパールでも青年教師たちは学校を卒業してのち辺地へおもむく。「教育は財産である」との考え方がしだいにいき渡り、近い将来貧しいながらも目を輝やかせて勉学する少年たちが、近代国家ネパール王国を背負って立つことであろう。何ら資源をもたないこの国において、教育水準を高めることこそが国の繁栄をもたらすものであり、教育制度が完全普及しつつある今、教育にかけられた期待は大きい。



## ネパール行を終えて考えること

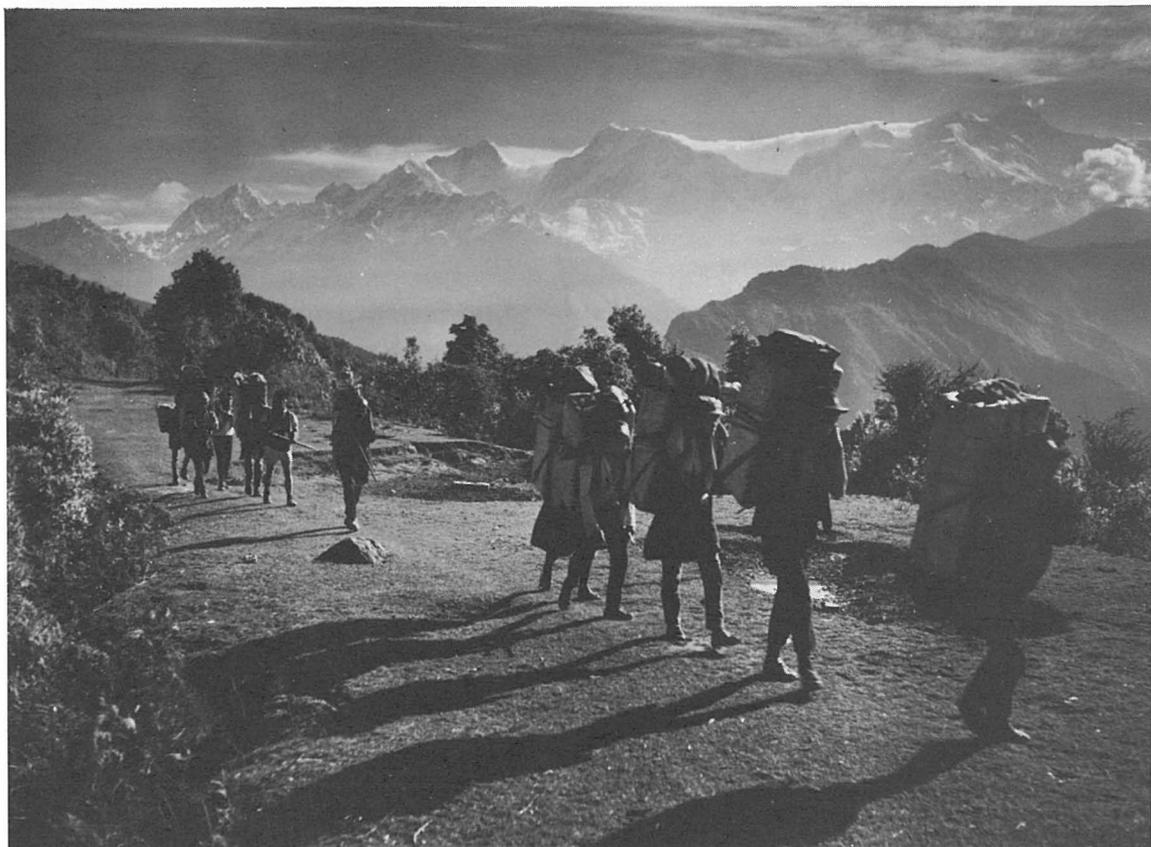
岡村知彦

プラチナに輝く太陽のもとで、大地ののた打つうねりは見はるかす彼方まで高く低く連なり、正に自然のかもしだす万里の長城を程している彼の地ネパール。繁栄と貧困とが入り混じりその生活用式も大地のうねり同様の複雑さを示す彼の地ネパール。私は一体何を得て彼の地よりもどってきたというのだろうか。

氷河より流れでる凍りつくような冷たさの乳白色の水、夜空にロンロンと輝やき手を伸ばせばとどくほどの数々の星、それとも、夜空に夜光虫の如くうごめく無数のホタルに代表される自然の美しさに対する感動か。雄大な神々の座、白き山々を背景にした峠の坂道を汗とあぶらとほこりとにまみれて行く旅人や、重荷にあえぎ目を血ばしらせてモクモクと歩くポーターたち。腰を曲げ、山腹の目もくらむ高さのたな田でくわをふるう農夫たちのかしゃくな自然の中で貧しくつつましくだが力強く生きぬく人々の姿に対する感動か。それとも、ヒマラヤの展望台ともいえる高台の校舎や、数百m切りたつ岩山の下、小川の流れるほとりのかやぶきの質素な建物の下で、ほろを紅潮させ勉学に励む愛くるしい子どもたち。都の雑とうの中で新聞やキャンディーを声高らかに売り、大人に優るとも劣らぬテキ屋ぶりを発揮する子どもたち。ナイトスクールの乏しい灯のもとで、瞳をクリクリさせ教科書や教師の顔をくい入るようにつめる子どもたちの秘められた熱情をか。

いや、これらさまざまな感慨や喜びや悲しみ、そして感謝をこめた今回の旅の糧となるような想い出も、私にとっては根無し草の旅人そのものがもたらす異国への単なる瞳けいの念でしかなく、紅葉の葉に輝る一しずくの水滴のようににはかないものでしかありえない。氷河をこの足で踏んでみたい、そして陽に輝やく青氷を見てみたい。ただその一念でくつをすりへらして街を歩き、金策に頭いたためて食費を切りつめもした。また夜をてっしての荷造りをし、目をショボつかせながらも友と語りあったこれらの情念こそが、私にとって今に残る玉石であったのかもしれない。とすれば、私にとっての意義ある旅そのものは、羽田の別れの窓からガラスごしに日本の国を見た時そのほとんどが達成されていたことになり、彼の国での行為思索そのものはぬけがらの私の行為思索であり全て未消化のものといっても過言ではあるまい。

いずれにせよ過去と未来の交叉する国に、感傷旅行となろうとも、またアドベンチャーの心を満たすための自慰的旅行になろうとも、過去の私の行為思索を私自身のもとするために彼の国ネパールへ再び出かけようとする浮気の虫が、心の中でうごめいていることだけは確かなようである。今度、別れの窓からガラスごしに日本の国を見た時、一体どのような感慨が心の中をきよ来することだろう。



# 遠 征 日 誌

遠征隊の記録  
學術調査隊の記録



## 遠 征 隊 の 記 録

2月7日 晴

先発隊、松尾、佐藤の2名、羽田出発、大勢の見送りを受ける。バンコック泊。

2月8日 晴

先発隊2名、カルカッタ経由カトマンズ入り。ヒマラヤンソサエティへ挨拶。

2月9日 晴

先発隊2名、日本大使館へ挨拶、ネパール政庁登山局へインポートライセンスの申請および、ウォーキートーキーの使用許可申請をする。

2月11日 晴

中発隊、西郡、扇能、山下の3名、羽田出発、松本登山会本隊、県稜山岳会先発隊と同乗となる。ダッカ泊。

2月12日 晴

- 先発隊2名、商工省でインポートライセンスを取得する。
- 中発隊3名、カトマンズ入り。ヒマラヤンソサエティへ挨拶。

2月13日 晴

- 先発隊、松尾、佐藤の2名、カルカッタへ出発、午後、通関業者と会い必要書類を提出する。
- 西郡、サーダーと同行するシェルパの確認を行う。予定よりシェルパ1名増となる。

2月15日 晴

- カルカッタ組2名、日本領事館へ挨拶、午後、在インドネパール領事館へBフォームの申請をしに行く。
- 西郡、ヒマラヤン・ソサエティとシェルパ雇用についての契約、手数料の支払い完了、シェルパとの契約を開始した。

2月16日 晴

- カルカッタ組、税関へ行く。隊荷が本日カルカッタに到着、三井O・S・K(株)の駐在事務所長 東氏を訪問。通関のアドバイスを受ける。
- カトマンズ組、ウォーキートーキーのインポートライセンス取得、登山局より、リエゾンオフィサー(連絡将校)の決定通知を受ける。現地食糧の買出しを始める。カルカッタより隊荷出発19日か20日の予定の電報が入る。

2月17日 晴

- カルカッタ組、松尾は特別天気予報の件で日本領事館と打合せ。佐藤は隊荷の陸揚げの確認に港へ行く。
- カトマンズ組、酸素ボンベ等の装備をホテルへ移す。シェルパとの契約はすべて完了。

### 2月18日 晴

○カルカッタ組、カルカッタ税関へ行くと、トラック輸送が禁止されたとの報を受け、今後の対策をどのようにするか問題となる。

○カトマンズ組、装備、食糧等のポカラ輸送のブッキングをする。

### 2月19日 晴

○カルカッタ組、トラック輸送禁止の真疑を確認に1日中飛びまわる。

○本隊、片岡、堀、森田、岡村、宮崎、市野の6名カトマンズ入り。

シェルパ全員と対面式を行う。

### 2月20日 晴

○カルカッタ組、松尾はエージェントの社長と一諸に、カルカッタ税関のネパール局長に会い、トラック輸送特別許可書の交付を求めるが、中央政府の許可書がなければ駄目との回答を得た。インド共和党首暗殺される。

### 2月21日 晴

○カルカッタ組、松尾、ニューデリーへ行きトラック輸送許可書を取るべく、航空券の手配をする。

○カトマンズ組、扇能、山下、アン・ヌルブ(ルクラ)、アン・リタ、アン・チョタレー、コック・ヌルブ、パサン・テンバ、ドルジェ、パサン・リタの9名、ポカラへ出発、残り全員でトレッキング・ビザの取得と、空輸隊荷のインポートライセンスの取得を行う。

### 2月22日 晴のちスコール

○カルカッタ組、暗殺事件の結果、西ベンガルはゼネストに突入、終日、ホテルで雑談。

### 2月23日 晴 カルカッタ・スコール有り

○カルカッタ組、松尾、ダムダム空港でキャンセル待ちをする。空席なし。

○カトマンズ組、片岡、堀、森田、岡村の4名、ポカラへ出発。

### 2月24日 晴

○カルカッタ組、松尾、キャンセル待ち、空席なし。佐藤、カルカッタ税関でトラック輸送の特別許可書入手。最速、カトマンズへ連絡をとる。

### 2月25日

○カルカッタ組、松尾、デリーへ出発、到着後、日本大使館へ挨拶、鈴木書記官が明日インド政庁へ同行して下さるとの確約をとる。

○カトマンズ組、ポカラへの隊荷輸送のブッキング終了。西郡、佐藤よりのトラック輸送許可の報を受ける。

### 2月26日 晴

○松尾、日本大使館で、佐藤よりの特別許可取得の電報を受ける。

### 2月27日 晴

○松尾、オールインディア放送局および気象台へ行き、特別天気予報の依頼をする。

夜、カルカッタ着

佐藤、カルカッタ税関のクレートのオープニングとシーリングとに立合う。無事終了。隊荷の一部、トラックでノータンワへ向う。

**3月1日 晴**

。カルカッタ組、日本領事館、三井O・S・Kへお礼の挨拶、ネパールキャリアヘトラック輸送の値段交渉に行く。夜、佐藤、トラックに乗り、ノータンワへ出発。

。カトマンズ組、西郡、市野、ギルミ・ドルジェ、ペンバ・ヌルブ、アン・ヌルブ(パンボチェ)、ハクパ・ツェリン、ペンバ・ツェリン、アン・ヌルブ(ポルツェ)、ナワン・チョタ、の9名、ポカラへ向う。ヘッド・ナイケのアムド・ケサン氏と会い、ポーター雇用について協議。ポーター賃は1日15ルピーと決定する。

**3月2日 晴**

。佐藤、トラック、パटनाに到着。

**3月3日 晴**

。松尾、カトマンズ着、宮崎、アン・ペマと再会、バイラワへの飛行機の予約をする。

。佐藤、チャプラへ到着。

**3月4日 晴**

。佐藤、夜、ゴラクプールを経て、ノータンワに到着。約1,200kmを4日で走破。

**3月5日 晴**

。カトマンズ組、日本大使館で、トラック輸送等の情報を報告する。後、セーリング・タックスの確認にネパール政庁へ行く。

。ポカラ組、西郡、リエゾンオフィサーの2名、隊荷通関のためバイラワへ向う。

**3月6日 晴**

。松尾、宮崎、アン・ペマの3名、バイラワ着、最速、国境税関へ行き、インド側ノータンワの税関へ、アン・ペマを迎えにやる。佐藤、ネパール入り。再会を喜び会う。

**3月7日 晴**

。バイラワ組、4名でノータンワの事務所へ通関のため行くも、Bフォーム未着のため、通関できず。午後、宮崎、連絡のためポカラへ向う。西郡、リエゾンオフィサーの両名と再会する。

**3月8日 晴**

。今日も通関できず。イライラする。

**3月9日 晴**

。バイラワ組、全員でノータンワの実力者の家へ隊荷輸送の助力を依頼に行く途中で、Bフォーム到着、早速、通関体制に入るが今日中は無理とのことで、またガッカリする。西郡、ポカラへ向う。

**3月10日 晴**

松尾、リエゾンの2名は通関に、佐藤、アン・ペマは野菜の買出しに走りまわる。通関終了後、2台

のトラックに便乗してポカラへ向う。タンセンにて泊る。

**3月11日 晴**

11時、トラック、ポカラ空港前のヒマラヤンホテルへ到着。隊員、シェルパの総出の出迎えを受ける。早速、再梱包を開始する。

全員が初めて、顔を揃えた。

**3月12日 晴**

今日も、再梱包に追われる。ポーターの担荷量を1人35kgとする。

**3月14日 晴**

先発隊、片岡、松尾、岡村、山下、アン・ヌルブ(ルクラ)、ペンバ・ツェリン、それにキッチンボーイのバサン・テンバ、ユン・ドゥン、ポーター11名の計19名アンナプルナⅡ峰のルート偵察のため出発する。マディ・コーラ岸のコイレまで行く(16:35)

**3月15日 晴**

○先発隊、コイレ(7:20)ーセト・パイロ・コ・バンヂェン(10:55)ーウルディ・コーラ岸のカラブ(14:10)

○本隊、終日再梱包

**3月16日 晴**

○先発隊、カラブ(7:10)ーツァブ・バンヂェン(9:40)ーミダム・コーラのつり橋(11:10)ーマリン(15:55)

○本隊、西郡、堀、森田、宮崎、扇能、佐藤、市野、リエゾンオフィサー、ギルミ・ドルジェ以下シェルパ8名、コック1名、キッチンボーイ2名、メイルランナー1名、ポーター141名の総勢161名の大キャラバンである。

ポカラ(9:00)ーベグナス・タール(14:30)

**3月17日 晴**

○先発隊、マリン(7:30)ーマーシ・チョウタレ峠(9:15)ーブルマ・コーラ(11:30)ークディ(14:10)ーブルブレ(15:30)

○本隊、ベグナス・タール(7:15)ーサルカ・バスーカラパタール(15:30)

**3月18日 晴**

○先発隊、ブルブレ(7:00)ーバウダラ(11:40)ーシャンギ(15:30)

○本隊、カラパタール(7:10)ーミダム・コーラ(12:15)ーナルマ(15:30)

**3月19日 晴のち雨のちくもり**

○先発隊、シャンギ(7:05)ージャガット(7:50)ータール(14:50)

○本隊、ナルマ(6:40)ーバグルン・パニ(10:40)ークディ(15:45)

**3月20日 晴のち雪**

○先発隊、タール(7:05)ートンジェ(9:20)ーバガルチャップ(13:00)ーティマン・カ

ルカ(15:30)

◦本隊、クディ(6:30)ーブルブレ(7:00)ーバウンダラ(14:30)

3月21日 晴のち曇

◦先発隊、ティマン・カルカ(7:05)ーチャーメ(10:10)ータータン(14:30)ーピサン  
盆地手前(15:30)偵察B・Cとする

◦本隊、バウンダラ(7:00)ーシャンギ(9:00)ージャガット(14:30)

3月22日 晴のち曇

◦先発隊、アンナプルナⅡ峰北東稜の東面の谷の偵察。

◦本隊、ジャガット(7:00)ータール(11:45)

3月23日 晴のち曇

◦先発隊、全員休養日。

◦本隊、タール(7:30)ーダラパニ(9:30)ートンジェ(10:30)ーバガルチャップ(15:15)

3月24日 晴のち曇

◦先発隊、片岡、松尾、アン・ヌルブ(ルクラ)、ペンバ・ツェリンの4名は北東稜と中央稜の偵察のため、ピサンピークへ登る。高度約4,000m、岡村、山下、キッチンボーイ2名は休養。

◦本隊、バガルチャップ(6:30)ーティマン・カルカ(8:00)ーチャーメ(15:15)

3月25日 晴のち曇

◦先発隊、片岡、ペンバ・ツェリンの2名はサラタン・コーラへB・Cの場所の偵察。松尾、アン・ヌルブ(ルクラ)は中央稜の偵察。高度約4,500mまで登る。

その後、本隊のキャンプ地まで行く。

◦本隊、チャーメ(7:30)ータータン(10:30)ーピサン(16:00)

全員集合し、ルートの協議をする。

3月26日 曇のちにわか雨

ピサン(7:00)ーB・C(9:30)やっとB・Cに到着した。隊員、シェルパ達も嬉しそう。山下、ペンバ・ツェリンの2名はC<sub>1</sub>へのルート偵察。

3月27日 晴のちにわか雪

昼すぎ、偵察B・Cで休養していた岡村がB・C着。これで全員が揃った。各係はこれまでのまとめと、今後の準備を進める。

3月28日 晴のちにわか雨

隊員8名、シェルパ9名にてB・Cからの第1日の行動を開始する。サラタン谷左岸をルートに取り、途中小滝をトラバースして草付き混りの斜面を進み、標高4,000m付近から本格的積雪をみるようになり、約4,500mのアンナⅣ峰からの派生尾根の末端の台地をC<sub>1</sub>と決めて荷をデポする。

今日現在で我々の陣容は隊員11名、シェルパ(サードーを含む)10名、コック1名、キッチンボー

イ3名、シェルパ用キッチンボーイ1名、マイル、ランナー2名、ウッド・ポーター3名で合計31名となった。

**3月29日 曇のちにわか雪**

調子の悪い岡村と報道担当の堀を残し、他全員で荷上げ。

**3月30日 晴のちにわか雪**

隊員、シェルパ全員でC<sub>1</sub>への荷上げを行なった後、隊員2名、シェルパ4名、計6名C<sub>1</sub>入り。

**3月31日 晴**

- C<sub>1</sub> 6名、C<sub>2</sub> 偵察と荷上げを兼ねて、C<sub>1</sub> から往復。
- B・C 全員、C<sub>1</sub> へ荷上げ往復。

**4月1日 晴**

- C<sub>1</sub> 6名、C<sub>2</sub> の予定地往復。
- B・C 休養。

**4月2日 晴のち曇**

- C<sub>1</sub> 6名停滞。
- B・C 隊員3名、シェルパ3名C<sub>1</sub> 入り、残りはC<sub>1</sub> の荷上げ往復。

**4月3日 晴のち曇**

- C<sub>1</sub> 6名C<sub>2</sub> 入り。隊員3名、シェルパ3名C<sub>2</sub> への荷上げ往復。
- B・C 隊員3名、シェルパ3名C<sub>1</sub> への荷上げ往復。

**4月4日 晴・曇のち小雨**

- C<sub>2</sub> 6名、アンナプルナⅡ峰北面の氷河を5,800mまでつめ、ルート偵察を行う。
- C<sub>1</sub> 隊員5名、シェルパ3名はC<sub>2</sub> への荷上げ往復。
- B・C 隊員3名、シェルパ3名、C<sub>1</sub> への荷上げ往復。

**4月5日 晴・曇のち小雨**

- C<sub>2</sub> 5,800mまでのルート工作。
- C<sub>1</sub> 隊員3名C<sub>2</sub> 入り、隊員2名、シェルパ3名休養。
- B・C 隊員4名、シェルパ3名C<sub>1</sub> への荷上げ往復。

C<sub>3</sub> のルートはアイス・フォールの取りつき地点が予想より悪い。B・C～C<sub>1</sub> 間の小滝の部分が雪融けで悪くなり、別に氷の部分にルート修正を行う。

**4月6日 晴・曇のち小雨**

- C<sub>2</sub> 隊員2名、シェルパ4名休養のためB・Cへ下る。
- C<sub>1</sub> 5名C<sub>2</sub> へ荷上げ往復。
- B・C 全員休養。

**4月7日 晴のち曇**

- C<sub>2</sub> 隊員3名C<sub>3</sub> へのルート工作。

- C<sub>1</sub> シェルパ2名C<sub>2</sub>入り、隊員2名、シェルパ1名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。
- B・C 隊員1名、シェルパ3名C<sub>1</sub>入り、隊員3名C<sub>1</sub>へ荷上げ往復、昨日、C<sub>2</sub>より下った隊員2名、シェルパ4名は休養。

#### 4月8日 晴のち曇

- C<sub>2</sub> 隊員3名、シェルパ2名5,800m地点に仮のC<sub>3</sub>を建設するための荷上げ。
- C<sub>1</sub> 隊員3名、シェルパ4名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。
- B・C 隊員3名C<sub>1</sub>への荷上げ往復。

#### 4月9日 晴のち曇のち雪

- C<sub>2</sub> 隊員3名仮C<sub>3</sub>入りする。シェルパ2名それをサポートしてC<sub>2</sub>に帰る。昨夜、ブロック崩壊があり、その余波で仮C<sub>3</sub>の8人用ミッド型テントのポールが折れたとの連絡、修理して使うことにする。
- C<sub>1</sub> 隊員2名C<sub>2</sub>入り、隊員1名、シェルパ3名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。
- B・C 隊員3名、シェルパ4名、キッチン・ボーイ2名C<sub>1</sub>入り。隊員2名荷上げ往復。

#### 4月10日 曇・晴のち再び曇

- 仮C<sub>3</sub> 隊員3名、更に上部の工作に向う。しかし、昨夜起ったらしいブロック崩壊が雪崩を誘発してアイス・フォール全面にデブリを広げていたので、工作隊に指示して、これまでのルートのみならず、アンナプルナⅡ峯北面のアイスフォール帯はいずれもルートとして取れないことを確認して仮C<sub>3</sub>を撤収することにした。
- C<sub>2</sub> この崩壊の余波を受けて装備の一部を飛ばされたので、位置を移動することにした。

#### 4月11日 曇

- C<sub>2</sub> 隊員1名、シェルパ2名仮C<sub>3</sub>の撤収を行う。隊員3名、休養のためB・Cへ下る。
- C<sub>1</sub> 隊員2名、シェルパ4名C<sub>2</sub>入り、隊員2名、シェルパ4名休養。
- B・C 全員休養。

#### 4月12日 早朝雪のち曇

- C<sub>2</sub> 早朝の降雪で上部は表層雪崩の危険があるので停滞とする。隊員1名、B・Cへ下る。
- C<sub>1</sub> 隊員2名、シェルパ3名C<sub>2</sub>へ荷上げ往復、シェルパ1名C<sub>2</sub>入り。
- B・C 隊員3名、シェルパ3名C<sub>1</sub>へ荷上げ往復、残りは休養。

#### 4月13日 曇

- C<sub>2</sub> 隊員3名、シェルパ5名上部の新ルートの工作に向う。
- C<sub>1</sub> 隊員1名、シェルパ1名C<sub>2</sub>へ荷上げ往復、隊員1名、シェルパ2名B・Cへ往復。
- B・C 隊員5名C<sub>1</sub>へ荷上げ、ピサンより住民の代表と称する3名の男が訪れ、ボクシスの要求に来たが、ていねいにお断わりした。

#### 4月14日 曇

- C<sub>2</sub> 隊員3名、シェルパ5名上部のルート工作を行う。C<sub>3</sub>のメドがどうやらついた。

- C<sub>1</sub> 隊員1名C<sub>2</sub>入り、隊員1名、シェルパ3名C<sub>2</sub>へ荷上げ往復。
- B・C 隊員3名C<sub>1</sub>入り、隊員1名、シェルパ3名C<sub>1</sub>へ荷上げ往復。隊員1名マナンへ行く。残りは休養。

#### 4月15日 曇・晴・一時雪

- C<sub>2</sub> 隊員4名、シェルパ5名C<sub>3</sub>予定地(6,300m)までルート工作を終える。
- C<sub>1</sub> 隊員3名C<sub>2</sub>入り、隊員1名、シェルパ3名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。
- B・C シェルパ2名C<sub>1</sub>入り、隊員1名、シェルパ1名C<sub>1</sub>への荷上げ往復。

#### 4月16日 曇時々晴一時雪

- C<sub>2</sub> 全員、休養、LPガスのチェックを行う。隊員1名、シェルパ1名B・Cへ下る。
- C<sub>1</sub> シェルパ2名C<sub>2</sub>へ荷上げ往復。残り休養。
- B・C 全員、休養。

#### 4月17日 雪

- C<sub>2</sub> 全員、停滞。
- C<sub>1</sub> シェルパ1名歯痛のためB・Cへ下る。隊員1名つきそいで下る。
- B・C 全員、停滞。

#### 4月18日 雨・雪

- C<sub>2</sub> 隊員6名、シェルパ4名C<sub>1</sub>へ下り、再びC<sub>2</sub>へ荷上げを行う。
- C<sub>1</sub> シェルパ2名C<sub>2</sub>入り、シェルパ2名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。
- B・C 全員、停滞。

#### 4月19日 雪

- C<sub>2</sub> 全員、停滞、積雪60cm
- C<sub>1</sub> 全員、停滞、積雪40cm
- B・C 全員、停滞、積雪20cm

昨夜半から本降りになった雪は今朝になっても止む気配なく、全キャンプ停滞、C<sub>2</sub>から今後にはそなえて、燃料節約の意味で薪を使っているB・Cへ下山したい旨連絡があった。

#### 4月20日 雪のち曇のち雨

- C<sub>2</sub> 全員、停滞、今日も雪である。
- C<sub>1</sub> 全員、停滞。
- B・C 隊員4名、シェルパ2名ラッセルを兼ねて荷上げを行う。隊員1名C<sub>1</sub>入り。各沢にはデブリが押し出し、積雪の大量さに目をみはった。

#### 4月21日 晴のち雨

- C<sub>2</sub> 全員B・Cへ下る。この3日の降雪で上部での行動はちょっと無理であった。
- C<sub>1</sub> 全員B・Cへ下る。
- B・C 全員、停滞、久方振りにB・Cに全員が顔を揃えた。

**4月22日 雪・晴・雨**

- B・C ゴブキを一通り殺して、久しぶりに動物性蛋白質が豊富、相変わらず天候は不順である。

**4月23日 晴・雨・雪**

- B・C 今日も停滞、テントの中はツーン・テン・ジャックのトバク場にかわってしまった。

**4月24日 曇・時々晴**

- B・C LPガスの節約のためC<sub>1</sub>へ隊員10名、シェルパ9名で薪を荷上げた。

**4月25日 晴・風強しのち曇**

- B・C 隊員5名、シェルパ9名C<sub>2</sub>まで登る。久しぶりの晴天は実に気持ち良い。隊員2名はC<sub>1</sub>入り、隊員4名、シェルパ2名はC<sub>1</sub>までの荷上げ往復。

**4月26日 晴**

- C<sub>2</sub> 隊員5名、シェルパ8名C<sub>3</sub>までのルートの再開に奮闘する。1mのラッセルに苦労させられた。雪崩で流されたと思っていたC<sub>3</sub>のデボは無事であった。

- C<sub>1</sub> 隊員2名C<sub>2</sub>へ荷上げ往復。

- B・C 全員、休養。

**4月27日 晴**

- C<sub>2</sub> 隊員5名、シェルパ8名C<sub>3</sub>へのルート工作と荷上げ往復。

- C<sub>1</sub> 隊員2名C<sub>2</sub>へ荷上げ往復。

- B・C 隊員2名、シェルパ2名C<sub>2</sub>へ登る。隊員1名はC<sub>2</sub>まで登りC<sub>1</sub>入り、シェルパ1名C<sub>1</sub>入り、残りは休養。

**4月28日 晴・曇・一時雨**

- C<sub>2</sub> 隊員4名、シェルパ2名C<sub>3</sub>入り。隊員8名、シェルパ7名C<sub>3</sub>への荷上げ往復。

- C<sub>1</sub> 隊員2名C<sub>2</sub>入り、隊員1名、シェルパ1名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。

- B・C 全員、休養。

**4月29日 晴**

- C<sub>3</sub> 隊員4名、シェルパ2名C<sub>4</sub>までのルート工作と荷上げ往復。

- C<sub>2</sub> 隊員5名、シェルパ5名でC<sub>3</sub>への荷上げ往復、シェルパ8名C<sub>3</sub>入り。

- C<sub>1</sub> 隊員1名、シェルパ1名C<sub>2</sub>への荷上げ往復。

- B・C 全員、休養。

**4月30日 晴・曇**

- C<sub>3</sub> 隊員4名、シェルパ5名で上部のルート工作、約6,800mまで登る。

- C<sub>2</sub> 全員、休養、隊員2名体調悪くB・Cへ下る。

- C<sub>1</sub> 隊員1名C<sub>2</sub>入り、シェルパ1名B・Cへ下る。

- B・C 全員、休養。

### 5月1日 晴

- C<sub>3</sub> 隊員2名C<sub>4</sub>入り、隊員2名、シェルパ5名はC<sub>4</sub>までの荷上げ往復。
- C<sub>2</sub> アタック隊員2名、シェルパ2名C<sub>3</sub>入り、隊員2名、シェルパ3名C<sub>3</sub>への荷上げ往復。
- B・C 隊員1名C<sub>2</sub>入り、残りは休養。

### 5月2日 晴

- C<sub>4</sub> 隊員2名主稜線までのルート工作の後、C<sub>3</sub>へ下る。
- C<sub>3</sub> アタック隊員2名、シェルパ6名C<sub>4</sub>入り、隊員2名、シェルパ1名C<sub>2</sub>へ下る。
- C<sub>2</sub> 隊員2名、シェルパ2名C<sub>3</sub>入り。
- B・C 全員、休養。

C<sub>4</sub>は結局、アンナプルナの主稜線まで伸びなかった。最終アタッカーとして、佐藤隊員、サーダーのギルミ・ドルジェの2名を決定。サポートは松尾隊員とペンバ・ヌルブとなった。

### 5月3日 晴

- C<sub>4</sub> アタック隊、佐藤隊員とサーダーは最終キャンプ入り、隊員1名、シェルパ5名は荷上げ往復。
- C<sub>3</sub> 隊員1名、シェルパ1名C<sub>4</sub>へ荷上げ往復、残りは休養。
- C<sub>2</sub> 全員、休養。
- B・C 全員、休養。

最終キャンプの建設は、主稜線上可能な限りⅡ峰よりに作るようになっていた。結局、7,300mの地点に建設できた。

### 5月4日 晴・風強し

- C<sub>5</sub> 佐藤隊員、サーダーの両名頂上アタックに向う。7,800mまで到達したが、登頂できず、C<sub>5</sub>へ引き返す途中、疲労により歩行困難となり再三スリップする。サーダーは佐藤隊員を確保の後連絡のため単身C<sub>5</sub>へ。かろうじて帰着。（詳細は遭難報告を参照）
- C<sub>4</sub> 松尾隊員、ペンバ・ヌルブの両名C<sub>5</sub>入り、サーダーの報告により救援に向うが、救助できず。シェルパ2名C<sub>2</sub>へ下る。
- C<sub>3</sub> 宮崎隊員、山下隊員C<sub>4</sub>入り、市野隊員は待機。西郡隊長、体調悪くC<sub>2</sub>へ下る。
- C<sub>2</sub> 片岡副隊長C<sub>3</sub>入り、扇能隊員待機、シェルパ1名C<sub>3</sub>入り、森田隊員C<sub>1</sub>へ連絡に下り、再びC<sub>2</sub>に戻る。
- B・C 堀隊員、岡村隊員は待機。

### 5月5日 晴・風強しのち曇

- C<sub>5</sub> 松尾隊員、ペンバ・ヌルブの両名は佐藤隊員の遭難現場の確認に行く。姿は何処にも確認できなかった。サーダー、ペンバ・ヌルブはC<sub>3</sub>まで下る。松尾隊員はC<sub>4</sub>まで下る。
- C<sub>4</sub> 隊員2名、シェルパ2名C<sub>5</sub>まで往復。
- C<sub>3</sub> 隊員1名C<sub>4</sub>入り、隊員1名、シェルパ3名C<sub>4</sub>まで往復。

- C<sub>2</sub> 隊員 2 名、シェルパ 1 名 C<sub>3</sub> まで往復、隊員 1 名、シェルパ 2 名 C<sub>1</sub> へ往復。
- B・C 隊員 1 名、シェルパ 1 名 C<sub>1</sub> まで往復。

5月6日 晴のち曇

- C<sub>4</sub> 隊員 4 名、シェルパ 2 名 C<sub>3</sub> まで下る。
- C<sub>3</sub> 隊員 1 名、シェルパ 4 名 C<sub>4</sub> まで往復荷下げを行う。シェルパ 2 名 C<sub>2</sub> へ下る。
- C<sub>2</sub> 隊員 1 名、シェルパ 2 名 C<sub>3</sub> まで往復荷下げを行う。隊長、今後の打合せのため B・C へ下る。
- B・C 隊員 1 名、シェルパ 1 名 C<sub>1</sub> まで往復。

5月7日 晴のち小雨

- C<sub>3</sub> 隊員 2 名、シェルパ 5 名 C<sub>4</sub> の往復荷下げを行い C<sub>2</sub> まで下る。隊員 3 名 C<sub>2</sub> まで下る。
- C<sub>2</sub> 隊員 1 名、シェルパ 3 名 C<sub>3</sub> まで往復荷下げを行う。シェルパ 2 名 B・C へ下る。
- B・C 隊員 1 名、シェルパ 2 名 C<sub>1</sub> まで往復荷下げを行う。

5月8日 小雨

- C<sub>2</sub> 隊員 5 名、シェルパ 8 名 C<sub>1</sub> までの往復荷下げを行う。隊員 2 名 B・C へ下る。
- B・C 隊員 2 名、シェルパ 3 名 C<sub>1</sub> までの往復荷下げを行う。

我が隊とガンガプルナ隊のリエゾン・オフィサーによって、アタック当日の行動についてサーダーから当日の様子の聴取が行なわれた。

5月9日 曇時々晴

- C<sub>2</sub> 隊員 1 名、シェルパ 4 名 C<sub>3</sub> の往復荷下げを行った後、B・C へ下る。隊員 4 名、シェルパ 5 名 B・C へ下る。
- B・C 隊員 2 名、シェルパ 2 名 C<sub>1</sub> までの往復荷下げを行う。

全員 B・C に集結した。

5月10日 晴・雪・雨

全員で約 4,000 m の通称「ランチのコル」まで佐藤隊員のケルンを建てるため登る。C<sub>1</sub> 以上はすっかりガスの中であった。

5月11日 雨時々曇

帰途のキャラバンの準備、再梱包に忙しい。遭難の詳細をできるだけ早く報告するために帰路も先発と本隊に分けることにした。昨日につづいて今遠征登山の反省会を開く。

5月12日 曇時々小雨

- 先発隊 ポータのサボタージュのため B・C からピサンまでしか行けなかった。かわりのポータも見つからず、ピサン泊りとする。
- 本隊 一日中、再梱包に追われる。

5月13日 晴のち曇

- 先発隊 ピサン—チャーメ 西郡、堀、松尾、宮崎、市野、シェルパ 3 名、ポーター 14 名。

○本隊 B・C — チャーム 片岡、森田、岡村、扇能、山下、シェルパ11名、ポーター56名。  
先発隊と本隊がチャームのチェック・ポストで合流してしまった。

5月14日 雨・曇

○チャーム — バガルチャップ

5月15日 曇・晴

○バガルチャップ — タール

途中、トンジェのチェック・ポストに立ち寄る。昨夜ラジオでわが隊の事故、登頂失敗、撤収のニュースを聞いたということであった。

5月16日 晴のち雨

○タール — シャンギ

久しぶりの晴天を得た。ポーターに賃上げの要求をしようという不穏な働きがあるらしい。

5月17日 晴・夜になって雷

○シャンギ — ブルブレ

案の上、賃上げの要求が出た。彼等の要求はなんと、18ルピー×10日である。出発の準備を終ったあとなので始末が悪い。B・C出発時に決められた、15ルピー×8.5日が大巾に崩れた。ポーターの入れかえができない土地であったので、涙を飲むより致しかたなかった。後日同じルートを通るであろうガンガブルナ隊、マナスル西壁隊に悪影響を与えることを心配した。夕食後、第2回目の反省会を開いた。

5月18日 晴

○ブルブレ — バグルン・パニ

マナスル三山がアーベント・ロートに輝き印象的であった。モンスーン近くなって、蛭が所々に顔を出すようになってきた。

5月19日 晴

○バグルン・パニ — カラパタール

標高もすっかりさがって、日中は涼を求めるところがない。強烈な日差しの中を進む。

5月20日 晴・夕方雷雨

○カラパタール — ベグナス・タール

暑くなって来たので、ポーター達の出発も早くなって来た。サルカ峠を通過してベグナス・タールの湖畔に幕営、明日はいよいよポカラである。

5月21日 晴・夕方雷雨

○ベグナス・タール — ポカラ

いよいよ帰路キャラバンの最終日、出発も早朝である。ポーターの足なみも早く、飛ばしに飛ばして11時前にポカラ飛行場近くのヒマラヤン・ホテルの庭に着いた。ポーターの支払いも済んだが最後にお茶代を請求されたが断った。70日振りのポカラはすっかり緑になってしまっている。夜、蚊がうる

さくて眠れなかった。

#### 5月22日 晴・夕方雷雨

朝から学術調査用資材、今後の遠征隊に譲り渡す装備、不用の装備類の仕分けと再梱包を行った。資材のデポはヒマラヤン・ホテルのアムド・ケサン氏に依頼することにした。

長い山行でお互に心が交い合うようになったシェルパも本日で解雇とする、なごりを惜んで夜遅くまでシェルパダンスに興じた。明日、先発隊がカトマンズへ飛ぶことになった。

#### 5月23日 晴

西郡隊長、森田、松尾、宮崎、岡村の5名とリエゾンオフィサー、学術調査に残るシェルパを除いた12名のシェルパが朝8時のフライトでカトマンズへ飛んだ。お世話になった坂本ドクター、A・P・セルチャン氏も見送りに来てくれた。

9時半カトマンズ着、早速、日本大使館に赴き、事故の報告とおかけした手数をお詫びする。死亡届と事故報告書を提出した。

日本への帰国には明日のフライトが一番早いというので、それで西郡、岡村の2名が帰国することになった。

#### 5月24日 晴

- 隊長は朝、日本大使館へ行き、根本大使にお礼を述べた。11時半、タイ航空で帰国の途につく。
- 宮崎、リエゾンオフィサーのライ氏はネパール外務省へ遭難の報告行く。その足で、ヒマラヤン・ソサエティーにも報告とお礼を述べた。
- 片岡、佐藤の遺品を持ってカトマンズ着。

#### 5月25日

- 片岡、宮崎は再度、日本大使館へ挨拶に行く。
- 松尾、森田は佐藤の遺品の発送手続を済ませる。

#### 5月26日

- 西郡、岡村、11半、羽田着、多数の出迎えを受ける。外務省情報文化局と日本山岳協会の事務所へ電話にてお礼と報告をしそのまま、松本へ直行、実行委員会の主要メンバーと会合、登山と遭難の報告、今後の計画について検討した。
- 松尾、宮崎、森田の3名は警視總監に招待され夕食会に行く。
- 片岡、日本大使主催の慰労会に出席。

5月27日以降の行動については、グループ毎に報告する。

### 1. 帰国隊員の行動

#### 5月27日

松本市で開かれた緊急実行委員会に出席、登山の報告、今後の対策について検討（西郡、岡村）

5月28日

長野市で、長野県山岳協会役員に帰国報告、長野県庁にて、後援をいただいた県の主要各位に帰国報告、報道関係者にも帰国報告をする。夜行で東京へ。(西郡、岡村)

5月29日

外務省領事課へ電話で報告、西郡は東京で実行委員長の赤羽と合流、福島市の佐藤家へ向う。岡村は信州大学学士山岳会東京支部の例会に出席、帰国報告。

6月6日

長野県山岳協会、遭難対策委員会に出席。(西郡)

6月10日

西郡、岡村の両名外務省へ、事故の報告と事後処理についてのお礼。除籍手続きについて確認。

6月11日

西郡、松尾の両名佐藤隊員の遺品をもって佐藤家へ行く。

6月12日

西郡、長野県山岳協会拡大理事会にて事故報告。

6月13日

西郡、信州大学学士山岳会理事会にて事故報告。

6月15日

佐藤隊員告別式、西郡、片岡、森田、松尾、岡村の5名出席。

6月20日

実行委員会、慰霊祭の準備にとりかかる。

6月26日

学術調査の今後の計画についての打合せ。(農学部)

7月11日

佐藤隊員慰霊祭(人文学部講堂)

## 2. 森田・松尾・宮崎

5月27日

森田、松尾、宮崎の3名は11時半のタイ航空でカルカッタ着。

5月28日

松尾、宮崎の両名は在カルカッタ日本領事館、三井O・S・Kの東氏に登山の報告とお礼を述べに行く。帰国のときの通関の件もあるので、エクスプレス・クリアリング・エージェンシーのゴーシェ社長にも挨拶に行く。

5月29日

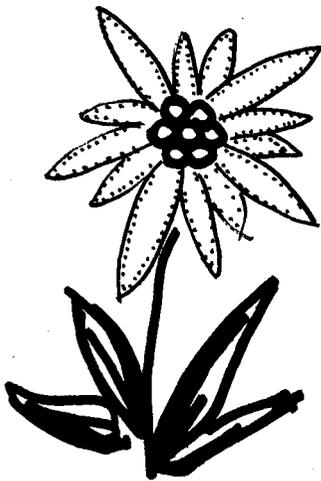
森田、松尾の両名は宮崎と別れ、シンガポール経由で帰国の途に着く。

5月31日

宮崎カルカッタ発カトマンズ着。

6月5日

森田、松尾の両名羽田着、佐藤の遺品を受け取る。



## 学 術 調 査 隊 の 記 録

### 宮 崎 隊 員

5月31日～6月16日

カトマンズ、ポカラにて、登山の残務整理および学術調査の準備

6月21日～7月10日

モディ・コーラおよびカリ・ガンダキへ扇能隊員と土砂の流出調査に向う。

7月11日～8月15日

ポカラ滞在、主としてポカラ盆地での調査活動。

9月11日～10月1日

カリ・ガンダキへ向う。山下隊員同行。

10月20日～11月2日

アンナプルナ学術調査ベースへ行く。

11月16日～11月25日

カトマンズにて隊荷の発送等の手続にあたる。

11月29日

扇能隊員と一緒に羽田着

### 堀 隊 員

5月25日～5月31日

マディ・コーラ源頭へ行き、南面よりアンナプルⅡ峯の登路の偵察を行う。同時に佐藤隊員の滑落した南面の写真撮影を行う。

6月1日～7月5日

ポカラ周辺にてメイガ類の天敵調査および昆虫採集を山下隊員と共に行う。

7月6日～7月27日

ティルケドンガ・ビルタンティ・ドビラ・ギジャンにて、メイガ類・昆虫採集を山下隊員と共に行う。

7月28日～8月7日

ポカラにて昆虫採集および採集品の整理。

8月21日～8月30日

カトマンズにて取材。

9月8日～9月28日

カリ・ガンダキ、ツクチェ周辺で扇能隊員と同行、昆虫採集を行う。

10月2日～10月8日

ポカラにて採集品の整理および帰国準備。

10月11日

羽田着

扇能隊員

5月27日～6月4日

マチャプチャレ学術調査ベースへ行く。主としてシャクナゲおよびサクラソウの調査を行なう。

6月21日～7月10日

モディ・コーラおよびカリ・ガンダキへ宮崎隊員と同行。

8月7日～8月16日

モディ・コーラへ気象観測ならびに植物採集調査に行く。

9月8日～9月28日

カリ・ガンダキ、ツクチェ周辺で堀隊員と同行、植物調査を行う。

10月20日～11月2日

アンナプルナ学術調査ベースへ宮崎隊員と同行。

11月6日～11月11日

マチャプチャレ学術調査ベースへ生体標本の採集に向う。

11月29日

宮崎隊員と共に羽田着。

山下隊員

5月26日～7月5日

ボカラ周辺にてメイガ類の天敵調査および昆虫採集を堀隊員と共に行う。

7月6日～7月27日

ティルケドンガ・ビルタンティ・ドビラ・ギジャンにて、メイガ類・昆虫採集を堀隊員と共に行う。

8月21日～8月30日

日本海外青年協力隊ラプティ農場附近にてメイガ類、昆虫の調査。

9月11日～10月1日

カリ・ガンダキへ向う。宮崎隊員と同行、昆虫採集を行う。

10月19日～10月30日

日本海外青年協力隊ラプティ農場周辺にてメイガ類、昆虫の調査。

11月13日

羽田着

市野隊員

5月26日～7月3日

ジュムラ目差してトレッキングに向う。ドルパタンにて1ヶ月滞在、チベット語の研究を行う。

7月21日

羽田着。

# NHESU '71 行程表 №.1

月日	天気 (B・C)	B・C 3,500m		B 1 4,500m		C 2 5,200m		C 3 6,200m
3 ・ 26	⊙ ⊙ ● =	全BC入り	山⑨					
27	⊙ ⊙ ⊗ =	全 Stay						
28	⊙ ⊙ ●	圃圃圃② ⑪⑫⑬⑭	西片森宮山佐市 ③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩		松①			
29	⊙ ⊗ = ⊙	圃⑪⑫⑬⑭	西片森松宮圃圃山佐市 ①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩					
30	⊙ ⊙ ⊗ =	⑪⑫⑬⑭	松佐①②③⑥ 西片圃森宮圃圃山 ④⑤⑦⑧⑨⑩					
31	⊙ ⊙ ⊙	⑪⑫⑬⑭	西片圃森宮圃圃山 市④⑤⑦⑧⑨⑩		松佐①②③⑥			
4 ・ 1	⊙ ⊙ ⊙	他全 Stay			松佐①②③⑥			
2	⊙ ⊙	⑪⑫⑬⑭	片圃市④⑦⑩ 西圃森宮圃山⑤⑧⑨	松佐①② ③⑥				
3	⊙ ⊙	圃⑪⑫⑬⑭	森山 西圃宮⑤⑧⑨		松佐①②③⑥ 片圃市④⑦⑩			
4	⊙ ● =	圃⑪⑫⑬⑭	西圃宮⑤⑧⑨		片森圃山市④⑦⑩		松佐①②③⑥	
5	⊙ ● =	⑪⑫⑬⑭	西圃宮圃⑤⑧⑨	森山④⑦ ⑩	片圃市		松佐①②③⑥	

# NHESU '71 行程表 №2

月 日	天 気 (B・C)	B・C 3,500m		C 1 4,500m		C 2 5,200m		C 3 6,200m
4 ・ 6	①  ● =	西 堀 宮 岡 ⑤ ⑧ ⑨ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭	← 松 佐 ① ② ③ ⑥		→ 森 山 ④ ⑦ ⑩	片 扇 市		
7	①  ◎	松 佐 ① ② ③ ⑥ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭	→ 西 ⑤ ⑧ ⑨ ← 堀 宮 岡		→ ④ ⑩ ← 森 山 ⑦		← 片 扇 市	
8	①  ◎	松 佐 ① ② ③ ⑥ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭	← 堀 宮 岡		→ 西 森 山 ⑤ ⑦ ⑧ ⑨		← 片 扇 市 ④ ⑩	
9	◎  ●	⑪ ⑬	→ 松 岡 佐 ⑫ ③ ⑥ ⑫ ⑭ ← 堀 宮		→ 森 山 ← 西 ⑤ ⑦ ⑧ ⑨		→ 片 扇 市 ← ④ ⑩	
10	①  ◎	⑪	← 堀 宮 ⑬	① ⑦ ⑫ ⑭	→ 西 松 岡 佐 ② ③ ⑤ ⑥ ⑧ ⑨	森 山 ④ ⑩	← 片 扇 市	
11	◎  ◎	堀 宮 ⑪ ⑬	← 片 扇 市	西 岡 ① ⑤ ⑧ ⑨	→ 松 佐 ② ③ ⑥ ⑦ ⑫ ⑭	森	← 山 ④ ⑩	
12	☀  ◎	片 扇 市 ⑪	← 堀 宮 ⑬ ← 森 ④ ⑩		→ ① ← 西 岡 ⑤ ⑧ ⑨	松 山 佐 ② ③ ⑥ ⑦ ⑫ ⑭		
13	◎  ◎	森 ④ ⑩ ⑪ ⑬	→ 西 ⑤ ⑧ → 片 堀 宮 扇 市		→ 岡 ⑨	⑫ ⑭	← 松 山 佐 ① ② ③ ⑥ ⑦	
14	◎  ◎	森 ⑪ 堀 マナンへ	→ 片 扇 市 → 宮 ④ ) ⑩ ⑬		→ 岡 ← 西 ⑤ ⑧ ⑨	⑫ ⑭	← 松 山 佐 ① ② ③ ⑥ ⑦	
15	①  ◎	森 ⑪ マナンより 堀 帰	← ④ ⑩ ← 宮 ⑬		→ 片 扇 市 ← 西 ⑤ ⑧ ⑨	⑫ ⑭	← 松 岡 山 佐 ① ② ③ ⑥ ⑦	
16	①  ◎	堀 森 宮 ⑪ ⑬	← 山 ⑦	西 ⑤ ⑧ ⑨	← ④ ⑩	片 松 岡 扇 佐 市 ① ② ③ ⑥ ⑫ ⑭		

### NHESU '71 行程表 №.3

月 日	天 氣 ( B · C )	B · C 3,500 m		C 1 4,500 m		C 2 5,200 m	C 3 6,200 m
4 · 17	☼ ●	堀 森 宮 山 ⑦ ⑪ ⑬	← 西 ⑨	④ ⑤ ⑧ ⑩		片 松 岡 尾 佐 市 ① ② ③ ⑥ ⑫ ⑭	
18	☉ ☼	西 堀 森 宮 山 ⑦ ⑨ ⑪ ⑬			④ ⑩ ⑤ ⑧ ← 片 松 岡 尾 佐 市 ① ② ③ ⑥	⑫ ⑭	
19	☼ ☼	西 堀 森 宮 山 ⑦ ⑨ ⑪ ⑬		⑤ ⑧		片 松 岡 尾 佐 市 ① ② ③ ④ ⑥ ⑩ ⑫ ⑭	
20	☼ ●	⑪ ⑬	西 堀 森 宮 山 ⑦ ⑨ ←	⑤ ⑧		片 松 岡 尾 佐 市 ① ② ③ ④ ⑥ ⑩ ⑫ ⑭	
21	☉ ●	堀 森 宮 山 ⑦ ⑨ ⑪ ⑬	← 西 ⑤ ⑧		片 松 岡 尾 佐 市 ① ② ③ ④ ⑥ ⑩ ⑫ ⑭		
22	☼ ●	全 Stay					
23	☉ ●	全 Stay					
24	☉ ☉	堀 ① ④ ⑪ ⑫ ⑭	← 森 山 西 片 松 宮 岡 尾 佐 市 ② ③ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑬				
25	☉ ☉	④ ⑫ ⑭	西 松 宮 佐 ① ③ 堀 森 ←		片 松 岡 尾 山 市 ② ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑬		
26	○ ☉	西 松 宮 佐 ① ③ ④ ⑫ ⑭			堀 森 ←	⑬	片 松 岡 尾 山 市 ② ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪
27	○ ○	西 ④ ⑫	⑭ 宮 松 佐 ① ③ ←		堀 森 ←	⑬	片 松 岡 尾 山 市 ② ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪

月日	天気 (B・C)	B・C 3,500m		C 1 4,500m		C 2 5,200m	
4 ・ 28	①  ◎	西④⑫			堀森 宮⑭	⑪⑬	片 扇山市②⑥ 松岡佐①③⑤⑦⑧⑨⑩
29	① ● =	西④⑫			宮⑭	⑬	⑤⑦⑩ 堀森松岡佐①③⑧⑨⑪
30	① ◎	西④⑫	⑭ 堀岡		宮	森松佐① ③⑧⑨⑪ ⑬	
5 ・ 1	○  ○	堀岡④⑫ ⑭	西			⑬	松佐①③ 森宮⑧⑨⑪
2	○  ○	堀岡④⑫ ⑭				森⑪⑬	西宮⑧⑨ 片扇⑤
3	○  ○	堀岡④⑫ ⑭				片 森扇 ⑤⑪⑬	
4	○ ①	堀岡④⑫ ⑭			森⑪	扇⑬	片⑤ 西 ⑦⑩
5	◎ ◎	岡④⑭	堀⑫		西⑦⑪	⑬	森扇⑩
6	① ◎	堀④⑫	西 岡⑭			森⑩⑬	①③ 扇⑦⑪
7	◎ ● =	西堀⑫	岡④⑭			森⑬	扇③⑦⑩ 松宮山
8	● ●	西①⑪	堀岡④⑫⑭ 宮山		片 扇山市②③⑤⑥⑦ ⑧⑨⑩	⑬	

行程表 № 4

C 3 6,200m	C 4 6,800m	C 5 7,300m	頂上 7,937m
片岡山市2⑥			
片岡山市2⑤⑥⑦⑩			
山市 片岡2⑤⑥⑦⑩			
松佐①②③⑥⑦⑩	山市		
宮山⑧	佐① 松2③⑥⑦⑩		
宮山⑧⑨	2⑥	松③ 佐①	
市 片⑤⑧⑨	宮山2⑥ ①	松 ③	
片⑤⑧⑨ 松宮山市2⑥			
片市2⑤⑥⑧⑨			

## NHESU '71 行程表 №.5

月 日	天 気 ( B · C )	B · C 3,500 m		C 1 4,500 m		C 2 5,200 m		C 3 6,200 m
5 · 9	①  ◎	西 宮 山 ① ⑪ ⑭	堀 岡 ④ ⑫		森 松 尾 市 ② ⑧ ⑨ ⑩ ⑬		片 ③ ⑤ ⑥ ⑦	
10	① ● =	⑫ ⑬ ⑭	他全 (ケルン作り)					
11	◎ ●	全 Stay						

注

西	西 郡 光 昭 隊 長
片	片 岡 格 副 隊 長
堀	堀 勝 彦 隊 員
森	森 田 稻 吉 郎 "
松	松 尾 武 久 "
宮	宮 崎 敏 孝 "
岡	岡 村 知 彦 "
扇	扇 能 清 "
山	山 下 泰 弘 "
佐	佐 藤 正 敏 "
市	市 野 和 雄 "

①	GIRME DORJE
②	ANG PEMA
③	PENBA NURB
④	ANG NURB ( LUKLA )
⑤	ANG NURB ( PHORCHE )
⑥	ANG NURB ( PANGPOCHE )
⑦	ANG CHOTAR
⑧	ANG RITA
⑨	PENBA TSHERING
⑩	LHAKPA TSHERING
⑪	NURB
⑫	DORJE
⑬	NAWAN CHOTA
⑭	PASANG TEMBA



資

料

提出書類とその内容  
シェルパの横顔



## 提出書類とその内容

今回の遠征では計画検討段階から遠征隊の帰国まで、暗中模索のうちにも実に様々の文書類を作成・提出してきた。その中で公的な意味をもつ主要な書類の内容等を一括掲載して、今後の大方の参考に供したい。ここにとりあげたものの中には社会情勢の変化によって必要のなくなるものも出ると予想されるが、我々の経験としてあえてここに記録することにした。

次の項目を記載する。

- (1) 提出書類および添付書類の内容・部数
- (2) 提出先
- (3) 提出時期
- (4) 所 感

### I 登山許可申請に関するもの

#### A

- |                       |     |
|-----------------------|-----|
| (1)(イ) 「推薦状交付申請書」送付願い | 1部  |
| (ロ) 誓約書               | 1部  |
| (ハ) 計画書（和文）           | 40部 |
- (2) 長野県山岳協会長
  - (3) 海外登山審議委員会以前
  - (4) 審議委員会で計画内容の説明を求められた

#### B

- |                 |        |
|-----------------|--------|
| (1)(イ) 推薦状交付申請書 | 正1・副1部 |
|-----------------|--------|
- ①隊の名称、②実施期間、③責任者氏名、④留守本部、⑤推薦状の宛先、⑥推薦状を必要とする理由
- |             |     |
|-------------|-----|
| (ロ) 誓約書     | 1部  |
| (ハ) 計画書（和文） | 20部 |
- ①隊員の氏名・年令・経歴、②登山計画、③経費予算、④入国の見通し、⑤外貨枠取得の方法、⑥関連する後援団体の名称、⑦その他参考となるべき事項
- (2) 日本山岳協会長（地区山岳協会経由で）
  - (3) 海外登山審議会以前
  - (4) 申請書類に不備がなければ事務的に推薦状が交付されたようである。（しかし、72年以後には何らかの規制の動きがあるようである。）

#### C

- |                      |        |
|----------------------|--------|
| (1)(イ) 「登山許可申請書」送付願い | 正1・副2部 |
|----------------------|--------|

- (ウ) 「登山許可申請書」(英文) 正1・副2部  
 日山協交付「推薦状」添付、内容D、(1)(イ)に同じ
- (ク) 誓約書 正1・副2部
- (ケ) 計画書(和文) 10部
- (2) 外務省情報文化局文化事業部長
- (3) 特になし
- (4) 文化事業部第二部に持参していろいろな情報を提供してもらうことは有益なことと思われる。

#### D

- (1)(イ)「登山許可申請書」(アプリケーション) 英文 1部
- ①遠征隊の名称、②遠征隊の所属国名、●支援団体名、④経費負担者、⑤遠征隊員名(簡単な履歴・顔写真)、⑥遠征の目的、⑦登頂するピークの名称と標高、⑧遠征する地域の関連地図、⑨遠征隊の滞在期間、⑩遠征隊のネパール国内での通過ルート、⑪使用するポーターの数、⑫サーターとシェルパの数、⑬使用する資材のリスト、⑭遠征費用の見積り額合計、⑮ネパール王国内へ持込む外貨の総額、⑯ネパール王国内で使う費用の見積り額、⑰その他
- (2) ネパール王国外務省(外務省情報文化局経由で)
- (3) 審議が不定期のため一定しない。
- (4) 1シーズン1隊で一応先着順とされているが、詳しいことは不明

#### II 外貨支出承認申請(登山料の半額を支払うため)に関するもの

- (1)(イ) 支払承認・許可申請書 1部  
 外国為替取扱銀行に申請用紙(外外15)あり
- (ロ) 誓約書
- (1) (イ)に同じ
- (ハ) 申請理由書
- ・ネパール政府外務省からの登山許可および登山料納入の督促状写し。
  - ・ヒマラヤ登山遠征隊規制に関する規則写し
  - ・計画書
- 以上各3部添付資料
- (2) 大蔵大臣(日本銀行外国局長)
- (3) 特になし
- (4) 我々が行なうまで正規のルートで送金された例はなかったようであったが、今後はこのルートが確立されることと思われる。

#### III 登山許可取得通知に関するもの

- (1)(イ) 登山許可取得通知 1部

- ・ネパール政府外務省からの登山許可証の写しを添付
- (2) 外務省情報文化局、日本山岳協会、長野県山岳協会
- (3) 許可取得後
- (4) この連絡は忘れ易いので注意を要す。

#### Ⅳ スポーツ外貨割当申請に関するもの

- (1)(イ) スポーツ外貨割当申請書 1 部  
必要外貨の金額を明記する
- (ロ) 計 画 書  
①隊の名称（英文も併記）、②隊員の氏名・年令・住所、③登山の目的および対象とする地域・山名、④隊のスケジュール、⑤登山隊経費の明細、⑥収入予定、⑦必要外貨、⑧事務局の住所・電話・担当者名
- (2) 日本山岳協会長
- (3) 9 月末日
- (4) 海外旅行持出し外貨枠が1,000ドル/人の時には重要な意味を持っていたが、3,000ドル/人に拡大された現時点では必要性の少なくなったものである。

#### Ⅴ 在外公館への便宜供与依頼に関するもの

- (1)(イ) 依 頼 書 1 部
- (ロ) 計 画 書 宛先数×2 + 2部
- (2) 外務省情報文化局文化事業部長
- (3) 出発前2週間
- (4) 立寄国の大使館・領事館はすべて依頼しておく方がよい。

#### Ⅵ 輸出承認申請に関するもの

- (1)(イ) 輸出承認申請書 3 部  
①品名・規格・数量・単価・総額、②国外消費・再輸入の別、③船・飛行機の別、④輸入品の明示と機械ナンバー  
申請用紙あり
- (ロ) 無為替申請理由書 3 部
- (2) 通商産業大臣（エイジェント経由）
- (3) 通関1週間以前
- (4) エイジェントが扱う。

## Ⅶ 海上輸送運賃値引申請に関するもの

- (1)(イ) 申請書 1部
- (ロ) 計画書 1部
- (ハ) パッキング・リスト 1部
- (2) ベンガル湾同盟
- (3) 船積前
- (4) 学術調査などの場合にはごく簡単に承認されるようである。

## Ⅷ 輸入許可書（インポート・ライセンス）に関するもの

- 1(イ) 輸入許可書交付申請書 1部
- (ロ) パッキング・リスト（インボイス） 3部
- 2) ネパール政府商工務省（ネパール外務省経由）
- 3) 現地提出
- 4) 許可を受けた登山隊は2～3日でもらえるようである。

## Ⅸ 簡易通関および陸送許可の申請に関するもの

- 1(イ) 簡易通関申請書 1部
- (ロ) パッキング・リスト（インボイス） 7部
- (ハ) インド国内陸送許可交付申請書 1部
- 2) カルカッタ税関
- 3) 現地提出
- 4) インド・ネパール間の通商関係が悪化していて、トラックによるネパール向け荷物輸送には特別な許可が必要であったため(1)(ハ)の許可が必要になった。

## X その他

### A トランシーバー使用許可申請

①商品名、②メーカー、③出力、④周波数、⑤性能、⑥価格、⑦数量を記入して、ネパール政府外務省に提出。

### B 気象放送の依頼

インド気象台とカルカッタ領事館を経てオール・インディア放送局へ依頼する。

### C 輸出許可書

学術調査の標本類を持ち出すために正規の輸出手続をとった。ネパール商工務省へ輸出承認許可申請書と輸入時のパッキング・リスト（インボイス）と輸出する物のパッキング・リスト（インボイス）を3部ずつネパール外務省経由で提出し、許可をうけた。申請した翌日簡単に許可になった。

そのため、航空会社では旅行手荷物としての運賃割引の扱いをうけることが出来なかった。

## シ エ ル パ の 横 顔

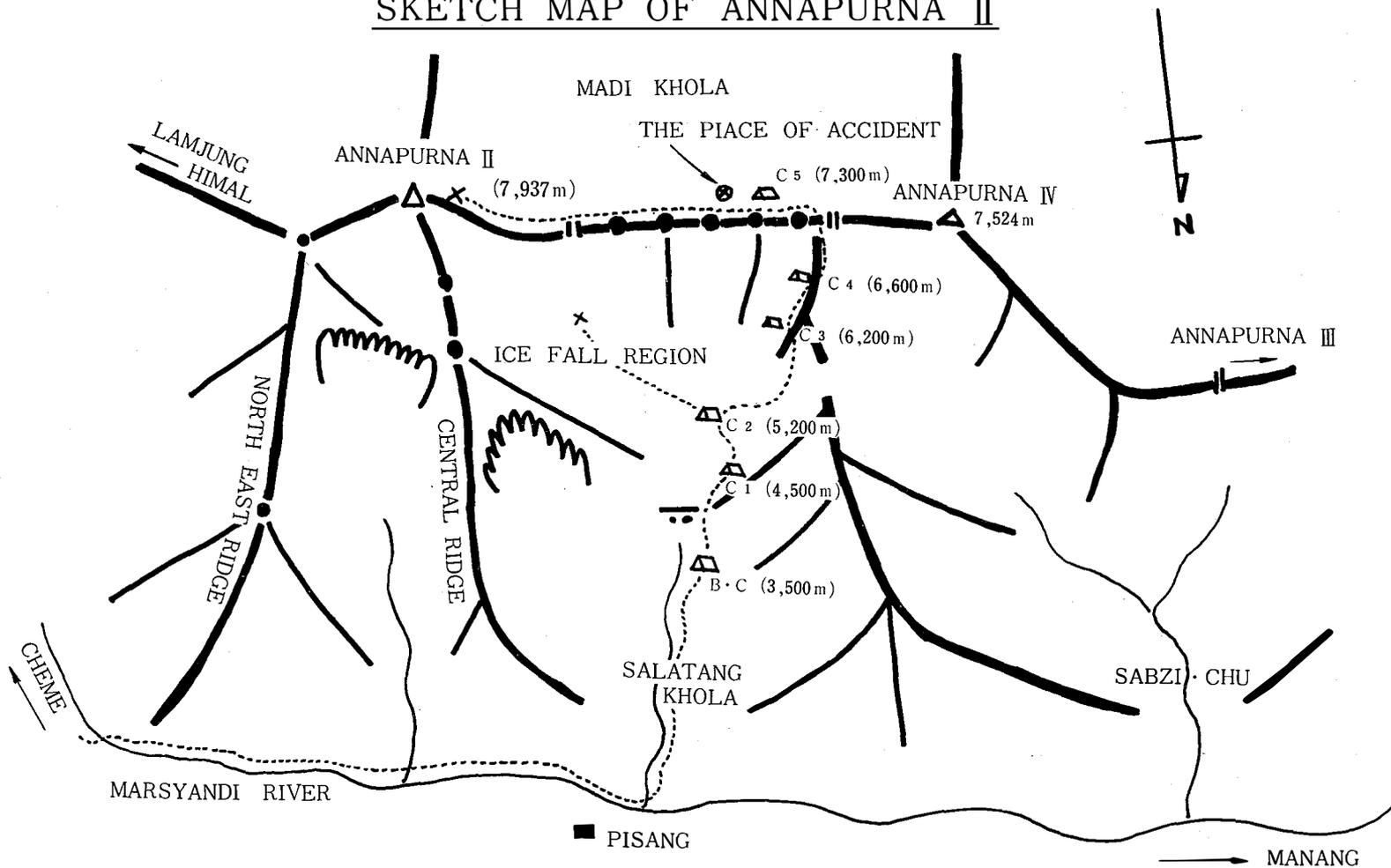
<b>Girmi Dorje</b>	<b>(Khunde)</b>	<b>36才</b>	
1955	カンチェンジュンガ	T・エバンズ	(イギリス)
1956	エベレスト	A・エクレル	(スイス)
1963	エベレスト	N・ディレンフェース	(アメリカ)
1964	ギャチュンカン	古原和美	(長野岳連)
1964	ガウリサンカール	ダヌーレン	(イギリス)
1965	エベレスト	M・S・コーリ	(インド)
1965	ダウラギリⅡ	杉田 博	(愛知岳連)
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
<b>Ang Pema</b>	<b>(Khumjung)</b>	<b>29才</b>	
1954	マカルー	ウィリアム・ミリ	(アメリカ)
1959	地図・地質調査	T・ハーゲン	(オーストリア)
1967~8	チベットで遊ぶ		
1969	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
<b>Ang Nurb</b>	<b>(Lukla)</b>	<b>37才</b>	
1954	チョー・オユー	H・ティッチー	(オーストリア)
1954	ダウラギリⅠ	イパニユ	(アルゼンチン)
1956	エベレスト	A・エクレル	(スイス)
1961	アンナプルナⅢ	M・S・コーリ	(インド)
1962	ジャヌー	R・トレイ	(フランス)
1965	エベレスト	M・S・コーリ	(インド)
1969	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
1970	エベレスト	松方三郎	(JAC)
<b>Ang Nurb</b>	<b>(Panphoche)</b>	<b>38才</b>	
1952	エベレスト	R・ランベール	(スイス)
1953	マナスル	三田幸夫	(JAC)
1954	学術調査隊(昆虫)		(スイス)

1956	エベレスト・ローツェ	A・エクレル	(スイス)
1959~60	学術調査隊(植物)		(スイス)
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
Ang Nurb	(Porche)	26才(?)	
?	アイロン・ピーク	ピーター	(イギリス)
Pemba Nurb	(Khumjung)	35才(?)	
1962	ジャグダラ	エバンス夫人	(イギリス)
1963	P29	篠田軍治	(大阪大)
1969	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
Ang Rita	(Khunde)	37才	
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
Pemba Tshering	(Khunde)	37才	
1960	アンナプルナⅡ	J・ロバーツ	(イギリス)
1963	シャルプー	石原憲治	(都立大・府立大)
1970	エベレスト	松方三郎	(JAC)
1970	アンナプルナⅡ	A・クナーベル	(ユーゴスラビア)
Lhakpa Tshering	(Khunde)	26才(?)	
1970	エベレスト	松方三郎	(JAC)
Ang Chotare	(Surke)	37才	
	不明		
Nurb	(Khunde)	36才	
1959	ロルワリン・ヒマール	加藤秀木	(福岡大)
?	ルングリ・ヒマール	?	(日本)
1964	アンナプルナ南峰	樋口明生	(京都大)
1970	ダウラギリⅣ	野村哲也	(関西岳連)
1970	ダウラギリⅠ	太田徳風	(同志社大)

Dor je	(Khunde)	28才	
1965	ダウラギリⅡ	杉田 博	(愛知岳連)
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
Pasang Temba	(Khumjung)	23才	
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
1970	アンナプルナⅡ	A・クナーベル	(ユーゴスラビア)
Nawan Chota	(Khunde)	24才	
1970	エベレスト・スキー	三浦雄一郎	(日本)
Pasang Rita	(Khumjung)	35才	
1960	アンナプルナⅡ	J・ロバーツ	(イギリス・インド・ネパール)
1961	アマダムラム	E・ヒラリー	(イギリス)
1970	ダウラギリⅣ	野村哲也	(関西岳連)

(注) Girmi Dorge, Ang Pema, Pemba Nurb, Nawan Chota の4名は、1971年ポストの長野山岳協会ガンガプルナ遠征隊に参加し、登山中雪崩にて死亡。

# SKETCH MAP OF ANnapurna II



## THE REPORT OF THE EXPEDITION ON THE ANNAPURNA II

First of all, I, as the leader of the expedition, representing all the party members, wish to express our heart-felt gratitude for the assistance and cooperation extended to our expedition party by both the Nepal Government authorities and dear friends of Nepal concerned.

The below is our brief report on the Nepal-Himaraya expedition.

Dr. M. Nishigori

Leader of the expedition

1. The name of the expedition: THE NEPAL-HIMARAYA EXPEDITION OF SHINSHU UNIVERSITY, 1971.
2. The purpose of the expedition: a) To climb the Mt. Annapurna II (7,937m high) located at the middle of Nepal and the scientific research on the whole neighborhood of the district.
3. The period of the expedition: From the 7th of February to the 30th of November, 1971.
4. Constitution of members:
  - The leader . . . M. Nishigori
  - The party members . . . . . 10 persons
  - Sherpa . . . . . 15 persons
  - Liaison Officer . . . . . 1 person

## **I. From Pokhara to the first camp (base camp)**

The Annapurna II, which had been our long-time targetted mountain, was standing up high into the blue sky in front of us at Pokhara.

On March 14, the advance group started from Pokhara for the purpose of finding out a good place for our base camp and exploring the north side of the Annapurna II.

Before the start of the advance group, we had planned to take a route on the north ridge of the mountain, but so poor information on the route had made us to hesitate to put a final decision. The advance group gave us one conclusion on this matter.

After their investigation on March 22 and 25, they reported us it was a big tough job to go through the route on both the northeast ridge and the central ridge. Then we decided to take a route on a big ice fall area spread out between the central ridge and the Annapurna IV

The main party left Pokhara on March 16 and arrived at Salatan Kohla, the base camping point, on March 26. The altitude of the camping site was approx. 3,500m above the sea level, and had a beautiful scenery of the ice fall area in the front.

## **II. Construction of the first advance camp (C1), the second (C2) and the third (C3)**

On March 28, we began to attack the summit of the Annapurna II. We took the route lied along the left riverside of Salatan Valley.

We set up C1 on March 30 at 4,500m altitude, and C2 on April 3 at 5,200m.

It was a nice climbing. Everything was going well until the completion of C2. The transportation was made smoothly. Almost all the members were in good conditions.

We, however in such an unexperienced high altitude, were inevitable from being short of breath and found a few members having symptoms of mountain sickness.

### **III. Construction of a provisional camp for C3 and change of a route**

We started to try to across the ice fall area on the route nearest to the col of the main ridge, but found it unexpectedly difficult to be broken through. We had lots of difficulties in pushing our way through the knee deep snow with terrible short breath in thin air at more than 5,000m altitude. In addition to this, a good tent-site for C3 could not be found. All the time we had to pay a strict attention to big ice blocks falling down to us and avalanches. Then we were forced to stop acrossing the area and set about constructing a provisional camp until the site for C3 be found.

In the evening of April 9, when the completion of the provisional camp was near, there happened a tremendous big avalanche which competely covered the ice fall area. Fortunately our camp was not so damaged, but it was easy for us to guess another big avalanche might happen in our future. We had to keep ourselves from danger and gave up the route. The place of C2 was accordingly changed to another site and a route was newly decided on the ridge near the Annapurna IV.

### **IV. Lack of fuel and return to the base camp**

The new route was united with "Tilman Route" at the foot of the Annapurna IV. The most difficult points were lied between 5,500m and 6,500m altitude. On April 15, we planned to construct camps as followings;

C3 at the point of 6,200m altitude to be reached by straight scaling of a snow cliff.

C4 at 6,800m by climbing a knife shaped ridge.

C5 at 7,300m near by the lowest col of the main ridge.

But unfortunately we were prevented from advancing by heavy snow fallings of days and nights which continued for 10 days from April 15, the very day we just made this paln.

In the meantime, we found that LP gas had been unexpectedly consumed by that time. It might be impossible to conquer our targetted mountain if

so big a consumption would continue. At the beginning, the consumption of LP gas was aimed to be less than 100g per one person a day, but actually, it was going more than 150g. It was one of the reasons of the big consumption that sherpas made free use of LP gas in cooking for their convenience. We had to take a strict care of using it. On reflection, the oil burner should have carried with us especially for key-pointed camp like C2.

On April 21, we, all the members in C2 returned to the base camp in order to be free from the bad weather conditions and also for the purpose of saving LP gas. We had to reexamine our plan.

#### **V. Construction of the third, fourth and fifth camp (C3, 4, 5)**

On April 25, just fine day, we began to climb again towards the summit of the Annapurna II. In the course of the day, we set up C2, and on April 28 we succeeded in constructing C3 which had been long-awaited. Owing to continued fine days, we were set up C4 on May 1, but its altitude was approx. 6,600m much lower than the scheduled height. As a result, this made the final attacking camp C5 put far from the summit.

The altitude of C5 was 7,300m on the main ridge. This was our best ability at that time, and if compared with that of two parties who had been successful in the past, was not at all inferior to them. But the horizontal distance more than 3,000m to the summit was surely heavy to us. Bringing our minds back to that time, this long distance may have caused the death of our Mr. M. Sato, one of our members.

#### **VI. Attack of the summit and the death of one of our members**

Mr. Masatoshi Sato, one of party members, and Mr. Gilmi Dorje, a sidar, were selected as final attackers to the summit. Both of the two members were strong and very skilled climbers. We were sure of their success, and believed the summit would be soon conquered.

On May 4, they started from C5 at 6.00 A.M. and arrived at the point of

7,800m altitude at 3.00 P.M. upon the scheduled route on the main ridge. A tragedy was begun at that time.

We received their call by transceiver that they were forced to retire to C5 due to their extreme exhaustion and the sudden changed bad weather condition. Especially Mr. Sato had been so heavily exhausted, he was almost impossible to walk along but to slip down. Shortly after, a sidar limped into C5 alone. Brokenly he told us that he left Mr. Sato at the point 200m near C5 hastened to the fixed pickel in order to avoid his slip down the cliff.

Immediately at 10.00 P.M., the two members stayed in C5 went to rescue of him. One was our party member and another sherpa. But when they arrived at the spot at 11.00 P.M., Mr. Sato had been already disappeared there. From traces of his slip down left there, they could only guess he had fallen out down into the valley at south side of the Annapurna II. They tried many times to find out him but in vain. The difference of the altitude between the point and the valley was more than 2,000m. With great sorrow, they returned to C5.

#### **VII. Withdrawal of the advance camps and return to the base camp**

The unexpected death of our Mr. Sato gave us a big shock. We had to give up to attack the summit, and began to withdraw the advance camps on May 5. We, all the members returned to the base camp. Under an obligation to report this accident to our country, we, then, required to come back to Pokhara as soon as possible. We left the base camp on May 13 and got back at Pokhara on May 21.

#### **VIII. Reconsideration of the accident**

With all the things reconsidered, we have got to the conclusion that the accident was caused by the following reasons.

- a) The bad weather condition and an unexpected consumption of LP gas made all the things out of schedule.
- b) We failed in adapting ourselves to the high altitude at the point of

C3 and heigher.

- c) The point of C4 was so much lower that C5 was accordingly located far from the summit.
- d) We should have given instructions to the attacking members to stop their climb much earlier before their exhaustion.
- e) Fully effective use of transceiver was not made.





6,200m附近にてルート工作中的の故佐藤正敏隊員

追

悼



## 経 歴

昭和23年4月3日

福島県福島市飯坂町平野坂上1に生れる。

昭和30年4月

福島市立平野小学校入学

昭和36年3月

卒 業

昭和36年4月

福島市立平野中学校入学

昭和39年3月

卒 業

昭和39年4月

福島県立福島高等学校入学

昭和42年3月

卒 業

昭和42年4月

信州大学人文学部経済学科入学

## 山 歴

一年生(1967年4月～1968年3月)

4月 信大山岳部に入部

5月 新人合宿(涸沢)

6月 鹿島槍強化合宿

6月 前アルプス縦走(徳本峠～餓鬼岳)

7月 北アルプス縦走

8月 奥又白合宿

8月 飯豊連峰縦走

9月 涸沢定着合宿

12月 ハケ岳

12月 冬山合宿(七倉尾根より針の木岳、蓮華尾根より下山)

3月 春山合宿(剣岳北方稜線)

3月下旬～4月上旬 飯豊方面

二年生(1968年4月～1969年3月)

- 5月 新人合宿(湊沢)
- 6月 奥又白、北鎌尾根、荒沢
- 7月 南アルプス縦走
- 8月 奥又白合宿、黒部上の廊下
- 9月 湊沢定着合宿
- 11月 北鎌尾根
- 3月 春山合宿(高嵐尾根より雲の平、黒部五郎岳)

三年生(1969年4月～1970年3月)

- 5月 北鎌尾根より岳沢
- 6月 新人合宿(湊沢)
- 6月 八方尾根より白馬岳
- 7月～8月 日高山脈縦走
- 8月 奥又白合宿
- 9月 白馬岳より赤岩尾根縦走
- 12月 冬山合宿(明神より前穂高)

四年生(1970年4月～1971年5月)

- 5月 鹿島槍ヒマラヤ強化合宿
- 6月 新人合宿
- 8月 南アルプス赤石沢
- 8月 剣定着合宿
- 12月 西穂より奥穂、前穂、明神岳
- 2月～5月 アンナプルⅡ峰登山
- 5月4日 アンナプルⅡ峰7,300m地点にて遭難

## 正 敏 を 偲 ぶ

佐 藤 マツヨ

正敏、又春になりおまえの生れた平野にもさくらんぼや桃の花がまっさかりです。おまえがあんなことになってからもう少しで1年です。おまえが出発するとき、私たちは羽田まで行ったね。あれが最後になりました。

もう1度家に帰って来ると言っていたのに、それもできずに発って行ってしまっただけで死ぬなんて、母ちゃんは夢にも思わなかった。正敏なぜ死んでしまったの。小さい時からなんでも私たちの言うことをきいてくれたのに、正敏が母ちゃんより早く死ぬなんて本当に親不孝です。今度くらい自分の無学なのが悲しいと思ったことは有りません。胸に思っていることの万分の一も言い表わせないのです。

正敏、あなたは大学を出、初めて給料をもらったなら私たちを関西旅行に連れて行くと母ちゃんに約束していたね。親子3人でそんな旅が出来たらどんなにか楽しかったでしょう。45年の秋、私たちが長野に行ったとき、3人で歩いたね。私たちが“やど”に泊り、おまえが寮に帰る後姿がみょうに淋しく見え、母ちゃんはおまえの姿の見えなくなるまで見ていたの。涙でおまえの姿が見えなくなったっけ。でもおまえは1回も振り向かなかった。今でも母ちゃんの頭から消えません。いつだって、いつだっておまえのことが頭から離れません。正敏、おまえは本当にヒマラヤに行きたかったの。生きても帰れない山に。母ちゃんはアンナプルナが憎らしいし、おまえの亡骸の有る山と思うとどうしていいかわからないくらい懐しい。正敏が冷たい水の中にいると思うと、とんで行って連れて来たいがそれもできず、母ちゃんは唯泣くばかりです。

11人も行ったのに、なぜおまえだけが死んだの。なぜみんなと一緒に帰って来なかったの。母ちゃんはおまえをなんとかして助けてもらいたかった。おまえは母ちゃんの宝だもの。

今度行くのにも、どんなにかお金に苦労したでしょう。正敏、ごめんね。母ちゃんがどんなことをしても頑張ればよかったのに。2度と帰らない死出の旅だったのに。

世間の人は日にちがたてば忘れられると言いますが、1年たった今悲しみが余計胸の中にかたまり、正敏はほんとうに死んだのだと思い、この悲しみがうすらぐとおまえとの「えん」が遠くなるような気がし、悩みも母ちゃんの運命だと思っています。

おまえの形見の品々も有れば悲しみのたねになるけど、何物にもかえがたい宝です。おまえがいつもくわえていたのでしょう歯形のあるパイプ、母ちゃんもくわえてみました。お前の最後の場所に有ったと言う赤い防寒手袋をおまえだと思い抱きしめると、母ちゃんごめんと言う声が聞えるような気がします。

正敏どんなにか残念だったろう。おまえの日記の最後に、大変なことになった責任重大だ、どうか神様ピークに立たせて下さい。松尾さんどうかよろしくお願い致しますと。おまえは余り責任感が強過ぎる。もっと早く戻ればよかったと母ちゃんは思う。いろいろのことを母ちゃんは後で聞いた。身体が悪かったとか自信過剰だとか、命がけで登ったおまえにそれが嘘の言葉だったのでしょうか。母ちゃんはわかります。おまえの気持が誰よりもよくわかります。母ちゃんはおまえを優しい想いやりの有る誰にも恥ずかしくない立派な気持ちを持った息子と思っています。こんなことを書きながらも真黒い顔に白

い歯を見せて笑いながら帰って来るような気がしてなりません。

本当に死んだのだ。いつ又生きて帰って来ると思いながらおまえのお墓も皆々様の御尽力でできます。おまえの好きだった吾妻連峰の見える田んぼの真中の、おまえが2年生の春休みに帰って来た時、父ちゃんの代りに「わりあて人夫」に出て造ったお墓です。

正敏、本当に死んでいるのならどうかここに帰って来て私たちや姉弟を守って下さい。私達も年です。そのうち、あの世とやらでおまえに会える日を楽しみにしています。

## 追 悼

信州大学長 池田 雄一郎

信州大学人文学部経済学科佐藤正敏君に、恭んで追悼の辞を申し述べます。

君は、昭和42年4月本学入学以来、山岳会員として南北アルプス、北海道、東北諸山の踏破を重ね、45年10月から翌3月までは伊那松本山岳部リーダーとして活躍されました。しかるに山岳会は、41年7月ヒマラヤ遠征を計画し、翌年秋4人を偵察隊として先発させ、今回の大学創立25周年記念ヒマラヤ遠征隊の準備を開始しました。

君は、入学直後から積極的にこの計画に参加し、アンナプルⅡ峰登頂に際して第1次アタック隊員として、5月4日最終キャンプを出発7,800mに達し、登頂を目前にして気象激変のため終に断念、降下の途中惜しくもヒマラヤ不帰の客となりました。

御族のみならず本学としても、君が学生とし、又岳人として更に前途ある社会人として活躍される日を待望していました。この期待も一瞬にして夢と化したのであります。

願わくは君の霊よ永に安けく鎮まらんことを。

信州大学人文学部長 中川 大倫

故信州大学、人文学部経済学科佐藤正敏君に謹んで哀悼のことばを捧げます。

あなたは福島県福島市の出身、福島市立平野中学を経て昭和42年福島県立福島高等学校を卒業され、同年4月見事本学部経済学科に進学されました。あなたがとくに信州大学を選ばれたのは、信州の美しい山と、美しい自然に魅せられたからだと聞いています。あなたは丈高くがっしりとした体軀の持主でした。身長1.76m、体重75kg、これはどんなに激しい訓練にも、どんなに苦しい登山にも十分堪えていける誠に立派な体格でした。あなたは、春の新人訓練、夏山、冬山の合宿訓練には、いつも姿を現わし、みがかれた抜群の登山技術と冷静な判断とをもって後輩の指導に当たりました。あなたが山岳人として残された足跡は膝元の北アルプス、南アルプスはもちろんのこと、新潟県境の魚沼三山から、さらに遠く北海道の日高山系にまで及んでいます。このような秀れた体力、気力、技術を持たれたあなたが、ネパール・ヒマラヤ遠征隊の隊員に選ばれたのは誠に自然なことでありました。隊員としてのあなたは最若年の1人、それにもかかわらず、あなたは先発隊に選ばれ、2月7日羽田を出発、今にして思えば最後となってしまった日本の国土を離れました。それから東パキスタンを経由、ネパールにはいり、ネパール山中最後の部落ピサン村についたのが46日目の3月25日、そして26日には標高3,500mの地点にベースキャンプ建設、その頃の便りに「ついにここまでやって来た」という感慨がこめられていたと伺います。あなたは無類の山好きであったから、時には飛行機から時にはキャラバンのトラックの中から、エベレスト、マナスル、ヒマールチュリ、アンナプルナ等、雄大なヒマラヤの山容に接し、ひとしお感激を興奮にふるえられたことだと思います。

登山は3月28日に開始されました。同月30日、標高4,500mに第1キャンプ、4月3日5,200

mに第2キャンプ建設、この頃あなたは始めて5,000mを超えた喜び、誰も歩いていない氷河をひとり歩いた喜び、この喜びをその頃の便りの中に記しておられます。しかし、第2キャンプ建設以後登山の模様には私たちの想像を絶するものがあつたように思われます。標高6,200mの第3キャンプ6,600mの第4キャンプ、そして7,300mの第5キャンプができたのが、5月3日、登山開始から何と37日目に当たっているからです。

アンナプルナⅡ峰の試みは、5月4日、第1登頂隊の白羽の矢は、まず第1にあなたに決まりました。山岳人としてこれ以上の榮譽があるでしょうか！ あなたはサーダー、ギルミ・ドルジェ氏とともに頂上に向いました。しかし、余りに強い風と連日の過労のためか、残念ながら、頂上を目前にして下山せざるを得ませんでした。暗黒の標高7,300mの地点で誠に不幸な事態に遭遇してしまいました。救援隊が急遽登山の途中上方かすかに認められたヘッドランプの光は、今やあなたの最後の姿になってしまったのです。あなたは過労の極遂に滑落されたのでした。あなたはアンナプルナの頂上近く静寂と清浄の世界の中に忽焉として姿を消されたのでした。

私はこの知らせを5月18日夜の電話で受けました。一瞬身のこごえる思いをし、啞然として驚愕と痛惜の思いにくれ、発することばもない有様でした。遺族の方々の御胸中をお察し申し上げる時、誠に悲痛のきわみ断腸の思いであります。

私たちはもう再びあなたの姿を見ることができないでしょう。しかしあなたのおもかげ、あなたの印象は私たちの胸の中に焼きついたように強く残っています。あなたは無口で素朴でした。この無口、素朴さと抜群の体力優秀な技量とはあなたがジャイアント・ボロと愛称された所似でしょうか。

登山訓練中のあなたは大変きびしかったといわれます。しかし日常のあなたは至っておだやかでやさしく、ロマンチストで意外なほどに神経細やかに配慮されるところがありました。

ネパールからの便りの中にこんなことが記されています。「この日僕は山の草原に横たわった。この時傍に小さな美しい花を見た、さくら草のような美しい花であった。つんで手紙の中に入れて日本に送ろうと思った。だが瞬間ためらった。あとから訪れる人の為にこのきれいな花を残しておこうと、僕は花を取ることを止めた」とあなたは、いつ誰が訪れるかわからないその日の為に小さな美しい花を手折ることを止めた。そのような心のやさしいところがあなたはあります。この故にあなたはいつも下級生からよく慕われたのです。

あなたは幾多の思い出を私たちの胸の底に残して、すでに遠く旅立たれました。私たちは今はただあなたの御冥福を心から祈るばかりです。

信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊実行委員長 赤羽 治郎

故 佐藤 正敏 君

君は1971年信州大学山岳会ネパール・ヒマラヤ遠征隊員として、ネパール王国ヒマラヤ山系中の雄峰アンナプルナⅡ峰、7,937mに遠征されました。

5月4日、ネパール人サーダー、ギルミ・ドルジェ氏とともに頂上を目指して、C<sub>5</sub>を出発しましたが7,800m地点に到って、君は周囲の状況を困難と判断され、C<sub>5</sub>に向って下山の途次、7,300m地点を最

後として、氷海の彼方に忽えんとして永遠に隠れ去られました。5月4日午後10時30分前後と推定されました。

君は先発隊員として、本隊に先立ち、2月7日羽田空港を飛び去られました。そして6月15日、君御霊はなつかしい御両親御姉弟の御許に帰り来られ、この日御実家における告別式に私は君と行を共にした隊員、友人と共に参拝いたしました。

信州大学山岳会の先輩と現役との間に山岳会の長年の念願であったヒマラヤ遠征の計画がもたされたとき、君は決然として遠征隊に参加を志願され、その実現に力をつくされました。本来ならば来年3月御卒業のところを、本遠征参加のために卒業を延期されて訓練を重ねられました。

いよいよ遠征隊が組織されたとき、君は主として梱包輸送の苦勞多い仕事を分担され、よくその任務を果たされました。

B. C到着後の4月1日付で、隊員諸君からの私あての寄書のなかで、君は「シェルパさんは本当に強くてどうしようもありません。順化ができれば俺だってと思って、毎日元気にやっています。」とその心境を知らされました。これまで世界のヒマラヤ遠征隊は数多いといえども、ネパール人のシェルパに、シェルパさんとさんずけで呼びかけているのは、佐藤君、君おひとりではなかったかと。君のこの御人柄が人種の差をこえてシェルパさんたちとも深い信頼による友情のきずなをつないでいたことを私は信じています。

あたかも5月9日、同じところ同じ松本からタウラギリV峰に登攀中の県立山岳会隊員3名が、5月4日に遭難されたニュースをききました。その時、私は信大隊の無事平安をひたすら念じていました。5月14日午後7時新聞社及び放送局から、いまネパール大使館からの至急報として、信大隊佐藤隊員の遭難が伝えられたと知らされました。

あの時の驚愕、この悲報をどうして御両親御家族にお伝えすることができましよう。私の心は潰れる思いでした。フランスのある著名な登山家の言葉に、「アルピニストは、困難に挑戦して、自己の極限を試みる」とあることも聞きました。

君は今度アンナプルナⅡ峰登頂の第1次隊員に選ばれたことを、アルピニストの本懐として、また誇りとされて、頂上攻撃に向われたことを私は信じています。

B. Cの上方、3,900m地点に君の友人の手によって君の記念のケルンが築かれました。朝に夕にあの美しいアンナプルナの峰の雪と氷を望みながら、君は君があんなにも憧がれたヒマラヤの懐に抱かれて永遠にヒマラヤとともにあることでしょう。

本日この慰霊祭に参列して、在りし日の君を偲び、想い、悲しみをこらえて哀悼の意を述べて弔辞といたします。

在天の君の御霊よどうぞ来り享け下さい。

## 思 誠 寮 一 同

佐藤正敏さん、秋の日に日焼けした顔とたくましい体を、思誠寮にあらわすのを期待した我々の誰が今度の不幸を予想したであろう。山を愛し、山にすべてを求めたあなたは今遠く異郷の山懐に眠る。あなたの求めしものは、すべて山にあった。春の訪れを山清の招きに認め、山へのあこがれはあなたの情熱をふるわせてやまない。夏、太陽と岩肌と青空と汗ばむ肉体に力がこもる、そのみがきぬかれた意志は、我々の目指す姿でもあった。静かに山の魅力を語り、山を見つめるあなたの目差しは、我々に勇気と力を与えるものであった。厳なる冬山に挑むあなたの姿は青春の証しであった。心と心の接点を求めて大酒をくらい、放歌高吟に興ずる姿はもう帰らない。痛恨。佐藤さん。信州の山々にあなたの足跡を訪ね、アルプスの夕映えの彼方にあなたの面影をしのびつつ、安らかなる冥福を祈る。

ヒマラヤの山間に、思誠寮々歌よ深く、ゆたけくひびけ。

## 渡 辺 晃

佐藤さん、僕は今シーズン41日間スキーをしました。前にも言ったように、僕はスキーをしていて、楽しいとか、おもしろいとか思ったことはありません。毎日毎日自分の下手くそ加減にいじけていました。それなのになぜ、あきもせずにスキーに行ったのか。それはスキーがうまくなりましたからです。スキーは技術の優劣が目的地までの時間に、他のスポーツに見られぬ程影響しますね。だから僕はあなたが帰ってくるまでに、あなたと同じレベルに、いやそれ以上のレベルになろうとしました。あなたと滑るために。アイスバーンで青あざを作りながら、誰もいない山の尾根や吹雪のゲレンデでも滑りました。そして、まだ強さはないけれど、一応ゲレンデならあなたと肩をならべて滑ることができるようになったはずです。5月3日、遠く白山がくっきり見える立山で滑った時、いつかあなたが言っていたパリからカトマンズまでスキーを積んでアジアハイウェイを走る車の影を思い浮べたのです。エルブールズやアララット、そしてヒマラヤを滑るにはもっと強いスキーをしなければならぬと思って立山で滑っていました。でも、あなたは帰ってこない。いつか永遠の闇の中へ静かに高く高くシュプルングして…。

## 鳥 越 洋 一

佐藤さん、ジャイアントボロとあだなされていたあなたが、このような事になろうとは夢にも思いませんでした。日本の山々で、あの様にジャイアントぶりを発揮していたあなたがヒマラヤのアンナプルⅡ峰の雪の中に消えてしまったとは、ぼくには信じられません。現在の僕に残っているのは、あなたと共に山行を行ったり、松本で生活した時の思い出だけしかありません。僕が入部しようと部室でのガイダンスに出席した時、入口の所に顔の真黒な体の大きな、一見おっかないような人が佐藤さん、あなたでした。さぞかしおっかない人だろうと思っていました。しかし、それも森と3人で行った針ノ木山行

でいっぺんに消されてしまいました。僕にとって初めての山の、あの夜のことは忘れられません。雨の夜、テントの中でずぶぬれになりながら、あなたは「春寂寥」、「初恋の山」、「山男」、「山の友へ」などの歌を教えてくださいました。水くみに雪の上を裸足で行ってくれました。僕がなさげなく「寒いです。」と言うとラジウスをたいて僕たちを寝かしてくれ、火の番をやってくれました。ただ一夜の事でしたが、思いやりがあり、親しみやすい先輩だと思いました。下山して、僕がスキーを峠まであげたにもかかわらず、持っておいたことを言っただけで、皆と笑っていましたね。あれは少々頭に来ました。でも今はだいぶ上達しました。佐藤さんあなたのスキーの板をもらって急に上達しました。この冬にでも一緒にスキーに行くことができるのを楽しみにしていました。またあなたがいじける顔を見るのも楽しみにしていたのですが。

僕が1年部員の夏、井関さんと小根田の4人で日高へ行ったときは、大変な迷惑をかけて申し訳ありませんでした。ペテガリ沢の出合の楽しかった生活、ペテガリのピークに立った時の喜び、しかし縦走も終りに近づいたカムイエクウシカウシのカールの中で、弱かった僕の体はもう動きませんでした。その僕をあなたは背負って1日もかかる長い幌内川の河原を、林道のある飯場までおろしてくれました。あなたは「男のくせに泣くな。」とおこって言いましたね。でもなぜか涙が出て来てしまいました。あれだけ楽しみにしていた八ノ沢の岩魚釣りもだめになってしまいましたね。でも僕が岩魚を一目見たいと言うと、背負って釣人のところまで連れて行って見せてくれましたね。本当にうれしかったです。エッセンの中にあれだけ多く岩魚の献立を入れたのに、結局一匹も食べることができませんでしたね。それで皆に笑われていじけていた佐藤さん。帯広での入院中から僕の父に引き渡すまで、いやな顔一つしないで親切に世話をしてくれた佐藤さん。僕のことは自分の責任ですと言いはっていた佐藤さん、本当にありがとうございました。その後、真剣に部をやめることを考えました。しかし、やめることができませんでした。あなたが山岳部にいたからです。

それから45年の夏もコンビで三井、川口の4人で赤石沢に行きましたね。今度こそ岩魚を食べようと勇んで行きましたが、運悪く台風のために釣糸をたらすことなく急いで沢をぬけてしまいました。岩魚がカエルに変わってしまいました。でもあのカエルはうまかったですね。

佐藤さん、あなたはとても酒に強かったですね。僕も強いと言われますか、あなたほどではないでしょう。よくコンパの終り頃、2人ともぶっおれることなく一升びんを手を持って故郷の話をして、「岡山(オキヤマ)はダメッセ。」とが、「福島(フクスマ)はダメッセ。」とやりましたね。互に笑いながらけなし合いをやりました。でもこれからコンパであなたの歌声や悪口が聞けないかと思うと淋しいです。

名産のままかりの酢漬をもってくると、昼間から赤い顔でうまいまいを連発していましたね。機会あるごとに、僕等を飲み連れに行ってくれ楽しく話し合ってくれましたね。

佐藤さん、ネパールの事を聞きました。あなたはシェルパに対して、シェルパさんと呼んでいたそうですね。ぼくはとてもうれしかったです。今までの遠征隊の記録を読むと、ほとんどのものがネパールの人に対する優越感が読みとれ、いやな気持ちでした。信大の遠征隊も同様ではないかと心配していたのです。しかし佐藤さん、あなたは異っていました。やはりあなたはどこの国の人々にも思いやりがあ

るんですね。きっと僕達に対する愛情と同じものを持って、ネパールの人々と共にアンナプルナⅡ峰を目指して登山したのだと思います。

今、思い出してみるとよく一緒に山へ行きましたね。僕もよくあなたに迷惑をかけたものです。でもあなたは、僕をいつも根気よく暖かく見守って指導してくれましたね。現在僕が山岳部員として活動していることができるのも、あなたのおかげです。本当にありがとうございました。ところが、あなたは皆を裏切ってしまった。僕をいやそれ以上に肉親の方々や部員、その他あなたを愛している多くの人々を。いつか言っていましたね。「互に親不孝者だ」と。きっとあなたは、親孝行ができなくて悲しかったのでしょう。でも今となっては、前以上の親不孝者となってしまったのです。あまりに部の事、僕達後輩の事を考えていたからではないでしょうか。

佐藤さん、安らかに眠ってください。部の事は残った僕達にまかせてください。

さようなら佐藤さん、あなたのことは忘れません。

渡 部 光 則

佐藤さん、佐藤さんのアンナプルナⅡ峰でのあの事から早や2ヶ月もの時間が過ぎてしまいました。梅雨もあけて、もうじき夏山の再来です。今年も又、多くの新人がルームの戸をたたきやってみりました。今日、この葬儀で僕が弔辞を読まんとする時、2月7日羽田飛行場での事が鮮やかに思い出されます。最後のお別れの時、僕はもう言うべきことはすべて言ってしまった様に思いましたので、「帰って来て下さい」と一言、万感の思いをこめて手を握りあって言っただけだし、佐藤さんも「帰ってくる」とだけ言って別れましたね。僕達はいろんな期待をこめて佐藤さんの帰って来るのを、真黒い顔をして、海の向こうの山のにおいを持って11月に帰ってこられるのを待っていたのです。山岳部の我々にも、もう海の向こうの氷河の山々に出かけるのも、奥又白の岩場に向かうのも、冬の穂高に向かうのも、観念的には同じアプローチでやれるところまで来ておりました。それだけに海の向こうに本当に出かける意味を、しっかりと肌でつかみ取るためにも、海の向こうの山のにおいを知るためにも期待をこめて待っていたんです。それに、S. A. C統合の問題も佐藤さん以外できぬことでしたね。僕も伊那の学部に移り、少しは強くなった自分をみてもらいたかったのですが、それらみんな遠い夢になってしまいました。

何でも、今の僕達、山岳部2年目では、一番佐藤さんと酒を飲みに行ったのは僕だということで、しゃべれということなのですが、佐藤さんには「いじける」と言われそうです。裏町の「広」にはよく飲みに行きましたね。アルコールを前に、佐藤さんはよく言われましたね。「山岳部なんか止めようぜ」と、そして山岳部の事についてよくダベりましたね。「反体制になるなよ」とも言われましたね。そんな諸々のことに対して、今ごろやっと答を用意できる自分になった時、佐藤さん、ボロさんはもういないんですから。最後は決まって、海の向こうの遊牧民の住む国に話は移りましたね。「……………必ずしも僕達の目的が山でなくてもいい。血をわきたたせるような魅惑的な僻遠の地であれば……………。その向こうに千古の雪におおわれた誰も未だ知らない山々が連なっている様な……………」そんな土地に

出かける夢でしたね。崑崙やワハンの谷やタカラマカンの砂漠の事でしたね。中央アジアという言葉の持つ響きは、チベットを含めて僕達には、未知への憧憬の結晶として思い起こしましたもの。でも佐藤さんは幸せだったとうらやましくもなります。アンナプルナⅡ峰の前進キャンプからは、僻遠の地チベットを眺められたのですから。僕あての手紙の中に「ここからは、チベットが見える。昨夜、足の太いチベットの馬に乗った夢を見た。……」と書かれておりました。

あれは去年の7月、上高地のサマーテントでの夜でしたね。2人きりのテントの中で、突然「50万ためろ」と言われましたね。「それでよう、パリで会おうぜ。ワーゲンか何かのワゴンを買ってユーラシア大陸を車で横断だよ。アフガンやパキスタンでヒンズークシュをやろうぜ。処女峰を2～3登って、カトマンズで現地解散ね」って。あの当時のいじけていた僕は、夢というよりはもっと現実味のある、自分の目的としてそれを受け取りました。佐藤さんの行こうとして行けなくなったヒンズークシュの山々に僕は何とかして行こうと思います。鷲の飛ぶよりも、もっと高くという意味のヒンズークシュの山に出かけます。僕はこの葬儀を一つの区切りにしようと思います。僕は佐藤さんとの、この1年間のことを、単に思い出としてふりかえるより、これから僕の知らない、広い未知の世界に飛び出す出発点にしたいと思います。そして佐藤さんの肩をかして下さい。佐藤さんの肩をかりて高く飛び立とうと思います。いただいた手紙の最後に「下級生にとって厳しく、おもしろいのある上級生であることを望みます。」とありました。今春から、新人を持った2年生の私は、精いっぱいそういう上級生になる事を最後に誓いたいと思います。そして妥協しない、いつもの調子で「あんたら、何しとんのよ」といってしかってください。

松尾 武久

佐藤君、許してください。君をこんなにも愛しておられるお父さん、お母さん、ご兄弟の所へ連れて帰ってあげることができなかったことを……。

あと30分早く現場に着くことができれば、こんなことにならなかったと考えると今、僕は自分の実力のいたらなさをつくづく感じて、君の御家族に、なんとおわびをいってよいか言葉を知りません。

風がテントをゆするたびに、君が「シゴカレたもんね!!」とあの大きい身体を見せるのではないかと何度もテントの入口を開けたあの5月4日の夜のことを、僕は決して忘れはしない。

夜10時に現場に着いたとき、薄明るいテラスの中に、君の残していった手袋と、イヤーストックだけが、むなしくころがっていたあの夜のことを決して忘れはしない。

2月7日 君と2人で日本を期待と不安で飛びたったときは、月がきれいだったね。BOACの機上で、また一緒に帰ってくることを誓い合ったのに、君の身体と心をこの僕はネパールに残してしまった。

隊荷の通関・インド国中のトラック輸送という大任があったカルカッタの20日間は毎日毎日暑い中を税関と港へ行ったね。君は例のジーパンとサンダル姿で、インドの労働者の吹う煙草を口にくわえてインド人をビックリさせたっけ。

ネパールとインドの国境で、僕がトラックを待っているとき、インド側に君の無事な姿を見たときの

ばある程。長く生きようが、若くて逝こうが、問題は充実した人生であったかどうかではないだろうか。君は最後に何を考えていた。お父さん、お母さんの顔を想い出し、肉親のことか、自分のことか、それとも最後まで戦っていたのか、あらん限りの力で最後の最後まで。寒かったろう。アタッカーと決ってから、無口だった君ではあるがよけいに話さなくなった。みんなの期待を背負ったのでそれに答えなくてはという一心に、そのことばかり考え込んでいたため話さなくなったのか。

君は目的なかばにして逝ってしまった。やりたいこと、やるべきことを残したまま。最初のステップだった今回の遠征が君の最期になってしまった。君の夢はあの中央アジアのように果てしなく広がっていたのに。

想えば君とは4年間の付き合いだった。共にした種々の山行。よく飲んだ酒。口では「イジケルモンネ」と言いながらも、常に闘志が燃えていた君、ボロよ。さまざまな君の姿、君の言葉が僕の脳裏を駆け巡る。あまりに多すぎ尽きることがない。でも僕はどれだけ君を理解していただろうか。思い出として、僕の心にある絵巻を書き現わすことはできない。そうすると空しくなるような気もする。僕にとって君はまだ生きているのだ。

市野和雄

5月2日、C<sub>4</sub>で握手をして私はC<sub>3</sub>へ下りました。その時の佐藤さんは遠征前の冬山合宿の時と同じ白い野球帽子に青いヤッケ、太い指に不自然なほど細く感じるタバコをくわえて、ボソッと「じゃあな」と言ってニタッと笑っておられました。私が初めて松本に来て入学手続きをしていた時見かけた真黒に日焼けした体の大きな佐藤さんはいつもそんな調子でした。

初めての新人合宿の徳本峠で次々にバテる1年部員の荷物を持って口がしまらなくなった大きなキスリングを背負った佐藤さんは、「ついて来まっしょね」とひとこと言って私の前を歩いておられました。大声でどなったりはなさいませんでした。何か知らん不気味な感じで佐藤さんの登山靴を見つめてついて行ったものです。それ以来、山行中はもちろん普段の生活においてもわれわれ下級生の面倒を見て下さいました。

いつもあまり多くを語らず、しかしその行動が常に、ともすれば山岳部ベッタリになりやすいわれわれに忠告しておられました。

高い山に登ることだけでなく広大なものに、そして未知なるものに対して非常にあどがれておられ、それに影響された下級生は多いはず。C<sub>2</sub>にいた時、なぜか夕方になると空がほんのりと赤く染まるチベットの方を見て、いつの日かヤクを連れて旅する事を話し会いました。酒を飲んだときは必ず、まだ見知らぬ地へ行くことを話して夢をふくらませたものです。

何かにつけて気どらない、素朴さを感じ、いつも後について歩いておりました。そして佐藤さんの命を奪ってしまいました。せめて佐藤さんと並んで歩くことのできなかった自分が情なく思います。

C<sub>2</sub>を後にする日、アンナプルナⅡ峰の上には月が白く光り昼間のように明るく、美しすぎるほどでした。佐藤さん、どうか安らかに。

佐藤君、まったく突然としかいえないように、君は雲のかなたの雪の高まりの中に消えてしまった。君との本当の山行は考えてみると、このヒマラヤ登山しかないのですが、私にはいつも一緒に山行を共にしていたような気がするくらい、君は心の中にしっかりとやきついていたのでした。悲しみというのは必死におさえれば、なんとか自分一人の心の中におさえつけておけるものと、私ながらに耐えていましたが、あのランチのコルに、皆で石を積みあげて君のケルンをつくって、その前に立ったときにはやはり君の死は現実のことなのだ、涙が出るのをこらえることができませんでした。というのはあのたぐいまれな巨体と、口には出さずにがんばりつづける君の心とが、寒さときびしさに耐えぬいてひょっこり、アイゼンをきしませながらテントに帰ってくると思こんでいたのでしたから。高度の影響をうけてひっくりかえってしまい、下山する私を、私のうしろについて見守ってくれた君、あのときはわれるように痛くて苦しくて、そのままとびこんでしまいたい誘惑にかられた私ですのに、君がいてくれるという安心感だけでC<sub>2</sub>に帰りついたのでした。君にはなにか筆ではあらわせない大きなものがありました。皆が帰国したあとも学術調査をしながら、あるときはポカラから、あるときはシクリスの村から、またあるときはノウダングの尾根から、いつもアンナのⅡ峰をにらんでいました。そしてネパールにいる間にいくつかの歌を作りました。無芸の私がそれでも一生懸命に書いたものです。ヒマラヤで神と同格になった君に、けものに近いクマさんからのせめてものはなむけにしたいと思います。

シュクパ焚く煙は闇にとけこみて、氷の尾根に君逝きにけり  
山の友の力あわせて造りたる ケルンの上に風なく雪なく  
口重く巨体たのもし雪の道 登り行きし日笑顔すずしく

アンナプルナで

心より唄いし寮歌にマリカンは 雲上の山巨きなる山  
一時も忘ることなし君のこと 旅の夜毎に地酒苦くて

旅で

雲厚く日毎つづけり雨また雨 山見えぬなりポカラ町  
ポカラ朝身ひきしめてみいたり 逆日に映える君逝きし山

ポカラで

西 郡 光 昭

あの7,000mの高み、アンナプルナⅡ峰に続く稜線から君の姿が消えたなんてまるで夢のような気が今でもしている。いつもと変らぬ、はにかむような笑顔を見せて再び私達の前にヌーッと現われてくれるような気がするのだ。

以前からよく気が合ったから、合宿などへはなかなか一緒に参加する機会がなかったけれど、山につ

いて語り、酒をくみかわす時の多かった松本での生活をふりかえるにつけて、いまでも君は私のもっとも身近かな存在である。

交わりのうちに君の中に見出したものは、ヌーボーとした風貌にかくされた山へのひたむきで真摯な情熱と、何にもまして君自身の素朴で潔癖な人柄であったといわねばならない。さも、君の先輩らしくしたり顔で振舞う私などハッとさせられることの幾度あったことだろう。

その君との交わりの中で、ヒマラヤへの夢を育て、君にとってははじめてのヒマラヤ行きが、私と同じチームのメンバーとして実現したことは、計画の段階の紆余曲折はあったにしても、いまとなれば当然の因縁だったといえるのかも知れない。

遠征中の君の姿は、日本の山での生活におけるそれといささかも変ろうはずがなく、ただひたすらに高みを目指すひたむきな姿であった。そこでは、稀薄な酸素や背にする荷の重みは、君にとっては苦痛ではなく、登山するもののみが享受しうる特権を楽しんでいるかのようにさえ見えて驚きであった。

それなのに、際限なく拡がったであろう君の夢を、情熱を無残にも摘み取り、そのうえ君を死に追いやった私の責任—— 佐藤よ、私は決して免罪を希ってはいない。決して鋭い糾弾の言葉をはかない君は、いつもの口調でこういうだろう。「こんなタクスティックスはまずいですよ」と。私には甘えは許されない。一体誰が私の取った指揮を是としようか、あるいは弁護しようか。

君の霊の安らかならんことを祈りつつ、君の死を私の一生の重みとして生きて行こう。そして許されるならば、今後も身をもって君の苦しみを苦しみとし、あとに続く山の仲間達の情熱と夢が、はかなくこの上ない悲しみに変ることのないよう伝え継いで行こう。

佐藤正敏君の霊よ安らかなれ。

## 遠征隊に後援・援助をいただいた方々

今遠征には以下の方々の暖かいご後援、ご援助をいただきました。ここにご芳名を記して、隊員、実行委員の心からのお礼にかえさせていただきます。

(アイウエオ順、敬称略)

赤羽真理子、浅野精四郎、旭光学(株)、朝日麦酒(株)長野出張所、味の素(株)松本営業所、東瑞穂、アムド・ケサン、(株)新井食品総本舗、新井正明、飯島町、医学部学4クラス一同、医学部公衆衛生学教室、石川島芝浦機械(株)、いずみ化学工業(株)、(株)伊勢喜、伊那市、伊那市金融団、伊那青年会議所、居谷純子、井上毅、今井郁次、(株)イワシタ機工、内山金物店、江戸川ビニール(株)松本工場、(株)遠兵、(株)大塩するめ長野出張所、(株)太田商会、大月康正、小笠原茶舗、小川功吉、沖允人、小沢写真機店、(株)小沢商店、小田切勉、小野電機商会(株)、(株)オリエンタル洋行長野営業所、オリンパス光学工業(株)伊那工場、(在ネパール)海外青年協力隊員、化研工業(株)、(株)カゴメ富士見工場、河西商事(株)、片岡喜蘇雄、勝山努、加藤四郎、(株)カネハチ、鎌倉麵業(株)、上高地みそ(株)、(株)上条器械店、上条鋼材(株)、上条書店、加茂病院、川鉄商事(株)資金部有志、川鉄商事(株)人事部有志、関西大学山岳会ヒマラヤ委員会、喜多の園、北野建設(株)、北福島商店、キッセイ薬品工業(株)、栗田屋醤油店、栗原信雄、興亜電工(株)、甲府市立病院、小林寿朗、駒ヶ根市、ゴールドパック(株)、斉藤信雄、酒井理化医器製作所、坂本豪、桜田電気工業(株)、笹井酒造(株)、ササスーパーマーケット本店、佐藤知久、(株)三協精機製作所、サンヨー電機(株)、三和紙工(株)、塩野薬店、滋賀県経済連事業所、信濃毎日新聞社、(株)信濃屋海苔店、島倉宏光、(株)島幸、下平彬隆、下村康夫、シャープ(株)、城南製作所、白鳥酒店、信越放送(株)、信州一高会、信州花王製品販売(株)、信州大学教官・事務職員有志、信州蜂の子生産(株)、信州ハム(株)、信州名鉄運輸(株)、新雪荘、鈴木三郎、スーパー加藤(株)、(株)ストージャム、諏訪砂糖(株)、(株)諏訪精工舎、関根倫雄、A. P. セルチャン、I. セルチャン、K. セルチャン、仙醸高遠酒造(株)、台東食品(株)、台糖ファイザー(株)、太平堂、(株)大三津本店、大洋漁業(株)、大和食糧(株)、高遠町、高野商店、(株)タカノ製作所、高山理化精機(株)、竹入勝美、(株)竹屋、辰野町、田中一雄、田中屋製菓所、中部電力(株)長野支店、土田砂糖(株)、都筑製作所、都築木材(株)、堤屋本店、出町恵、東信製紙(株)、登喜和豆腐(株)、富井義、戸谷茶店、東レ(株)、中川村、長喜園、中沢今朝源商店、長野県、長野県医学会有志、長野県医師会、長野県度量衡(株)、長野県農業協同組合連合会総合運営委員会、長野市、長野トマト(株)、中村章、中山印刷所、成沢ハム栄養食品(株)、(株)新村松本支店、(株)西糸屋、西沢(株)、(株)仁科、日魯漁業(株)、日建工業(株)、日穀製粉(株)、日産農林(株)、日東製菓(株)、日東電気工業(株)松本駐在所、日本ケミファ(株)、日本山岳会信濃支部、日本水産(株)、日本染色(株)、日本ヒマラヤ山岳協会、日本ペイント(株)、日本冷蔵(株)、農学部OB(中京地区林学科・長野県職員)有志、農学部応用昆虫学研究室、農学部作物育種学研究室、農学部蔬菜花卉学研究室、農学部治山砂防工学研究室、野口秋人、野沢信教、乗鞍ヒッテ愛好会、長谷村、八十二銀行、(株)はやしべ、日置電機(株)、(株)フォルテ、福島高等学校山岳部OB

会、富士弦楽器(株)、富士通(株)須坂工場、富士電機製造(株)松本工場、フジヤスーパー、文正堂運動具店、ブンリン製作所、勉強堂本店(株)、北信理化学(有)、北洋商事、堀田金物店、(株)ほていや、堀内照夫、堀内伊太郎商店、前田製作所、(株)マスタ金物店、増又紙店、間瀬仁、町田和信、松井良夫、松浦要、松坂屋材木店、松下電器産業(株)、(株)松田商会、松電商事(株)、松本塩業(株)、松本化成工業(株)、松本市、松本電気鉄道(株)、松本東芝商品販売(株)、松本北部ロータリークラブ、松本林友木材(株)、(株)松屋、マルエス商会、マルコメ味噌(株)、丸三木材工業(株)、(株)丸善商店、丸日水産(株)、丸干削節製造販売元(株)、丸美屋食品工業(株)、(有)丸山商店、丸山晴弘、三笠物産(株)、三及屋スーパー、南箕輪村、箕輪町、(株)宮下清志商店、宮田村、明星ラーメン(株)上田工場、明治乳業(株)、ももせテンプラ店、森永製菓(株)、山印信州味噌醸造(株)、やすぎかスーパー、山田ダンボール(株)、(有)ヤマトヤ、八幡屋儀五郎商店、ユニチカ(株)米子工場、横内祐一郎、横地康生、横山昭一、吉沢一郎、吉田ハム(株)、朶讓治、ロッセ(株)、渡辺晃、渡辺径。

## 編 集 後 記

未知なるものに対するあこがれが僕達をして、ヒマラヤ・アンナプルナⅡ峰の登山に向わせました。そして、その登山が終ってから、はやくも、1年半が立とうとしています。その間、学術調査隊の調査も無事終了し、全隊員が無事、懐しい信州に顔を合せました。しかし、帰国してからも、いつもいつも僕達の心の中に残っているものは、遠くヒマラヤの雪の中に残して来た「佐藤正敏君」のことでした。青春の燃焼を思いきりヒマラヤにぶっつけた結果としては、余りにも失ったものは大きく、僕達は今、自分達の山に対する実力の無さを激しくかみしめているのです。

ご家族の悲しみに対して、僕達の今できることは、登山の全容を、ご後援頂いた方々に発表し、遠征に対する批判、また遭難に対するご叱責を頂くことであり、そして、「佐藤正敏君」の登山の足跡を永久に残すことにより、二度と同じことを引き起こさないようにすることが最大の使命であると考えております。

そして、色々の紆余曲折はありましたが、どうか「報告書」ができあがりました。もとよりはじめて手がけた仕事であり、満足のいくものではありません。しかし、僕達の登山の全容はすべて網羅したつもりです。特に「遭難報告」の項では、注意して事実をそのまま掲載するようにしました。トランシーバーの交信録についても、その時の感情といったものが、読む人々に伝わらないと思いましたが、重要な遭難に対する手がかりでもあると考え掲載することにしました。また、「各係の報告」には、今後のヒマラヤ登山に志す人々に少しでも参考になればと考え僕達のつたない経験から得たさまざまな事項をまんべんなく書くように努めました。

この報告書の発刊にあたっては、株式会社刈谷高速印刷の社長岡本健紀氏、それに同氏のご実弟で信州大学の卒業生である岡本戡紘氏のご理解あるご協力に負うところが大きかったです。ここに厚くお礼を申し上げます。また、色々とお世話になった方々にも、あらためてお礼を申し上げます。

このようにして、信州大学山岳会、信州大学学士山岳会が送りだした第1回目の遠征隊は、第一段階の登山においては失敗に終わってしまいました。しかし、僕達は後輩諸君にもヒマラヤとはいわず、アンデスやキリマンジャロ、中国の奥地そして未知なる土地へ行ってもらいたいと思います。それは、僕達隊員それぞれが、ヒマラヤ登山を通じて、自然というもの、人間というもの、また登山というものが何であるかということの一断片をつかんだと思うからです。そして、その思いは隊員の各自の心の中に生涯とりついて離れないことでしょう。僕達隊員は後輩諸君のためにも、それを暖め、生かすよう努力していかなければなりません。そうでなければ、この遠征の意義は無かったと同じなのですから……………。

最後になりましたが、僕達の遠征にシェルパとして参加し、そしてその実力を十分に発揮してくれた今はガンガプルナ峰の氷河に眠るサーダー、ギルミ・ドルジェ氏、アン・ペマ氏、ペンバ・ヌルブ氏、ナワン・チヨタ氏にも心より哀悼の意を表するとともに、この報告書を捧げます。（松尾武久）

ANNAPURNA II 1971

(非売品)

発行年月日	昭和47年12月1日
編集	信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征実行委員会
発行	信州大学山岳部 信州大学学士山岳会
印刷所	株式会社 刈谷高速印刷
事務局	松本市旭3-1-1 信州大学学生部厚生課気付

(落丁、乱丁はお取りかえいたします。)

